

それでも
死者は生きている

Hans-Jörg Ronsdorf



魂の不死

Hans-Jörg Ronsdorf

それでも死者は生きている

魂の不死

Christliche Literatur-Verbreitung

Postfach 11 01 35 • 33661 Bielefeld

使用聖書：Überarbeitete Elberfelder〔ドイツ語聖書翻訳〕, 1999, CSV,
Hückeswagen

第1版 1992年

第2版 1994年

第3版（改訂増補版）2004年

© 1992 by

CLV • Christliche Literatur-Verbreitung

Postfach 110135 • 33661 Bielefeld

CLVのウェブサイト：www.clv.de

組版：CLV

装丁：ディーター・オッテン（Dieter Otten）、グマースバッハ（Gummersbach）

印刷・製本：Ebner & Spiegel、ウルム（Ulm）

ISBN 3-89397-227-7

目次

まえがき	
1 序論	12
1.1 このテーマの意味と重要性	13
1.2 執筆のきっかけと課題	14
1.3 本書の構成	15
1.4 将来の出来事の順序——預言のカレンダー	16
1.5 旧約聖書と新約聖書における聖書の啓示	18
1.5.1 新約聖書の啓示	19
1.5.2 旧約聖書の啓示	20
1.5.3 旧約聖書にも光がある	21
1.6 死の起源と働き	24
1.7 死ぬとき、何が起こるのか	26
1.7.1 人間の霊と死	27
1.7.2 死にゆくときの魂	28
1.7.3 霊と魂	29
1.8 死のさまざまな側面	30
1.9 死に対する勝利	30
1.9.1 死と罪	31
1.9.2 死と悪魔	34
2 死の後に何が来るのか	36
2.1 ラザロと金持ち	36
2.1.1 ここでは死後のいのちが問題になっているのか	37
2.1.2 この話の意味	38
2.1.3 たとえ話なのか	39
2.1.4 死の前に	40
2.1.5 ユダヤ人の来世観	41
2.1.6 アブラハムの懐	42
2.1.7 ラザロはどのようにしてアブラハムの懐に行ったのか	43
2.1.8 ハデス	44
2.1.9 ルカの福音書16章のハデス	47
2.1.10 シェオル	49
2.1.11 目を上げること	51
2.1.12 遠くから	52

2.1.13 大きな淵	53
2.2 生きている者の神	54
2.2.1 サドカイ人	
2.2.2 変貌の山のモーセとエリヤ	58
2.2.3 死後のいのちと復活の関係	59
2.2.4 種粒のたとえ	59
2.3 十字架上の犯罪人	60
2.3.1 パラダイス	62
2.3.2 ユダヤ教の伝承におけるパラダイス	63
2.3.3 新約聖書におけるパラダイス	64
2.3.4 ルカの福音書23章43節の別の解釈は可能か	68
2.4 永遠の栄光——死に直面しての希望	70
2.4.1 外なる人	72
2.4.2 内なる人	73
2.4.3 地上の幕屋	75
2.4.4 着せられること	77
2.4.5 旅と故郷	80
2.4.6 別の解釈	83
2.5 死ぬことは益	86
2.5.1 別の説明	89
2.5.1.1 キリストの再臨のことか	89
2.5.1.2 世を去ること	89
2.5.1.3 魂の眠りか	90
2.5.1.4 パウロだけの権利か	90
2.5.2 主にお会いする！	91
2.6 眠った人たち	92
2.6.1 眠った人たちは魂の眠りにについているのか	93
2.6.2 眠りは何を指しているのか	94
2.6.3 ステパノの死の例	95
2.6.4 携挙のときの眠った人たち	96
2.6.5 携挙の前の眠った人たち	97
2.6.6 結論	98
2.7 キリスト——生きている者と死んだ者の支配者	98
2.8 祭壇の下で	103
2.8.1 殉教者の魂	104
2.8.2 祭壇の下で	106

2.8.3 この出来事はいつの時代のことか	108
2.8.4 復讐を求める叫び	109
2.9 永遠のいのち	110
2.9.1 永遠のいのちとは何か	111
2.9.2 永遠のいのちと不死	112
2.9.3 人はどのようにして神のいのちを受けることができるのか	113
2.9.4 信者たちはどのようにして永遠のいのちを持っているのか	114
2.9.5 永遠のいのちと死	115
2.9.6 死んだ信者たち	115
2.9.7 生きている信者たち	116
2.9.8 永遠のいのちの将来の姿	117
2.9.9 聖霊	118
2.9.10 結論	119
2.10 捕らわれている霊たち	120
2.10.1 ペテロの意図	121
2.10.2 この箇所についての私の説明	121
2.10.3 肉においては死に渡され、霊においては生かされた	123
2.10.4 捕らわれている霊たちへの宣教	124
2.10.5 宣教の内容	124
2.10.6 魂と霊	126
2.10.7 この霊たちは墮落した御使いなのか	127
2.10.8 霊——死んだ人間	128
2.10.9 牢獄	130
2.10.10 旧約の信者たちはシェオルから解放されたのか	131
2.10.11 イエスの地獄降下？	132
2.10.12 結論	133
2.11 死の際の体験と臨死体験	134
2.11.1 これらの報告にはどれほどの真実があるのか	136
2.11.2 聖書に死の際の体験はあるのか	137
2.11.3 使徒パウロと使徒ヨハネ	139
2.11.4 死の際の体験——天国と地獄	141
2.11.5 闇の惑わし	142
2.11.6 死者に伺いを立てる者は主に忌み嫌われる	143
2.11.7 サウルとサムエル	144
2.11.8 終わりの時の反キリスト的な惑わし	145
2.11.9 結論	

3 聖書の人間観	148
3.1 人間は何から成り立っているのか	149
3.2 人間の霊	152
3.2.1 いのちの息	152
3.2.2 神からの霊と人間の霊	153
3.2.3 まとめ	156
3.3 人間の魂	156
3.3.1 まとめ	159
3.4 人間のからだ	160
3.5 結論	162
4 魂の不死	163
4.1 永遠のいのちと魂の不死	164
4.2 新約聖書における不死	165
4.3 死と復活の間	167
4.3.1 からだのない魂の意識	168
4.3.2 魂にはまだからだが必要なのか	168
4.4 聖書における不死とギリシア哲学における不死	169
4.4.1 二元論	170
4.4.2 復活	170
4.4.3 魂の不死は最終状態ではない	172
4.4.4 人格	172
4.5 結論	173
4.6 この真理の意味	174
5 死者の将来	175
5.1 復活	176
5.1.1 旧約聖書における復活	177
5.1.2 いのちへの復活	178
5.1.3 復活のからだ	182
5.1.4 復活の時	185
5.1.5 さばきへの復活	187
6 永遠における人間	192
6.1 永遠における信者たち	193
6.2 永遠における信じない者たち	194
6.2.1 地獄（ゲヘナ）	196
6.2.2 火の池	198
6.2.3 第二の死	199

6.3 刑罰はどれほど続くのか	200
6.3.1 新約聖書における「永遠」と「永遠の」	201
6.3.2 「滅び」	204
6.3.3 まとめ	205
6.3.4 神の義と聖	206
6.3.5 ゴルゴタの十字架	208
7 付録	212
7.1 聖書はシェオルとハデスについて何を教えているか	212
7.2 さまざまな用語の一覧表	219
8 参考文献	221
脚注	226

第1版へのまえがき

この難しく複雑なテーマに取り組むことは、容易な仕事ではありませんでした。ですから、いま読者の手元にあるものは、このテーマを論じ尽くしたものではありません。それは、このテーマについての数多くの本を示す参考文献を見ても、容易にわかることです。

この本は、友人マティアス・ピール（Matthias Piel）の協力がなければ、このような形では生まれなかったでしょう。ここに彼への特別な感謝を表します。マルティン・ハイデ（Martin Heide）にも、その助力に感謝します。そして何よりも、妻に感謝します。妻は長い時間、私なして過ごさなければなりませんでしたが、それでも、この仕事を仕上げるよう私を励ますことをやめませんでした。

真実な神が、ご自身の栄光のためにこの本を祝福してくださいますように！
聖書に基づいて寄せられる批判については、どの読者にも感謝いたします。

Hans-Jörg Ronsdorf

第3版へのまえがき

この本は神学者のために書かれたものではありません。神学者のためには、この問題をもっと詳しく、もっと深く扱った研究があります。私の願いは——とりわけ、聖書に忠実な教会においてさえ聖書の理解にまだ改善の余地が大きいことを思うとき——、信者の手に一冊の本を渡すことです。これらの真理に、やさしく、わかりやすく親しめるような本です。

いくつかの箇所では原語を挙げています。けれども、良い翻訳があれば、この本で扱う問いを正しく理解することは可能である——それが私の深い確信です。

この本の題名「魂の不死」は、一部のキリスト者にとって挑発的に聞こえます。それには、ある程度もっともな理由もあります。しかし私は、その内容を聖書の真理に照らして吟味してみたいと思います。そして、私たちがそれを聖書的に理解し用いる限り、このことばには十分な正当性があるという結論に至っています。

第1版と第2版の出版後、非常に多くのお便りをいただきました。多くの賛同がありましたが、同じくらい多くの反対もありました。私はこの版に多くの点を取り入れました。ちなみに、いくつかの箇所では訂正も加えています。こうしたご指摘に感謝しています。私たちの知ることは一部分にすぎません。

私はこの本で、このテーマに関係するすべての（と私は願っていますが）聖書箇所を体系的に扱っていますので、この本は参考書としても用いることができます。そのため、どうしても繰り返しが多くなります。各章をそれぞれ単独で読むことができるようになっているからです。

全面的な改訂となり、多くの補足を加えたこの版においても、多くの方々の協力と支えに深く感謝しています。とくにグマースバッハのヴェルナー・ミュッシャー（Werner Mücher）と、アルゴイ地方オーバーギュンツブルク

のヴォルフガング・クレックナー（Wolfgang Klöckner）に感謝します。クレックナー氏は、理解を深めるための問いを書き加えてくれました。お二人のおかげで、考えがより明確に、よりわかりやすくなりました。

このような仕事をする中で、私は、青年時代に据えられた霊的な土台が今日どれほど役に立っているかにも気づかされます。ですから、その土台を据える労をとってくださった方々にも感謝しています。

私の祈りは、多くの神の子どもたちがこの本から益を受け、主イエス・キリストの偉大さ——死に対する主の勝利と、そこから私たちにもたらされた祝福——を、いっそう明らかに見るようになることです。

Hans-Jörg Ronsdorf、アルゴイ地方ケンプテンにて、2003年12月

1 序論

死後にも本当に存在が、いのちの継続があるのでしょうか。もしあるとすれば、その存在をどのように思い描けばよいのでしょうか。何度も繰り返し問われるのは、このような問い、あるいはこれに似た問いです。神は人の心に永遠を置かれました。そのために人は、死が終わりではないことを感じ取るのです。

「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない」（伝道者3:11）。

このみことば自体が、心——聖書において人間の最も内なる本質的な部分——が永遠に向けて造られていることを意味しているとまでは言えないとしても、少なくとも次のことは語っています。人は、私たちの認識の地平を越えたところに何かがあること、すなわち、この人生の後に続くいのちがあることを感じ取っているのです。古今東西のあらゆる世界宗教や部族宗教がそれを裏づけています。創造主ご自身が、ご自分が時を超えた方であるという意識を、人間に持たせてくださったのです。¹

しかし、伝道者のこのことばは、同時に認識の限界をも告げています。死と将来については、**日の下**では何も知ることができません。伝道者にとって「**日の下**」とは、神の啓示を知らない人間の視点から見た世界観です。そして感謝なことに、私たちは聖書によって神の啓示を手にしています。伝道者の言い方を続けるなら、それは日の上におられる神から来ているのです。

人々は、科学や疑似科学のあらゆる分野を動員して、この究極の問いを解こうとしています。認識の限界を取り除くことはできないにもかかわらず、死とその後に来るものを——聖書の見方からすれば——惑わしに満ちた、致命的な仕方の説明する答えが差し出されています！ ある人々は、死はすべて

1. この意識が多くの場合きわめて異なる形で現れていても、また多くの人が死後のいのちを否定していても、このことに変わりはありません。

の人にとってパラダイスへの移行だと言います。別の人々は、死の後にはもう何もないと主張します。あるいは、一定期間の存在の後に、ある人々には決定的な終わりが、別の人々には永遠のいのちが来るのだと考える人もいます。

これらの説明が致命的なのは、人を誤りに導き、死を本当の姿において理解していないからです。死とは、罪の報酬（ローマ6:23）であり、神からの断絶なのです。

これについて、私たちキリスト者は何を語るべきでしょうか。私たちは、この問いについての見方を神のことばに基づかせているのでしょうか。そして、心に抱いている希望について説明する用意があり、またそれができるのでしょうか（ペテロ第一3:15）。²

私たちは隠れる必要はありませんし、隠れてはなりません。私たちの周りで死をさまざまに解釈しようとする試みがあっても、死とその後について、したがって人間の将来についての聖書の見方が比類のないものであることは、繰り返し明らかになるからです。これほど大きな希望と、これほどすばらしい将来は、ほかのどこにもありません。もっとも、二つの行き先があります。それは、広い道と狭い道のそれぞれの終わりにあるのです（マタイ7:13-14）。

1.1 このテーマの意味と重要性

この本のテーマは、いのちと死の領域における、人間の知識の限界に関わる問いを扱っています。このテーマについて、私たちは神がみことばの中で語っておられることだけに頼るしかありません。聖書はこれらの事柄について本質的なことを語っていますが、それでも私たちは、このテーマを強調しすぎて、聖書が与えていない価値をそれに与えてはなりません。ですから、多くを語りすぎず、しかし少なすぎることもないようにしたいと思います。聖書が沈黙しているところでは、私たちも沈黙したいのです！ 聖書は将来について非常に多くのことを語っています。しかし、死と復活の間の時につい

2. 私たちの希望は、死後のいのちだけで尽きるものではありません。死と復活の間の時は「単に」一時的なものにすぎません。私たちの希望と将来は、復活における永遠のいのちなのです。

ては比較的わずかししか語っていません。それは、いつか永遠に終わる、一つの中間段階にすぎないからです。

一見すると、死と復活の間のいのちは、信仰の土台（たとえば、イエス・キリストの人格とみわざ、聖書の靈感）とは直接関係がないように見えます。ある人が、死後、復活まで無意識の眠りに沈むと確信していても、それは必ずしも異端³ではないかもしれません。しかし——そしてこれはよく見られることですが——そこから、永遠においてもこのような無意識の状態や存在の終わり、たとえば不信仰な者の消滅があるのだと結論づけられるなら、キリスト教信仰の土台が攻撃されることになります。

そうなると、これから見ていくように、神のご本質、すなわち神の愛と聖さと義も問題になってきます。読者の中には、このつながりに驚く方もおられるかもしれません。しかし実際に、主イエス・キリストの贖いのみわざの有効性とその影響が問われているのです。

このテーマ、すなわち人間の将来を包括的に考察していくと、円が閉じていく様子が見えてくるでしょう。問題は、死と復活の間のいのちだけにとどまらないのです。

1.2 執筆のきっかけと課題

しばらく前、私は、魂が死後も存在し続けることを否定する見方に直面しました。この確信は、さまざまなセクトや異端（とりわけアドベンチスト⁴やエホバの証人⁵）に見られるもので、おおよそ次のような内容です。

人間は生まれながらに不死の魂を持っているわけではない。罪によって人間は死ぬべき者とされている。人間が不死を得るのは、キリスト

3. 私はこの見方を誤った教えだと考えています。それ自体としては大きな影響はないかもしれませんが。しかし、異端、すなわち人々を迷わせ、滅びに導く教え（申命27:18、エゼキエル13:10）への一歩は非常に近く、実際に少なからぬ人々がその一歩を踏み出してきました。

4. たとえば、G. トーブラー（G. Tobler）*Wann beginnt das ewige Leben*（Advent-Verlag, Zürich）。M. トマーシ（M. Tomasi）*Tod und Auferstehung, Himmel und Hölle*（Advent Verlag, Zürich）。77 Fragen an die Gemeinschaft der Siebenten-Tags-Adventisten（Union Verlag Berlin）, 1988.

5. この二つのセクトは確かに区別して見るべきですが、この点については両者の間に本質的な違いはなく、どちらも誤った教えを主張しています。

によってのみであり、しかもそのときに初めて得るのである。これが永遠のいのちであり、キリストを信じるすべての人が受けるものである。したがって、キリストにあるいのちを持たない者はみな、永遠に生きるのではなく、いつか存在をやめる。すなわち、彼らは地獄で滅ぼされ、その存在は消し去られる。

人間の魂は不死ではなく死ぬべきものであるから、死後のいのちもない。死において魂は死に、人間全体が消え去り、あらゆる機能——精神的、心的なものも含めて——が消える。この見方の一つの変形では、死後から復活までの状態に関する限り、この「非存在」の状態を魂の眠りとも呼ぶ。この魂の眠りの間、意識はない。⁶

この見解では、人間は分けることのできない一体として見られています。人間は（からだの中で）生きているか、死んでいるかのどちらかです。この二つの存在形態の間に、中間状態はありません。一体として造られた人間は、復活において初めて再び意識を持つことになります。この見方では、からだなしに、あるいはからだの外に、魂や霊が存在することはありません。

私が問題にしたいのは、死と魂の不死についての無神論的、唯物論的な見方との論争ではありません。むしろ、聖書に基づいて主張されている一つの見解に向き合いたいのです。

しかしこの本は、条件的不死論や魂の眠りという特定の問題に直面している人々のためだけのものではありません。このテーマに基本的に取り組みたいと願うすべての人のためのものです。

1.3 本書の構成

まず、このテーマに関する聖書のことばをバランスよく評価することが必要です。旧約聖書（旧約）の預言者たちや新約聖書（新約）の使徒たちは、来世の事柄についてどのように考えていたのでしょうか。

6. この見解は「条件的不死論」（Konditionalismus）という名で知られていますが、ドイツ語圏ではあまり知られていません。この用語（ラテン語 *conditio* 「条件」から）は、人間の不死が、その人がキリストにあるいのちを持っているかどうかという条件にかかっている、という意味です。

次に、死をその起源と働き方という点から調べます。そして、私たちの主イエス・キリストによる死に対する勝利に、特別な注意を向けたいと思います。

この準備作業の後、死の直後に何が来るのかを扱います。その際、それについて述べている新約のすべての重要な聖書箇所を取り上げます。これらの箇所は、本来のテーマにとって最も重要な部分です。ここでは、死と復活の間の時が、さまざまな書き手によって直接取り上げられているからです。ある書き手はこのテーマに軽く触れるだけですが、別の書き手は具体的に論じています。聖書箇所が少なすぎるということは決してありません。

これはさらに、人間とはそもそも何なのかという問いに接しています。とりわけ、魂の性質と不死が問題になります。条件的不死論の土台となっている見解の根も、そこにあります。死後の中間状態は時間的に限られたものにすぎないので、次に、この状態を終わらせる大いなる出来事、すなわち復活に進みます。さらに別の章では永遠の状態を扱い、とくに不信仰な者の運命を調べます。神の愛を考えると、本当に永遠の地獄がありうるのか——この問いは何度も繰り返し浮かび上がってきます。

1.4 将来の出来事の順序——預言のカレンダー

このテーマについてどの本を読むにしても、どの本にも、終末論、すなわち将来の出来事についての教えに関する一定の見方が土台にあります。この本も例外ではありません。読者が全体のつながりをよりよく理解できるように、預言的な出来事の順序とその重点についての私の確信を、あらかじめはっきりさせておきたいと思います。ここでは詳しい根拠を示さずに、私の確信を手短に述べます。⁷

私は、すべてのキリスト者、すべての神の子どもたちが、間もなく天のイエス・キリストのもとへ携え上げられる（携挙される）と信じています。そのとき、それまでに死んだすべての信者が復活し、生きている者たちとともに

7. さまざまな見方についての詳しい論述は、とりわけヨハネの黙示録注解の序論に見られます。W.J. アウウェネール (W.J. Ouweeneel) *Das Buch der Offenbarung*, Bielefeld (CLV) 1995、および J.D. ペンテコスト (J.D. Pentecost) *Bibel und Zukunft*, Dillenburg (CVD) 1993。

携え上げられます。その後、大きなさばきの時が来ます。その時には反キリストが現れ、多くの人々を惑わします。そのとき、神の救いの歴史の焦点となるのは、何よりもイスラエルの地と民です。神ヤハウェは、ご自分の古からの民イスラエルに与えたすべての約束を成就されます。それから、キリスト（ヘブル語でメシア）が生きている者をさばくために現れ、ご自分の王国を打ち立てられます。この力と栄光の王国を建てるのはキリスト者ではなく、治めるために来られるキリストご自身です。この王国の後に、もう一度サタンによる大きな惑わしがあります。そしてその後に初めて、すべての人の最後の審判が来ます。これは一般に「終わりの日」と呼ばれています。そのとき、地と天は崩れ去り、新しく造られます。

しかし、預言の年代順についての理解が異なるからといって、私たちのテーマに関わるすべての点で、必ずしも異なる結論に至るわけではありません。たとえば復活というテーマでは、その方法と性質については大きな一致がありますが、その時期や、復活が一回なのか複数回なのかについては一致がありません。

次の図は、復活とさばきの順序を示しています。挙げられている聖書箇所を、読者ご自身で読んでいただきたいと思います。

- 地獄¹¹・新しい天と新しい地¹⁰・父の家¹²
- 永遠の状態⁹
- □ 世の終わりに大きな白い御座の前で行われる死者のさばき⁸
- ▲ 千年王国の後、大きな白い御座の前でのさばきに向けた、すべての正しくない者の復活⁷
- ▲ 第一の復活 段階B⁵ 大患難からの殉教者
- □ 地上の千年王国の初めに、生きている者をさばくためのキリストの出現⁶
- □ 天において栄光を受けた信者のためのキリストのさばきの座⁴
- ▲ 第一の復活 段階A² 教会の天への携挙^{y3}
- イエス・キリストの死と復活¹

□ = さばき・: = 時・▲ = 復活

¹ コリント第一15:1-23、使徒17:31；²⁺³ テサロニケ第一4:13-17、コリント第一15:51-54；⁴ コリント第二5:10、コリント第一3:13-15、4:4-5；⁵ 黙示録20:4-6；⁶ マタイ25:31-46；⁷ 黙示録20:5、ヨハネ5:29、ヨブ14:10-12；⁸ 黙示録20:11-15、コリント第一15:24；⁹ ペテロ第二3:13、コリント第一15:24；¹⁰ 黙示録21:1-8；¹¹ マタイ18:8、ユダ7、13、黙示録14:11、20:10；¹² ヨハネ14:2-3、17:24、テサロニケ第一4:17

1.5 旧約聖書と新約聖書における聖書の啓示

死後と永遠における人間の状態はどのようなものか、という問いをもって聖書全体を調べてみると、旧約と新約の間に大きな違いがあることに気づきます。本質的な違いは啓示の度合いにあります。つまり、神がこれらの事柄について、一方では旧約において、他方では新約において、どの程度語られたかということです。来世と人間の不死についての問いに包括的かつ最終的に答えているのは、新約が初めてです。

これは、旧約にこのテーマについての記述がほとんど見当たらないという意味ではありません。いいえ、死とシェオルについての記述は、むしろ新約よりも旧約のほうが多いのです。しかし、旧約の人々のことばは、しばしば死についての不確かさや無知、さらには疑い、それどころか恐れによって特徴づけられています。それは、これらの人々には死後のいのちについてごくわずかしかな啓示されておらず、神との平和と永遠の贖いの確かさを持っていなかったからです。

これに対して、新約の信者たちには、まったく異なる姿勢が見られます。彼らにとって死は、もはや旧約の多くの信者にとってそうであったようなものではありません。彼らにとっては、このような不確かさや無知はもはやなく、疑いや恐れもありません。この点について、ヨブのことばと使徒パウロのことばを一度比べてみてください。

ヨブは言いました。「……私が行って帰って来なくなる前に。闇と死の陰の地、暗黒のように真っ暗な地、死の陰があって秩序がなく、光も

暗闇のような地へ」(ヨブ10:21)。⁸

しかしパウロは、こう言うことができました。「……世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、**すべてはあなたがたのものです**」(コリント第一3:22)。⁹

イエス・キリストの復活によって、死に対する信者の態度は根本的に変わりました。キリスト者は、死に対する勝利と、死に打ち勝った勝利者を知っています。この勝利は、復活において明らかになるだけではありません。死の直後の状態においても明らかになるのです。

1.5.1 新約聖書の啓示

なぜ新約は、来世についてより多くのことを私たちに明らかにしているのでしょうか。それは、イエス・キリストの死と復活によって死が打ち負かされ、滅ぼされたからです。そしてそれによって、その規模においてすべてを変える根本的な転換が起こったからです。この転換こそ、福音の知らせです。

「神は私たちを救い、聖なる召しをもって召してくださいました。それは私たちの働きによるのではなく、ご自分の計画と恵みによるものでした。この恵みは、キリスト・イエスにあって、永遠の昔に私たちに与えられ、**今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされました。キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不滅**〔または「朽ちないもの」〕を明らかに示されたのです」(テモテ第二1:9-10)。

ルカも使徒の働きの中で、同じようなことを述べています。

「……すなわち、キリストが苦しみを受けること、また、死者の中から最初に復活し、この民にも異邦人にも光を宣べ伝えることになる、ということです」(26:23)。

8. ヨブ14:12、30:23、38:17も参照。

9. ピリピ1:23、コリント第一15:54-56、コリント第二4:7-5:10も参照。

旧約の書き手たちは、イエス・キリストのみわぎの結果として初めて来ることのできた事柄について、明確さを求めて探り調べました。彼らにとって、死は——少なくとも主観的には——まだキリストのみわぎによって滅ぼされてはいませんでした。¹⁰ 彼らは、いのちと朽ちないものが明らかにされる前の死を見ていたのです。それは単に啓示の問題ではありませんでした。神にとって、幕を上げることなどたやすいことだったはずだからです。問題は、これらの事柄の啓示が、イエスの死と復活と結びついていたということです。

来世の事柄の完全な啓示は、神の御子が来られるのを待たなければなりませんでした。それ以前には、来世の事柄についての約束や啓示はわずかしかなかったませんでした。今日私たちが、主イエスが来られた後に、新約の文書を通して知っているのとは対照的です（ヨハネ3:11-13、エペソ1:3以下、ピリピ3:20）。

1.5.2 旧約聖書の啓示

旧約には、実にさまざまな書き手がいて、それに応じてさまざまな文学形式¹¹が見られます。まず、神がご自分の民とともに歩まれた道を記録している歴史書があります。次に預言書があります。そこでは神が預言者たちを通して、ご自分の民や他の民族の道徳的な状態と、その将来について語られました。

そのほかに、たとえばヨブ記、詩篇、伝道者の書のような詩歌の書があります。これらの書は、特別な仕方で人間の考え、感情、心の動きを表現しています。¹² 最後に挙げた三つの書に、このテーマとの関連で私たちの関心を引く記述の大部分が見られます。

10. それでもなお、後で見るように、旧い契約のすべての信者は、死後、天のパラダイスに行きました。そのことは、彼らが死ぬ前には知らされていませんでした。つまり、啓示されていなかったのです。

11. 歴史記述、詩、格言など。

12. ここで私が、これらの書は人間の考えを内容としていると言っても、それらは他のすべての聖書の書と同じく、聖霊によって靈感を受け、神のご意図をもって私たちのために書き記されたものです。

伝道者は、人生と世界の意味を、ときに純粹に水平的な視点から説明しようとしています。そのとき、彼の地平は、彼が「日の下」に見るものを越えることがありません（1:3、2:11、18、22）。意味の問いに対する彼の答えの一つは、次のとおりです。

「人の子の結末と獣の結末は同じ結末だ。これも死ねば、あれも死ぬ。両方とも同じ息を持つ。人は獣にまさっていない。すべては空しいからだ。すべては同じ所に行く。すべてのものは土のちりから出て、すべてのものは土のちりに帰る。だれが知っているだろうか。人の子らの霊は上に昇り、獣の霊は地の下に降りて行くのを」（伝道者3:19-21）。

伝道者は、この世の視点からしか真実でない結論に至っています。ですから、この書を、来世の事柄、まして永遠の事柄についての主要な証人にしてはなりません。詩篇にも、伝道者のことばによく似た記述がいくつか見られます（たとえば詩篇49:12、103:15-16）。これらの記述も、来世について最終的な解明を与えてはくれません。¹³

旧約を新約から切り離して見ると、矛盾を相手にしているような印象を受けることがあります。しかしこの印象が生じるのは、旧約の時代には来世の事柄が部分的にしか啓示されていなかったことを忘れる場合だけです。旧約の記述を最も強力な論拠とするような論証では、真理の全体を示すことはできません。

1.5.3 旧約聖書にも光がある

しかし、だからといって、私たちのテーマについてまったく光がなかったというわけではありません。旧約でさえ、死によってすべてが終わるのではないことを示す手がかりを十分に与えています。

13. 詩篇は異なる性格を持っています。その大部分は預言的な性格のものです。その特徴は、これらの預言が非常にしばしば人間の考えや感情の中で表現されていることです。たとえばダビデが語っている苦しみは、神の御霊の導きのもとで、最終的にはキリストの苦しみにおいてしか成就しえない形をとっています。

- 「自分の民のもとに集められた」¹⁴（新改訳では「自分の民に加えられた」）。私たちの日常の言葉遣いでも、「集められる」とは通常、そこにいる全員に関わる事柄のために、何人かの人を一つの場所に集めることを意味します。この表現が死ぬことにも用いられているなら、そこには少なくとも、死者たちが一つの場所、すなわち死者の領域——旧約ではシェオル¹⁵——に集められるという暗示があります。注目すべきことに、埋葬や葬りは「集められること」とは区別されています。¹⁶つまり、歴史の初めからすでに、来世に関わる概念があるのです。
- エン・ドルの霊媒の女とサムエルの霊（サムエル第一28章）。イスラエルでは、死者に伺いを立てる者が死者の霊を呼び出すことができると考えられていました。これは、死者の霊が何らかの仕方どこかに存在しているはずだということを前提にしています。少なくとも、このような死者の霊が存在すると考えられていたのです。それはさておき、神は、オカルト的な口寄せを通して死者の霊に尋ねることを、最も重い刑罰をもって禁じておられました。¹⁷
- エノク（創世記5:24）とエリヤ（列王第二2章）が天に移されたこと。これらの人々に起こったことは例外ですが、それでも私たちは、彼らが天に上げられた後どこにいたのかと問うことができるでしょう。¹⁸エリヤとモーセ——モーセは自然な死を遂げました——は、二人とも変貌の山に現れ、イエスと語り合いました。¹⁹
- ダビデと死んだ子ども（サムエル第二12:23）。ダビデはこう言いました。「しかし今、あの子は死んでしまった。私はなぜ断食をしなければならないのか。あの子をもう一度呼び戻せるだろうか。私があの子のところに行くことはあっても、あの子は私のところに戻っては来ない。」

14. 創世記25:8、17、35:28-29。創世記37:35、士師2:10も参照。

15. 創世記37:35、42:38、44:31、民数16:30、サムエル第一2:6。

16. 創世記35:29、列王第二22:20、歴代第二34:28。

17. レビ19:31、20:6、27、申命18:11。

18. 2.2節を参照。

19. マタイ17:3、マルコ9:4、ルカ9:30。

信者と神との交わり、そして彼らの神への信頼は、死においても途切れることがありません。死への恐れが表されていることばと並んで、確信、平安、期待が見られることばもいくつかあります。詩篇16:9-11、17:6、31:5、49:14-15、73:24-26、116:15。

まとめると、旧約は来世について、ある程度までしか私たちに知らせていないということがわかります。ですから、もし旧約から死後のいのちについての決定的な主張を導き出そうとするなら、新約に見いだされるこの事柄についての光を暗くしてしまうことになるでしょう。旧約のことばを新約に基づいて調べ、その光のもとで解釈するときだけに、私たちはそれを正しく理解できるのです。新約は常に旧約を開く鍵であって、その逆ではありません。

次の聖句で救いについて言われていることは、意味の上では人間の将来についても当てはまるでしょう。預言者たちは多くのことを見て書き記しましたが、それは探し求め、調べることであって、完全な知識が与えられていたわけではありませんでした。

「この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証ししたときに、それがだれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです」（ペテロ第一1:10-11）。

この問題における旧約と新約の関係は、ドイツ基本法第31条のことばで明らかにすることができますでしょう。「連邦法は州法を破る」（Bundesrecht bricht Landesrecht）。つまり、同じ事柄について条文の内容が異なる場合には、連邦法が優先するのです。

理解を深めるための問い

- 「死後のいのち」について旧約で何が啓示されたか、まとめてください。
- 旧約と新約とでは、啓示においてどのような違いがありますか。
- なぜ旧約を、人間の将来についての教えの土台として用いることができないのでしょうか。

1.6 死の起源と働き

永遠の神²⁰、ただひとり不死を持っておられる方²¹の御手から、これ以上良く美しくなりようのない被造世界が生み出されました（創世記1:31、伝道者3:11）。人間は神のかたちに、神に似せて造られ（創世記1:26-27、ヤコブ3:9）、したがって目に見える被造世界の中心として、創造主との交わりの中で生きるように定められていました。人間はすばらしい園に住んでいました。それは、この使命を果たすのに最もふさわしい環境でした。園の中央には、いのちの木が立っていました（創世記2:9、16、3:22）。力と豊かさに満ちたいのちが、被造世界の特徴でした。いのち、しかも時間的な限りのまったくいいのちこそ、神が人間に与えられた最高のものでした。人間はいつでも、いのちの木の実を食べることができました。人間は初めから、終わりのないいのちに向けて造られていたのです。それだけが、神のご本質とみこころにかなうことでした。

それだけにいっそう印象深いのは、人間が不従順によって創造主への依存と交わりから離れ出るなら死ぬ、という警告です（創世記2:17）。いのちがあふれるこの領域において、死の警告は、考える最も恐ろしい警告でした。死とは人間にとって、自分に見える被造世界——つまりその地上の領域——を去らなければならないことを意味しました。そしてそれは、この（目に見える）被造世界の中で知っていた創造主から離れることでもありました。人間はちりから形造られました（創世記2:7）。そして再びちりになるのです。

「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついには土〔直訳「地面」〕に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ」（創世記3:19）。

20. 「山々が生まれる前から、地と世界をあなたが生み出す前から、とこしえからとこしえまで、あなたは神です」（詩篇90:2）。「……永遠の神の命令にしたがい」（ローマ16:26）。

21. 「キリストの現れを、定められた時にもたらしてくださる、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王〔直訳「王である者たちの王」〕、主の主〔直訳「治める者たちの主」〕、ただひとり死のない方、近づくこともできない光の中に住み、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。この方に誉れと永遠の支配がありますように。アーメン」（テモテ第一6:15-16）。

いのちのために造られた人間が、滅び去り、地上のいのちを失い、ちりのように無意味なものになる——これ以上の対照があるでしょうか！？

人間は、蛇すなわち悪魔の誘惑によって、不従順を選び、それによって死を選びました（創世記3:1-7）。罪は、死がこの被造世界でその恐ろしいわざを始めるための扉を開きました（ローマ5:12以下）。死は罪の報酬です（ローマ6:23）。死は、神から離れ去ったことの恐ろしい結果です。これが、死についての聖書の基本的な主張です。罪が原因であり、死は避けられない結果です。罪によって人間は神への依存から離れ出て、それによって、いのちを持ち、いのちを与える方から離れてしまうのです。²²

ですから、死は自然ないのちの終わりでも、恵み深いいのちの終わりでもありません。死には何一つ良いところはありません。死は、人間が手放したくないいのちを終わらせます。死は決定的で、取り消すことができず、元に戻すことができません。人間が死から取り戻されることはないということ（サムエル第二12:23、14:14）——これが、罪人となった人間の恐ろしい運命です。このような暗い見通しをもって、歴史の歩みは始まります。被造世界全体が、死とはかなさの判決のもとに置かれました。しかし希望があります。女の子孫がいつか蛇の頭を踏み碎き、それによって被造世界全体の解放への道を開くからです（創世記3:15）。

「被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。被造物が虚無〔または「はかなさ、空しさ」〕に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています」（ローマ8:19-22）。

死は、自然に反するものとして被造世界に侵入してきました。しかも、人間には打ち負かすことのできない敵として、残酷に、容赦なくそのわざを行う敵としてです。人間も通常、死をそのように感じています。神なしに生きる

22. ヨハネ1:4。箴言14:27、19:23も参照。

人は死の恐怖に苦しみます。自分に何が起こるのかを知らず、また自分の良心に責められるからです。良心は彼を罪ありとし、生ける神への恐れを彼に抱かせます（ヘブル2:15）。

アダムとエバが罪を犯した後、神は彼らの裸をおおうために、皮の衣を着せてくださいました（創世記3:21）。初めて彼らは死に直面しました。この衣を作るために、一匹の動物が死ななければならなかったのです。さらにはるかに恐ろしかったのは、兄弟に殺された自分たちの息子の亡骸を見たときでした（創世記4:8）。死は、破壊的で打ち負かすことのできない敵として姿を現します。死はとどまることなく、その勝利の行進を始めます（ホセア13:14、コリント第一15:54）。アダムは非常に長く生きましたが（創世記5:5）、それでも、彼が死んでちりにならなければならないことは、真実となったのです。

理解を深めるための問い

- 死はどこから来たのでしょうか。
- 死は何を引き起こしたのでしょうか。

1.7 死ぬとき、何が起こるのか

ここで扱うのは、罪の結果として人間の地上のいのちに終わりをもたらす、からだの死です。では、死において何が起こるのでしょうか。すでに示唆したように、死は分離を引き起こし、一つに結び合わされているべきものを引き裂きます。死とは、一つのまとまり、すなわち人間の全体性の終わりなのです。

人間は一つのまとまりではありますが、その存在を形づくる多くの側面を持っています。死との関連では、霊、魂、からだについて語られています。²³ 死は、からだを霊と魂から分離させます。外なる人から内なる人を分離させ

23. これについては第3章で詳しく扱います。

るのです（コリント第二4:16以下）。神のことばは、このことを何度も証ししています。²⁴

1.7.1 人間の霊と死

人が死ぬとき、人間の霊は、それを与えた神のもとに帰ります。多くの問いにこの世の視点から答えている伝道者でさえ、こう言っています。

「……土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る」（伝道者12:7）。

ルカも、ヤイロの娘を生き返らせた出来事の報告の中で、このことに触れています。

「しかしイエス〔原文の補足〕は娘の手を取って、叫ばれた。『子よ、起きなさい。』すると娘の霊が戻って、娘はただちに起き上がった。それでイエスは、娘に食べ物を与えるように命じられた」（ルカ8:54-55）。

死が訪れたときに娘から去っていた霊が、戻ってきたのです。人が死ぬと、霊はからだを離れます（詩篇146:4）。ヤコブもこう言っています。「霊のないからだが生んだものであるのと同じように、行いのない信仰は生んだものである」（ヤコブ2:26）。

人間を創造されたとき、神は人間に霊を与えられました（創世記2:7）。人が死ぬと、神は霊を取り戻されます。

「天を張り、地の基を定め、人の霊をその内に形造られた主はこう言われる」（ゼカリヤ12:1）。

「あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑います。あなたが彼らの息を取り去られると、彼らは息絶え、自分のちりに帰ります。あなたが

24. ここで私は、人間を二分説や三分説で見ようとしているのではありません。霊と魂ということばは、しばしば入れ替え可能な形で使われています。大切なのは、それらが人間の中で死を越えて存続し、死の向こうまで人間の人格を保つ部分であるということです。人間の本質が問題になると、人間の心もまた、聖書の中で同じように重要な位置を占めています。

あなたの息〔直訳「息吹」(または「霊」)〕を送られると、彼らは創造され、あなたは地の面を新しくされます」(詩篇104:29-30)。

死ぬこととは、霊が神の御手に受け入れられることです(詩篇31:5)。主イエス・キリストも、十字架上で死なれたとき、このことを語られました。福音書記者たちは、このことをはっきりと記しています。²⁵

マタイ「しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された」(マタイ27:50)。

ルカ「イエスは大声で叫ばれた。『父よ、わが霊をあなたの手にゆだねます。』こう言って、息を引き取られた」(ルカ23:46)。

ヨハネ「イエスは酸いぶどう酒を受けると、『完了した』と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった」(ヨハネ19:30)。

創造主として、初めに主は人間にいのちの息を吹き込まれました。しかし十字架の上では、完全に人となっておられたので、ご自分の霊を父の御手にゆだねられたのです(詩篇31:5)。主は、霊(マルコ8:12)においても、魂(マルコ14:34)においても、そして苦しみを受けて死なれたからだにおいても、人間でした。

ステパノは死に際してこう祈りました。「主イエスよ、私の霊をお受けください」(使徒7:59)。

1.7.2 死にゆくときの魂

ラケルがベニヤミンを産むときに死んだとき、彼女の魂は出て行きました(創世記35:18)。エリヤは、ツアレファテのやもめの死んだ息子の魂が戻るように祈りました。「主はエリヤの声を聞かれ、その子の魂はその子のうちに戻り、その子は生き返った」(列王第一17:22。ドイツ語聖書の訳語に沿って訳出)。

25. イエスは霊をお渡しになりました。つまり、主はその引き渡しの時をご自分で決められたのです。この点で主は比類のない方です。主には、ご自分のいのちを捨てる権威がありました(ヨハネ10:18)。被造物である人間には、それはありません。

旧約では、ときに魂が死ぬことについても語られています（たとえば民数23:10、士師16:30）。しかしこれは、魂の死ではなく、からだの死を意味しています。問題は、魂がからだから出て行くことなのです。このことは、「生きることに疲れた」エリヤのことばにはっきり表れています。彼はえにしだの木の下に座り、自分の魂が死ぬことだけを切に願いました（列王第一19:4）。彼は主に、自分の魂を取り去ってくださるようお願いしたのです。

ヨナは、生きているより死ぬほうがましだからと、主が自分の魂を取り去ってくださるように祈りました（ヨナ4:3）。

アナニアとサッピラの場合も、ヘロデ王の場合も、彼らが「魂を吐き出した」（息絶えた）とき、死が訪れました（使徒5:5、10、12:23）。²⁶

神は、金持ちの農夫から、いのちだけでなく、その魂をも取り立てられました（ルカ12:20）。

つまり、死ぬこととは、魂が（生物学的ないのちだけではありません！）神のもとへ取り去られることであって、決して魂の解体や消滅ではないのです。聖書は一点の疑いもなく、人間の魂が死において消え去るのではなく、生き続けることを明らかにしています。

1.7.3 霊と魂

引用した聖書のことばでは、霊も魂も、死のときに人間を離れ、別の場所に行くか、「からだのない」状態で存在するものを表しています。「霊」と「魂」という二つのことばは、多くの場合同じ意味で用いられ、しばしば一つの同じものを指しています。ですから、この本の以下の部分で人間の霊と魂について語るときには、この二つのことばを組み合わせることにします。「靈魂」ということばを用いることにします。このことばは聖書には見られませんが、理解を容易にしてくれます。

理解を深めるための問い

- 死ぬとき、あるいは死にゆくとき、何が起こるのかを説明してください。

26、「息絶える」と訳されているギリシア語 *ek-psycho* は、直訳すると「魂を出す」という意味です。

- なぜ人は死を恐れるのでしょうか。
- 死と罪の関係を説明してください。
- 死に関して、一方では悪魔が、他方では主イエスがどのような役割を果たしているかを述べてください。

1.8 死のさまざまな側面

死は人間のからだだけに関わるものではありません。新約は、すべての人が自分の罪のゆえにその中にいる、霊的な死についても語っています。²⁷ 霊的な死とは、人間の霊の「非存在」でもなければ、まして霊の消滅でもありません。それは、人間の霊が神から切り離されていることです。

新約はまた、「第二の死」についても語っています。²⁸ 「第一の死」は、人間が目に見える世界を去るときの、からだの死を指しています。信じない者たちには、復活の後に第二の死が続きます。それは、彼らが復活した後の、決して終わることのない二度目の死のようなものです。第二の死は人間の最終的な消滅ではなく、神からの最終的な断絶です。そこから神との交わりに戻ることは、もはやありません。

1.9 死に対する勝利

死は、人間の罪によって世界の中で勝利の行進を始めました。神から切り離されたところには、死しかありません。死は、罪に対する神のさばきです。しかし、死が力を持ち続け、人間が霊的な死、からだの死、そして最終的には永遠の死に服し続けることが、神のみこころなののでしょうか。いいえ、聖書はこれについてこう語っています。

「これは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることです。神は、すべての人が救われて、真理を知ることになることを望んでおられます」（テモテ第一2:3-4）。また、「わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——神である主のことば——。彼がその生

27. ルカ15:32、ヨハネ5:25、エペソ2:1-10、コロサイ2:13、ヨハネ第一3:14、ユダ12、黙示録3:1。

28. 黙示録2:11、20:6、14、21:8。

き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか」（エゼキエル 18:23）。

1.9.1 死と罪

いのちを与えるためには、死の問題が解決されなければなりません。死と罪に陥った人間の救いを求められた救い主なる神は（テトス2:11、3:4）、一つの道を見いだされました。永遠の神（ローマ16:26）、ご自分のうちにいのちを持っておられ（ヨハネ5:26）、光であり（ヨハネ第一1:5）、愛である（ヨハネ第一4:8）神が、イエス・キリストの人格において、いのちの光をもって（ヨハネ1:4、8:12）死の地を照らしておられるのです。

「闇の中に住んでいる民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいる者たちの上に光が昇る」（マタイ4:16。イザヤ9:2からの引用）。

この聖句はイスラエルの民について述べていますが、原則としてはすべての人に当てはまります。神は、時が満ちたとき（ガラテヤ4:4、ヘブル1:1）、死に打ち勝つためにご自分の御子を遣わされました。神の御子は勝利を収められました。主は十字架でみわざを成し遂げ、復活された後にこう言われました。「わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とハデスの鍵を持っている」（黙示録1:17-18）。このことばから、神ご自身が語っておられることがわかります。これらのことばは神にしか当てはまらないからです（黙示録1:8、2:8、22:13）。それは、旧約でご自分を現された同じ神なのです（イザヤ41:4、44:6、48:12）。

主イエスは、地上で人として歩まれたとき、死に対する力を持っておられました。ラザロ（ヨハネ11章）、ナインの若者（ルカ7:11-14）、ヤイロの娘（ルカ8:49-56）をよみがえらせることによって、主はそれを証明されました。主が死人をよみがえらせたことは、主がいのちの君（使徒3:15）であり、したがって神ご自身であることの証明でした。

キリストの神性と同じように重要なのは、キリストが人であるという事実です。主は、罪人の身代わりとして死ぬことができるように人となりました。主は罪のためのいけにえとして死なれました。墓に葬られました。三日後、神によってよみがえらされました。復活において、主は今、人として朽ちることのないいのちを持っておられます（ヘブル7:16）。ですから、よみがえって栄光を受けた人として、主は死とハデスの鍵を持っておられるのです。鍵は権威を表す象徴です。²⁹ 人であるイエス・キリストが、死とハデス、すなわち死者の領域に対する権威を持っておられます。死はもはや主に対して何もできません（ローマ6:9-10）。ですから、主と結ばれている人々に対しても、死はもはや何もできません。それは、主に立ち返り、主のいのち、すなわちよみがえられた方のいのちを持っている人々です。

人々を死から永遠に解放するためには、神ご自身が人となって死ななければなりませんでした。それによって罪の問題が解決され、また復活によって死が打ち負かされたのです。なんと神らしい勝利でしょうか！

神の御子イエス・キリストは聖なる方でした。つまり、聖霊なる神ご自身によって宿された方でした（ルカ1:35）。したがって、その生涯には罪がありませんでした（ヨハネ第一3:5）。ことばにも、思いにも、行いにも罪はなかったのです（コリント第二5:21、ペテロ第一2:22）。ですから、ほかのすべての人に当てはまるのが、主には当てはまりませんでした。主は死ぬ必要がなかったのです。主が死なれたとき、それはご自分の意志による死でした。主には、ご自分のいのちを捨てる権威があり、またそれを死から再び取る権威もありました（ヨハネ10:17-18）。

これは私たちを、死と罪の関係へと再び連れ戻します。罪が死をもたらしました。死の問題は、同時に罪の問題でもあります。ですから、まずこの原因が取り扱われなければなりませんでした。初めに述べたように、神は光です。つまり、神は絶対的に聖なる方です。神は罪を見ることができず（ハバクク1:13）、罪を罰せずにそのままにしておくことはできません。罪人の罪のための宥めがなされることなしに、神は罪を抱えたままの罪人を受け入

29. 黙示録3:7、9:1、20:1、マタイ16:19、18:18、イザヤ22:22参照。

れ、その人にいのちを与えることはできません。そのために、神の子羊であるキリストが死なれたのです（ヨハネ1:29）。主は、罪に対する神の怒りを、罪人の身代わりとして負われました（コリント第二5:21）。神の要求は、キリストの死によって満たされました。神の聖さは、完全に満たされたのです。

宥めを成し遂げたキリストの死は、普通の人間の死ではありませんでした。キリストの死は、罪に対する神のさばきでした。聖なる方である主が、罪とされたのです。主は、神の側から罪のために苦しみを受けられました。私たちに平安をもたらす懲らしめが、主の上にありました。神は、罪のない方を私たちの罪のために罰せられました。ですから、人間が罪の報酬として受ける死は、からだの死だけではなく、最終的には永遠の死でもあります。永遠の死、すなわち神からの永遠の断絶という刑罰を、キリストは十字架の上で経験されました。それは、私たち信じる者をそこから永遠に解放するためでした。

キリストが三日後によみがえられたとき、主はご自分の神としての力によって死の鎖を打ち砕かれました。キリストはよみがえられ、罪は宥められ、死は打ち負かされました。主は罪と死の力を打ち砕かれたのです（ローマ5:12-21）。これが復活の知らせの中心です。これが死の支配の終わりなのです！

しかしこの勝利は、死が今すでに廃止され、世界から取り除かれたという意味ではありません。死は依然としてこの世界を支配しています。キリストの復活のいのちを持っている信者たちも、なお死にます。しかし信者にとって、死はすでに力を奪われています。「滅ぼす」（*zunichte machen*）とは、「無効にする」「無力にする」という意味です。世界では死が罪を通して支配し続けていますが、信者は死の力から解放されています。信者にとって死は、もはやさばきではなく、栄光への入り口なのです。ヘブル人への手紙2章14～15節は、これらの考えをまとめています。

「そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力

を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」

1.9.2 死と悪魔

悪魔が死の力を持っているとは、どういうことでしょうか。悪魔は自分の意のままに人を殺すことができるのでしょうか。悪魔は死を自由にできるのでしょうか。それは不可能です。神がすべての人のいのちをご自分の御手に握っておられ、お望みのときにそれを取り戻されるからです。悪魔にはそれはできません。しかし悪魔は、死の力を同盟者として自分の側につけています。悪魔は巧妙な誘惑によって人間を罪に誘い、それによって人間を死の力のもとに置きました。それが悪魔の狙いだったのです。

こうして悪魔は人間に影響力を持つようになりました。悪魔はこの世の神（コリント第二4:4）となり、この世を支配する者（ヨハネ12:31、14:30、16:11）となりました。死と闇の力がこの世界を支配しており、悪魔は初めから人殺しです（ヨハネ8:44、ヨハネ第一3:8）。繰り返しますが、悪魔には殺す力はありません。しかし悪魔は、いのちの源である神から人間を引き離すことによって、狡猾な誘惑者として人を殺すのです。この誘惑の毒が、人を霊的にも肉体的にも、しかも永遠に殺します。神なしに死ぬ人はみな、永遠に悪魔の獲物です。この意味で、死は悪魔のために働き、悪魔の邪悪な意図を助けているのです。

しかしキリストは、悪魔の支配領域である死の中に入り込み、ご自分の復活によって勝利を収めることによって、悪魔を滅ぼされました。主の十字架の死は、悪魔に対する勝利です（コロサイ2:15）。

悪魔は確かに消滅させられてはいませんが、壊滅的な敗北を喫しなければなりませんでした。悪魔はまだ生きており、初めのころと同じように活動し続けています。しかし、悪魔と死の終わりは、すでに確かに定められています。

イエスの勝利は、今のところ、キリストと結ばれている人々にだけ当てはまります。彼らは死の恐怖から解放されています。彼らにとって死は打ち負か

された敵だからです。使徒パウロのことば（コリント第一3:22）によれば、死は今や彼らのものでさえあります。死は彼らを、パラダイスにおられるキリストのもとへ連れて行くからです。信者にとって、すべてのことがともに働いて益となる（ローマ8:28）と言われているなら、死でさえその例外ではありません。

死に打ち勝った方を知らないすべての人にとって、死への恐れは一生涯にわたる奴隷状態を意味しうるのです。死に直面したときの人々の死の恐怖が最も大きくなるのは、宥められていない罪責について良心が目覚め、彼らを責めるときです。ですから、ヘブル人への手紙2章14～15節の筆者は、とくに律法の束縛のもとにあって、罪が赦されているという確信を持たなかった人々のことを考えていたのでしょう。

イエス・キリストの勝利は、死と死の恐怖の束縛を打ち砕きました。罪と死と悪魔は、主イエス・キリストの宥めの死と復活によって打ち負かされました。これが土台となって、やがて罪は全宇宙から取り除かれ（ヨハネ1:29、ヘブル9:26）、死は最後の敵として滅ぼされるのです（黙示録20:14）。

「最後の敵として滅ぼされるのは、死です」（コリント第一15:26）。

「そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。『死は勝利に呑み込まれた。』『死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか』（コリント第一15:54-55。イザヤ25:8、ホセア13:14参照）。

「神の御子が現れたのは、悪魔のわざを打ち破るためです」（ヨハネ第一3:8）。

主は本当にそれを成し遂げられました。そして、それを完成されるのです！
主がほめたたえられますように！

2 死の後に何が来るのか

死後から復活までの人間の状態について、聖書はそれほど多くを語っていません。むしろ聖書は、私たちの期待を完成の日へと向けさせます。キリスト者の希望は、主イエス・キリストが来られて、ご自分の民を天の故郷へ導いてくださることに向けられています。この祝福に満ちた希望を前にして、死と復活の間のいのちは背景に退きます。

それは当然のことです。私たちの希望は、死によって実現するのではないからです。私たちが最終目標に到達するのは死によってではなく、復活の時になって初めてです。しかし中間状態は、最終目標の前の最後の行程です。そしてそれは、すでに完成の前味わいを含んだ、祝福に満ちた認識なのです。

死後のいのちについて語るとき、私たちは時間的に限られた中間状態について語っています。以下で私が追究したい問いは、次のとおりです。死後の人間の意識状態は、どのようなものなのでしょうか。その際、私は何度か、死後のあらゆる意識と、来世そのものを否定する見方と取り組むことになります。

これらの問いを、これから11の項目に分けて追究していきます。その際、新約の重要な聖書箇所を取り上げます。各章はそれぞれ単独で用いることができるほど詳しくまとめてあります。そのため、あちこちで繰り返しが生じることがあります。

2.1 ラザロと金持ち

死後のいのちが問題になるとき、多くの人がまず思い浮かべるのは、きっとこのよく知られた話でしょう。この話は、いつもそのような意味で理解されてきました。それでも、この話を死後のいのちから完全に切り離し、まるでそれについて何も語っていないかのように解釈しようとする試みがあります。私は一方でこの話の意味を明らかにし、他方で誤った説明についても見解を述べたいと思います。

「ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた。犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた。しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懷に連れて行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた。金持ちが、ハデスでしみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懷にいるラザロが見えた。金持ちは叫んで言った。『父アブラハムよ、私をあわれんでラザロをお送りください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすようにしてください。私はこの炎の中で苦しくてたまりません。』するとアブラハムは言った。『子よ、思い出さない。おまえは生きている間、良いものを受け、ラザロは生きている間、悪いものを受けた。しかし今は、彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている。そればかりか、私たちとおまえたちの間には大きな淵が置かれている。ここからおまえたちのところへ渡ろうとしても渡れず、そこから私たちのところへ越えて来ることもできない。』金持ちは言った。『父よ。それではお願いですから、ラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人いますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることがないように、彼らに証ししてください。』しかし、アブラハムは言った。『彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ。もし、死んだ者たちの中から、だれかが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。』アブラハムは彼に言った。『モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない』(ルカ16:19-31)。

2.1.1 ここでは死後のいのちが問題になっているのか

次の理由は、ここで死後のいのちが問題になっていることをはっきり示しています。

- この話の大部分、すなわち三分の二以上が、二人の人物の死の「後」に起こる事柄を描いています。二人の復活については何も語られていません。
- 金持ちが死後に目を上げる「ハデス」も、貧しい人が死後に連れて行かれる「アブラハムの懷」も、死の向こう側の場所あるいは状態を指しています。これらのことばを、それ以外の意味に説明することはできません。
- ユダヤ人はこれらのことばをよく知っていました。彼らの伝承において、来世についてのこうした、あるいはこれに似た描写はなじみ深いものでした。
- 金持ちが死の状態にあったとき、その兄弟たちはまだ生きていました。兄弟たちは同時に存在しています。ある者たちは地上に、一人はハデスに。

30

神の御子はここで幕を引き開け、それまで旧約の書物の中で啓示されていなかったことを明らかにしておられるのです。

2.1.2 この話の意味

この話は死の直後の状態についてのものだと私たちが言うとき、文脈（ほかのたとえ話）も、この話によって直接語りかけられている人々——パリサイ人たち——も見落としているわけではありません。この話の中でイエスは、金持ちのぜいたくと自己中心を、その恐ろしいほどの規模において描いておられます。金持ちは、あからさまな律法違反者として描かれてはいません。彼の罪も、パリサイ人たちの罪も、そこにあったのではないからです。彼らの罪、すなわち金銭を愛することは、敬虔さという偽善の外套の下に隠されていました（ルカ16:14）。金銭を愛すること（テモテ第一6:10）は、永遠に及ぶ結果をもたらします。そしてその結果は、死の直後からすでに始まるのです。それがこの話のテーマです。

パリサイ人たちは、主の弟子たちに向けて語られた不正な管理人の話（ルカ16:1）を、少し

30. したがって、この世界の歩みに何の変化も起こっていません。たとえば神の国の始まりや、復活といった変化です。

離れたところで聞いていました（ルカ16:14）。そのあと彼らが主をあざ笑ったので、主は彼らに直接語りかけられました。彼らは、とりわけ厳粛で誤解の余地のない教えを受けたのです。イエスは、金持ちの振る舞いを通して彼らに語りかけられました。

この教えは、パリサイ人たちの金銭への愛を責めることだけにとどまりません。またこの警告は、金持ちであれ貧しい者であれ、すべての人がいつか死ななければならないということだけで尽きるものでもありません。それは何よりも、その後に来るものに向けられています。ですから、明らかに分量の多い部分が、死の向こう側の出来事、とくに金持ちの運命を扱っているのです。二人の死の後の出来事は、お金についての教えをはめ込むための意味のない枠組みではありません。それこそが、この話の主要な内容なのです。

2.1.3 たとえ話なのか

この話がたとえ話なのかどうかという問いについては、多くのことが語られてきました。ある人々は、これはたとえ話であって、教理的な主張をしたり、それまで知られていなかった事柄を啓示したりするためのものではない、と強調します。また、たとえ話は一つの中心的な考えしか含んでいないので、そのあらゆる細部を解釈することはできない、と言います。ここでの中心的な考えは、パリサイ人たちの金銭欲とお金の誤った使い方を責めることであり、それが——死後のいのちではなく——中心的な主張なのだ、というのです。

ルカは、この話をたとえ話とは呼んでいません。ルカはその福音書の中で十一回もたとえ話について語っているので、もしかすると私たちはそう呼ぶことを期待したかもしれません。これがたとえ話ではないことを示す最も強力な論拠は、固有名詞、すなわちラザロという名が使われていることです。これは、ほかのたとえ話には見られないことです。この固有名詞——ラザロはよく知られた名前でした（ヨハネ11章参照）——は、実際に起こった出来事が問題になっていることを示唆しています。

なぜイエスは、明らかに来世を表すのに使われていたことばを用いられたのでしょうか。そうすることで主は、パリサイ人たちの考え、彼らが来世につ

いて信じていたことにまさに的中させられたのです。けれども彼らは、事の重大さを自分自身に当てはめようとはしませんでした。

2.1.4 死の前に

最初の三節だけが地上の生活を描いています（ルカ16:19-21）。そしてそこには、二人の死後のいのちにとって決定的であったことが、まさに含まれています。名前の挙げられていない金持ちは、自己中心の中で生きていました。彼の衣服は最上のものでした。彼は自分の富を神の祝福だと理解していたかもしれません。けれども、あらゆる賜物の与え主である神は、彼の人生の中にいませんでした。彼は隣人愛というものを知らないようでした。それは、貧しい人に対する彼の態度からはっきりわかります。貧しい人は、金持ちの家の門口で犬たちと同じ境遇にあり、そこで惨めな物乞いの生活をしながら、金持ちの残り物で生きていました。金持ちの罪は富そのものではなく、その自己中心でした。彼はおそらく毎日その貧しい人を見ていたのに、気にも留めなかったのです。犬たちのほうが、金持ちよりもラザロに同情を示したようです。

金持ちの名前とは対照的に、貧しい人の名前は挙げられています。ラザロとは「神は助け」という意味です。この名前の中に、貧しい人の生き方を解く鍵があります。彼は、貧しさの中で頼らざるをえなかった神のもとに助けを見いだししました。しかし、彼を死後にアブラハムの懷へ連れて行ったのは、彼の貧しさではなく、神への信頼でした。

すべての人にそうであるように、この二人にも、地上に別れを告げなければならない日がやって来ました。二人とも同じように死にました。金持ちは葬られましたが、貧しい人の葬りについては何も語られていません。しかし二人の死とともに、物事は突然、別の光のもとで見られるようになります。

人が死ぬとき、真実の時が来ます。何が本当に大切で、死を越えて残るものは何か、その人に明らかになる時です。そのときには、もはや自己欺瞞も不信仰もありません。

人は、生きている間、死後のいのちについて話しかけられるたびにいつも要求していた証拠を、そのときにはもう求めないのです。

イエスは、二人の違いが、地上の生活においてよりも死後のほうがはるかに大きいことを示しておられます。形勢は逆転しました。貧しい人は祝福の場所にいて、地上の生活との別れを惜しむ必要がないからです。救いを受け継ぐことになる人々に仕える霊である御使いたち（ヘブル1:14）が、ラザロをその死の瞬間にアブラハムの懷へ運んで行くのです。

2.1.5 ユダヤ人の来世観

主イエスがここで、ご自身もユダヤ人として知っておられた聴衆の考え方に結びつけて語っておられることは、一般に認められています。ですから、当時の来世観を簡単に説明しておくことは役に立つでしょう。

ユダヤ人は、死者の魂あるいは霊はシェオルに行くと思っていた。それは死者の領域であり、復活を待つ間の一時的な滞在場所にすぎません。彼らはまた——そしてこれは旧約の聖書の証言を越えるものでしたが——そこでは正しい者と正しくない者とが分けられていると信じていました。一方は至福の中にあり、他方は刑罰と報いを受けていたのです。ですから彼らにとって、死者が完全な意識を保っていることは疑問の余地のないことでした。そうでなければ、祝福も刑罰も意味をなさなかったからです。

歴史家ヨセフス（Josephus）は、パリサイ人の信仰を次のように述べています。「彼らはまた、魂は不死であり、その人が徳のある者であったか悪徳に満ちた者であったかに応じて、地の下で報いあるいは罰を受けると信じている。それゆえ、悪徳に満ちた者たちは永遠の牢獄で苦しまなければならないというのである。」³¹ このような背景のもとでは、パリサイ人たちにとって、この話を理解することは難しくありませんでした。イエスは、死後の人間のいのちと存在について、

31. フラウィウス・ヨセフス（Flavius Josephus）*Jüdische Altertümer*（『ユダヤ古代誌』）第18巻、第1章3節、Wiesbaden（Fourier Verlag）、1985、506、507ページ。

そしてその存在が地上の生活によってどのように決まるかについて語られたのです。

パリサイ人たちが、旧約を越えるこの見方にどのようにして至ったのかを調べることは、私の意図ではありません。大切なのは、この信仰が旧約と矛盾していないということです。主イエスもこの見方を断罪したり訂正したりしてはおられません。むしろ、この考え方の基本的な考え³²に結びつけながら、同時に神としての全知をもって、死後に何が来るのかを啓示しておられるのです。

神の御子はここで、ユダヤ哲学やギリシア哲学の影響を受けることなく、死後のいのちがあること、しかもそれが喜びの中にも苦しみの中にもあることを明らかにしておられます。イエス・キリストを認める人は、そのご人格を疑問視することなしに、これらのことばを別の意味に解釈し直すことはできません。

2.1.6 アブラハムの懷

アブラハムの懷というのは、典型的なユダヤ的表現です。聴衆にはよく知られた表現でした。聖書の中でこの表現が出てくるのは一度だけです。アブラハムの懷とは、正しい人が死後に迎え入れられる祝福の場所でした。「正しい人々の懷」という表現も、ユダヤ人にとっては死の向こう側の場所を指していました。ここでは、神の友アブラハムが中心にいます。アブラハムが死後も生き続けていることは、ユダヤ人にとって疑問の余地のないことでした（ルカ20:27-40）。アブラハムの懷は、ユダヤ人にとって、死後にぜひとも占めたいと願う名誉ある場所でした。この場所は、交わり、親しさ、喜びを示しています（ヨハネ1:18、13:23）。

主イエス・キリストの教えは、ユダヤ人の考え方に結びつけて語られたとしても、ユダヤ人だけに当てはまるものではありません。新約のほかのことばと一致して、原則としてすべての人に及ぶものです。ですから、「アブラハムの懷」は「パラダイス」とも呼ぶことができます。この考えも、ユダヤ人

32. 私があえて「基本的な考え」と言うのは、当時の思想世界には、ルカの福音書16章によって裏づけられない豊かな空想があったからです。

にとってなじみのないものではありませんでした。たとえば「雅歌のタルグム」³³にもその響きが聞かれます。そこでは、死んだ正しい人々の魂は御使いたちによってパラダイスに運ばれる、とされています。

アブラハムの懷は、ときどき主張されるように、将来の神の王国ではありません。確かに別の箇所では、この王国で族長たちと共にする食事について語られています（マタイ8:11）、それは地上で行われることです。しかし、ここで問題になっているのはそのことではありません。この話では、ラザロと金持ちが地上ではなく、目に見える世界の外にいることがわかります。同時に、金持ちの五人の兄弟は、その時まだ地上で生きていました。金持ちは、兄弟たちに警告するために死者の中からだれかが遣わされることを望んだのです。兄弟たちは明らかに、かつて彼自身が生きていたように生きていたからです。

2.1.7 ラザロはどのようにしてアブラハムの懷に行ったのか

人が死ぬと、からだが朽ちていく一方で、その靈魂は生き続けます。しかしこの話では、ラザロは一人の人間全体として、アブラハムの懷へ運ばれたように描かれています。靈魂だけがそこへ運ばれたとは書かれていません。これは矛盾ではありません。この世を去った魂については、いつも、まるでからだを持って生きている状態にあるかのように語られるからです。この世を去った人々の感覚やいのちの営みは、主イエスがここでなさっているように、からだを持って生きている現実に対応する仕方では、ことばや比喩で表現することができないのです。

二人の死の後に続く出来事の描写は、死の前の生活の描写と何ら変わりません。二人の意識と知覚に関する限り、死はここで明らかに何も変えていません。人間の人格、周囲を意識的に知覚すること、そして記憶は、死後も何の制限もなく保たれるのです。

33. 旧約と新約の間の時代の外典。

2.1.8 ハデス

金持ちはハデスで目を上げ、苦しみの中にいます。ハデスはギリシア世界でよく知られたことばでした。そこではハデスは冥界の神であり、また死者のいる場所でもありました。

ハデスを地獄と混同してはなりません。残念なことに、いくつかの聖書翻訳（たとえばルター訳〔ドイツ語聖書翻訳〕）では、ここで使われているギリシア語「ハデス」が「地獄」（Hölle）と訳されています。そのため、二つのことばが同じものを指していると考えてしまうかもしれません。しかし、これは二つの異なるものです。これについては後でさらに詳しく述べます。ルカの福音書16章のハデスをさらに詳しく扱う前に——「孤立した」、したがって誤った説明に陥らないために——ハデスが出てくる新約の10か所すべてを見てみましょう。

1番目と3番目の箇所：「カペナウム、天にまで上げられたおまえは、ハデスにまで落とされる」（マタイ11:23、ルカ10:15）。

ここで「ハデス」は「天」と対比されています。カペナウムが天にまで上げられたのは、メシアがこの町で最も多くの奇跡を行われたからです（マタイ9:1）。ここでは、さばきの日におけるカペナウムの深い転落が、「最も高い」場所と「最も深い」場所という大きな対比によって明らかにされています。この意味で、しばしば「上」と「下」について語られています。³⁴ ここでハデスは、祝福の場所である天から、到達できないほど遠く離れたさばきの場所なのです。

2番目の箇所：「そしてこの岩の上に、わたしの教会〔直訳「集会」〕を建てます。ハデスの門もそれに打ち勝つことはできません」（マタイ16:18）。

生ける神の御子である主イエス・キリストは、攻め落とすことも動かすこともできない土台であり、主はその上にご自分の教会を建てようとしておられました。この岩の上に建てられているので、ハデスでさえ教会に打ち勝つことはできません。ハデスには力があります。そのことが、門という象徴によ

34. ヨハネ8:23、テモテ第一6:9、ペテロ第二2:4、ユダ6、黙示録20:1、箴言9:18、15:24参照。

って表されています。ハデスの背後には死の力が隠れています。ハデスと死の力は、教会に打ち勝つことも、それを「占領する」こともできません。教会は、いのちそのものであり死に打ち勝った方の上に建てられているからです。ハデスは悪しき力であり、ここでは教会の敵として姿を現しています。

4番目の箇所：「金持ちが、ハデスで苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懷にいるラザロが見えた」（ルカ16:23）。

5番目と6番目の箇所：ペテロは、詩篇16篇を引用して、主イエスについてこう言いました。「あなたは私の魂をハデスに引き渡したままにせず、あなたにある敬虔な者に朽ち果てることをお許しにならないからです」（使徒2:27。31節も参照）。

これらのことばは、ダビデが何世紀も前に語ったものでした（詩篇16:10）。ペテロはペンテコステの日の説教の中で、これをメシアの死と復活についての預言として引用しています。ハデスは、いわば救い主の聖なる魂に向かって手を伸ばし、それを奪い取って自分のものにしようとしていました。しかしハデスは、主の魂をとらえることはできませんでした。主は神の聖者だったからです。³⁵ 主は死なれたとき、ハデスの手に落ちたのではなく、パラダイスに行かれました。主のからだは墓に納められましたが、朽ちることはありませんでした。主はよみがえらされたからです。

ここで、ハデスとは正しくない者たちの魂がいる場所であることが明らかになります。からだ、すなわち肉は、墓と朽ちることに結びついています。魂

35. ほとんどの翻訳では、ここは「あなたは私の魂をハデスの中に（残して）おかない」あるいはそれに類する訳になっています。この訳文だと、主はハデスにおられたことになります。その場合、ハデスはシェオルと同じく、正しい者と正しくない者の区別なく、一般に死者の場所だということになります。それは旧約の記述に合致しています。これについては、C. ブリーム (C. Briem) *Ein Volk für seinen Namen*, Teil 2, Hückeswagen (CSV), 1983, 100~103ページを参照。私はこの見解を共有しません。なぜなら、まさに使徒の働きの著者であるルカこそが、その福音書の中で、一方ではルカの福音書16章でハデスとアブラハムの懷を対置し（つまり、アブラハムの懷はハデスの中にあるのでも、ハデスの一部でもありません）、他方では、主が死なれたときにパラダイスに行かれたという主のことばを引用している唯一の福音書記者だからです。さらに、イエスの時代にはすでに、祝福された者たちの場所は天にあり、正しくない者たちの場所はシェオルにある、という見方がありました。私は、新約のハデスを一貫して、死の力のもとにある正しくない者たちの場所と考えています。そこにキリストはおられませんでした（これについては付録を参照）。

は、ここでも他のすべての箇所でも、ハデスと結びついています。ここでは墓とハデスがはっきりと区別されています。両者は一つの同じものではないのです。

7番目の箇所：「……わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とハデスの鍵を持っている」（黙示録1:18）。

これは、よみがえられた方としての主イエスのことばです。主は死んでよみがえられたので、死とハデスに対する力を持っておられます。死（からだに関して）も、ハデス（魂に関して）も、神の御子の前にひれ伏さなければなりませんでした。すべては主に従っているのです！ 死者の領域とそこにいるすべての者は、主の権威のもとに置かれています。なぜなら、「キリストが死んでよみがえられたのは、死んだ人にも生きている人にも、主となるため」（ローマ14:9）だからです。信者はもはや恐れる必要がありません！

主の力は、鍵でハデスを開き、魂を導き出して、復活においてからだと結び合わせるにより、死者をよみがえらせることにも表れます。

8番目の箇所：「私〔ヨハネ〕は見た。すると見よ、青ざめた馬がいた。これに乗っている者の名は『死』で、ハデスがそれに従っていた」（黙示録6:8）。

死とハデスは、共通の事柄を行うので、互いに密接に結びついています。³⁶ 両者の協力とは何でしょうか。死はからだをとらえ、ハデスは魂をとらえます。この意味で、ハデスは死に従って行き、死が手を触れることのできない魂を受け入れるのです（マタイ10:28）。

「ハデス」という語は、言語史的には「すべてを受け入れるもの」を意味することがあります。ハデスは飽くことのない飢えをもって死者たちを呑み込みます。その点で、ハデスはシェオル（旧約におけるハデス）に似ています。シェオルは、ヘブル語の言語感覚においては「求める」（使徒2:27、31参照）と結びつけられていました。³⁷

36. サムエル第二22:6、イザヤ28:15、18、ホセア13:14、ハバクク2:5参照。

37. 箴言1:12、27:20、30:16、イザヤ5:14。

9番目と10番目の箇所：「死とハデスも、自分の中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。それから、死とハデスは火の池に投げ込まれた」（黙示録20:13-14）。

死者たちはハデスにいます。これは、ルカの福音書16章の話と並んで、ハデスの本質を最もはっきりと示すものです。ハデスは、福音を信じなかった死者たちの場所です。この人々だけが、大きな白い御座の前に出るのです。

ここで私たちは、からだの死の終わりを見ます。死は火の池、すなわち地獄に投げ込まれます。この時点ですべての死者が復活しているので、ハデスにとどまっていられる死者の魂や霊はもはやありません。したがって、それは必然的にハデスの終わりでもあります。滅びに定められた人々は、復活において受けたからだとともに地獄に投げ込まれます。ですから、ハデスはもはや必要なくなり、死と同じように地獄でその終わりを迎えるのです。

まとめ：ハデスは、死によってからだから切り離された死者たちの魂を受け入れます。ハデスは死の力と結びついています。永遠の滅びに至るこの死に服しているのは、信じていない者たちだけです。ですから、ハデスはまた、キリストなしに死んだ死者たちだけの滞在場所でもあります。ハデスは、復活までの間、不信仰な者たちが通過し、とどまる場所なのです。

2.1.9 ルカの福音書16章のハデス

ルカの福音書16章におけるハデスの意味は、これまでに調べた箇所から明らかになったことと完全に一致します。それに加えて、ここにだけ記されているいくつかの細かい点があります。

金持ちは葬られました。しかし彼の靈魂は墓の中ではなく、ハデスにいました。彼についてまず言われているのは、彼が「苦しみの中に」あったということです。つまり彼は、死によって感覚を失ってはいなかったのです。しかも彼は、感覚だけでなく、完全な意識をも死を越えて保っていました。彼は話し、自分の考えを述べ、思い出すことができます。さらに彼は、苦しみと痛みに特徴づけられた周囲の状況を、自分の目で知覚することができます。金持ち自身が、この周囲の状況を苦しみの「場所」（28節）と呼んでいま

す。つまり、ハデスは単なる状態ではなく、実際の滞在場所でもあるのです。

金持ちが感じている苦しみと炎の熱は、血と肉のからだを前提としているように見えます。しかし人間は、死後から復活までの間、もはやそのようなからだを持っていません。ですから私たちは、この苦しみの描写を、ある現実を比喩的に描いたものとして理解します。それは、まだからだの中にいる私たちにはなじみのない現実であり、その深さと大きさは、それを自ら耐え忍ぶ者にしかわからないものです。地獄についても似た形で出てくるこの比喩は、ハデスの苦しみを私たちにも理解できるように示すために必要なのです。

ヘルマン・クレーマー（Hermann Cremer）は、この苦しみを次のように描いています。「〔魂は〕死において、死ぬには多すぎ、生きるには少なすぎるものしか持たない貧しい人に似ている——生と死の間で宙づりにされ、おびえ続けるこの状態、終わりのないこの死は、なんと恐ろしい状態であろうか！ 死がこのことについてまだ人の目を開いていない間は、人は自分を欺き、自分の魂には何も欠けていないかのような妄想にふけることができる。自分のからだの主人であり、周りの世界と仕事や気晴らしの中で関わっていられる間は、私たちは自分の魂のあらゆる感覚や必要から逃れることができる。しかし死とともにこの可能性は終わり、魂の無力さが、終わりのない衰弱の中で明らかになる。神から引き離され、神から疎外されている魂は、神から来るいのちからも疎外されている。……永遠に力なく、妨げられ、縛られている魂にとって、その不死は死よりも良いものではなく、むしろはるかに惨めで悪いもの、すなわち存在をかけた永遠の闘い、あらゆる満足の永遠の欠如、神にふさわしくないもの、神から疎外されたものすべてに対する聖なる神の対抗のもとで、終わりなく自らをすり減らし続けることである。罪深く、贖われていない人間にとって、不死とは永遠の死にほかならない。それは夜を照らす光の一筋ではなく、光から落ちる影にすぎない。」³⁸

38. ヘルマン・クレーマー（Hermann Cremer）*Jenseits des Grabes*, Gießen (Brunnen-Verlag), 刊行年不明、31、32ページ。

これはもちろん、魂の眠りとも、まして死後の非存在とも、まったく異なるものです。この話は、まさにその正反対を証明しています。魂の眠りという誤った教えを保とうとするなら、この話をまったく別の仕方と解釈することが必要になります。それは、ハデスとは金持ちの遺体が葬られた墓にほかならない、という解釈です。その際、別の句読法³⁹によって文の意味を変えてしまう読み方が根拠とされます。それによってハデスは、金持ちが納められた墓になってしまうのです。その読み方は次のとおりです。「金持ちは死んで、ハデスに葬られた。彼が苦しみの中で目を上げると……」。このように本文を区切ることを支持するギリシア語写本は、二つや三つさえ存在しません。また、この区切り方は、今日信頼できるとされているどの聖書翻訳にも見られません。

文の句読法にとって決定的なのは、本文の文脈と、新約全体との内容的な一致です。すでに見たように、ハデスが墓と同じものであることを裏づける箇所は、新約のどこにもありません。

言語史的には、「ハデス」という語には「見えないもの」「知覚できないもの」という意味もあります。⁴⁰ この点からも、「ハデス」という表現が墓を指すことはありえません。

ハデスと墓が同じだという見解は、「ハデス」が実際にヘブル語「シェオル」のギリシア語訳であることから生まれたのかもしれませんが、しかし、次の節で見るように、旧約において「シェオル」という語はもっと広い意味を持っています。

2.1.10 シェオル

使徒の働き2章27節における詩篇16篇10節の引用から、「ハデス」がヘブル語「シェオル」の訳語であることがわかります。七十人訳聖書では、「シェオル」という語は「ハデス」と訳されていますが、ときには「死」とも訳され

39. 句読法とは、もともとの本文ではなく、数世紀後になって初めて付け加えられた句読点のことです。

40. Dictionary of New Testament Theology, Vol. 2 (Paternoster Press) 1981、206ページ

ています。旧約では「シェオル」は65回出てきます。そのうち半分以上は、ヨブ記、詩篇、箴言に見られます。

旧約において、シェオルはどのような意味を持っているのでしょうか。旧約では、この語のいくつかの意味を見分けることができます。一般的に言えば、シェオルは死の領域と関わっており、そこには死の恐怖、墓、深淵、死者の領域も含まれます。

- 墓あるいは穴としてのシェオル：創世記37:35、42:38、44:29、民数16:30、申命32:22、サムエル第一2:6、ヨブ7:9、詩篇139:8、伝道者9:10、エゼキエル31:16。
- 墓あるいは穴としてのシェオル。ただし、死後の意識あるいのちを思わせる響きを伴うもの：サムエル第二22:6、列王第一2:6-9、ヨブ17:13-16、アモス9:2。
- 死者の領域、すなわち魂の滞在場所としてのシェオル：詩篇16:10、箴言15:11、27:20、イザヤ14:9-15。
- 死、悪、恐れ、苦難、捕囚の力という象徴的な意味でのシェオル：詩篇116:3、イザヤ28:15、57:9、ヨナ2:2。

これらの聖書箇所は、「シェオル」という語が複数の意味を持っていることを明らかにしています。シェオルはいつも墓や穴である、と言うのは誤りでしょう。ですから、この意味を新約のハデスに当てはめるのも、同じように誤りなのです。

イエスがこの話をされた当時のユダヤ人のシェオル観は、本質的に、ルカの福音書16章におけるシェオル、すなわちハデスの描写と一致していました。

シュトラック（Strack）とビラーベック（Billerbeck）はこう書いています。「エノク書22章とルカの福音書16章19節以下の間に多くの接点があることから、エノク書22章が主張するシェオル観がユダヤの民の間にある程度広まっており、イエスの時代には一般的な通念となっていた可能性が高い。」

41

41. Kommentar zu Talmud und Midrasch IV より。

ユダヤ人のさまざまな文書（たとえばエノク書）では、ハデスは死者の霊あるいは魂の滞在場所でした。それと並んで、シェオルには正しい者のための区画と正しくない者のための区画がある、という考えも広まっていた。正しい者たちはそこで喜びを味わい、正しくない者たちは苦しみを受けるというのです。

シェオルがしばしば墓を指すとしても、シェオルと墓は二つの異なる概念であり、いつも同じ意味で使われているわけではありません。墓は、シェオルとは違って複数形でも出てきます。墓は掘られるものであり（たとえば創世記50:5）、特定の人物のものであり（たとえば列王第一13:30、歴代第二34:28）、その中に遺体が納められます。⁴² これらの特徴は、シェオルには当てはまりません。ヒゼキヤ王は一つの文の中で三つのことばを挙げ、それらを区別しています。ですから、それらが同じ意味であることはありえません。「シェオルはあなたをほめたたえず、死はあなたを賛美しません。穴に下る者たちは、あなたのまことを待ち望みません」（イザヤ38:18）。

ですから、新約の「ハデス」と関連して、「シェオル」については次のことを確認しておかなければなりません。

旧約においては、墓の向こう側の事柄はまったく啓示されていないか、ほのめかす程度にしか啓示されていませんでした。ですから、旧約の観点からシェオルについて多くを述べることはできません。上に挙げたシェオルの意味のうち一つだけ（たとえば墓という意味）を新約のハデスに当てはめることは許されないのです。

2.1.11 目を上げること

金持ちはハデスで目を上げた、と私たちは読みます（ルカ16:23）。「目を上げる」〔ドイツ語の訳文では「目を開く」（die Augen aufschlagen）〕という表現は、眠りから目覚める人を思わせます。イエスはこの表現を使って、金持ちの驚き、仰天、そして同時に恐怖を描いておられます。金持ちは突然、それまで慣れ親しんでいたものとはまったく異なる周囲の状況と状態を

42. たとえば列王第二13:21、詩篇88:5、エレミヤ26:23。

知覚します。アブラハムの子孫として、彼はそんなことを予想していなかったのです。

この話の中に魂の眠りの教えを見いだそうとする人々は、この「目を開くこと」を復活として説明します。ハデスは墓であると言うなら、ほかの説明は残っていません。墓の中で目が開かれることはないからです。死の眠りと目覚めのつながりは復活と結びつけやすいので、この説明は一見すると、まったく的外れではないように見えます。しかしこの説明には疑問があります。この話の30節と31節では、文字どおりに復活について語られているからです。復活が一度は文字どおりに語られ、別のところでは比喩的にしか語られないというのは不自然です。

「上げる」という語（ギリシア語 *epairo*）は、しばしば「目」や「見る」と結びついて出てきます。⁴³ 新約がこの表現で、眠りから目覚める過程や、まして復活を描くことは決してありません。正しくない者たちが復活するとき、彼らはその直後に大きな白い御座の前でさばかれ、地獄である火の池に投げ込まれます（黙示録20:11-15）。最終的なさばきは、この話には含まれていません。ハデスでは、金持ちはまだ審判者の前に立たされていません。最終状態はハデスではなく、火の池です。ハデスでもすでに苦しみと痛みがあるとしても、ハデスを地獄と混同してはなりません。罪人たちが地獄に投げ込まれるとき、正しくない者たちの滞在場所として用いられてきたハデスは、もはや必要なくなります（上記参照）。

2.1.12 遠くから

金持ちは、アブラハムの懐にいるラザロを遠くから見ます。「遠くから」という表現は、その場所に到達できないこと、そして望みなく失われた、変えようのない状況を明らかにしています。ある意味で、この隔たりは二人の生前からすでにありました。今やこの隔たりははるかに大きくなり、もはや取り除くことができません。これはまた、不信仰な者たちが地獄で永遠の刑罰として耐え忍ぶことになる神からの隔たり（テサロニケ第二1:9）が、ある意味ですでに死の直後から始まっていることを示してはいないでしょうか。

43. たとえばマタイ17:8、ルカ6:20、18:13、ヨハネ4:35、6:5、17:1。

金持ちは、苦しみを和らげてもらおうとアブラハムに訴えます。彼は、ラザロが指先を水に浸して自分の舌を冷やしてくれるようにと頼みます。金持ちは自分の状況を理解しました。この願いはあまりにもささやかで、生前の彼から知られていたいつもの振る舞いとはもはや違っているからです。指先から落ちる水の一滴は、あの貧しい人がむなしく求めたパンくずに相当するのではないのでしょうか。この願いさえ聞き入れられません。アブラハムでさえ、金持ちの状態をもはや変えることはできないのです。

このことから、死者への影響——それが良いものであれ悪いものであれ、人間やその祈りによるものであれ、御使いや悪霊によるものであれ——は完全に締め出されていることがわかります。人は死後、ただ神の御手の中にだけあるのです（ヘブル10:31）。聖書は、死者のためのとりなしも祈りも知りません。

2.1.13 大きな淵

ハデスとアブラハムの懐の間には、橋渡しすることのできない大きな淵が置かれています。死後には自分の居場所をもはや変えることができないということを、これ以上印象深く描いたものはほとんどないでしょう。悔い改めの可能性はもはやありません。この淵は、同情によっても、恔意によっても越えることはできません。金持ちは、自分にはもはやこの場所から逃れる可能性がないことを、自ら悟っています。

死後にはもはやあわれみはありません。人間の地上の生涯には、イエス・キリストにある神の恵みを受け入れるのに十分な機会と時間があるからです（ローマ2:4、コリント第二6:2）。主イエスは聴衆に対して、地上の生涯が永遠を決定するのだと、真剣に指摘しておられます。

死後の悔い改めの可能性——第二のチャンス——を持ち出し、それを宣べ伝えさえする人は、闇への道を指し示すさまよう星のようです（ユダ13）。死後に第二のチャンスを期待することは致命的です。人がどれほどそれを望んだとしても、そのような可能性はないのです。

金持ちにはもはや救いはありませんが、彼は兄弟たちのことを思います。彼らに警告するために、自分はまだ何ができるだろうか。彼は、死んだことがあり、死後に何が来るのかを証しできる人の言うことなら、彼らも聞くかもしれないと考えつきます。しかしアブラハムは、金持ちの兄弟たちは死者の中から戻って来た人の言うことにも耳を傾けないだろうと答えます。今の時代に神のことは拒む人々にとっては、そのような目を見張るような証しでさえ、心を悔い改めに向かわせるのに十分ではないのです。

しばらく後に、主は別のラザロを死者の中から呼び戻されます（ヨハネ11章）。このラザロは、まさに金持ちが求めたような人でした。しかしこのラザロにおいて、アブラハムの答えが正しかったことが確かめられます。ユダヤ人たちは主の証しを受け入れるどころか、主の全能を示すこの証しを沈黙させるために、いのちと死の主を殺そうと相談するまでに至ったのです。

主イエスご自身が死者の中から戻って来られました。主の復活は目撃者たちによって証明され、主の弟子たちがこの知らせを伝えたにもかかわらず、人々はこの証しを受け入れようともしませんでした。人間の腐敗した心は、真理に服そうとしなかったのです。

罪人が神のもとに導かれるのは証拠によってではなく、ただ悔い改めた心と光を与えられた良心によるのだ、というのは真実です。

理解を深めるための問い

- ルカの福音書16章の話がたとえ話ではない理由を述べてください。
- 新約の「ハデス」と旧約の「シェオル」ということばが何を意味するのか、まとめてください。
- ルカの福音書16章では、何によって、死後にはもはや第二のチャンスがありえないことが明らかにされていますか。

2.2 生きている者の神

エルサレムの神殿でのサドカイ人とイエスとのよく知られた論争では、死者の復活が問題になっています。サドカイ人は、復活を信じていないことで知

られていました。福音書記者のマタイ、マルコ、ルカは、口をそろえてそのことを述べています。

「さて、復活があることを否定しているサドカイ人たちが何人か、イエスのところに来て質問した。『先生、モーセは私たちのためにこう書いています。「もし、ある人の兄が妻をめとって死に、子がいなかった場合には、その弟が兄嫁と結婚して、兄のための子孫を起こさなければならない。」ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻をめとりましたが、子がないままに死にました。次男も、三男もその兄嫁と結婚し、七人とも同じようにして、子を残さずに死にました。最後に、その妻も死にました。では復活の際、彼女は彼らのうちのだれの妻になるのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが。』イエスは彼らに言われた。『この世の子らは、めとったり嫁いだりますが、次の世に入るのにふさわしく、死んだ者の中から復活するのにふさわしいと認められた人たちは、めとることも嫁ぐこともありません。彼らが死ぬことは、もうあり得ないからです。彼らは御使いのようであり、復活の子として神の子なのです。モーセも柴の箇所、主を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼んで、死んだ者がよみがえることを明らかにしました。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。神にとっては、すべての者が生きているのです。』律法学者たちの何人かが、『先生、立派なお答えです』と答えた。彼らはもはや、何もあえて質問しようとはしなかった」（ルカ20:27-40。マルコ12:18-27、マタイ22:23-33参照）。

サドカイ人というグループとその見解を、もう少し詳しく見てみましょう。

2.2.1 サドカイ人⁴⁴

この本文の細部をいくつか調べる前に、もう一度福音書記者ルカに語ってもらいましょう。今度は使徒の働きからです。「サドカイ人は、復活も御使いも霊もないと言っている」（23:8。使徒4:2参照）。サドカイ人の教えは、それ自体として筋が通っており、一貫していました。復活がないのなら、霊の存在、つまりからだから切り離された死者の霊⁴⁵の存在もないことになります（ヘブル12:23、ペテロ第一3:19）。

歴史家ヨセフス（Josephus）の聖書外の証言もこれを裏づけています。彼は、サドカイ人が魂の不死と、冥界における刑罰と報いを否定していたと書いています。⁴⁶

ここでは、復活と、死後に靈魂がからだの外で存在することとが、直接に結びついており、互いに依存し合っていることが示唆されています。サドカイ人は、復活と、からだから切り離された靈魂とが互いに矛盾するものではなく、一方なしには他方もありえないほど密接に結びついていることを知っていました。だからこそ、彼らは両方を否定したのです。⁴⁷

この詭弁的な論法に対する主イエスの答えは、神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である、神にとってはすべての者が生きているからだ、というものです（38節）。主はこの事実を、燃える柴の中からモーセに語られたヤハウェのことばから導き出しておられます。「わたしはあなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」（出エジプト3:6。14-

44. サドカイ人（おそらくソロモンの時代の大祭司ツァドクにちなんで名づけられた）は、古い祭司貴族から生まれ、紀元前150年ごろから紀元70年まで、ユダヤの祭司家系の保守的で親ローマ的な党派を形成していました。彼らの「伝統的な」敵対者であったパリサイ人とは対照的に、サドカイ人は魂の存続と、御使いや霊の存在を否定しました。同じく、人間の事柄への神の介入も信じていませんでした。さらにパリサイ人の敵対者として、口伝のトーラーを退け、神の摂理を人間の意志の自由よりも優先させました。彼らはモーセ五書だけを啓示として認め、復活の希望と御使いへの信仰を退けました（使徒23:8）。サドカイ人は民衆の間に幅広い支持基盤を持っていなかったため、政治的にも宗教的にも影響力のあるグループとしては消滅しました。

45. この聖句では御使いと霊が区別されています。これは、ここでの霊が死者の霊であることを証明しています。ほかの箇所では、御使いも霊と呼ばれています（たとえばヘブル1:14）。

46. *Geschichte des Jüdischen Krieges*（『ユダヤ戦記』）第2巻、第8章14節。

47. これとは対照的に、これらの教えはパリサイ人の確信に属していました（使徒23:6-7参照）。

15節も参照)。聴衆は、ヤハウエがこのことばを語られた時点で、三人の族長のだれ一人としてもはや生きていなかったことを知っていました。彼らはみな死んでいたのです。もし死が完全な、あるいは時間的に限られたものであっても、消滅と非存在を意味するのなら、どうしてヤハウエは、ご自分が彼らの神であると言うことができるのでしょうか。そうであれば、神は実際に死んだ者の神だということになってしまいます。しかし神は、存在しないものの神ではありません。聴衆はそれを理解しました。律法学者の何人かが、主は立派に答えられたと言ったからです。サドカイ人は、この神の知恵に対して何も言い返すことができませんでした⁴⁸——主は彼らを黙らせられたのです。彼らは大変な思い違いをしていたからです（マタイ22:34）。

ある人々はこれを、族長たちはいつかよみがえらされるので、神の記憶あるいはご計画の中で生きているのだ、と説明します。しかしこの聖句からは、神が柴の中から語られた時点で、族長たちが何らかの仕方で生きていたはずだ（つまり、記憶の中の思いとしてだけではなく）という結論しか引き出せません。神が族長たちの神「であった」とか、復活を見据えて族長たちの神「となる」とか言われているのではありません。神は族長たちの神「である」、しかも今日に至るまでそうである、と言われているのです。また、彼らは神にとって「生きていた」とではなく、「生きている」と言われています。

主イエスが、死者が生きているという事実をすべての人に広げておられることを伝えているのは、ルカだけです。主はこう言われるのです。「神にとっては、**すべての者が**生きているのです」（つまり、族長たちだけではありません）。これには明らかに、族長たちのようにずっと昔に死んだ人々も含まれています。

48. 興味深いことに、イエスは出エジプト記から引用されました。サドカイ人はモーセ五書だけを神のことばとして認めていたからです。主は、復活、御使いの存在、そして不死（御使いは死なないからです）についての発言によって、サドカイ人の主張のいくつもの側面を一度に論駁されたのです。

2.2.2 変貌の山のモーセとエリヤ

福音書記者たち自身が、死後に生きていた旧約時代の二人の信者の例を挙げています。変貌の山でイエスが栄光の姿に変えられたとき⁴⁹、モーセとエリヤが現れました。エリヤは死んだのではなく、天に上げられたのでした（列王第二2:11）。エノクも同じです（創世記5:24）。

エリヤは死ななかったのですから、彼がそこに自ら現れたことはまだ理解できます。しかしモーセはどうでしょうか。モーセは死にました（申命34:6。ユダ9参照）。もしモーセが死後もはや生きていなかったのなら、モーセはいったいどこから来たのでしょうか。モーセはすでに復活していたのでしょうか。聖書はそのようなことを何も語っていません。またそれはありえないことです。眠った者の初穂はモーセではなくキリストであり（コリント第一15:20、23）、信者たちの復活はまだ起こっていないからです。

永遠の神（ローマ16:26）は、生きている者の神です。ですから、モーセも今、死後、そして復活の前に生きています。神は、この出現のためにモーセとエリヤをよみがえらせ、その後また眠りにつかせたではありません。また、彼らだけが——すべての信者ではなく——意識のある、祝福された状態にあるとは考えられません。あらゆる時代の信者たちは、今みなパラダイスにいるのです。⁵⁰

このように、モーセとエリヤの出現からも、サドカイ人に答えられた主のことばからも、また聖書全体の文脈からも、死んだ者はみな生きていることが明らかになります。

多くのユダヤ人にとって（サドカイ人を除いて）、死んだ人々が生きていることは当然のことでした。たとえば彼らは、アブラハム、イサク、ヤコブが今ある場所にいて、忠実なユダヤ人もそこへ行き、族長たちに迎えられののだと信じていました。⁵¹

49. マタイ17:1-8、マルコ9:2-8、ルカ9:28-36。

50. 2.3節を参照。

51. 外典第四マカバイ記13:16。

神ご自身は、地上に生きている人々にとってだけでなく、死んだ人々にとっても、いのちを保たれる方です。彼らも、そもそも生きているものすべても、神に依存しているからです。この意味で、魂の不死とは、それ自体に備わった不死ではなく、いのちの源である神に依存したもののなのです。

主イエスが族長たちについて語られたとき、問題になっていたのは死後の状態ではなく、復活でした。しかし主は、族長たちがその時に生きていたという事実が復活の証拠だと言われました。これはきわめて重要なことで、要約すれば次のようになります。死んだ人々の魂が生きているからこそ、復活がなければならないのです。それはなぜでしょうか。

2.2.3 死後のいのちと復活の関係

罪によって世界に入ってきた死は、人間に関する神の創造のご計画を妨げました。死は、地上における人間のからだのいのち、からだを持った存在に終わりをもたらしますが、人間は靈魂の人格として生き続けます。しかし、からだのない靈魂の人格は、神が人間を造られたときのご意図ではありませんでした。⁵² 神のご意図とご計画は変わることがないので（ローマ11:29）、からだはよみがえらされなければなりません。それは、神が初めから持っておられたご計画が成就し、人間がその「全体性」において回復されるためです。死が最後の決定権を持つわけではありません。からだのない魂は、もしそれが永遠の状態であるとすれば、死が勝利したことを証明することになってしまうでしょう。これとは対照的だったのがギリシアの信仰で、それは死を、からだからの永続的な解放と見なしていました。復活は、人間を、神が望まれたその一体性において回復させるのです。

2.2.4 種粒のたとえ

すべての者が生きているという事実と一致して、パウロが復活を説明するために用いているたとえもあります。パウロは、実を結ぶ前にまず土の中に蒔かれる種粒について語っています。パウロはそれを、いつかよみがえること

52. 3.4節を参照。

になる、死んだ信者の遺体と比べています（コリント第一15:35-44。ヨハネ12:24参照）。

興味深いことに、土の中の種粒は、有機的な過程が完全に終わってしまうという意味では、実際には本当に死ぬわけではありません。もし種粒が完全に朽ちて分解してしまうなら、決して実が生じないでしょう。しかし、生きたまに残る胚から新しい植物が生まれてきます。胚は、育つべき植物を決定する遺伝情報をすべて内に持っています。胚を包んでいる種皮あるいは殻は落ちて朽ちていきます。つまり、文字どおりの意味で死ぬのはこの部分だけなのです。

この過程は、人間（コリント第一15章では信者）が死後も生き続けるという事実を、さらに示すものです。種粒の外側の殻は、朽ちていくからだにたとえられています。胚は、内なる人（コリント第二4:16）、すなわち靈魂にたとえることができます。人間のこの部分は、死後も生き続けるのです。そしてこれは同時に、胚が新しい実を生み出すように、からだが再びよみがえらされる理由でもあります。

種粒を土に蒔くことが、明らかにその一部は生き続けているにもかかわらず、はっきりと「死ぬ」と呼ばれていることに注意したいと思います。これは矛盾ではありません。聖書において、人間の死とは、決してその完全な終わりではなく、靈魂がからだから分離することを意味しているからです。

理解を深めるための問い

- 死後のいのちと復活の間には、どのような関係がありますか。
- なぜ復活がなければならないのでしょうか。
- 種粒のたとえは、どのような意味で、復活のたとえであるだけでなく、死後のいのちのたとえでもあるのでしょうか。

2.3 十字架上の犯罪人

主イエス・キリストが犯罪人の一人に語られたことばは、死後のいのちがあることをはっきり示しています。主はそこでこう言われます。「まことに、

あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」
(ルカ23:43)。

ゴルゴタの場面は胸を打つものです。イエスの右と左にいた二人の犯罪人にとって、終わりが来ていました。彼らは自分たちの行いに見合うものを受けていました。彼らにはもはや、ほんのわずかな希望の光もありませんでした。絶望の中で、犯罪人の一人が自分の罪を悔いて、真ん中の人に向かいます——それが、彼にまだできる唯一のことでした。彼は言いました。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください」(ルカ23:42)。犯罪人は、自分が無実だと確信しているこの隣の人こそ、神が約束されたメシアであり王であるに違いないと感じ取ります。ですから、もし自分にまだ何らかの希望があるとすれば、それは、いつかすべてのものの王として最後の決定権を持つことになるこの方のもとにある、というわけです。

犯罪人はこの瞬間に、将来のこと、メシアがご自分の支配を始めるために来られる時のことを考えていました。ユダヤ人の希望はそこに向けられていました。旧約から、メシアについて多くのことが知られていました。メシアの支配、その王国、その偉大さと力です。⁵³ 犯罪人は、メシアがその王国の初めに現れるときの復活を知っていました(ダニエル12:2、イザヤ26:19)。彼は、自分もメシアの王国をともに体験できるように、自分のことを覚えていてくださるよう願ったのです。

主イエスは注目すべき答えをされます。「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」。この答えがそれほど注目すべきものに見えるのは、救い主がそのことばにおいて、実は犯罪人の願いにそのまま応じてはおられないからです。犯罪人は将来の王国のことを考えていますが、救い主はパラダイスについて語っておられます。主は将来のことではなく、「今日」について語っておられるのです。

53. たとえば詩篇2篇、8篇、24篇、イザヤ4章、9章、11章、53章、ダニエル2章、7章、ミカ5章など。

主イエスは、ときに、ご自分に向けられた問いに直接お答えにならないように見えることがありました。しかしよく見ると、主の答えがどれほどすばらしいものかがわかります。その答えは、問いがそもそも意図していたことよりはるかに多くのことを明らかにしているからです（ヨハネ2:19-22参照）。ここでもそうです。パラダイスと王国が同じものを意味していないのは明らかだからです。

そこで、聖書において**パラダイス**ということばが何を意味しているのか、また犯罪人、あるいは一般にユダヤ人がパラダイスについてどのような考えを持っていたのかを調べてみましょう。

2.3.1 パラダイス

このことばはおそらくペルシア語から来ており、「円形の囲い、あるいは塁壁」「庭園」といった意味です。当時このことばは、ペルシアの王たちの壮麗な庭園に使われていました。旧約でも同じように用いられています。⁵⁴ 旧約のギリシア語訳である七十人訳聖書では、このことばは、地上のパラダイスであるエデンの園⁵⁵、あるいは単に園⁵⁶を表すのに用いられています。聖書の最初の数章から、地上のパラダイスがどれほど美しい場所であったかがわかります。神はそれを人間の住まいとして備えられました。墮落の後、人間はパラダイスから追い出され、もはやそこに足を踏み入れることも許されませんでした。その後、このパラダイスについてはもう何も聞かれません。エデンにあった元の地上のパラダイスは、もはや存在しません。ですから、主イエスがこのパラダイスのことを言われたのでないことは明らかです。

旧約の伝えることはエデンのパラダイスに限られており、旧約のどこにも別のパラダイスについては語られていないので、イエスの時代に**パラダイス**が何と理解されていたのかを知るために、聖書外の情報源としてユダヤ教の伝承を参照してみましょう。

54. ネヘミヤ2:8、伝道者2:5、雅歌4:13。

55. 創世記2:8、13:10、イザヤ51:3、エゼキエル31:8。

56. 民数24:6、イザヤ1:30、エゼキエル31:8。

2.3.2 ユダヤ教の伝承におけるパラダイス

イエスの時代のユダヤ教の伝承、すなわち古代のシナゴグは、パラダイスを三つの異なる形で知っていました。⁵⁷

- 元の地上のパラダイス。これは、その後のあらゆるパラダイス観を決定づけるものでした。
- 魂のパラダイス。これは、眠りについた正しい人々の魂が、中間状態の間に滞在する場所です。人々は、魂のための天のパラダイスを信じていました。この考えによれば、エノクとエリヤ、また族長たちもそこに迎え入れられたのです。
- 終わりの時の地上のパラダイス。その中心はメシアのもとにあるイスラエルとエルサレムであり、復活と最後の審判の後に、祝福された人々に与えられるものです。

神が地上のパラダイスを閉ざし、地上から取り去られたので、人々は、パラダイスは今や天にあり、同時に、パラダイスのような平和の王国として再び現れるのだと確信するに至っていました。地上のパラダイスは、来世の、そして将来のパラダイスのひな型となったのです。

祝福された人々の天の滞在場所を表す、ユダヤ教で知られているその他の呼び名には、次のようなものがあります。

- 「生ける者の地」——詩篇116篇9節にならったもの。「私は主の前を歩みます。生ける者の地で。」
- 「生ける者の束」(サムエル第一25:29)——主のもとで包まれている生ける者の束は、しばしば祝福された人々の場所と理解されました。
- 「宝の家」⁵⁸——「あなたの魂が永遠のいのちの宝の家に納められますように。」

57. シュトラック (Strack) とビラーベック (Billerbeck) *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, München (C.H. Beck).

58. 同書。

- 「神の御座の下」——正しい人々の魂は、栄光の御座の下に納められる。

59

- 「天」——魂は、復活において再びからだと結び合わされるまで、天にとどまる。

これらの例は、イエスの時代に、旧約の啓示をはっきりと越える来世の理解、あるいは来世観があったことを明らかにしています。この理解がどこから来たのかを突き止めるのは困難です。決定的なのは、イエスがこの関連で「パラダイス」(ルカ23:43)、「地獄」⁶⁰、「ハデス」(たとえばルカ16:23)ということばを用いておられることです。これらのことばは、当時のユダヤ人、とりわけパリサイ人の来世信仰を表すものでした。パウロはパリサイ人でした。彼もまた、死後の魂の存続と復活を信じていました。つまり、これらのことばはユダヤ人にとって新しいものではなかったのです。それによって主イエス・キリストは、ある程度の真理を含んでいたこの信仰の中心的な主張を是認しておられるのです。⁶¹ この背景は、私たちの理解の助けになります。しかし、何が神の真理であるかを判断するための基準は、常にただ聖書、すなわち靈感を受けた神のことばだけです。

2.3.3 新約聖書におけるパラダイス

主イエスが、パラダイスとはこの世を去った正しい人々の魂がいる場所だという、当時の考えに結びつけて語っておられることは明らかです。それは状況から必然的に導き出されます。二人は、十字架で死ぬその日にパラダイスに行くことになっていたのです。救い主は、意味の上では次のように言っておられます。「わたしが王として現れるまで待つ必要はない。いや、あなたは今日すでに、わたしに続いてパラダイスに行くことができるのだ。」救い主はその日に死なれ、ご自分の霊を父の御手にゆだねられました。犯罪人は、主の少し後に死にました。主が死なれたとき、主はパラダイスに行かれ

59. 黙示録6:9参照。

60. ギリシア語「ゲヘナ」(たとえばマタイ5:22)。

61. これについては、F.W. グラント (F.W. Grant) *Old Testament Shadows*, Charlotte, North Carolina (Books for Christians), 1972、246ページ以下の“Facts and Theories as to a future State”を参照。

ました。そして犯罪人は、恵みを受けた罪人として主に続いてそこへ行ったのです。

「パラダイス」ということばは、新約ではルカの福音書23章43節のほかに、あと二回しか出てきません。パウロは、パラダイスと、そこへ引き上げられたという並外れた体験について報告しています。

「私はキリストにある一人の人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったのか、私は知りません。肉体を離れてであったのか、それも知りません。神がご存じです——第三の天にまで引き上げられました。私はこのような人を知っています。——肉体のままであったのか、肉体を離れてであったのか、私は知りません。神がご存じです——彼はパラダイスに引き上げられて、人間が語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞きました」（コリント第二12:2-4）。

パウロはパラダイスを第三の天と呼んでいます。この呼び名はこの文脈にしか出てきませんが、それが天のパラダイスであることをはっきり示しています。パラダイスと同じ意味の「第三の天」ということばは、次のように説明できます。第一の天は私たちが生きている大気圏、第二の天は星々の宇宙空間、そして第三の天は神が住んでおられるパラダイスです。

役に立つ並行箇所が、ヘブル人への手紙9章23節にあります（8:5参照）。そこには、旧約の幕屋とそれに結びついた礼拝が、天にあるものの写しであると書かれています。「第三の天」は、幕屋にも見られるような順序と段階を示しています。人は庭（1）から聖所（2）を通して至聖所（3）に入りました。そこには契約の箱、すなわち神の御座がありました。そこに神が住んでおられたのです。幕屋は神の家、地上における神の住まいでした。⁶²

つまり、「**第三の天**」ということばは、神の住まいを思い起こさせます。それがパラダイスの本質的な特徴です。ですからそこには、かつての幕屋と同

62. 信者たちは今、キリストの成し遂げられたみわざに基づいて、霊的に、信仰によって、神の御前に、神のすぐそばに、自由に近づくことができます（ヘブル4:16、10:19以下、エペソ2:18）。

じように、神の栄光があります。その栄光は今、キリストの御顔において見られます（コリント第二4:4-6）。キリストがそこで神の右に座しておられるからです（ペテロ第一3:22）。

パウロにとって、この圧倒的な栄光について人間のことばで語ることは不可能でした。彼がそこで見聞きしたことは、彼のことばから読み取れるように、人間の想像力をはるかに越えていたのです。

すでに確認したように、主イエスは犯罪人に語りかけられたとき、パラダイスを死後の魂の滞在場所とするユダヤ教の考えに結びつけておられました。しかしコリント人への手紙第二12章2節には、この意味を見いだすことはできません。このことから、三番目の箇所もさらに示すように、私たちは「パラダイス」ということばを、眠りについた信者たちの滞在場所だけに限定することはできないということがわかります。パラダイスは、この目的のために、限られた期間のために「設けられた」ものではありません。神のご意図は、パウロに、パラダイスにおける眠りについた信者たちの状態を知らせることではなかったはずです。いいえ、神が願われたのは、栄光を受けたキリストを中心とする天の栄光⁶³をパウロに示し、それによって、その後の奉仕のために彼を励まし、整えることだったのです。

それでもなお、コリント人への手紙第二12章からは、中間状態にとって決定的な一つの基本的な事実が明らかになります。パウロは二度（2節、3節）、自分がからだのままパラダイスに引き上げられたのか、からだを離れてであったのか知らない、と述べています。つまり彼にとって、からだの外でパラダイスにいることは可能だったのです。まさにそれと同じことが、信者が死ぬときにも起こります。その人のからだは朽ちて崩れていきますが、靈魂はパラダイスに行くのです。これは、からだの外で、あるいはからだなしに、意識を持って存在することがあるということの明白な証拠です。

ヨハネの黙示録2章7節で、パラダイスは三度目に言及されています。

63. エペソ1:3、2:6、コロサイ3:1-4、ピリピ3:20。

「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」

ここでも天のパラダイスが言及されています。この描写は、エデンの園の描写に結びついています。ここでもいのちの木について語られているからです。いのちの木は当時、園の中央に立っていました（創世記2:9）。それと同じように、キリストは昇天以来、栄光を受けた人として天のパラダイスの中心におられます。いのちの木において、キリストは真のいのちの源として見られています（ヨハネ14:6、使徒3:15）。

勝利を得る者たちには、神のパラダイスにあるいのちの木から食べることが約束されています。この約束は原則としてすべての信者に当てはまるものであり、死後から復活までの時に限られたものではなく、永遠に至るまで信者たちの祝福となるものです。ですから、いのちの木は新しい創造の中にもなお見られるのです（黙示録22:2、14、19）。

ここでも「パラダイス」ということばは、時間的に限られた中間状態や、この世を去った魂の滞在場所に限定されていません。ここでそれは、平和の王国と新しい創造のパラダイスであり、そこで諸国の民とよみがえった聖徒たちが、いのちの木の実を味わうことになるのです。

この考察から、私たちは次のように結論づけます。天のパラダイスとは、父なる神が住んでおられる場所である（そして常にそうであった）。主は、十字架でご自分の霊を父の御手にゆだねられたとき、父のもとへ行かれました。神のすぐそばにあるこの場所は、今キリストにおいて見られる神の栄光に満ちています。あらゆる時代の聖徒たちは、眠りにつくときにそこへ行きます。彼らは故郷に帰るのです。天こそ彼らの故郷だからです（コリント第二5:8、ピリピ3:20）。彼らは（つまり彼らの靈魂は）、復活の日までそこにとどまります。彼らはそこで、贖い主の御前で（ピリピ1:23）、自分の労苦から解き放たれて休んでいるのです（黙示録14:13）。

2.3.4 ルカの福音書23章43節の別の解釈は可能か

死後のいのちは存在しないという前提に立つなら、当然ながらパラダイスは、肉体を離れた魂のいる場所ではありえません。そこで、ここでのパラダイスは将来の王国のことだ、と論証しようとする人々がいます。しかし、ユダヤ教の伝承（前述参照）がこの考えを否定しています。そのことは、ほかならぬ十字架上の主のことばがはっきり示しています。「あなたは今日〔将来ではなく〕、わたしとともにパラダイスにいます。」主が「今日」と言われたのは、ご自分が死なれるその日にパラダイスに行かれたからです。

この「今日」は、王国とパラダイスは同じものだとする見解にとって、一つの問題となります。力ある王国は、今に至るまでまだ実現していないからです。この問題を解決するために、読点あるいはコロンを「今日」の前ではなく「今日」の後に置く、ということが試みられてきました。そうすると「今日」は、パラダイスに入る時点ではなく、イエスがこのことばを語られた時点を指すことになります。

まず基本的に言うべきことは、新約の記者たちは句読法を知らなかったということです。句読点や語の区切りは、後になって、およそ紀元4世紀ごろに付け加えられたものです。しかも、句読点によって「今日」をことばが語られた時点に結びつけ⁶⁴、パラダイスに入ることに結びつけていない写本は、ただ一つ（!）しかありません。⁶⁵ そのような読み方は、ルカの用語法ともまったく相いれません。そのことは、ルカの福音書2章11節、4章21節、19章5節、9節、22章34節の箇所が示しています。

同じことは、ヤコブの手紙4章13節とヘブル人への手紙3章7節にも当てはまります。これらの節にも、似たような文の構造が見られます。ここでも「今日」は、ことばを語る時点を示すためではなく、出来事が起こる時点を強調

64. シリア語写本、キュアトン・シリア語写本（Cureton Syrer）、5世紀。

65. この節は、書き写される際に変更されたり、付け加えられたりもしました。いくつかの写本からは、「だから勇気を出しなさい」、「パラダイス」の代わりに「エデンの園」、「本当に信じるのか」といった語句が後から付け加えられたことが分かります。ブルース・メッツガー（Bruce Metzger）*A Textual Commentary on the Greek New Testament*, London (United Bible Societies), 1975, 181～182ページ参照。

するために置かれています。「今日」ということばの意味は明白です。さらにルカの箇所の場合、もし別の読み方をすれば、余計な重複になってしまいます。「わたしはあなたに言います」ということばが、すでに現在形で語られているからです。いったいこの犯罪人には、自分がいつ主のことばを聞いているのかが分からなかったのでしょうか。そんなことはありません。

主イエスはその答えの中で、犯罪人の本当の必要に応じておられます。その必要とは、自分の死ぬ日、すなわち十字架の「今日」に、自分の身に何が起こるのかということでした。死の向こう側で、自分はどこへ行くのか。主イエスは、このもっとも本質的で、その瞬間において決定的な問いに答えてくださいました。犯罪人自身はそのことを尋ねてはいなかったにもかかわらずです。こうして死の時に臨んで、犯罪人の期待と希望は満たされた以上のものとなりました。それははるかに超えられたのです。彼は死んだ直後に、キリストに続いて天のパラダイスに行くことが許されたのですから。

こうして私たちには、神からの慰めのことばが与えられています。すなわち、この犯罪人に与えられたことは、私たちにも当てはまるということです。私たちの状態は、まさにこの犯罪人と同じでした。私たちは希望がなく、罪の咎のゆえに死刑の宣告に引き渡されていました。しかし、主が十字架で死なれたので、主の恵みはその判決を取り消したのです。ですから私たちも、主が来られる前に死ぬなら、パラダイスに行くことが許されています。もしかすると私たちは、死ぬことそのものからは免れないかもしれませんが。あの犯罪人も免れなかったようにです。けれども死は、私たちを私たちの主のもとへと連れて行くのです。

人間は自らの不従順によって、パラダイスへの道を自分で失ってしまいました。そののち、キリストが恵みによって、私たちのためにパラダイスへの道を開いてくださったのです。しかも、新しい創造において初めてではなく、私たちが死ぬときにすでに開いてくださっているのです。

理解を深めるための問い

- 「パラダイス」とは何を意味するでしょうか
- 旧約において

- ルカの福音書23章のイエス・キリストにおいて
- コリント人への手紙第二12章のパウロにおいて
- そこにいるのは誰でしょうか。
- パラダイスは、人間一般にとってどのような意味を持っているのでしょうか。

2.4 永遠の栄光——死に直面しての希望

パウロのコリント人への手紙第二の箇所は、新約の手紙の中で私たちのテーマについて見いだせる、おそらくもっとも詳しく、もっとも示唆に富む部分でしょう。キリストのための苦難によって絶えず死と向き合わされていたことが、使徒パウロに、死について、復活について、そしてその間の時について書かせることになりました。これらの節には、神からの大いなる慰め（コリント第二1:3、テサロニケ第二2:16）が含まれています。それは、この世が知らない慰めです（テサロニケ第一4:13）。

本来なら、コリントの人々はこのテーマについて、すでにコリント人への手紙第一15章で詳しく教えられていたはずだ、と思うかもしれません。そこでは、復活を否定する誤った教えに立ち向かうことが問題でした（12節）。それがきっかけとなって、パウロは復活について根本的な事柄を書いたのです。それに対してここでは、この希望が日々の生活の苦しみの中でどのように働くのか、それがどのような励まし、どのような慰め、どのような確信を与えうるのかが問題となっています。文脈を考慮して、コリント人への手紙第二4章16節から5章10節までの本文を引用します。

「ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。私たちは見えるものにではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

私たちの地上の住まいである幕屋〔または天幕の家〕が壊れても、私たちには神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいが天にあることを、私たちは知っています。私たちはこの幕屋にあってうめき、天から与えられる住まいを上に着たいと切望しています。ただしそれは、私たちが衣を着ていても、裸であると見いだされない場合のことです。確かにこの幕屋のうちにいる私たちは、重荷を負ってうめいています。それは、脱がされたいからではなく、上に着せられたいからです。死ぬはずのものが、いのちによって吞み込まれるためです。そうなるのにふさわしく私たちを整えてくださったのは神です。神はその保証として御霊を私たちに下さいました。ですから、私たちはいつも心強いのです。そして、からだを住まいとしている間は、私たちは主から離れていることを知っています（私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです）。私たちは心強いのですが、むしろからだを離れて、主のみもとに住むほうがよいと思っています。そういうわけで、からだを住まいとしていても、からだを離れていても、私たちが熱心に願うのは、主に喜ばれることです。私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれからだにおいてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです」。

この聖書のことばでは、一時的で過ぎ去るものと、永遠の天のものとが対比されています。信仰の天秤にかけるなら、苦難は永遠の栄光の重さに比べれば無に等しいものです。私たちは信仰によって、今すでに将来の栄光を仰ぎ見えています。私たちはその栄光へと召されたのであり（ペテロ第一5:10、テサロニケ第一2:12）、いや、その栄光は今すでに私たちの信仰の財産なのです。栄光の望みを私たちの心の中に生き生きと保つこと、それが聖霊の絶えざる願いです（コロサイ1:27、テトス2:13、ペテロ第一4:14）。それはどうしても必要なことです。私たちは、自分の生活を目に見えるものに向け、それに左右されてしまいやすいからです（4:18）。

パウロは、キリストのための休むことのない奉仕によって生じた苦難を思うとき、永遠の栄光について書いています。彼はいったい何度、死に直面した

ことでしょう（コリント第二4:7-15、11:23-28）！ 彼がキリストのために死を味わうことになる可能性もありました。パウロは、キリストが再び来られる前に自分が死ぬということを、もはや否定していないように見えます。

この箇所で扱われているのは、死ぬことについて、死後から復活までの状態について、そして死ぬべきからだの復活と変貌についてです。このことを分かりやすく説明するために、パウロは日常生活から三つのたとえを用いています。それらは、将来の事柄を私たちに身近なものにしてくれるたとえです。新約の記者たちのうち誰一人として、この中間状態や栄光のうちにある復活のからだを、私たちが理解できるように描き出すことはできませんでした⁶⁶。そうです、それがいつかどれほど栄光に満ちたものになるのかは、私たちにとって大きな、期待に満ちた緊張として残るのです。

パウロは5章の最初の10節で、次のようなたとえを用いています。

- 地上の幕屋
- 衣を着ること
- 旅と故郷

最初のたとえを詳しく見る前に、コリント人への手紙第二4章16節を調べてみましょう。そこに、これらのたとえを理解するための鍵が見いだされます。

「ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」

ここには、死後の人間の存在に関して重要な二つの本質的な概念が挙げられています。外なる人と内なる人です。

2.4.1 外なる人

外なる人とは、過ぎ去り、死ぬべき人間であり、その衰えの過程は私たちの目の前で進んでいます。外なる人は、4章と5章でさらに次のような表現でも言い表されています。

66. パウロはパラダイスにまで引き上げられましたが、そこで聞いたこと、見たこと、体験したことを語ることはできませんでした。

- 土の器 (4:7)
- からだ (4:10)
- 死ぬべき肉体 (4:11)
- 地上の幕屋 (5:1)
- 死ぬべきもの (5:4)

「外なる人」とは、人間のうち、外に向かって世の人々の目に見える部分です。外なる人は地上の生活の中で、押し寄せ襲いかかるあらゆるものによって消耗し、すり減っていきます。パウロの場合、それは特に、キリストのための迫害によって、また神の国と神の教会のための休むことのない献身によって起こりました（コリント第二4:7-12、11:23-28）。

外なる人は、いわば内なる人を包んでいます。ですから私たちは「死すべき殻」という言い方もします。とはいえ、ここで魂とからだ、物質的なものと霊的なものとを区別することは簡単ではありません。外なる人とは、死ぬべきからだのうちにある私たちの地上の存在を形づくっているすべてのものに関わっています。心の働きや知的な働き、さらに感情は、外なる人と深く結びついています。そのため、失望や落胆や無気力は、そこに源を持っているのです。

外なる人は、移ろいやすさと時間の制約に服しています。最後には死が、このこわれやすい器を碎きます。しかし、主イエスを死からよみがえらせた神は、いわば粉々に碎けてしまったからだという器をも、復活において再び組み立て、完全なものとして現してくださるのです（コリント第二4:14）。

2.4.2 内なる人

しかし人間は、外なる人だけでなく、内なる人からも成り立っています。内なる人とは、人間の内側に向いた、非物質的で目に見えない側面を言い表しています。コリント人への手紙第二4章16節～5章10節で扱われているのは信者です⁶⁷。日々の新たにされることを経験するのは信者だけだからです。内

67. 信じない者も内なる人を持っていますが、それは別の意味においてです。すなわち、靈魂のことです。

なる人には年齢の限界がありません。内なる人は聖霊によって絶えず新たにされます。内なる人は永遠の事柄に目を注ぎ、それを信仰によってつかむことができます。神は内なる人を元気づけてくださいます。つまり内なる人には、隠された力の源があるのです。

ペテロは「心の中の隠れた人」について語っています（ペテロ第一3:4）。心から、朽ちることのない（時を超えた！ すなわち、いつまでも、死を越えてもなお存続する）柔和で穏やかな霊が生まれ出るのです。

主イエスはこう言われます。「内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。……これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです」（マルコ7:21-23、マタイ7:15、ルカ11:39-40参照）。

内なる人は、神によって、神のために生きています。内なる人は神の律法を喜んでいます（ローマ7:22）。信者は、キリストが信仰によって心のうちに住んでくださるように、神の御霊によって内なる人に強められるのです（エペソ3:16-17）。

これらすべてのことから、パウロが18節で言っていることは内なる人にも当てはまる、ということになります。「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」内なる人は永遠に生きるのです⁶⁸。内なる人は肉体の死に服してはいません。

なぜ私は、「外なる人」と「内なる人」という概念を鍵となる概念と呼ぶのでしょうか。

これから見ていくたとえの中に、一つの対応関係が見いだされるからです。幕屋と衣は、外なる人に相当します。このからだの中に内なる人は住まい、その中で暮らしているのです。内なる人は幕屋に住み、衣を着せられ、そしてからだから離れていることもできるのです。

68. 内なる人とは、新しい創造、あるいは新しい人の別の呼び方です。信者が受ける永遠のいのちも、これと密接に結びついています。

2.4.3 地上の幕屋

「私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいが天にあることを、私たちは知っています」（コリント第二5:1）。

ここで最初のたとえが示されています。人間のからだのうちにある私たちの地上の存在、すなわちからだの一時的で地上的なかたちが、幕屋にたとえられています。それは、その永遠の天的なかたち、すなわち神が下さる建物と対比されています。天幕作りであったパウロ（使徒18:3）は、生活の実感から語っているのです。幕屋が地上のものであるのは、人間が土から形造られ（創世記2:7）、地上の領域に住まいを持っているからです（コリント第一15:48）。幕屋は、いのちのはかなさ、旅の生活、そして一つの場所にわずかの間しかとどまらないことを思い起こさせます。人間はいつか地上を去らなければなりません。さらに天幕の小屋は、宿りと住まいを語っています。私たちが自分のからだの中に住んでいるように、人はその中に住むのです⁶⁹。

この地上の幕屋、すなわちからだのうちにある私たちの地上の存在が死によって壊されるなら、私たちはその**直後に**、神が下さる建物を持っています。これは大きな慰めです。そうであるなら、死は、人の手によらない天的な存在のかたちへと直接移ることだからです。ですからそれは、死ぬべきからだのうちにある私たちの地上の存在とは比べものになりません。したがってこの「神が下さる建物」は、まず第一に私たちの死後の状態を言い表しています。使徒はその状態を、8節で「主のみもとに住む〔我が家にいる〕」という表現で描いています。

人は死によって、この幕屋を「脱がされる」こともあります（4節）。パウロが用いている三つのたとえは互いに重なり合っています。そのため2節では、住まいが同時に衣でもあるのです。ですから人は、この幕屋から「引越して」、それを後にしていることもありうるのです（8節）。ここでは、

69. イザヤ38:12、マルコ14:58、ヨハネ2:19-22。

人間はからだ（幕屋）の中にいる（住んでいる）こともできれば、それを離れて（そこから引っ越して）、どこか別の場所にとどまることもできる、ということが示唆されています。

同じ考えを、使徒ペテロもペテロの手紙第2章13～14節で述べています。間もなく彼は殉教者として死に、地上に別れを告げることになっていました（15節）。それは、我が家に、すなわち自分の主のもとにいるためです。彼は自分の死について「去ること」（ギリシア語 *exodus*）ということばを用いています。これは、地上の幕屋からの退去です。ペテロの存在がそこで終わったのではないことは明かです。彼は死の向こう側にある別の場所へ、自分の主のもとへと行ったのです。彼は、こわれやすい幕屋を、壊れることのない神の建物と取り替えたのです。

この存在のかたちについて私たちが知っているのは、それが永遠のものであり、天的なものであるということだけです。しかしこの二つの特徴から、私たちの幸いと喜びは、復活の前からすでに大きいものだと結論することができます。それでもなお、それは中間状態であって、最終的な状態ではありません。からだは朽ち果て、まだ死の力の下にあります。まるで死が最後のことばを持っているかのように見えます。もしそうであるなら、神はご自分の完全な栄光に至ることができないでしょう。しかし神はご自分の最終目標に到達されます。神は死に対する勝利者だからです。そのことは、イエス・キリストの復活によって証明されています。ですから神は、信者たちの復活において、霊と魂とからだから成る人間の一体性を回復してください。こうして「神が下さる建物」は、私たちの復活のからだをも含んでいます。それは私たちの永遠の部分です。

続く2節と4節では、建物はこの意味を持っています。神は信者に、こわれやすい天幕とは対照的な、永遠の家を与え（建て）てくださいます。それは、キリストが今持っておられる栄光のからだです（ピリピ3:21、ヨハネ第一3:2）。この家は天に属しています。それは天的なからだであり（コリント第一15:48-49）、そこにその定めとふるさとがあるからです。このからだは、もはや死によって触れられることも、ましてや壊されることもありませ

ん。それは（人間の）手によらず、神によって造られた永遠の家だからです。

2.4.4 着せられること

「私たちはこの幕屋にあってうめき、天から与えられる住まいを上に着たいと切望しています」（コリント第二5:2）。

私たちの地上のからだは、罪の結果に苦しんでいます。私たちは毎日、罪によって世に入ってきた不調や苦しみや障がいについてうめいています。ですから私たちは、罪やその結果とはもはや何の関わりもない新しいからだを受ける瞬間を待ち望んでいるのです。この住まいは、私たちのために備えられています。そのときが来ると、私たちは「上に着せられる」のです（überkleidet）。（ここで、住まいという最初のたとえば、衣という二番目のたとえばへと移っていきます。）その瞬間に、衣の取り替えが起こります。古い衣、すなわち死ぬべきもの（4節）は、新しいいのちの衣に場所を譲らなければならないので、永遠に脱ぎ捨てられます。コリント人への手紙第一15章51～54節では、この瞬間は「変えられること」と呼ばれています。

生きている私たちは、主イエス・キリストが再び来られるときに変えられます。主は、神の子どもたちを天のふるさと、父の家へと連れて行くために来られるのです（ヨハネ14:3）。この節で扱われているのは、その瞬間に生きている信者だけです。眠りについた信者たちは「上に着せられる」のではなく、復活のからだを受けるときに「着せられる」（angekleidet）からです。「この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着なければならないからです」（コリント第一15:53）。

キリストにある死者はよみがえり、生きている者は変えられます。そのとき、すべての者が神の御子と同じになり、天の復活のからだを持って、天にある父の家にいつまでも住むのです⁷⁰。

70. ヨハネ14:1-3、17:24、コリント第一15:51-55、ピリピ3:20-21、テサロニケ第一4:13-18、ユダの手紙21節。

コリント人への手紙第二5章3節で、パウロは裸であることについて厳粛な警告を語っています。

「……ただしそれは、私たちが衣を着ていても、裸であると見いだされない場合のことです。」

この挿入文の中でパウロは、衣を着ていても裸である可能性がある、と述べています。これは一見すると矛盾です。衣を着ている人が、同時に裸であることはありえないからです。裸であると見いだされるとは、どういう意味でしょうか。この表現には法廷的な意味があります。法廷の前に出て、有罪か無罪か、自分の状態を見極められるということです。この節では、「裸であると見いだされる」という判定は、心の霊的な状態に関わっています。

これにぴったりのたとえを、私たちはアダムに見いします。彼が罪を犯した後、神は彼を隠れ場から呼び出されました。彼が隠れたのは、自分が裸であることに気づいたからでした（創世記3:7、10、11）。自分の裸を覆うために、彼はいちじくの葉で腰の覆いを作っていました。しかしこの衣は、神の前では役に立ちませんでした。葉っぱは彼の裸を覆うことができなかったのです。衣を着ていても、神の前で彼は裸でした。

そこで神ご自身が、人間のために動物の皮で衣を作ってくださいました（創世記3:21）。これらの動物は死ななければなりませんでした。これは象徴的に、キリストの死と流された血について語っています。それによって罪人は「救いの衣」を着せられ、救われるのです⁷¹。

信者はキリストの義を着せられ、それに包まれています。それに対して信じない者は霊的に裸であり、いつかその状態のまま、アダムのように神の前に立つことになります（黙示録20:11-15）。そこで彼らは、「正義の外套」を持っていないので、自分の罪のうちにあらわにされ、暴かれます。ですから彼らは失われており、永遠の苦しみに行くのです。

この短い挿入文は、見かけだけのキリスト者、キリスト者であることの外側の形だけを身につけた人々すべてに対する厳粛な警告です。主が来られると

71. イザヤ61:10、ルカ15:22、ガラテヤ3:27、黙示録3:17-18。

き、彼らが救いの衣を着ていなかったことが明らかになります。しかし、神の前で通用する唯一のものこそ、その救いの衣なのです。彼らにも、すべてが明らかにされる神の御座の前の日がやって来ます。そのときには、もはや見せかけも覆い隠しありません。すべてが神の目の前に裸で、さらけ出されているのです（ヘブル4:13）。

本文は次のことばで続きます。

「確かにこの幕屋のうちにいる私たちは、重荷を負ってうめいています。それは、脱がされたいからではなく、上に着せられたいからです。死ぬべきものが、いのちによって呑み込まれるためです」（コリント第二5:4）。

「脱がされること」とは、死による地上の幕屋の取り壊し（1節）です。キリストの復活によって死は私たちのしもべとなり（コリント第一3:22-23）、私たちをキリストのもとへ、パラダイスへと連れて行くものとなりました。それにもかかわらずパウロは、脱がされる（死ぬ）ことではなく、上に着せられる（変えられる）ことを望んでいました。死ぬべきからだを、永遠の天のからだと取り替えるためです。

神の子どもたちの中には、死の床にあっても、死のその時まで、なおキリストが来られるのを待ち望んでいた人たちがいます。信者は死を待っているではありません⁷²。信者の希望は、天から来られるイエス・キリストを待ち望み（テサロニケ第一1:10）、そのとき変えられることにあります。ですからパウロは、死ぬ前にキリストが来られるのを体験するほうを望んでいるのです。

「そうなるのにふさわしく私たちを整えてくださったのは神です。神はその保証として御霊を私たちに下さいました」（コリント第二5:5）。

将来を見つめることと、それに結びついた期待とは、私たちにとって不確かな事柄ではありません。神は私たちの弱さに歩み寄り、疑いに揺さぶられる

72. 他方で、続く節は、キリストが来られることへの希望と並んで、死んだ後に主のもとにいるという確信があることを示しています。これは、キリストが来られることへの希望と並ぶ、同じように大きな慰めです。

こともある私たちに、保証と担保を与えてくださいます。神はご自分の約束を果たすことを、ご自身に義務づけておられるのです。神は私たちに、聖霊を保証（あるいは手付金）として与えてくださいました（コリント第二1:22、テサロニケ第一4:8）。

もし神が私たちを変えることも、よみがえらせることもなさらないなら、神は保証である聖霊を失ってしまわれることになります！ まさにこのことを、このみことばは言おうとしているのです！ 御霊はいつまでも私たちとともにおられます（ヨハネ14:16）。死んだ後も、御霊は私たちのうちに住んでおられます（ローマ8:2、11）。この真理は、死後のいのちがあることをはっきりと示しています。

信者のからだは神の御霊の宮であり（コリント第一6:19、ヨハネ第一4:13）、永遠にそうであり続けます。聖霊は、ご自分が住まわれた聖徒たちのからだを見捨てることはありません（ローマ8:11）。聖霊ご自身が、死ぬべきからだの復活と変貌という神のみわざに加わってくださるのです。

2.4.5 旅と故郷

「ですから、私たちはいつも心強いのです。そして、からだを住まいとしている間は、私たちは主から離れていることを知っています」（コリント第二5:6）。

保証を持っていることによって、私たちはいつも心強くいられます。それは、私たちのうちにある死ぬべきものがすべて、間もなくいのちによって吞み込まれることの保証だからです。

ここで三番目のたとえが導入されます。異国に身を置くことと、ふるさとに住むことです。私たちは、からだのうちにいる間は、本来私たちがいるべき主のもとにはいないことを知っています。ですから、私たちが異国に身を置くことは、限られた期間でしかありえません。「住まいとしている」（*einheimisch*、我が家にいる）ということばは、ここではからだの中に住むこと、あるいはからだの中に自分の家を持つことを意味しています。それに対して、主から「離れている」（*ausheimisch*、我が家を離れている）と

は、私たちが異国にいる、すなわち、私たちが旅人であり寄留者であるこの世にいる、ということを意味しています（ペテロ第一2:11）。

この確認は、死後の状態にとって示唆に富んでいます。この対比は、この二つの状態、あるいは二つの居場所しか存在しないことを意味しています。ここでは、この二つの状態の間に中間段階があるとは言われていません。ある人々は、この段階は意識的に体験されないので、主観的には（つまり自分の体験としては）存在しないのだ、と考えます。しかしこれらの節から明らかなのは、意識のない中間状態は、それがどのようなものであれ、客観的に存在しないということです。そもそも、どうしてそのような状態を待ち焦がれることができるのでしょうか。

信者は、からだのうちにいるか、主のもとにいるかのどちらかです。**それ以外の可能性はありません**。まさにそれこそが、私たちが心強くいられる理由なのです。

「（私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです）」
（コリント第二5:7）

ここで扱われているのは目に見えない、それゆえに永遠の事柄ですから、この真理（6節）は信仰によってしか認識し、理解することができません（ヘブル11:1）。天のふるさとは、信仰によってしかつかむことができないのです（ヘブル11:13-15）。ですからこの節は、ふるさとへの途上にある異国の者である私たちキリスト者の生活にとって、きわめて重要な原則を示しています。私たちの希望は信仰の事柄です。「私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか」（ローマ8:24）。

信者は、臨死体験の報告や、患者が死に際して体験したことの報告を必要としません。信者はもっぱら、信頼できる神のみことばに拠り頼みます。このような報告によって惑わされる必要はないのです。

「私たちは心強いのですが、むしろからだを離れて、主のみもとに住むほうがよいと思っています」（コリント第二5:8）。

この節では、6節の言明が逆転されています。パウロは、からだを離れるほうをはるかに望んでいました。そうなれば私たちはただちに主のみもとに住む、すなわち主のもとで我が家にいることになると思っていたからです。この節は、死後の状態を理解するための鍵となる節です。

ですから、人が死んで、もはやからだのうちにいないなら、その人は主のもとで我が家にいるのです。それによって、からだと靈魂は分かたれています。そうでなければ、どうしてからだの外に 있으면同時に主のもとで我が家にいる、ということがありえるでしょうか。

「からだを離れている」ことは、同時に異国の者であることでもあります。靈魂、すなわち内なる人がからだから分かたれているからです。これは不完全な状態であり、もともと意図されていたものではありません。神は人間を、靈魂とからだから成る人格として、一つのまとまりとして創造されました。このまとまりは死によってもはや存在しなくなりますが、それでも復活において回復されるのです。ですから「からだを離れている」ということは、復活した信者には当てはまりません。彼らは復活のからだを持っており、したがってからだから離れてはいないからです。ここに描かれている状態は、眠りについた信者だけに当てはまります。

現時点で、異国とふるさとのどちらかを選ぶ、つまりキリストのもとにできるだけ早く行く道を選ぶということであれば、パウロは、キリストとともにいるために、むしろ死ぬことを望んでいました（ピリピ1:23）。しかし、永遠の家をどのような仕方着せられるかを選ぶことができたなら、パウロは もちろん、脱がされる（死ぬ）のではなく、上に着せられる（変えられる）ことを望んだのです（4節）。

「そういうわけで、からだを住まいとしていても、からだを離れていても、私たちが熱心に願うのは、主に喜ばれることです。私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれからだにおいてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです」（5:9-10）。

ふるさとをどれほど慕い求め、間もなくそこに行くことをどれほど期待していても、一つの重要な事実を忘れてはなりません。永遠において意味を持つのは、私たちがからだのうちにあって、主に喜ばれるために行ったことだけです。それがキリストのさばきの座の前で明らかにされます。主にとって価値のなかったほかのすべてのものは、そこでは残ることがなく、報いを受けることもありません（コリント第一3:12-15）。その瞬間、私たち自身が自分の全生涯をキリストの目で見ることになり、自分の行いについて、キリストの判断と完全に一致するようにされます。贖いの問題がそこで扱われる必要はもはやありません。それはとうの昔に解決済みだからです。ここで問題となるのは、ただ私たちの行いの評価だけです。

パウロは、私たちがからだを住まいとしていても（6節）、主から離れていても（8節）、神の栄光のために生きるよう、全力を尽くして努めるべきだと言っています。この二つは、どちらも地上での私たちの生活にだけ当てはまります。地上でこそ私たちは、神に喜ばれる良いことを行うよう努めるべきなのです。今、地上でそうであるような、からだのうちにあるこの一回限りの比類ない形でそれを行うことが、もはやできなくなり、取り戻すこともできなくなる時がやって来ます。

2.4.6 別の解釈

この聖書箇所にはさまざまな解釈があり、本書で反論している見解を根拠づけようとする試みもそこでなされている、ということを読者に隠しておくべきではないでしょう。

神が下さる建物——復活のからだだけなのか

広く行き渡っている解釈によれば、建物とはもっぱら復活のからだのことであって、死後から復活までの状態のことではありません。この場合、地上の幕屋はもっぱらからだとして理解されます。からだ死によって壊されると、神ご自身が形造られ、もう二度と壊されることのない新しいからだを、神が私たちに与えてくださる、ということです。さらにこのからだは、私たちがそれを持って天で生きることになるので、天的なものだとされます。

私はこの見解に基本的には同意します。それでも私は、「神が下さる建物……がある」ということばの中に、私たちが死ぬまさにその瞬間のための神の備えを見えています。幕屋が取り壊されると、すぐに新しい家が用意されています。それはまだ復活のからだではありません。そのときにはまだ復活は起こらないからです。それは死後から復活までの状態であり、それが神が下さる建物の一部なのです。ですから、この中間状態をここに含めて考えるのは自然なことです。パウロは8節でこの状態を直接、しかも同じ文脈の中で述べているからです。からだの外では、信者は主のもとにしかいることができません。それ以外の場所も状態もないのです。ですから、ここで問題になっているのは二種類のからだではなく、二種類のいのち、二種類の存在、すなわち地上の存在と天の存在なのです。

神が下さる建物——中間状態のための霊的なからだなのか

この「神が下さる建物」とは、中間状態のために用意されているからだなのでしょうか。少なくとも二つの理由がそれに反対します。第一に、この建物については、それが永遠のものだと言われています。しかし中間状態は永遠ではありません。それは復活によって確実に終わります。第二に、この状態を扱っている聖書のどの箇所にも、この期間のための特別なからだについては書かれていません。中間状態にはからだは必要ありません。この期間、霊魂は、地上でからだのうちにいる人間と同じように目に見えるからです（黙示録6:9-11）。中間状態のあいだのあり方について、聖書はそれ以上のことを語っていません。

神が下さる建物——天、父の家なのか

ある解釈者たちは、「神が下さる建物」を父の家（ヨハネ14:2）、私たちの天の故国（ピリピ3:20）と理解しています。しかし「神が下さる建物」と「天」は、はっきりと区別されています。ここで天とは、私たちがとどまることになる場所です。その限りでは、天を父の家と呼ぶこともできるでしょう。しかし「建物」——そしてこの概念こそが父の家とのつながりをもたらすのですが——は、死と復活の間においても、また復活のからだにおいても、一人ひとりの信者の個人的な天的存在のかたちを言い表しています。こ

の神が下さる建物を持って、私たちは天にいます。言い換えれば、この建物を持って、私たちは父の家にいるのです。

「裸であると見いだされる」——からだのない魂なのか

裸であることは、肉体の死の状態を、復活の日まで魂が意識のないままとどまっていることとして描いているわけではありません。信者は1節によれば、死後に神が下さる建物を持っており、8節によれば主のもとで我が家にいます。この挿入文を説明する可能性はいろいろありますが、からだのない中間状態という選択肢は除外されます。ピリピ人への手紙1章23節やコリント人への手紙第二5章8節の意味での中間状態を、冷たく恐ろしい裸の状態として感じるなど、ありえないのです。

脱いでいるのか、着ているのか

この問いは、翻訳上の問題に関わっています。多くの翻訳者は「着ている」を採用しています。もし本当に「脱いでいる」であったとしても、上に述べた解釈は原則として何も変わりません。その場合、信者は死において衣を脱がされる、つまりからだを持たない状態になりますが、それでも裸であるとは見いだされないことになります。「裸であると見いだされる」ことは、からだにも、幕屋にも、衣にも関わってはいません。それは裁きによる吟味の結果であり、もっぱら人間の霊的な状態を指しているのです。すなわち、人がキリストのうちにいるなら、からだのうちにいようとからだの外にいようと関係ありません。しかしキリストを持たないなら、からだのうちにあっても死の中にあっても、その人は永遠に裸なのです。

理解を深めるための問い

- 「外なる」人と「内なる」人の違いは何でしょうか。
- 使徒パウロはコリント人への手紙第二4～5章で、どのような三つのたとえを用いているでしょうか。
- この箇所から、私たちはどのような厳粛な警告を読み取ることができるでしょうか。

- ふるさとを慕い求める私たちの思いは、何によって悪い影響を受けることがあるでしょうか。

2.5 死ぬことは益

死ぬことは益です！ このことばは、死が人間にとって意味するすべてのことをひっくり返します。人間はもはや死を恐れる必要がないのです。死は冷たい敵です。たとえ多くの死亡広告で、特に病気の場合に、死が解放として描かれているとしてもです。もし死に打ち勝った方がおられなかったなら、死は益などとはまったく程遠いものです。この方の勝利は、死さえも益に変えてしまうのです。

これこそ神の知恵です！ 神はすべてをひっくり返し、祝福に変えることがおできになります。罪の増し加わったところに、恵みも満ちあふれました（ローマ5:20）！ サムソンの物語の中に、私たちは美しい予型を見いだします。サムソンが獅子を殺すと、その死骸に蜜蜂の群れが巣を作り、蜜を生み出しました。「食らう者から食べ物が出た。強い者から甘い物が出た」（士師14:14）。死は、引き裂き、食らい尽くす猛獣のようです。しかし殺された猛獣から、人を元気づけ、さわやかにする蜜が出てくるのです。パウロは、死に対する勝利者を知っていました。

「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。しかし、肉体において生きることが私の定めであるなら——それは私にとって労苦のかいがあることです——、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに良いのです。しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です」（ピリピ1:21-24）。

これらの節は、死後の状態について聖書が語っている、もっとも明確なことばの一つです。

パウロがこのことばを書いたとき、彼は獄中にいました（ピリピ1:13）。彼はこの牢獄から、もう一度生きて出ることができるのでしょうか。死刑の判

決を受ける可能性もありました。そのような状況の中から彼は、死を前にして自分が何を感じ、何を期待し、何に心を動かされていたかについて、いくつかの思いを書き記したのです。

キリストはこの瞬間まで、彼の人生の唯一の目標であり、その中身でした。ダマスコへの途上でキリストに出会ったその瞬間から（使徒9章）、彼にとってはキリストとキリストのみわざ以外の何ものも、もはや存在しなかったのです。この出会いのとき以来、パウロは自分のいのちを、それ自体として価値のあるものとは少しも考えず、主イエスから受けた務めを全うしようとしました（使徒20:24）。キリストがあがめられることに役立つのであれば、彼は殉教者として死ぬ覚悟さえできていたのです（20節）。

そのときパウロは、殉教の死はキリストの栄光に役立つだけでなく、さらに自分個人にとっても益であることに気づきました。彼は、死ぬことが自分個人に何をもたらすのかを示しています。肉体における彼のいのちは、すでにキリストによって満たされていました。しかし彼の死は、それに加えてさらなる益を意味していたのです。この益は、「私にとって生きることはキリスト」という彼の生涯のモットーさえも、さらに上回るものでした。彼にとって死は、キリストによって満たされた人生の終わりであるだけでなく、はるかに良いものへの移行だったのです。

キリストが私たちのいのちを満たしているときにだけ、死は私たちにとって益となります。キリストを持たない人間にとって、死は、自分で決めてきた自分の人生の、苦く、避けられない終わりであり、終幕です。一言で言えば、損失です。キリストなしには存続しないので、そのいのちは失われるのです。信者の人生のうちにおられるキリストが、永遠の栄光という益を保証してくださいます！ しかしキリストを持たない人間は、永遠に失われます。それは決して終わることのない損失です。

パウロは、もし自分が囚われの結末を自分で決めることができるとしたら、どちらを選ぶだろうかと思い巡らしています。死（それは益です）か、自由（肉体において生きること）かです。彼はここにとどまることを、決して悲しんでいるわけではありません。そうすれば、さらに主に仕えることができ

るからです。ピリピの人々と、彼らの福音への熱心さを思うとき、彼は喜びと感謝に満たされました。彼は、彼らの信仰を前進させるためなら、何でもしようと思っていたのです。

こうしてパウロは、二つの可能性の両方に引き寄せられていました。一方には大きな個人的な益が見え、他方には主への奉仕と信者たちの幸いが見えていました。彼は、そう簡単には決められないことを率直に認めています。

では、パウロは益ということで、正確には何を言おうとしていたのでしょうか。彼にとって益とは、世を去ってキリストとともにいることでした。死が彼にもたらすものは、まさにそれ以外の何ものでもありませんでした。それははるかに良いものであり、それまで彼が体験してきたこととは決して比べものになりませんでした。死ぬとき、彼は瞬時に、自分の贖い主のすぐそばに行くことになるのです。この益の大きさのすべてが、「キリストとともにいる」というわずかなことばの中にあります。彼は、自分の贖い主に顔と顔を合わせてまみえることを強く願い求めていました。彼を引きつけていたのは、労苦の多い奉仕の後の休息ではありませんでした——もっとも、それもまたあったのですが⁷³——。そうではなく、地上ですでに彼の人生を満たしていた一つの人格、ひとりの方だったのです。地上で彼はすでに、この方を知るようになっていました。残念ながら、人生のさまざまな状況、そしてとりわけ古い性質、罪深い肉が、キリストとのこの交わりと親しさを乱すことがありえました。しかしそのときには、それももはやなくなり、キリストとともに生きることを妨げるものは何もうなくなるのです。彼が地上ですでに味わっていたキリストとの深い交わりが、そこでは完全な形で生きられることになるのです。

キリストというお方を知ること（ピリピ3:8）が、彼に死ぬことを願わせました。死がしもべとして（コリント第一3:22参照）、彼をキリストのもとへ連れて行くことになるからです。今日でも、キリスト・イエスを知ることだけが、信者たちのうちに同じ願いを呼び覚ますことができるのです。

73. 黙示録14:13

けれども、パウロは再び教会への気遣いにとらえられ、彼らの益のために自分はとどまるだろうという確信に、個人的に至ります（25節）。

2.5.1 別の説明

残念ながら、これらの節についても誤った見解があります。信者が死後ただちにキリストのもとにいたことが否定されるのです。

2.5.1.1 キリストの再臨のことか

ある人々は、ここで扱われているのは人間の死や死ぬことではなく、キリストの再臨のことだと言います。それによれば、信者たちはキリストの再臨とそれに伴う復活のときになって初めてキリストのもとへ連れて行かれ、そのときからキリストとともにいるのだ、ということです。しかしそれは、半分の真理にすぎません。確かに私たちは、主が来られるときに、復活において完全な状態に到達します。しかしここで扱われているのは、主の再臨でもなければ、完全な最終状態に到達することでもありません。パウロは死ぬことについて語っているのです！

もしここで本当に主が来られることが扱われているのなら、主がパウロのためだけに来られるのかどうか、非常に疑わしいことになります。その結果、ピリピの人々は取り残されることになるでしょう。パウロは去り、彼らはここに残る。ここで主が来られることが扱われているのなら、そういう結論になるのです。主が来られるときには、どの信者も取り残されることはないということは、ほとんど強調するまでもないでしょう。

2.5.1.2 世を去ること

ここで扱われているのがキリストの再臨と復活ではないもう一つの理由は、「世を去る」ということばです。「世を去る」に対応する名詞は、パウロのもとではほかにもう一度だけ、テモテへの手紙第二章6節に出てきます。そこで彼は、疑いなく自分の殉教の死についてこのことばを用いています。

当時の日常語では、「世を去る」ということば⁷⁴は、港に停泊していて、今まさに出航しようとしている船の、もやい綱を解き、錨を上げることを表すのに用いられました。また、出発に際して野営の天幕をたたむこと（コリント第二5:1、4、ペテロ第二1:14参照）を表すのにも使われました。さらにこの語には、本来一緒に属しているものが分かれるという意味も含まれていました。死に関して言えば、それは靈魂がからだから分かれることです。「世を去る」ということばのこの最後に挙げた用法も、ここで扱われているのが死であるという考えを支持しています。

2.5.1.3 魂の眠りか

また、死は魂の眠りの始まりだと主張する人々もいます。仮に、パウロが死後に本当に魂の眠りに陥り、まったく意識のないまま、どこにも属さない場所にいることになるのでしょうか。そうだとしたら、世を去ることを願っていたということばを、私たちはどう理解すればよいのでしょうか。パウロは自分の状況から逃れ、自分の務めから逃げ出したかったのでしょうか。いいえ、彼は、仮の無の中へ去っていくよりも、ピリピの人々とすべての信者の益のためにとどまりたいと願っていたのです。この見解によれば、彼にとって死後の時間は（主観的には）もはや存在せず、したがって死から復活までの時間は彼にとって少しも過ぎないことになります。しかしそうだとした場合、少なくともピリピの人々にとっては時間が過ぎていきます。その間、彼らはパウロの助けと奉仕を必要としていたのです。もしパウロが魂の眠りを教えていたのなら、彼はおそらく、役に立たない魂の眠りのうちにただの一時間も失わないために、とどまりたいと言ったことでしょう。彼は信者たちに、時間を眠って過ごすのではなく、機会を十分に生かすよう勧めたのです（エペソ5:16、コロサイ4:5参照）！

2.5.1.4 パウロだけの権利か

すべての信者が使徒パウロと同じことを自分のものとして主張できるわけではない、と反論する人々もいます。確かに、パウロだけに与えられ、使徒と

74. 「世を去る」は、ここでは文字どおりには「解き放つ」という意味です。こうして死において、幕屋とからだという衣は、いわば解かれるのです（コリント第二5:1、4）。

しての彼だけに授けられていた事柄はあります。しかし死後の状態は、すべての信者にとって同じです。それは、完成されたキリストのみわざの結果だからです。キリストは、すべての人のために死に対する勝利を勝ち取ってくださいました。これらの祝福は、神の民の中での特定の地位や特定の職務、あるいは特別な体験によって左右されるものではありません。すべての信者に、同じように、しかも完全な形で与えられているのです。

2.5.2 主にお会いする！

パウロから学びたい一つの見方をもって、この章を締めくくりましょう。すべての信者が死ぬときにキリストのもとに行くということが確かであるなら、それは私たちにどのような影響を与えるでしょうか。私たちは、いつでも主イエス・キリストに召し出される用意ができていますでしょうか。信者がこのことについて考え、自分がこの人生とそのすべての事柄に執着しているのか、それともキリストを見つめて、いつでもすべてを手放す用意ができていますのかを確かめることは大切です。まさに死について考えることが、私たちの人生の多くのことを明るみに出してくれます。主が私たちの家族を顧みてくださると、私たちは主に信頼するでしょうか。私たちは手放す用意ができていますでしょうか。たとえ神の子どもであっても、私たちはいつでも、どんな年齢でも、死によって主の天の御国へと召し出されることがありうる。そのことを決して除外しないようにしましょう！

私たちは今すでに、自分の救い主をよく知っているのです、向こう側で出会うのは見知らぬ方ではなく、よく知っている方だと言えるでしょうか。私たちがすでに主を肉眼で見たというわけではありません。そうではなく、私たちは主を見たことはないけれども愛しているのです（ペテロ第一1:8）。今すでに主と持つことを許されている交わりが、主との親しい関係を生み出し、私たちはそれを向こうでも続けていくのです。ここで得た知識、ここで信仰の目をもって見たものを、私たちは向こうへと携えて行くのです。

私たちは主に圧倒されるでしょう。そのときにはもはや信仰の目で主を見るのではなく、その麗しさのすべてにおいて、実際にこの目で主を見るからで

す⁷⁵。キリストとともにいるということは、主をありのままに見るということ
です⁷⁶。

理解を深めるための問い

- パウロにとって、なぜ死ぬことが益だったのかを説明してください。
- あなたは個人的にそれに同意できますか。
- そのための前提は何でしょうか。
- この人生でイエス・キリストを知ることが、永遠における私たちの知識に
どのような影響を与えるのでしょうか。
- なぜ魂の眠りについて語ることは誤りなのでしょうか。

2.6 眠った人たち

「眠った人たち」という表現は、死んだ人々の別の呼び方です。厳密に言えば、新約はこの言い表し方を、キリストと結ばれている人々のためだけに取
っておいています⁷⁷。

「眠りにつく」ということ自体は、死を和らげて言う婉曲な表現です。です
からそれは、まさに信者たちに当てはまります。信者にとって死は、死に対
するキリストの勝利によって、すでに打ち負かされた敵だからです（ヘブル
2:14）。この言い表し方がこれほど美しいのは、眠りが常に一定の時間しか
続かないからでもあります。目覚めの瞬間、すなわち起き上がる（よみがえ
る）瞬間がやって来ます。そして、もはや夕べのない永遠の日が明けるので
す。

死が眠りと呼ばれるのは⁷⁸、眠っている人と亡くなった人とが外見上似てい
ることにもよります。しかし眠りは、死の現実を和らげようとする死のたと
えにすぎないではありません。それは死者の実際の状態を描いているので

75. 詩篇45:2、列王第一10:7、イザヤ33:17の転用された意味において。

76. ヨハネ第一3:2。

77. 新約で「眠った人たち」ということばが出てくるのは、次の箇所です。コリント第一15:20、
テサロニケ第一4:13、14、15。「眠りにつく」ということばは、次の箇所に出きます。マタイ
27:52、コリント第一7:39、11:30、15:6、18、51、ペテロ第二3:4。旧約では、この概念は信者に
限定されていません。エレミヤ51:39、57、ダニエル12:2。

78. エレミヤ51:39、ダニエル12:2、マタイ9:24、マルコ5:39、ルカ8:52、ヨハネ11:11-14。

す。ですからこの眠りは、死が人間の終わりではなく、時間的に限られた状態にすぎないことを、すでに示唆しています。私たちの知っている眠りは、いつも一定の長さのものです。眠った人たちについても同じことが言えます。彼らが眠りから目覚める、すなわち、よみがえる時がやって来るのです。

「眠りにつく」に用いられていることばは、「横たわる」「休むために身を横たえる」「眠りに沈む」という基本的な意味から来ています。それに対応するのが復活であり、復活とは眠りから「起き上がる」ことを表しています（コリント第一15:20、51-52）。こうしてこの眠りは、復活を待つことに似ています。復活が中間状態を終わらせ、最終的な状態を始めるのです。

しかし「眠りにつく」ということは、もともと、死が訪れると同時に死の眠りが始まるという意味ではありません。そのような意味がこのことばに含まれるとしてもです。むしろこの表現は、死ぬことと世を去ることの過程を描いています。新約でこのことばが使われるとき、それは死者が今眠っているという意味ではなく、彼らが死に、それによって別の状態へと移っていくという意味なのです。ですから眠った人たちとは、死んで、それ以来別のいのちの状態にある信者たちのことです。

2.6.1 眠った人たちは魂の眠りにについているのか

死の中での状態に関して問われるのは、眠りと復活が何に関わっているのかということです。この眠りはからだだけに及ぶのでしょうか。それとも内なる人、つまり霊魂にも関わっているのでしょうか。魂の眠りと呼ばれているものは、信者であれ信じない者であれ、人間全体が無意識の状態、あるいは意識のない状態にあることです。ある人々は、この眠りは死の夜の中で人格が完全に消えてしまうことに等しい、と主張します。しかし、次の箇所が示すように、それでは死んだ信者たちの眠りも、死者の状態も、まったく説明されていないのです。

その前にひとこと述べておきます。眠っていて、からだは休止状態にある人でも、同時に、たとえば夢の中で何かを体験することがあります。からだは活動していなくても、潜在意識は活動していることがあるのです。これは、

眠りというたとえが、眠っている人に意識がないことを意味するわけではない、ということを示したいだけです。眠っている人は、夢の中で自分自身とその周囲を、一つの人格として十分に体験することができるからです。眠りが目覚めている状態とは別のいのちの状態にすぎないように、死もまた、同じ人格の地上の存在とは別のいのちの状態なのです。肉体の眠りが眠っている人にいのちがないことを意味しないのと同じように、死は、死ぬ人格の存在が消し去られることではありません。

2.6.2 眠りは何を指しているのか

この関連で興味深いのは、イエスの十字架刑の際に起こった一つの出来事です。「……地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返った。彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた」(マタイ27:51b-53)。

この節では、私たちが調べてきた三つの概念、すなわち**復活**、**眠った人たち**、**からだ**が同時に挙げられています。この三つの概念は互いに結びついており、眠り、そしてよみがえらされるのはからだであることをはっきり示しています。眠っていた聖徒たちのからだがよみがえらされた、とされています。そしてその結果、もちろん人間全体が、つまり靈魂もよみがえったのです。彼らはイエスの復活の後でエルサレムに入って行ったのですから。

からだの復活しかありません(コリント第一15:35-44)。ほかの箇所では、死者がよみがえると言われ、それによってももちろん人格全体が意味されている場合、それは、人間全体が復活において、復活のからだと靈魂が結び合わされることによって再び生み出されるということを示しているのです⁷⁹。

この聖徒たちが眠ったことは死でした。その死は死ぬべきからだにだけ及ぶものであって、彼らの靈魂には及びません。ですから、よみがえらされたのも彼らのからだだけでした。ここでも、眠ることとよみがえらされることはからだだけに関わっている、という結論以外にはありません。

79. 新約は、からだの復活と、靈的に死んでいた者がキリストとともに生かされる靈的な復活とをはっきり区別しています。たとえば、エペソ2:5。

ですからこの本文には、死における眠りの状態が聖徒たちのからだに関係している、というはっきりとした示唆があります。新約のどこにも、死の眠りが魂や霊について用いられている箇所はありません。それは靈魂の本質にも反するでしょう。靈魂はからだに縛られていないからです。眠りは、まさにからだの状態にすぎないのです。

2.6.3 ステパノの死の例

そのことは、ステパノの死の例も明らかにしています（使徒7章）。彼は——しばらく前の彼の主と同じように——自分の同胞によって殺されました。生涯の最後の数分間に、彼は開かれた天をのぞき見ました。そこで彼は、キリストが神の右に立っておられるのを見ました。キリストは、大きな苦境の中にあった彼のために、忠実な大祭司としてとりなしておられたのです。そして殺害者たちの石が彼の上に雨のように降り注いだとき、彼は祈りました。「主イエスよ、私の霊をお受けください」（使徒7:59、ルカ23:46参照）。この死は、安らかに眠りにつくことと比べられるようなものではありませんでしたが、それでも彼は眠りについた、とされています。彼の霊は、主イエスによって天のご自分のもとへ迎え入れられたのです。このような描写を前にして、ステパノは意識のない魂の眠りに沈んだ、と誰が主張しようとするでしょうか。もし結局は意識のない魂の眠りに陥ったのなら、なぜ死の直前に、天をのぞき、死に対する勝利者を仰ぎ見ることが彼に開かれたのでしょうか。主イエスが彼の霊を受け入れてくださるようという願いは、いったい何のためだったのでしょうか。

ステパノは（すなわち彼の靈魂は）、彼の主が死なれたときと同じように、パラダイスへ行きました。主イエスの聖徒たち、主に愛されている者たちは、主にあって、「キリストにあって」眠るのです（コリント第一15:18）。ですから彼らはステパノのように、主ご自身によって迎えられ、受け入れられます。それは、まずは眠った者として、そしてやがて復活した者として、いつまでも主とともにいるためです。

2.6.4 携挙のときの眠った人たち

天への携挙は、信者たちの希望です。主イエスご自身が、ご自分の民を天に迎え入れるために来られます。テサロニケの人々は、この希望を忍耐をもって堅く保っていました（テサロニケ第一1:3）。けれども彼らは当然、生きている自分たちが携挙されるとき、眠った信仰の兄弟姉妹はどうなるのか、と尋ねずにはいられなかったに違いありません。パウロは彼らを励まし、望みのないほかの人々のように悲しまないように、と言います。なぜなら、

「イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスによって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずです」（テサロニケ第一4:14）。

ほかならぬ生ける神ご自身、彼らが立ち返ったその神が、眠った人たちを引き受けてくださいました。御子が携挙のために天から来られるとき、神は彼らを御子にゆだねてくださいます。彼らは主にあって、神の御子イエスにあって眠ったのです。ですから彼らは、今度は主とともに来ることになるのです。そのとき、16節が述べていることが起こります。

「すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえります。」

言い換えれば、イエスは眠った人たちを天から一緒に連れて来られ、それから眠った人たち、すなわちキリストにある死者がよみがえるのです⁸⁰。ここで私たちは、眠った人たちの靈魂が

天でイエス・キリストのもとにいて、それから主によって一緒に連れて来られ、復活においてからだと結び合わされるのを見ます⁸¹。こうしてこのみこ

80. 別の解釈は、この節を次のように説明します。キリストは力と栄光をもって来られるとき、眠った人たちを——彼らが復活の際に天へ携挙された後で——天から「連れて来られる」のだ、ということです。

81. 人間の成り立ちも、そのように理解することができます。生殖によってからだ、すなわち外なる人が生じますが、神はその内に霊を送り、あるいは形造られるのです（ゼカリヤ12:1、詩篇33:15、104:30）。

とばも、復活とは靈魂がからだと結び合わされることだ、ということを裏づけているのです。

2.6.5 携挙の前の眠った人たち

テサロニケの人々は、眠った兄弟姉妹たちも、生きている自分たちと同じように携挙というすばらしい出来事に加わるのだと知って、安心しました。そこでパウロはさらに、眠った人たちが携挙まで、どこにいるのかをも彼らに知らせたのです。

「神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。主が私たちのために死なれたのは、私たちが、目を覚ましていても眠っていても、主とともに生きようになるためです」（テサロニケ第一5:9-10）。

キリスト者の豊かさのすべてを短く言い表した、すばらしいみことばです！ 私たちは永遠の昔から救いへと選ばれており、キリストのみわざによって、それは実際に私たちの分け前となります。救いは私たちを、今やいつまでもキリストとともに生きるところへと導いたのです。

この節で「目を覚ましている」とは、地上で生きていることを意味します。したがって「眠っている」とは、信者として⁸²死んでいる、つまり眠りについている、という意味です⁸³。パウロは、どちらの状態であっても、私たちはキリストとともに生きるのだと言っています。それは、からだが眠っている間、靈魂はキリストのもとにいる、ということを意味しています。ですからパウロは、眠った人たちについて、もはや何の疑問も残していないのです。

私たちはキリストにあつていのちを持っているだけでなく、「主とともに」生きてもいます。もちろん、前者が後者の前提です。ここではそれは、意識

82. ここで眠っている人たちとは、5章4～7節の人々ではありません。彼らは決してキリストとともに生きることがないからです。彼らは夜の子らであり、闇の中にいるので、キリストを知りません。キリストは彼らにとって盗人のように来られます。ですから、キリストが来られることは、彼らにとってさばきを意味するのです。

83. もしかすると、「眠る」が死んだ信者たちの状態を表しているのは、ここだけかもしれませんが。

のある交わりを意味しています。このつながりと交わりを、生きている者は今すでに信仰によって体験しています。眠った人たちも同じです。そしてやがて、この二つのグループが、復活した者としてそれを体験するのです。

この節は、将来の永遠の側面を描いています。すなわち、生きている者も眠った人たちも、同じようにいつまでも主とともにいる、つまり主とともに生きるのです。そしてその少し後には、主とともに公に現れることにもなるのです（テサロニケ第二1:10、コロサイ3:4）。

2.6.6 結論

したがって、信者が眠りにつくこと、眠っていることは、決して魂の眠りを意味しません。それはただひたすら、死ぬという過程と、よみがえらされる時までの、人間の死ぬべきからだの状態を描いているのです。

理解を深めるための問い

- なぜ「眠る」という概念は、からだだけに関わっているのでしょうか。
- テサロニケの人々は、亡くなった人たちについて何を心配していたのでしょうか。そしてパウロは、彼らをどのように励ましているのでしょうか。

2.7 キリスト——生きている者と死んだ者の支配者

キリストが生きている者と死んだ者を支配しておられるという事実は、ローマ人への手紙14章の鍵となることばです。そこで扱われているのは、主のはっきりした命令がない事柄について、異なる見解や異なる実践を持っている信者たちのことです。つまり、神の子ども一人ひとりが、個人として自分の主に対して責任を負っている事柄です。信者が行うことはすべて、その信者が属している主に向けられています。「私たちの中でだれ一人、自分のために生きている人はなく」とパウロは言い、さらに強調してこう付け加えます。「自分のために死ぬ人もいない」（7節）。その時を私たちが決めるのではない死においてさえ、信者はキリストのうちに目標を持っているのです。パウロはこの真理をもう一度繰り返しています。

「私たちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死にます。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです」(8節)。

私たちは自分のいのちを主のために生き、自分の死において主のために死にます。それは、私たちが主のものであるという事実に基づいています。私たちは日々の生活においても、死においても主のものです。死において私たちが主から失われることはありません。死においても、私たちは主の所有だからです。何とすばらしいことでしょう！ 私たちは、御子を中心とする神の包括的なご計画の中に組み込まれたのです。

「キリストが死んで、また生きられたのは、死んだ人と生きている人の両方を支配するためです！」(ローマ14:9)。

すべてを御子に従わせることは、永遠の昔からの神のご計画でした(エペソ1:9-10、21-22)。万物の創造者として、神である御子には、当然ながら常にすべてが従っていました(コロサイ1:16、ヘブル1:2-3)。それでも、人としての御子にもすべてが従わせられることになっていたのです⁸⁴。主イエスは贖いのみわざを成し遂げ、すべてのものために死を味わい(ヘブル2:9)、そこにおいて神の栄光を完全に現されました。それゆえ、主は人としてすべてのものの上に高く上げられたのです。主は今、神の御座に、御父の右に座しておられます⁸⁵。そこで主は、すべての敵がご自分の足もとに置かれる時を待っておられます。主はまだ、この世で公にご自分の支配を始めてはおられないからです(ヘブル1:3、10:12-13)。主は今なお、退けられた方です。神は今なお恵みの時を与えておられ、それによって、この時に神の御子に服し、その権威を認めて主に仕える機会を与えておられるのです。

神の子どもたちは、今すでにイエスの支配を認めています。彼らは主に仕え、主に従っています(コリント第二5:15、使徒17:7)。しかし、ほかのすべての人々にとっても、イエスの支配を認めなければならない時が来ます。

84. たとえば、詩篇8篇、ヘブル2:5-9、コリント第一15:25-28参照。

85. ヘブル8:1、12:2、黙示録3:21。

そのときには、彼らはそうすることを強いられます。自発的にそうする時は過ぎ去っているからです。そのときにはもはや、その用意があるかどうかを尋ねられることはありません。神は、ご自分の御子がすべての者からあがめられることを望んでおられるからです（ピリピ2:9-11、ヨハネ5:23）。

支配するというキリストの要求と権威は、人間の目に見える領域と地上のいのちを越えています。死者たちも、キリストの支配から逃れることはできません。ハデス（死者の領域）もまた、キリストに服しているのです。栄光のキリストは、使徒ヨハネにこのように出会われました。

「私はこの方を見たとき、その足もとに倒れて死んだ者のようになった。するとその方は私の上に右手を置いて言われた。『恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とハデスの鍵を持っている』」（黙示録1:17-18）。

ここで主イエスは、死とハデスを従えておられる方としてご自分を示しておられます。鍵を持つ者が権力を持っているからです（イザヤ22:22、マタイ16:19）。生きている者と死んだ者に対するキリストの支配とは何を意味するのでしょうか。彼らはどのような仕方でキリストに服しているのでしょうか。そしてキリストは、いつから彼らを支配しておられるのでしょうか。

「支配する」という表現は、ルカの福音書22章25節と同じことばです。ここでは、異邦人の王たちは人々を「支配し」、権力をふるう、と言われていきます。支配には、支配者の権力に服し、その権威にひざをかがめなければならない臣下が前提となります。ローマ人への手紙14章9節では、この臣下とは生きている者と死んだ者です。

主イエスは、いつご自分の支配を始められたのでしょうか。すでに示唆したように、すべてを包み込む支配は将来になって初めて始まります。私たちはまだ、すべてのものが主に従わせられているのを見ていないからです（ヘブル2:8）。生きている者についてのキリストの支配は、信者に限られています。信じない者は神の御子に服さないからです。ローマ人への手紙14章の文脈から明らかなように、信者はだれでも（通常は）自分の生活を主にゆだ

ね、ただ主に対してだけ責任を負っています（7-8節、12節）。信者は生涯を通じて、また死においても自分の主のものです。ですから、信者に関する限り、キリストの支配は、キリストに服する信者が存在するようになったときから、すでに始まっているのです。神の国の暫定的で隠された形において、今なお退けられている王が、信者たちの上にその「亡命」政府を行使しておられるのです（17節、コロサイ1:13）。

しかし9節では、生きている者の前に死んだ者が挙げられており、同じことが彼らにも当てはまります。キリストは、彼らのご自分の権力のもとにあるという仕方で、彼らをも支配しておられるのです。死ぬ人はだれでも、死の直後に、キリストが主であるという事実と直面させられます。「地の下にあるもの」、すなわちハデスにいる死者たちも、ひざをかがめて、キリストは主であると告白しなければならない、と言われています（ピリピ2:10-11）。信じない者にとって、これはさばきを意味します。罪の問題が解決されていなかったからです。彼らは神と和解しないまま永遠に入って行きます（ヘブル9:27）。彼らは取り返しのつかない形で失われています。死後、亡くなった者はもはや自分自身のいのちを生きることができず、最終的にキリストの権威にひざをかがめなければならないのです。

死んだ者に対する支配は、信者であれ信じない者であれ、それが実際に感じ取られるときにのみ、理解できるものとなります。そしてそれは、亡くなった人々や眠った人々が完全な意識を持っていることを、どうしても前提とします。もし彼らに意識がなく、あるいは意識のない魂の眠りにについているのなら、死んだ者に対するキリストの支配もないことになるでしょう。

キリストの支配に逆らうことができるのは、この人生においてだけです。死の後には、もはや抵抗はありません。死ぬ人はだれでも、生きておられる真実な方に迎えられます。しかし、そこには決定的な違いがあります。失われた者にとっては審判者であるこの主が、信者には、彼らを愛し、彼らのために死んでくださった方として出会ってくださるのです。ですから信者たちは、パウロのように、死によって愛する主のもとに行き、パラダイスで主とともにいる瞬間を、心強く待ち望むことができるのです（ピリピ1:23）。

彼らの希望は死ではなく、キリストの再臨です（テサロニケ第一1:10、4:13-18）。けれども死は、それより前に彼らを主のもとへ連れて行くのです。眠った人たちにとって、キリストの支配は、喜びと平安と言い尽くせない幸いを意味します。主イエス・キリストは、生きている信者たちだけでなく、眠った人たちをも、復活の時までご自分の手のうちに保っておられます。彼らを失うことのないためです。それが御父のみこころだからです（ヨハネ6:39、10:29）。死でさえも、信者を神の愛とキリストの愛から引き離すことはできません（ローマ8:38-39）！

亡くなった信じない者に対するキリストの支配が何から成っているのかについて、聖書は多くを語っていません⁸⁶。ペテロは、亡くなった信じない者がとどまっている場所を「牢獄」と呼ぶことで、一つの手がかりを与えています（ペテロ第一3:19-20）。牢獄には、人々を拘留する権力を持つ人物や権威が前提とされます。この牢獄、すなわちハデスは、栄光を受けた人としてのキリストの権威のもとに置かれました（黙示録1:18）。亡くなった信じない者たちは、キリストによってそこに留め置かれ、大きな白い御座の前でのさばきの日まで（ペテロ第二2:9）保たれているのです（黙示録20:11-15）。

ある者たちは、復活の時まで、自分の主の御前で守られています（アブラハムの懷にいたラザロのように）。ほかの者たちは、大きな白い御座の前で判

86. キリストが支配を引き継ぐ前、シェオル（死者の領域）はどうだったのか、と問うのはもったいなくもなことです。何が違っていたのでしょうか。それ以前にはハデスもパラダイスもなかったのでしょうか。ラザロと金持ちの話（ルカ16章）から、キリストの死と復活の前にすでにハデスとパラダイスがあったことが分かります。キリストの死の後になって初めて、信者たちはキリストのもとにいたと言われています。パラダイスは「アブラハムの懷」と呼ばれており、栄光を受けた人であるキリストの臨在によって特徴づけられてはいません（またそうであることもできません）。それでも、そこは祝福の場所であり、祝福の状態です。これらの信者たちにとって、キリストの死の前と後とで変化があったのかどうかは、私たちには分かりません。けれども、あらゆる時代の亡くなった信者たちは、キリストの死と復活以来、キリストの臨在を体験しています。キリストは死なれたとき、パラダイスにおられたからです。この時以来、「パラダイスにいる」とは、キリストとともにいることを意味しています（ピリピ1:23）。この問いについて、これ以上のことを言うことはできません。聖書がそれ以上語っていないからです。信じない者たちは、（白い御座のさばきまで）イエス・キリストを見ることはありません。彼らはキリストのもとにはいません。けれども、自分の罪の中で死んだすべての死者に対して——私はそう信じていますが——、キリストが今も死者を支配しておられることが、感じ取れる形ではっきり示されることになるでしょう。

決が言い渡されるまで、捕らえられています（ハデスにいた金持ちのように）。

主の支配は、主が死者をその墓から呼び出される復活において（ヨハネ 5:28-29）、一度限りその力を行使し、現されることにとどまるものではありません。それは根本的で永続的な服従を意味しており、それはキリストが神の御座に着かれたときに始まったのです。

まとめとして、死んだ者に対するキリストの支配は、霊魂の人格が死後も意識をもって生き続けることを前提としている、と結論することができます。

理解を深めるための問い

- キリストの支配は、どのように説明し、区別することができるでしょうか。
- 一方では信者において、他方では信じない者において
- 死の前と死の後において
- キリストの支配のもとでの意識的な生活とは、どのようなものでしょうか。

2.8 祭壇の下之魂

ヨハネの黙示録は、被造物に対する神の道の完成を私たちに明らかにするとともに、死後の人間の状態についても教えてくれます。その点でこの書は、新約のほかの部分からすでに導き出されてきたことと、正確に一致しています。

「子羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された人たちの魂が、祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んだ。『聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。』すると、彼らの一人ひとりに白い衣が与えられた。そして、彼らのしもべ仲間と、彼らと同じように殺されようとしている兄弟たちが満ちるまで、もうしばらくの間休んでいるように言い渡された」（黙示録6:9-11）。

この本文を調べるにあたって、私たちは次の問いに絞ることにします。

- 祭壇の下之魂とは誰なのか。
- 魂はどこにいるのか。
- この出来事はいつの時代のことか。

2.8.1 殉教者の魂

ヨハネはここで、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された人たちの魂を見えています。なぜ彼はここで、単に殉教者と言わずに、殉教者の魂について語っているのでしょうか。その違いはどこにあるのでしょうか。

魂とは、殉教者のうち、死後も生き続ける部分です⁸⁷。殺す者たちには、からだを殺す力しかなく、魂を殺す力はありません。主イエスはこの事実を、ご自分の名のために殺される人々への慰めとして与えておられます。

「からだを殺しても、魂を殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、魂もからだも地獄で滅ぼすことができる方を恐れなさい」（マタイ10:28）。

ここで扱われているのは、そのような人々です。彼ら自身は神のことばのゆえに殺されましたが、彼らの魂は殺されませんでした。主イエスはここで、魂とからだをはっきりと区別しておられます。魂は不死であって、殺されることがありえません。それは、殺されることがありうるからだとは対照的です。ですからここで「魂」という概念は、地上のからだにおけるいのちは死によって終わったけれども、途切れることなく——からだの外で——別の世界で続いている、ということを含んでいます。ヨハネが見ているのは魂であって、肉と血から成る地上のからだではありません。からだは地上に残っているからです⁸⁸。

87. 3.2節参照。

88. 黙示録における「魂」という概念の意味は、一様ではありません。ギリシア語 *psyche* は7回用いられています。6:9（殉教者という人格）、8:9、12:11（いのち、すなわち地上の存在）、16:3（海の中のすべての生き物）、18:13、14（人間の魂、魂）、20:4（6:9と同じ意味）。聖書解釈の重要な原則の一つは、ある概念の意味にとっては本文の文脈が決定的だ、ということです。第一の段階として、ほかの記者たちの用法を調べる前に、まずその記者自身がそれらの概念をどのように用いているかを探ることは、当然ながら興味深いことです。

6章9節と20章4節で、魂は明らかに殉教者という人格を表しています。そのことは、彼らが語り、また語りかけられていることから明らかです。そこでは、象徴的なものではない、現実の会話が交わされています。会話は、完全な意識と、活発な精神の能力を前提とします。それらは明らかに、この魂たちに備わっています。こうして殉教者の人格は、死後も、人間の人格にとって本質的なあらゆる特徴とともに、完全に保たれているのです。

ヨハネは魂を見ました。魂がもはやからだを持っていないのなら、ヨハネはいったい何を見たのでしょうか。ヨハネが人間の姿を見て、それを殉教者だと見分けたことは明らかです。（白い）衣を受け取り、それを身に着けることができるのは、人間の姿をしたものだけです⁸⁹。

ですから魂は、地上のからだとも、復活のからだとも（復活はまだ起こっていないからです）区別される「からだ」を持っているのです。それによって私たちが意味しているのは、中間状態の期間のために特別に造られた霊的な特別のからだではなく、個性が保たれていることです。そこには、死後、復活の前にも、その人がその人であると見分けられることが含まれています。魂はその人自身であり、この中間状態において、来世で目に見える姿をもって現れるという仕方です。来世での魂の「外見」は、地上でのからだのあり方と結びついています。そうでなければ、天で互いに見分けることはできないでしょう。この世にいる私たちには、それは想像できません。ただ、ここでは亡くなった人々が完全な意識を持っており、しかも人格として認識されている、ということを確認しておきましょう。

見分けられるということは、変貌の山でのモーセとエリヤの出現においても明らかです（マタイ17:1-8）。そこでこの二人は、人の姿をとって、個人として現れています（そうでなければ、ペテロが彼らのために幕屋を造ろうなどと考えることは、まずなかったでしょう）。その際、モーセとエリヤは復活のからだを持っていなかったことを考慮しなければなりません。復活はまだ起こっていなかったからです。彼らの外見は、死後から復活までの状態に

89. 黙示録は象徴に満ちていますが、すべてを象徴的に解釈しなければならないわけではありません。ここで扱われているのは、殺されて、現実の場所にいる現実の人々です。

相当しているのです⁹⁰。

ここでもう一度述べておきますが、「魂」という概念は、ここではからだの「いのち」と訳すことはまずできません。もしそうなら、ヨハネは祭壇の下に何を見たというのでしょうか。ですから、この文脈で魂という概念が用いられているなら、それは人格が見分けられることに関わっているのです。そのために、ヨハネの黙示録6章9節と20章4節では、まさに「魂」ということばが用いられています。そこで問題になっているのは、からだのあり方にも左右される、この世を去った人々が見分けられることだからです。死後も、人間の人格とその姿、すなわちその人に固有でその人を特徴づける外見は保たれるのです。

まとめましょう。ここで魂とは、死んで、からだの外で、完全な意識をもって（つまり魂の眠りの中ではなく）天にいる人々のことです。

天が魂のいる場所であることは、次の項で示すことにします。

2.8.2 祭壇の下で

魂は「祭壇の下に」いるのが見られます。この表現は、彼らが神のことばのために自分のいのちをささげたという事実と密接に結びついています。彼らが祭壇の「下に」いるという状況は、旧約の似たような事柄を思い起こさせます。そこでは、いくつかのいけにえの動物の血が、青銅の全焼のいけにえの祭壇の土台に注がれました（出エジプト29:12、レビ4:7-34）。魂は血の中にあります（レビ17:10-14）。ですから人間の死は、魂を注ぎ出すこととも言い表されます（詩篇141:8、イザヤ53:12）。新約では、いけにえは神のためにいのちをささげることを表すよく知られたたとえです（ピリピ2:17、テモテ第二4:6、ローマ12:1）。

祭壇は黙示録に8回出てきます。6:9、8:3（2回）、5、9:13、11:1、14:18、16:7です。黙示録では、旧約のように二つの祭壇（青銅の全焼のいけにえの祭壇と香の祭壇）が区別されているわけではありません。もっとも、いくつ

90. この出現が例外であり、したがってそこから、すべての人に当てはまることを導き出すことはできない、ということは承知しています。私はただ、この例外が、聖書のほかのすべての言明に基づいて筋の通った説明ができる、ということを確認しているだけです。

かの箇所では青銅の全焼のいけにえの祭壇（6:9、16:7）を、ほかの箇所では金の香の祭壇（8:3、9:13）を思い浮かべることができます。

祭壇の位置は、非常に正確に定められています。

- それは、天にある神殿の中にあります。「また、もう一人の御使いが、天にある神殿から出て来た。……また、火を支配する権威を持つもう一人の御使いが、祭壇から出て来た」（14:17-18）。
- それは、神の御座の前にあります。「また私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。……また、もう一人の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒の祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった」（8:2-3）。
- それは、神のすぐ近くにいます。「私は、神の御前にある金の祭壇の四本の角から一つの声を聞いた」（9:13）。

これによって、殉教者の魂がどこにいるのかは明らかです。彼らは神のすぐ近くにとどまっているのです。この場所は、主イエスが十字架で死なれた後、御父の御手にご自分の霊をゆだねられたときに行かれたパラダイスに相当します（ルカ23:43、46）。主は神のすぐ近くに、ご自分の御父のもとに行かれたのです。パウロも同じ「天のパラダイス」に引き上げられ、そこで言い表すことのできないことばを聞きました（コリント第二12:2-4）。

祭壇の下之魂たちは何をしているのでしょうか。彼らは、しばらくの間休んでいるように言われました。それは魂の眠りの休みでもなければ、意識のない存在でもありません。休みを心地よい幸いとして味わう、意識のある状態なのです。はっきりとこう書かれています。

「今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。」御霊も言われる。「しかし。彼らはその労苦から解き放たれて休むことができる。彼らの行いが、彼らとともにいつて行くからである」（黙示録14:13）。

この人々にとって、労苦と働きの時は終わりました。彼らは神の御前で休むことを許されているのを喜び味わっています。魂が祭壇と結びついているこ

とから、そこが礼拝の場所であると結論することもできます（黙示録8:3）。聖徒たちは、キリストの御顔にある神の栄光を仰ぎ見ながら、驚嘆して礼拝するのです。

繰り返しましょう。魂は神の御座の前、神のすぐ近くにおいて、自分の働きを終えて休んでいます。彼らは神の栄光を仰ぎ見、神を礼拝しているのです。

ここで私たちは、眠った聖徒たちのいる場所について、新約のほかの言明との際立った一致を確認します。聖書が一つである以上、それは当然予想されることです。眠った聖徒たちはみな、例外なく、主イエスがパラダイスと呼ばれる場所にいます。彼らはキリストのもとにおいて、そこを住まいとしている、つまり主のもとで我が家にいるのです。

2.8.3 この出来事はいつの時代のことか

もう一度、魂とは、まだ死の状態にある亡くなった人々のことだ、という点に立ち返しましょう。彼らは殺された（9節）、彼らの血が流された（10節）、彼らは殺された（11節）と言われています。彼らは祭壇の下にいます。彼らは——まだ生きているしもべ仲間たちのように——「兄弟たち」と呼ばれるのではなく（11節b）、「魂」と呼ばれています。彼らはまだよみがえっていないからです。これらの殉教者の復活は、第五の封印が解かれる時点（黙示録6:9）では、まだ起こっていません。

なぜ私たちは、復活がまだ起こっていないと考えるのでしょうか。彼らは、自分たちに加えられた不正に対する復讐を叫び求めています。この願いは、すぐには聞き届けられません。彼らは、まだ地上にいる兄弟たちもまた殉教の死によってそのいのちを全うするまで、しばらくの間待つように言われます。ご自分のしもべたちの血の復讐（19:2）は、主イエス・キリストご自身が、力ある現れのときに行われます。キリストが現れるときになって初めて、復活が起こるのです（20:4）。ですから、兄弟たちがまだ地上にいて迫害されている以上、それまで復活は起こっていないのです。

こうして私たちは、第五の封印のもとで述べられているわずかな手がかりから、兄弟たちの復活とキリストの来臨はまだ起こっていない、と結論するこ

とができます。6章9～11節の場面は、死後の魂の状態を描いているのです。

2.8.4 復讐を求める叫び

ここでもう一度、魂たちの復讐の要求に立ち返りましょう。死後の意識あるいのちを否定する人々は、これらのことばを本人が語ったものとは理解せず、純粹に象徴的なものとして説明します（創世記4:10、ヤコブ5:4、ルカ19:40参照）。さらに彼らは、キリスト者は決して復讐を叫び求めたりしない、と論じます。キリスト者は、十字架の上でさえ自分を殺す者たちのために祈られたキリストの模範に倣おうとするからだ、というのです。ですから、この血もアベルの血と同じように、象徴的に復讐を求めているにすぎない、というわけです。

魂たちが復讐を求めている、それによって実際にキリスト者の心構えにそぐわないことは、確かに注目すべきことです。けれども彼らがキリスト者の心構えを否定していることになるのは、彼らがキリスト者である場合だけです。この問いの解決は、黙示録を歴史的にどう解釈するかにかかっています。それは何よりも、私たちキリスト者が歴史的に見て、黙示録の初めにいるのか、その中ほどにいるのか、それともすでにその終わりにいるのか、という問いに関わっています。ここで詳しく立ち入ることはできませんが、私の理解による歴史的、あるいは預言的な枠組みを簡単に述べておきます。

ヨハネの黙示録1章19節の区分によれば、七つの教会への手紙は、キリスト教会の初めから終わりまでの歴史を預言的に概観しています。したがって4章以降、新しく生まれたキリスト者たちは、もはや地上ではなく天にすることになります。そこではキリスト者たちが、旧約時代の信者たちとともに、栄光を受けた信者として24人の長老たちの中に描かれています。

キリスト者たちが天にいるようになった後、イスラエル（黙示録7:3-8）と諸国の民（黙示録7:9-12）の両方から、人々が信仰に至ります。ですからそれは、祭壇の下之魂たちはキリスト者ではなく、神の教会にも属していない、ということの意味しています。祭壇の下之魂たちは、教会の携挙の後に宣べ伝えられることになる御国の福音の宣教を信じたのです（マタイ24:14）。彼らはその信仰のゆえに殺されます。彼らの復讐を求める叫びは典型的に旧

約的なものであって（申命32:43、列王第二9:7、詩篇79:10）、キリスト者の約なものではありません。ですから、この復讐の要求を象徴的に理解しなければならぬ必然性はありません。それは、患難時代の信者たちの理解と立場にふさわしいものだからです。

理解を深めるための問い

- 「祭壇の下之魂」についての記述は、どのような点で私たちにとって慰めとなりうるでしょうか。
- なぜここで扱われているのは、亡くなった聖徒たちなのでしょう。
- 彼らはどのようなからだを持っているのでしょうか。

2.9 永遠のいのち

死後、復活において、あるいは永遠において人間がどのような状態にあるのかを考えると、ほとんど必然的に、聖書が「永遠のいのち」⁹¹と呼んでいるものに突き当たります。何と云っても永遠のいのちは、キリスト教のメッセージの比類のない要素として、死と移ろいやすさに向き合っています。もしこのいのちを手に入れることができるとしたら、人間はどれほどの代価を払うでしょうか。それを所有するためなら、何でも差し出すことでしょうか！ 神の御子によって、私たちは実際にこのいのちを受けることができます。しかも代価を払うことなしにです。ですから、永遠のいのちとの関わりでは、信者についてしか語ることができません。神の御子を信じ、御子に服しているのです、信者だけが永遠のいのちを持っているのです⁹²。彼らは、神の恵みの賜物として永遠のいのちを持っています（ローマ6:23）。

信者の死に関して、永遠のいのちはどのような意味を持っているのでしょうか。信者は死において永遠のいのちを手放し、あるいは失い、復活において改めてそれを与えられる、ということがありうるのでしょうか。

91. 新約聖書の中で永遠のいのちについて語られているすべての箇所は、次のとおりです。マタイ19:16、29、25:46、マルコ10:17、30、ルカ10:25、18:30、ヨハネ3:15、16、36、4:14、36、5:24、39、6:27、40、47、54、68、10:28、12:25、50、17:2、3、使徒13:46、48、ローマ2:7、5:21、6:22、23、ガラテヤ6:8、テモテ第一1:16、6:12、テトス1:2、3:7、ヨハネ第一1:2、2:25、3:15、5:11、13、20、ユダの手紙21節。

92. ヨハネ3:16、36、6:40、47、54、10:28、11:25、ヨハネ第一5:13。

この問いを調べる前に、まず、そもそも永遠のいのちとは何なのかをはっきりさせなければなりません。

2.9.1 永遠のいのちとは何か

神のほかには、何ものも、誰も永遠ではありません。神は、初めも終わりもない永遠の方です（創世記21:33、イザヤ40:28、ローマ16:26）。ですから永遠のいのちとは、永遠の神ご自身のいのちです。神の永遠の御子イエス・キリストについては、こう言われています。「この方こそまことの神、永遠のいのちです」（ヨハネ第一5:20）。御子のご自分についてこう証ししておられます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ14:6、11:25参照）。永遠のいのちは、御子のうちに人格化されています。御子のご自分のうちにいのちを持っておられ（ヨハネ1:4）、それゆえ、それを現すことのできる唯一の方でした。「永遠のいのちとは、意識し、考え、意志し、感じ、知り、愛する、神ご自身のいのちである」⁹³。

神のもう一つの特徴が、このいのちと密接に結びついています。神は天に住んでおられます（詩篇115:3、マタイ6:9ほか）。ですから永遠のいのちは、天のいのちです。そこにこそ、このいのちの故郷があります。このいのちは、この被造世界の自然のいのちの領域に属するものではありません。それは、人間の感覚の及ぶ範囲の外にある、別の世界に属しているのです（コリント第二4:18）。

この意味でイエスは、ニコデモに永遠のいのちについて語っておられます。イエスはそれを「天上のこと」と呼んでおられます（ヨハネ3:12）。永遠のいのちとは、父の家でのいのちであり（ヨハネ14:3）、それは御父と御子の交わり（ヨハネ第一1:2-3）と愛（ヨハネ17:24）によって特徴づけられています。

永遠のいのちは、キリストにあって信者に与えられた、天の祝福（エペソ1:3）と霊的な富の豊かさのすべてを集約したものです。信者が御父と御子との交わりの中に置かれていることも、そこに含まれます（ヨハネ第一1:1-4、

93. W.J. アウウェネール (W.J. Ouweneel) *Das ewige Leben*, Neustadt (Ernst-Paulus Verlag), 1980, 9ページ。

ヨハネ14:23、コリント第一1:9)。信者は永遠のいのちを今すでに持っています。将来それを受けることを待っているではありません（ヨハネ3:36、5:24）。

2.9.2 永遠のいのちと不死

この二つの概念は、あたかも永遠のいのちと不死が同じ一つのものであるかのように、しばしば混同されています。それは大きな誤りです。これまで述べてきたことから明らかなように、永遠のいのちは第一に時間の長さやいのちの長さ（量）を含んでいるのではなく、いのちの「質」を言い表しているのです。永遠のいのちの質とは、それが天に住んでおられる永遠の神のいのちである、という点にあります。このいのちは、御子のうちにある神の満ち満ちたご性質のすべてを伴っています。それは、三位一体の神が永遠の昔から住んでおられる父の家で味わわれるいのちなのです。

ですから、永遠のいのちを不死や永遠の存在と同一視するだけでは十分ではありません⁹⁴。もちろん永遠のいのちは不死をも含んでいます。そうでなければ、それは「永遠の」いのちではないでしょう。しかし永遠のいのちの意味は、時間的な側面をはるかに越えているのです。

「永遠のいのち」と「不死」を同じ意味で用いると、永遠のいのちを持っていない信じない者は永遠の存在を持たない、という誤った結論が容易に導き出されかねません。しかし、永遠の存在は、永遠のいのちを持っているかどうかにかかわらず左右されるものではないのです。

もう一度言います。永遠のいのちとは、決して終わることのないいのちであるだけでなく、まったく別のいのちです。このいのちを、信じない者は持っていない。ヨハネは、「[永遠の] いのち」を見ることのない人々について語るとき、そのことをはっきりさせています。そのような人々の上には、神の怒りがとどまります（ヨハネ3:36）。しかし神の怒りは、人間が滅ぼし尽くされ、その結果として永遠の死に至る、ということで尽きるではありません

94. 読者は、永遠のいのちの代わりに不死と読んでみる試みを、自分でしていただくことができます。そうすれば、この二つの概念が入れ替え可能な場合はごくわずかしかならないことに、すぐ気づくでしょう。

せん。神の怒りは責任ある被造物に向けられています。ですからそれは、いつまでも、つまり永遠に存在し続ける人間の上にだけ、いつまでも「とどまる」ことができるのです。この節は、永遠のいのちと永遠の存在との間に大きな違いがあることを明らかにしています。

2.9.3 人はどのようにして神のいのちを受けられるのか

神ご自身が人とならなければ、人間は永遠のいのち、すなわち神のいのちを受けすることはできませんでした。そして、まさにそのことが起こったのです。使徒ヨハネは、キリストご自身であるいのちのことばについて、こう言っています。「このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます」（ヨハネ第一1:2）。

キリストはいのちのことば（logos）です。すなわち、いのちの完全な表現であり、いのちの啓示です。キリストのうちにいのちがあるからです（ヨハネ1:4、14:6）。キリストは人として、ご自分のうちにいのちを持っておられます。ですから、それを人々に分け与えることがおできになるのです（ヨハネ5:26）。人々は死の中に横たわっていたので、ことばは世にいのちをもたらすために人となられました（ヨハネ5:24、エペソ2:1）。霊的な死は罪の結果でした。ですから神の御子は、私たちがいのちを受けられるように、私たちの罪のための宥めのささげ物とならなければならなかったのです（ヨハネ第一4:9-10）。

自分の罪の中で霊的に死んでいた者たちが受けるのは、「霊的な」いのちです（コロサイ2:13）。彼らは、神の御子の名を信じるときに、神の賜物としてこのいのちを受けます（ヨハネ第一5:13）。そのためには、新生による神の介入が必要です。人間はこの誕生を、自分自身の力で引き起こすことはできないからです（ヨハネ1:13）。新生とともに、そのような人々の霊的ないのちの歴史が始まり、それはもはや決して終わることがないのです。

このいのちは彼らの所有となり、彼らはそれを自分自身のうちに持つようになります（ヨハネ6:53、ヨハネ第一3:15）。同時に、彼らはそれを御子のうちに持っている、とも言われています（ヨハネ第一5:11）。彼らは、いのち

の源である御子に依存することによってしか、それを持つことができないからです。御子の外でそれを持つことはできません。こうして彼らは神の性質に「あずかる者」となるのです（ペテロ第二1:4）。ちょうど一枚の葉が、枝についているときにだけ、みずみずしく青々としていられるのと同じです。

2.9.4 信者たちはどのようにして永遠のいのちを持っているのか

信者たちが新生によって受け（ヨハネ3章、ペテロ第一1:23-25）、神の前に持っているいのちは、「永遠のいのち」です。それは、このいのちが、（どのような理由であれ）再び信者から離れてしまいうるような、信者の一構成要素にすぎないものではない、ということを意味しています。それは、場合によっては再び失うこともありうる、高価な贈り物のようなものではありません。永遠のいのちは信者のいのちとなったのであり、それは、キリストにあって神の前にある彼らの状態であり、新しい存在なのです。死者の中から生かされた者としてのこの新しい存在を、パウロは新しい創造⁹⁵、神のみわざ⁹⁶と言いつづけています。新しいいのちを受けることによって、罪人は新しい人となるのです。

これまで述べたことを例えて説明しましょう。私たちは自分の自然のいのち（ギリシア語 *bios*）を、失っても何の影響もない小包のように持ち歩いているわけではありません。それを失う者は死ぬのです。自然のいのちとは、まさに、肉体の死によって終わる私たちの地上の存在全体のことです。私たちが永遠のいのちを持っている仕方も、それと比べることができます。もし永遠のいのちを失うことがありうるとすれば、それによって新しい創造が壊されることになるでしょう。しかし、事実はまさにその逆です。新しい創造は、キリスト・イエスにある神のみわざなので、もはや壊されることはありません。

95. 永遠のいのちは、もちろん被造物ではありません。しかし、信者が今それを持っており、それが信者の新しい状態を特徴づけているという事実は、新しい創造の一部と見なすことができます。

96. コリント第二5:17、ガラテヤ6:15、エペソ2:5、10、4:23-24、コロサイ3:9-11。

地上のいのちには、人間を人格とする意識ある存在が含まれています。それは、自分を表現する能力であり、考え、感じ、認識し、愛する力です。地上のいのちのこうした特徴を、私たちは永遠のいのちに当てはめることができます。自然のいのちが人間を人格とするように、パウロは新しい人格、新しい「私」について語っています。「……もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ2:20）。信者は、自分を新しい人格とするような仕方、新しいいのちを持っているのです。ですから私たちは今、神に倣う者となることができます。神のいのちと神の性質を持っているからです。このいのちの力は聖霊です。聖霊は、永遠のいのちとまったく同じように、私たちに与えられているのです。

この状態とこの存在に対して、死はもはや何の影響も及ぼしません。永遠のいのちは、当然ながら死ぬことがありえないからです。

こうして永遠のいのちの性質と意味と射程を見定めたので、いよいよ最初の問いに取り組むことにしましょう。

2.9.5 永遠のいのちと死

信者が死ぬとき、永遠のいのちはどうなるのでしょうか。眠った人たちにとって、永遠のいのちはどのような意味を持っているのでしょうか。これこそ、死後の信者の状態に関する核心の問いです。

主イエスは、この問いにはっきりと答えておられます。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません」（ヨハネ11:25-26）。主イエス・キリストがご自身の人格においてよみがえりであり、いのちであるという事実は、信者にとって——生きている者にとっても、亡くなった者にとっても——広範囲にわたる祝福された結果をもたらします。

2.9.6 死んだ信者たち

主が次のような方であるというみことばは、死んだ信者たちにとって何を意味しているのでしょうか。

- よみがえりである
- いのちである

彼らは、いつかよみがえるので、生きるのです。それが肉体の復活を指していることは、すでに見てきました。主がよみがえりであるので、復活は彼らの肉体の死の終わりであり、再びいのちに入ることを意味します。これが、主の人格、主の宥めのみわざ、そして主の復活に基づく復活の希望です。永遠のいのちは、からだがよみがえらされることの保証です。そのときには、からだもまた全面的に永遠のいのちにあずかることになるのです。

彼らは死んでも生きる——ここでは、死の直後の信者の状態が言い表されています。信者が死ぬとき、いのちは永遠のいのちのあらゆる特徴（2.9.4節参照）とともに存続します。永遠のいのちは死によって損なわれることがなく、無傷のまま「死の門」を通り抜けていきます。具体的に言えば、新しいいのち、すなわち信者の新しい「私」、新しい人の人格的な意識は、死後も存続し続けるということです。永遠のいのちは、信者と切り離すことのできない形で結びついているのです。

この関連で、永遠のいのちはもはや決して信者から切り離されることがありえない、ということがもう一度明らかになります。信者は死んでも、このいのちの力と意識のうちに生き続けるのです。永遠のいのちによって初めて可能となった御父と御子との交わりは、途切れることはありません。

2.9.7 生きている信者たち

ヨハネの福音書11章26節で主は、ご自分がよみがえりであり、いのちであることが、生きている者にとって何を意味するかを語っておられます。生きている者は、永遠に決して死ぬことがないのです。この真理を、主はほかの箇所でもさらに二度語っておられます。「これは天から下って来たパンです。先祖たちが食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます」（ヨハネ6:58）。また、「だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を見ることがありません」（ヨハネ8:51）。

注目すべきことに、主はヨハネの福音書11章25～26節の前半で、死んだ信者たちについて語っておられながら、後半では、信者はもはやまったく死なないと言っておられます。しかし信者も、信じない者とまったく同じように、今なお死にます。これは矛盾でしょうか。この節の後半では、死が別の側面を持っています。信者の死と信じない者の死は同じものではありません。死ぬ信者は、信じない者が肉体の死の後に向かっていく永遠の死を見ることはありません。肉体の死は、罪人を永遠のさばき、すなわち永遠の死（黙示録20:14）へと導きます。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」からです（ヘブル9:27）。罪人に残されているのは、死とさばきのほかには何もありません。彼にはもはや何の希望も助けもありません。これが信じない者の死です！

罪人のこの死を、信者が死ぬことはありません。人間に対する罪の作用（すなわち死）は、キリストの復活によって、信者にとっては完全に取り除かれています。信者は、今すでに、もはや死ぬことのない新しい性質を持っているのです——たとえまだ肉体の死を通らなければならないとしてもです。それは、神のいのちの力によって死に打ち勝たれた方のいのちです。主がよみがえりであるので、それは、死がもはや何の力も持たないいのちなのです。

信者は、生きていても死んでいても、**いつも**永遠のいのちの力と意識のうちに生きています。ただからだが、死によって一定の期間、そこから締め出されているのです。

まとめ——永遠のいのちは、信者が置かれる三つの異なる時期のすべてにおいて、信者の所有です。それは地上の生涯の間、信者が新しく生まれたときに始まります。次に、それは死後も信者の所有です。そして最後に、それは復活における永遠の完成へと至るのです。

2.9.8 永遠のいのちの将来の姿

使徒パウロ（ローマ5:21および6:22）も共観福音書（マタイ18:8、25:46、マルコ10:30、ルカ18:30）も、永遠のいのちについて、ヨハネの場合のように現在の所有としてではなく、将来の姿において語っています。

パウロは、永遠のいのちを完全に所有し味わうことを、復活における朽ちないことと結びつけています。彼は、「忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと朽ちないもの〔復活におけるからだの朽ちなさ〕を求める者」への報いは永遠のいのちである、と言っています（ローマ2:7）。パウロにとって、完全な意味での永遠のいのちとは、栄光のうちにある復活のキリストと同じようになることです。それこそが、永遠のいのちがその故郷とする雰囲気なのです。

地上に生きている私たちは、今はまだ、死ぬべきからだのうちに永遠のいのちを持っています。復活において、私たちは「永遠の住まい」を着せられます（コリント第二5:1）。それは、永遠のいのちに、すなわち完成の状態に完全にふさわしいからだです。ヨハネもまた、永遠のいのちのこの側面を知っています⁹⁷。

永遠のいのちの希望と期待（テトス1:2、3:7、ローマ6:22）とは、天のこと、父の家のことを、間もなく、そのいのちに固有の環境と雰囲気の中で体験し、味わうことができるということにあるのです。

2.9.9 聖霊

聖霊は私たちに与えられています⁹⁸。ここではこれ以上詳しく立ち入りませんが、イエスが言われるとおり、聖霊はいつまでも私たちとともにいてくださる、ということを指摘しておきます。

「……そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、ま

97. ヨハネ4:36、12:25、ヨハネ第一3:1-2参照。

98. ヨハネ7:39、14:16、15:26、使徒1:8、19:2、ローマ8:9、11、14-16、コリント第一2:12、3:16、6:19、コリント第二1:22、エペソ4:30、テサロニケ第一4:8、テモテ第二1:14、ヤコブ4:5。

た、あなたがたのうちにおられるようになるのです。」(ヨハネ14:16-17)。

したがって神の御霊は、死においても私たちとともにおられます。そのときにも、御霊は私たちの力なのです。御霊は永遠のいのちと同じように、この中間の時期において、私たちが完全な意識をもち、完全な力と知識をもってイエスのもとにいたことの保証です。まさにそのために、神の御霊は保証として、すなわちこの瞬間に向けての担保として、私たちに与えられているのです。

「そうなるのにふさわしく私たちを整えてくださったのは神です。神はその保証として御霊を私たちに下さいました」(コリント第二5:5)。

この人生において神から私たちに与えられているものは、死においても私たちのものなのです！

2.9.10 結論

最後に、「死後の信者の状態とはどのようなものか」という全体にかかわる問いについて、次のことを確認することができます。永遠のいのちも聖霊も、信者が死後、キリストとの意識ある交わりのうちに生き続けることの保証なのです。

信者のうちにあるいのちは死ぬことはありません（外なる人が死ぬときでさえそうです）。信者はそれを、永遠に生きておられる御子のうちに持っているからです。また信者は、もはやそれを失うこともありえません。もし失うなら、神から生まれた者として持っている自分の存在全体を失うことになってしまうからです。この新しい存在は神のみわざであり、新しい創造です。それは壊されることもなく、決して終わることもないのです。

同じように、私たちに与えられた聖霊のあらゆる特徴が、死においても私たちのあり方を決定づけるのです。

理解を深めるための問い

- 「永遠のいのち」と「不死」を区別してください。

- 信者の死は、信じない者の死とどのように違うのでしょうか。そのために、ヨハネの福音書11章26節のことばに注目してください。
- 中間状態にとって、聖霊はどのような意味を持っているのでしょうか。

2.10 捕らわれている霊たち

「捕らわれている霊たち」とは、私たちのテーマと直接関わりのある概念です。この概念は聖書の中に一度しか出てきません。しかもペテロの手紙第一だけです。まさにそこに、それを正しく理解することの難しさもあります。ペテロは二番目の手紙の中で、パウロの手紙のいくつかは理解しにくいと書いています（ペテロ第二3:16）。しかしここでは、それはおそらく彼自身の手紙にも当てはまるでしょう。霊たちが挙げられている箇所（ペテロ第一3:19-20）は、新約の中でもっとも難しい箇所の一つだからです。そのため教会の歴史の中で、非常に多様な解釈がなされてきましたし、今日でもなされています⁹⁹。

聖書解釈のもっとも重要な原則を挙げているのは、ペテロ自身です。すなわち、「聖書のどんな預言も勝手に解釈するものではない」ということです（ペテロ第二1:20）。ですから私たちはこの本文も、すでに2.1～2.9節で扱ってきた新約のすべての聖書箇所の光に照らして調べることにします。それらの箇所は、死と復活の間の、正しい者と正しくない者の両方の状態について、包括的な姿を私たちに示してくれました。

ペテロは散らされて寄留している人たちに宛てて書いています。

「キリストも一度、罪のために苦しみを受けられました。正しい方が正しくない者たちの身代わりになられたのです。それは、あなたがたを神に導くためでした。キリストは肉においては死に渡され、霊においては生かされて、その霊において、捕らわれている霊たちのところに行き行って宣べ伝えられました。かつてノアの時代に、箱舟が造られてい

99. これについては、ウィリアム・ケリー（William Kelly）*Christ Preaching to the Spirits in Prison*, The Bible Treasury, Vol. 9, 1872、およびユルゲン・クベルスキ（Jürgen Kuberski）*Eine Höllenfahrt Jesu?*, Bibel und Gemeinde, 2/1988、およびH.L. ハイコープ（H.L. Heijkoop）*Der erste Brief des Petrus*, Neustadt (Schriftenverlag Ernst Paulus) 1978を参照。付録も参照してください。

た間、神が忍耐して待っておられたときに従わなかった霊たちのことです。その箱舟に入って水を通して救われたのは、わずかな者たち、すなわち八つの魂でした」(ペテロ第一3:18-20)。

2.10.1 ペテロの意図

ペテロにとって問題なのは、死後の状態とは何かという問いではありません。誰も彼にそのことを尋ねてはいませんでしたし、反駁すべき誤った教えを持ち込んだ者もいませんでした¹⁰⁰。ペテロが手紙を書き送った信者たちは、イエスのゆえに激しい迫害にさらされていました¹⁰¹。彼は、この困難な状況の中にある彼らを励まそうとしたのです。そのために彼は、彼らの状況を、洪水前の時代のノアの状況になぞらえました。ノアは家族とともに、わずか八つの魂という少数派をなしていました。主のことばに従って、彼は息子たちとともに乾いた陸地で船を造りました。ほかには誰も彼に従いませんでした。ノアが神を見なかったのと同じように、信者たちもキリストを見てはいませんでした(1:8)。それは信仰の事柄だったのです。ノアの模範、そしてご自分の御霊によるキリストの働きと臨在が、彼らを奮い立たせて、たとえ自分たちのメッセージが拒まれ、不当に苦しめられても、耐え忍ぶようにさせるはずでした。

2.10.2 この箇所についての私の説明

苦しみを受けるキリストは、キリストと同じように善を行って苦しまなければならなかった信者たちの模範です。この節で扱われているのは、罪のためのキリストの苦しみです。正しい方であるキリストは、正しくない者たちを神に導くという目的をもって、彼らのために死なれました。これは、信者たちが耐え忍ぶ必要のなかった、キリストの宥めの苦しみです。キリストの宥めのみわざは、キリストに死をもたらししました。キリストは「肉においては死に渡され」たのです。しかしそれで終わりではありませんでした。キリス

100. パウロはたとえば、コリント人への手紙第一15章でそれを行い、復活の否定に立ち向かっています。

101. ペテロ第一1:6、2:12、19-21、3:14、17、4:1、4、12、16、5:8-9。

トは神の御霊の力によって死者の中からよみがえられたからです（ローマ 1:4、8:11）。

この霊において——地上にいる人間としてではなく——キリストは行って、かつて従わなかった捕らわれている霊たちに宣べ伝えられました。聖霊、言い換えればキリストの御霊（ペテロ第一1:11）が、義を宣べ伝えたノア（ペテロ第二2:5）のうちに働いておられたのです。ノアと同時代の人々への宣教は、箱舟が造られている間ずっと続けました。彼らのうちの誰一人として悔い改めず、皆、その不従順のゆえに大洪水の中で死にました。キリストの御霊は今、同じ目的をもって、ペテロが手紙を書き送った信者たちのうちに働いておられました（ペテロ第一4:14、1:11参照）。彼らを通して神の恵みの証しを広めるためです。

ペテロは、ノアの時代に死んだ人々を「捕らわれている霊たち」と呼んでいます。彼らは福音を信じず（ペテロ第一4:6）、箱舟が造られていた長年にわたる神の忍耐を、むなしく過ぎ去らせてしまいました。ですから死において彼らのさばきが始まり（ヘブル9:27）、彼らは苦しみのある場所であるハデスにいることになるのです（ルカ16:23）。ここではそれが牢獄と呼ばれています。このことにも、信者たちにとっての励ましがあります。彼らが弁明すべきであった彼らのメッセージと希望（ペテロ第一3:15）は、まったく正しいものでした。彼らのメッセージに従わなかった人々は皆、同じ場所に行くことになります。彼らにも、死後には牢獄が待っていました。そこが、復活の日まで、そして大いなるさばきの日まで、彼らのいる場所となるのです。ペテロがその少し後で書いているとおりです。

「……彼らは、生きている者と死んだ者をさばこうとしておられる方に、申し開きをすることになります」（ペテロ第一4:5）。

ノアは箱舟の中で、大洪水を通して救われました。それに対応する型であるバプテスマが、今も信者たちを救います。信者たちもまた、ノアと同じように、地上で新しい立場に移されるからです。この世と同時代の人々から切り離されて（使徒2:40-41）、彼らは今や、すべての権威を与えられている、復活して栄光を受けたキリストに仕えたのです。

以下の見出しのもとで、私が聖書的ではないと考えるいくつかの概念と説明について、さらに詳しく取り上げます。

2.10.3 肉においては死に渡され、霊においては生かされた

この二つの表現については、すでに上で説明しましたが、ここではさらにいくつかの側面を挙げておきます。「肉においては死に渡され」という表現については、異なる見解はありません。これがキリストの宥めの死を指していることは疑いありません。キリストの死は、その後に来たもの、すなわちキリストの復活と対比されています。復活は「霊においては生かされた」と言い表されています。「生かされた」は、ローマ人への手紙4章17節、8章11節、コリント人への手紙第一15章22節、36節、45節と同じ表現です。しかし復活とは、主の霊が「生かされること」ではなく、からだの復活を意味しているのです（ヨハネ2:19-22）。

復活において働いておられるのは、神の聖霊です。聖霊については、「いのちを与えるのは御霊です」と言われているからです（ヨハネ6:63）。パウロは、主の復活、そして信者の復活と結びつけて聖霊について語っています。

「……聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです」（ローマ1:4）。

「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだも生かしてください」（ローマ8:11）。

主イエスのうちには、神の満ち満ちたご性質が、すなわち三位一体の神が、形をとって宿っておられます（コロサイ1:19-20、2:9）。神の三つの位格すべてが、贖いのみわざに、したがってキリストの復活にも関わっておられたのです。

この霊においてキリストは行って、宣べ伝えられました。ですから、キリストはそれを個人として、つまり肉と血を持つ人間として行われたのではなく

ません。それはキリストの御霊¹⁰²でした。この御霊は、キリストが人となれる前にすでに旧約の預言者たちのうちに働いておられ（ペテロ第一1:11）、今も福音の宣教の中で働いておられ、そこでは「聖霊」と呼ばれています（ペテロ第一1:12）。

ノアの時代には、神の御霊はノアを通して働かれました。ペテロはノアを「義を宣べ伝えた者」と呼んでいます（ペテロ第二2:5）。モーセもまた、洪水によるさばきとの関わりで、ノアの時代における神の御霊の働きについて語っています（創世記6:3）。新約にも並行する箇所が見いだされます。そこでは、キリストが平和を告げ知らせることによって宣べ伝えられた、と言われています（エペソ2:17）。しかしキリストはそこでも、それをご自身で直接にではなく、ご自分のしもべたちを通して行われたのです。キリストは天に上っておられ、もはや個人としてはその場におられなかったからです。

2.10.4 捕らわれている霊たちへの宣教

さまざまに異なる解釈の間でも、キリストはご自分の死と復活の間の短い期間に、ハデスにいる霊たちに個人として宣べ伝えた、という点については、広く意見が一致しています。このことには、広範囲に及ぶ問いが結びついていきます。

2.10.5 宣教の内容

説明が多種多様であることから、宣教の内容、つまりそのメッセージは分かっていることがうかがえます。それでも私には、人々を悔い改めに導いて救われるようにすることを目的とした宣教しか考えられません。それが一般に「宣教」の意味です¹⁰³。この宣教を定義しているのはペテロ自身です。彼は、死んだ人々にも福音が宣べ伝えられた、と言っています（4:6）。です

102. 「キリストの御霊」または「イエスの御霊」という表現は、使徒の働き16章7節、ローマ人への手紙8章9節、ピリピ人への手紙1章19節、ペテロの手紙第一1章11節に出てきます。「主の御霊」は、使徒の働き5章9節、8章39節、コリント人への手紙第二3章17節に出てきます。いずれの箇所でも、それは神の聖霊です。

103. たとえば、マタイ26:13、コリント第一1:23、ガラテヤ2:2、ピリピ1:15。

から、ハデスでのそのような宣教は、亡くなった人々に悔い改めの二度目の機会が与えられたということを意味することになるでしょう。

宣教の内容についての説明は、キリストの勝利の宣言から、福音の宣教にまで及んでいます。亡くなった人々にキリストの勝利が告げられるという考えは、聖書のどこにも述べられていません。またそれは、あまり意味をなしません。いずれにせよ、すべての人が——キリストの死の時点までに死んだ人々だけでなく——キリストの支配を認める時がやって来るからです。パウロは、地上のもの（すなわち生きている者）も、地の下のもの（すなわち死者）も、その中に含まれていると言っています。

「……それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が『イエス・キリストは主です』と告白して、父なる神に栄光を帰するためです」（ピリピ 2:10-11）¹⁰⁴。

キリストの死と復活の間に、捕らわれている霊たちに悔い改めを呼びかける宣教がなされたという考えは、さらに次の理由から退けられなければなりません。

- この見方を支持するような手がかりは、聖書のほかの箇所にはありません。むしろ逆に、キリストご自身がルカの福音書23章43節で言われたとおり、キリストはハデスではなく、信者たちのいるパラダイスへ行かれたのです。
- ペテロは、キリストが死なれた後に生かされた、と言っています。彼は、死と復活の間に何が起こったかについては語っていません。
- 生前に神の忍耐を経験しながらそれを拒んだとはっきり言われている、まさにその人々に、もう一度宣べ伝えられるということは理解できません

104. ピリピン人への手紙2章11節からは、それがいつ起こるのか、また挙げられているすべての者にとってそれが同じ時点なのかどうかは読み取れません。しかし、ほかの聖書のことばと照らし合わせると——とりわけさばきの座の場面から——、それは大きな御座の前での生きている者と死んだ者のさばきのことであり、そのさばきがすべての者に同時に臨むのだ、と導き出すことができます。この意味で、主イエスも「さばきの日」について語っておられます（マタイ10:15、11:22、24、ルカ10:14）。

ん。聖書の証言は、死後にはもはや悔い改めの可能性がないことを明確にしています。

- それは、キリストが洪水で死んだ人々にだけ宣べ伝えられた、ということの意味することになるでしょう。ここで問題になっているのは、明らかにこの人々です。では、その前やその後に死んだ人々、全体としてはこの人々よりはるかに多いはずの人々はどうなのでしょう。それならば、死んだすべての人が宣教を聞くことができるはずではないのでしょうか。

そのような考えも意味をなしませんし、死後の悔い改めの可能性を開くことになります。しかしそれは誤りであり、聖書の教えではありません。ハデスについてのルカの福音書16章のイエスの教えから、死後にはもはや何の変化もないことがはっきりと分かります。越えることのできない大きな淵が、祝福の場所と苦しみ of 場所を隔てているのです。

2.10.6 魂と霊

箱舟の中で救われた八人の人間は、「魂」と呼ばれています。ペテロは第一の手紙で「魂」ということばを6回用いています¹⁰⁵。5回は「魂」を信者の本質的な構成要素の意味で用いており、一度だけ——私たちの本文で——人間全体を指して用いています。もし彼がここで「魂」の代わりに「人々」と言ったとしても、意味は同じだったでしょう。聖書では「魂」という概念がしばしばそのように用いられているからです¹⁰⁶。「魂」のこの意味は、今日の私たちの言葉づかいにも見いだされます。

では、「魂」がノアの時代に地上で生きていた人間を指しているのだとすると、牢獄にいる「霊たち」とはどういう意味なのでしょう。「霊たち」という概念は、死んだ人間を表しているのでしょうか。はっきり確認できるのは、「魂」とは明らかに対照的に、「霊」は地上で生きている人間について用いられることがどこにもない、ということです。もちろん「霊」ということばは、人間と結びつけて非常によく用いられます。しかしその場合には、魂の場合と同じように、もっぱら人間の本質的な構成要素として用いられてい

105. 1:9、22、2:11、25、3:20、4:19。

106. たとえば、創世記12:5、出エジプト1:5、民数31:35、使徒2:41、7:14。

るのです。それに対して「霊」ということばは、御使いについて用いられます。神に仕える御使いについても、悪霊、すなわち墮落した御使いについても用いられるのです（たとえば、マタイ10:1、黙示録12:8）。

2.10.7 この霊たちは墮落した御使いなのか

しかし、これによって、ここで問題になっているのは今や最も深い淵に閉じ込められている御使いたちだ、という見解が根拠づけられるわけではありません。¹⁰⁷ この見解は、次の聖書箇所を拠り所としています。

「神は、罪を犯した御使いたちを容赦せず、最も深い淵〔ギリシア語 Tartarus〕に投げ落として暗闇の鎖に引き渡し、さばきのために閉じ込めておかれたのです……」（ペテロ第二2:4、ユダ6参照）、

そして、これを創世記6章2～4節と結びつけるのです。

「……神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、その中から自分が選んだ者を妻とした。すると主は言われた。『わたしの霊は、いつまでも人と争うことはない。人は肉にすぎないのだから。人の齢は百二十年としよう。』そのころ、またその後も、地には巨人たちがいた。神の子らが人の娘たちのところに入り、彼女たちが彼らに子を産んだころのことである。」

人々は、ユダが書いている鎖の中に、ペテロが書いている牢獄と並行するものを見ています。創世記6章の出来事、すなわち御使いたちが女たちと結びついた出来事は、疑いなくノアの時代のことを指しています。キリストは、墮落して今は縛られ、さばきのために閉じ込められているこの御使いたちに、何らかのメッセージを届けたのだ、というのです。しかし、それが恵みと救いのメッセージであることはありません。ヘブル人への手紙2章16節によれば、主は御使いたちを解放するために彼らを助けられるのではないからです。

107. ケネス・S. ウェスト (Kenneth S. Wuest) *First Peter in Greek New Testament*, Michigan (Eerdmans Publishing), 1942を参照。

聖書の中には、キリストが御使いたちにゴルゴタでのご自分の勝利を告げ知らせたことを示すものは何一つありません。それに、そのようなことには何の意味也没有ありません。御使いたちには、すでに定まっているさばきの日があるからです。キリストがその審判者となられます（コリント第一6:3参照）。ですから、そのときにはいずれにせよ、キリストの権威と偉大さが繰り広げられることになるのです。

結局のところ、キリストの力を宣言する必要などありません。墮落した御使いたち、すなわち悪霊や汚れた霊たちは、ゴルゴタ以前からキリストの力を知っていたからです。しかもさばきについても知っていて、主の力を恐れていました（ルカ8:27-33、マタイ8:29）。悪霊どもは、キリストから告げ知らされるメッセージがなくても、信じて身震いしているのです（ヤコブ2:19）。

創世記6章からは、御使いたちが女たちと結びついたのはノアの時代より前であったことが読み取れます。したがって、この出来事は必ずしもノアの時代に起こったわけではありません。

一見すると関連があるように見えても、この箇所の「霊たち」を御使いと理解するのは誤りです。ここでもまた、文脈と聖書全体の証言に注意を払わなければなりません。

2.10.8 霊——死んだ人間

ここではノアと同時代の人々が「霊たち」と呼ばれています。彼らは今、すなわちこの手紙が書かれた時点で、牢獄にいたからです。「牢獄」ということばによって、彼らの不従順の結果が暗示されています。彼らのさばきには終わりがありませんからです。死後の彼らの存在は、肉と血から成るからだの中にあるではありません。パウロの表現を借りれば、彼らは「からだを離れて」いるのです（コリント第二5:8）。ですから彼らは霊たちと呼ばれているのです。ここで霊たちと呼ばれている人々を指す別の呼び方を、ペテロは数節後で用いています。その節も先に引用した節に属しており、実はこの思考の流れの締めくくりとなっています。

「そのためにこそ、死んだ人々にも良い知らせが宣べ伝えられたのです。それは、彼らが肉においては人間に従ってさばかれても、霊においては神に従って生きるためでした」（ペテロ第一4:6）。

彼らは今——靈魂という点から見れば——捕らわれている霊たちです。からだという点から見れば、彼らは今、死んだ人々です。どちらの描写も同じ状態を説明していますが、二つの側面から説明しているのです。一方はからだの側面（「死んだ人々」）であり、もう一方は靈魂の側面です。良い知らせが宣べ伝えられたのは、当時すでに死んでいた人々に対してではありません。今は死んでいるけれども、当時は生きている人間としてそのメッセージを聞き、その後、洪水で滅びた人々に対してなのです。¹⁰⁸

これが「霊たち」ということばの意味です。それは——原語の知識がなくても——文脈から見て取ることができます。

霊たち、すなわち死後の人間について語られている箇所が、もう一つあります。

「……そうではなく、あなたがたが来ているのは、シオンの山、生ける神の都である天のエルサレム、無数の御使いたち、すなわち全体の集い、天に名が記されている長子たちの集会、すべての者の審判者である神、そして全うされた正しい人たちの霊たちなのです」（ヘブル12:22-23）。

このすばらしい列挙の最後に、この関連で私たちの関心を引く概念が出てきます。「全うされた正しい人たちの霊たち」です。¹⁰⁹ ですから、ここで霊た

108. 死を靈的に解釈する注解者もいます（エペソ2:1、5、コロサイ2:13、ルカ15:24、32参照）。しかし私の考えでは、靈的な死が旧約で言及されたり、旧約時代の人々に当てはめられたりすることは決してありません。

109. ペテロの手紙第一とヘブル人への手紙12章の概念の違いは、ペテロにおいては「霊たち」が人格全体を指しているのに対し、ヘブル人への手紙12章では霊たちが信者の本質的な構成要素として見られている、という点にあります。これによって、霊のほかにはからだがあることが明らかになります。基本的には、これらの概念は同じ意味を持っています。これとの関連で、「証人たちの雲」という概念を指摘しておきます。証人たちは、競技場のように信仰の競技者を取り囲んでいます。証人たちとは、ヘブル人への手紙11章に出てくる信仰の英雄たちで、今は天のパラダイスにいます。彼らが競技の観客のようにキリスト者たちを見ているのだ、とほのめかされてきました。私の考えでは、それはありえません。そうだとすれば、彼らは私たちの生活全体を、私

ちはからだから切り離されていて、長子たちの集会の一部を成しています。この概念が指しているのは、この人々だけです。イエスの血によって義と認められたのは、罪人たちだけだからです。御使いたちにはイエスの血は適用されません。この霊たちが御使いであることはありません。御使いたちは、この列挙の中で別に挙げられているからです。

2.10.9 牢獄

この牢獄は本当にハデスなのでしょうか。この問いに答えるのは簡単ではありません。霊たちと結びついた「牢獄」という概念は、聖書の中に一度しか出てこないからです。

「牢獄」ということばは、ここで、新約のほかの箇所から私たちが知っているのと違う意味で用いられているわけではありません。¹¹⁰ 罪を犯した者は拘留され、罪の問題が明らかにされないうちは、この場所¹¹¹から逃れることができません。「牢獄」という概念は、正しくない者たちが死後、さばきの日まで拘束されているということで、うまく説明できます。ペテロ自身が、二番目の手紙の中でそのことにも触れています。

「主は、敬虔な者たちを試練から救い出し、正しくない者たちを、罰を受けるように、さばきの日まで**閉じ込めておく**ことを心得ておられるのです」（ペテロ第二2:9）。

この真理は、さばきの審理までは未決勾留があるという、今日の私たちの理解とも一致しています。この説明は、私たちのテーマとの関連ですでに考察してきたほかのすべての本文と、決して矛盾しません。むしろそれは、死後の正しくない者たちの分についての全体像を完全なものにするのです。¹¹²

ある種の御使いたちについても、彼らが「牢獄」の中に拘留されているということが当てはまります。彼らはそこで、さばきの日まで捕らえられていま

的な事柄までも見ることになってしまうでしょう。聖書はこれについて沈黙しているので、私たちは確かなことを何も言うことができません。

110. たとえば、マタイ14:10、ルカ3:20、使徒5:19、コリント第二6:5。

111. もしかすると、使徒の働き1章25節にも、この場所を指し示すものがあるかもしれません。

112. 牢獄にいる者たちが完全な意識を持っていることは、言うまでもないように思われます。眠っている者を牢獄に閉じ込めておく必要はないからです。

す。判決が言い渡される日まで、彼らは獄の中にいるのです。

「牢獄」ということばは、「罪の牢獄」という意味でも理解されます。イザヤ（42:7、49:9、61:1）とルカ（4:18-19）は、この表現をそのように用いています。しかし私の考えでは、この用い方はここでは不可能です。霊たちは生きている人間なのではなく、かつて生きていた人間だからです。霊たちとの関連で罪の牢獄が語られているとしたら、それは、彼らが赦しを得ていないので、今や自分の罪に縛られている、という意味においてだけでしょう。

2.10.10 旧約の信者たちはシェオルから解放されたのか

同じくかなり広く行き渡っている見解があります。それによれば、シェオルにいた旧約の信者たちは、苦しみのある場所か、あるいは至福とは呼べない一種の待機状態にあったということです。そしてキリストが死後この場所を訪れたとき、信者たちを解放してパラダイスに導いた、あるいはご自分がそこにおられることによって、この場所をパラダイスに変えた、ということです。

この見解の根拠となっているのは、とりわけ旧約における「シェオル」という概念の意味です。シェオルは、とりわけ、死者たちが行き着く否定的で暗い場所です。それに対してパラダイスは、旧約では死んだ信者たちの場所として言及されていません。しかし、それが啓示されていなかったという事実は、パラダイスがなかったことを意味しません。アブラハムは死後、不安と恐怖に陥ったとでもいうのでしょうか。彼はすでに、堅い基礎の上に建てられた都、神が設計し建設された都を待ち望んでいました。そして、この世にはない天の故郷を待ち望んでいたのです（ヘブル11:10、14、16）。

同じように、こう問わなければならないでしょう。キリストはまだ来ておられなかったのだから、アブラハムは罪の赦しをそもそも知らなかった、あるいは持っていなかったのでしょうか。¹¹³

113. ローマ人への手紙3章25～26節に基づいて、神は旧約の信者たちに対して、イエスのいけにえを見越して、いわば前もって、罪を負わせなかったと考えることができます。したがって、アブラハムが死後に何らかの苦しみや、ましてや浄化を経験しなければならない理由もありませんでした。

シェオルからの解放があったのかという問いに、反問だけで答えるつもりはありません。しかし、このことについて論じることのできる聖書本文はありません。私の考えでは、この考えには意味がありませんし、キリストのそのようなわざをほんのわずかでもほのめかしている並行箇所も、聖書にはありません。

アブラハムは先祖たちのもとに集められました。¹¹⁴ 彼は来世で先祖たちに再会したと考えてよいでしょう。彼が全能者として知っていた神は、生きている者の神です（ルカ20:38）。そこから私たちは、神の友と呼ばれるアブラハム（ヤコブ2:23）が今、至福のいのちを送っていて、そのいのちは復活まで解放も改善も必要としない、と結論づけることができます。

主イエスが至福の場所について「アブラハムの懷」と語られたとき、主は、ユダヤ人たちがすでに知っていたか、あるいは十分に理解できる表現を用いられました。それは、正しい人たちが死後に行く祝福の場所でした。そこから、キリストが死後——アブラハムのためにも——パラダイスへの扉を開かれるまでは、死の中にある旧約の信者たちにとってアブラハムが中心であった、と導き出すことはできません。パラダイスは——あえてこう言えば——あらゆる時代の信者たちに開かれていました。パラダイスは常に存在していたのです。それは、天の御座の前にある神の臨在だからです。

2.10.11 イエスの地獄降下？

主イエスが地獄に降られたのかという問いは、実はもう答える必要がありません。すでにさまざまな側面から答えてきたからです。いくつかの信仰告白は——それ自体も何度も変更を経てきたのですが——、イエスを、地獄に、あるいは死者の領域に降った方として告白しています。ルター（Luther）をはじめとする人々は「ハデス」を「地獄」（Hölle）と訳しています。そのために、キリストの「地獄降下」という考えが生まれたのです。

「地獄降下」を根拠づけるために、たとえばエペソ人への手紙4章8～10節が挙げられます。

114. 創世記25:8、民数27:13のモーセも参照（1.5.3節参照）。

「それで、こう言われています。『彼は高い所に上ったとき、捕虜を捕らえて連れて行き、人々に賜物を与えた。』——この『上った』ということは、彼が地の低い所にも降ったということではなくて何でしょうか。降った方ご自身が、すべてのものを満たすために、すべての天よりも高く上った方なのです。」

ここで問題になっているのは、イエスの高举と、その卑下の深さです。主の卑下の最も深いところは死でした。神である御子が、人として地の^上におられたことが、すでにへりくだりでした（ピリピ2:5-11参照）。しかし主は、私たちのために死にまで降り、葬られさえました。それが「地の低い所」ということで意味されていることです。次の節もそのことを語っているとおりです。

マタイの福音書12章40節で問題になっているのは、死者の領域での滞在ではなく、肉体の死です。

「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中心にいることになるからです。」

使徒の働き2章27節にある詩篇16篇10節の引用から、主イエスはハデスにおられたのだ、という結論に至る人がいるかもしれません。

「……あなたは私の魂をハデスに捨て置かず、あなたの敬虔な者が朽ち果てるのをそのままにはなさらないからです。」

しかし、この節は、主が実際にハデスにおられたことの証拠ではありません。これについては、2.1.8節の説明を参照してください。（付録も参照してください）

2.10.12 結論

主イエスが死後、ハデスに行かれたのではなく、ましてや地獄に行かれたのでもないことを、私は繰り返し強調せずにはられません。主はパラダイスに行かれたのです。十字架上の強盗にご自分で言われたとおりです。

そこで宣べ伝えることを目的としたハデスへの降下は、聖書の中にほかの手がかりを見いだせません。さらに、そこでの宣教は、その内容が何であったにせよ、意味をなしません。死んだ者はすべて、墮落した御使いたちも含めて、悔い改めの機会のないまま、自分たちのさばきまで閉じ込められています。そのさばきのときに、彼らはキリストの審判者としての力に直面するのです。

悔い改めない罪人の運命は、信者たちにとって、困難があっても黙ることなく、ノアのように義を宣べ伝える者であるようにとの励ましとなります。

理解を深めるための問い

- ペテロの手紙第一3章の「霊たち」とは誰でしょうか。
- 誰が彼らに宣べ伝えたのでしょうか。また、それはいつ起こったのでしょうか。
- 主イエスは死から復活までの間、どこにおられたのでしょうか。また、どこにはおられなかったのでしょうか。
- それはなぜでしょうか。
- ペテロはこの箇所を用いて、当時の信者たち（そして今日の私たち）をどのように励ましているのでしょうか。

2.11 死の際の体験と臨死体験

聖書の証言によって、私たちは来世について明確な姿を得ました。しかし今日、この姿は、誤った神学的・教理的見解だけでなく、死に近い状態での体験、すなわち死の際の体験や臨死体験とも向き合わされています。それは、「臨床的には」死んでいて蘇生されたものの、「生物学的には」死んでいなかった人々のことです。彼らは、死と生の間の領域の「どこか」にいました。私がこの考察の中で常に前提としてきた意味での死、すなわち取り消すことのできない最終的なものとしての死においては、彼らは死んでいなかったのです。

臨床死とは何を意味するのかをよりよく理解するために、ある医師のことが引用します。「臨床死とは、一つには呼吸停止、すなわち周囲の空気から

の酸素の取り込みと周囲への炭酸ガスの排出が完全に止まることを意味する。さらにそれは心停止、すなわち血液循環が完全に麻痺することを意味する。臨床死に至ると、心電図の画面にはいわゆるフラットライン、つまり心臓の波形がまったく現れなくなる。臨床死は、非常に限られた時間内であれば、たとえば非常に強い電気ショックによって元に戻すことができる。蘇生に成功しなければ、数分後に『生物学的な死』が訪れる。生物学的な死とは、個々の臓器系、とりわけ脳がその機能を停止することである……生物学的な死の境界を越えると、通常はもはや戻ることはない。」¹¹⁵

生と「最終的な」死の間のこの領域で、いくつかの現象が起こってきました。これから私はそれを取り上げたいと思います。¹¹⁶ ここで問題になっているのは、復活によっていのちに戻った人々ではなく、ごく短い時間だけ**臨床的に**死んでいた人々です。その間に彼らの魂——彼らの意識——がからだを離れたというのです。彼らはたとえば、手術室で医師たちが自分のいのちを救おうと懸命になっているのを見たといいます。心地よい環境の中で、親しげな光の存在や昔の知人たちと出会ったことを報告しています。彼らはもう自分のからだに戻りたくありませんでした。こうした肯定的な体験は、キリスト者だけでなく、キリストへの信仰とは何の関わりもない人々からも報告されています。そのような体験をした後、彼らにとって死にはもはや何の恐ろしさもなく、彼らはこの体験を良い知らせのように人々に伝えています。

キリスト者は、こうした現象について明確な立場をとることができなければなりません。これらの報告は、私たちの社会において死を新しい、ほとんど魅力的とさえ言える光の中に置いているからです。人間の最後の敵は打ち負かされたかのように見えます。こうした体験によれば、死とは、愛に満ちた完全な世界への移行だからです。そうすると、「私たちはみんな、みんな天国へ行く」（Wir kommen alle, alle in den Himmel）という歌を、もっと

115. 医学博士ハルトムート・マイアー＝ゲルバー（Dr. med. Hartmut Maier-Gerber）*Sterben – Der Höhepunkt des Lebens*, Wuppertal, 1994、20～21ページ。R. メッケル（R. Moeckel）*Ist Sterben doch ganz anders*, Sehndeに引用。

116. 私自身は死の際の体験をしたことがありませんし、そうした体験をした人を個人的に知ってもしません。ですから、これらの現象の評価は、私の手元にあり、誰でも入手できる書かれた資料だけに基づいています。

もなことで歌うことができるでしょう。あるいは、結局は「すべてうまくいく」ということになるのです。

レイモンド・ムーディ博士 (Dr. Raymond Moody)、ロバート・A. モンロー (Robert A. Monroe)、E. キューブラー＝ロス (E. Kübler-Ross) らの出版以来、死についてのこうした考えは広く行き渡りました。キューブラー＝ロス女史は、死の研究者たちのメッセージを次のように要約しています。

「神は罰したり断罪したりする存在ではありません。戻ってきた人々から私たちが知るの、すべての人が向こう側に移った後、平安と調和と満ち足りた全体性の感覚を味わうことができるだろう、という確証です」¹¹⁷。

これは驚くべき発見ではないでしょうか。実際、死と来世の秘密を解き明かすことは、人間が月や火星に着陸することよりも重要です。ついに——そう見えるのですが——向こう側を見ることができるようになり、それが私たちから死の恐れを取り去ってくれるのです。そこには、自分の人生について申し開きをしなければならない神がいらないからです。これらすべてに科学的な装いが施されているので、こうした知見は真剣で信頼できるもののように見えます。

2.11.1 これらの報告にはどれほどの真実があるのか

これらの報告は、細心の注意をもって見なければなりません。先に挙げた著者たちの叙述を、一言一句そのまま真に受けることはできません。それらはしばしば、異教的な世界観や心靈主義、ニューエイジ運動に色づけられており、現象もまた、この世界観に沿って解釈されているからです。それでもなお、これらの異常な現象を真剣に受け止め、その真実性を疑わないだけの十分な理由があります。そのような体験をした人が、キリスト者にもキリスト者でない人にも、あまりにも多くいるからです。これらの報告を幽霊話や空想として退けるのは、あまりに単純な、いや、誤った結論でしょう。では、私たちはこれを本当のところどう考えるべきでしょうか。また、これらの報告を聖書的にどのように位置づけ、評価することができるでしょうか。

117. エリーザベト・キューブラー＝ロス (Elisabeth Kübler-Ross) *Über den Tod und das Leben danach*, Berlin, 1994, 44ページ。

2.11.2 聖書に死の際の体験はあるのか

最初の問いは常に、神のことばの中にこの種の現象が見いだされるかどうかです。私たちは死者がよみがえらされた記録を持っていますので、その人々に目を向けてみましょう。

最もよく知られている記録は、イエスによるラザロのよみがえりです（ヨハネ11章）。この記録によれば、ラザロはすでに死んで四日たっており、からだは腐敗し始めていました。ここでは生物学的な死を前提にしなければなりません。いのちと死の主が、ラザロをいのちに呼び戻されたのです。それは奇跡であり、ユダヤ人たちに対する証しのためのしるしでした。

注目すべきことに、ラザロが死んでいた間に何を体験したのかについては、何も報告されていません。そもそもラザロについてはほとんど何も報告されていないのですが、ここにはきっと報告すべきことがあったはずです。来世についての彼の証言は、今日私たちが耳にするものとはまったく次元の違うものだったでしょう。

イエスによるほかの二つのよみがえりも、これに劣らず驚くべきものです。ヤイロの娘（マルコ5:22、ルカ8:41）と、ナインの若者（ルカ7:11）です。彼らも生物学的に死んでいましたが、いのちの君である主イエス（使徒3:15）によってよみがえられました。彼らについても、来世での体験については何も報告されていません。

ちなみに、旧約や新約に記されているほかのすべてのよみがえりについても、同じことが言えます。

ご自身のことばによれば死んでいる間パラダイスにおられたイエスでさえ、そこでの滞在については何も報告されませんでした。パラダイスがどれほど素晴らしいところか、また、主がそこであらゆる時代の信者たちに会われたとき、どんな喜びがあったのかを、主は報告することがおできにならなかったのでしょうか。

目を引くのは、神がそのみことばの中で、体験の報告に基づいてパラダイスの存在を確証している体験を、ただ一つしか語っておられないことです。そ

れは、第三の天に、パラダイスに引き上げられたパウロでした（コリント第二12:1-4）。

他方で、聖書にこのような体験が（一つの例外を除いて）何も記されていないという事実は、それが存在しないことの証明にはなりません。しかし、この事実は根本的なことを明らかにしています。神は証拠をお与えになりません。その必要がないからです。神はみことばの中で、パラダイスとハデスが、また天国と地獄が存在することを、十分に、誤解の余地なく明らかにしておられます。

それは、ルカの福音書16章の貧しいラザロと金持ちの話で非常にはっきりしています。金持ちはハデスで苦しみの中にあり、自分の兄弟たちも、もし悔い改めなければ、いつの日か自分に続いてこの恐ろしい場所に来ることになると知っていました。彼らは、かつて彼が生きていたように生きていたのです。彼は、兄弟たちが立ち返る唯一の可能性は、誰かが彼らの家に遣わされて、彼らに切実に警告することだと考えました。「金持ちは言った。『それでは父よ、お願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人いますが、彼らにまで切実に警告して、彼らもこの苦しみの場所に来ることがないようにしてください。』しかしアブラハムは言う。『彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。』金持ちは言った。

『いいえ、父アブラハムよ。もし死んだ者の中から誰かが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。』アブラハムは彼に言った。『モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ誰かが死んだ者の中からよみがえっても、彼らは説得されはしない』」（ルカ16:27-31）。

神は人間とその不信仰をご存じです。そして、たとえ誰かが死んだ者の中からよみがえっても、罪人が応答しないことを知っておられます。神は罪人に、悔い改めと信仰の従順を求めておられます。罪人には、被造物の証しと良心があります。そのうえ神は彼に、ご自分のことばと福音の宣教を与えておられます。聖書の証しは、基本的に十分なのです。人々は証拠としるしを求めます。しかし、さまざまな種類の多くの奇跡によるイエスの働きが示したのは、主の神性を示す圧倒的な証拠でさえ、人間の立ち返りをもたらさ

ず、かえっていっそう大きな憎しみを引き起こしただけだった、ということです。

主イエス・キリストは、ご自分がパラダイスに行くと言われました。そして復活のときに、そこから戻って来られました。パラダイスで過ごされた時について、主は私たちに何も伝えておられません。私の結論は、それについて何かを知ることは私たちにとって重要ではない、ということです。主にとって大切だったのは来世ではなく、この世でした。すなわち、地上における神の国です。弟子たちの心を動かしていたのは、主がいつ神の国を打ち立てられるのか、ということでした。復活後の四十日の間、主イエスは何時間も彼らとそのことについて語られました（使徒1:3）。ここでもはっきりと見て取れるのは、聖書全体が重点を置いているのは来世や中間状態ではなく、常に復活における完成と、全被造物に対する神の道の完成だ、ということです。

2.11.3 使徒パウロと使徒ヨハネ

ここまで確認してきたことは、死の際の体験についての難しい問いに、最終的な答えを与えるものではありません。しかし私たちは、こうした現象に直面するときに用いなければならない一つの原則を明らかにしました。

パウロやヨハネ、またほかの信者たちにも、天やパラダイスについて報告している例が見られます。ヨハネは生涯の終わりに、パトモス島で囚われの身となっていました（黙示録1章）。そこで彼は幻を受け、それをヨハネの黙示録に書き記しました。黙示録は、天からの体験報告です。ヨハネは主の日に御霊に感じていました。それは、神の御霊が彼に臨み、彼が別の世界に入り、そこでよみがえられた方に会ったということです。それどころか、彼は天に呼び上げられたとさえ書かれています。それは夢ではなく現実でした。その現実が彼を強くとらえたので、彼は見たことをすべて詳しく書き記したのです。これは死の際の体験でも臨死体験でもありませんでした。しかしこのことは、神が人々に、天や御使いたち、そして主イエスご自身と触れ合う体験をお与えになったことを明らかにしています。イザヤ（たとえば6章）、ダニエル、エゼキエルなどの預言者たちも、同じ体験をしました。け

れども、これらの人々の場合に問題になっているのは、旧約と新約の文書を書いた預言者としての、彼らの特別な務めの遂行です。ですから、これらは「普通の」死の際の体験ではありません。

パウロの場合も同じでした。「誇ることは私の益になりません。しかし、主の幻と啓示のことに移りましょう。私はキリストにある一人の人を知っています。この人は十四年前に——からだのままであったのか、私は知りません。からだを離れてであったのか、私は知りません。神がご存じです——**第三の天にまで引き上げられました**。そして私は、この人が——からだのままであったのか、からだを離れてであったのか、私は知りません。神がご存じです——**パラダイスに引き上げられて**、言い表すことのできない、人が語ってはならないことばを聞いたことを知っています」(コリント第二12:1-4)。

パウロの場合は、死の際の体験と復活のことであった可能性があります。コリント人への手紙第二が書かれた時と、使徒の働き14章19節に記されているリステラでのパウロの石打ちとの間には、十四年の隔たりがあります。石打ちは、石を投げられた者が本当に死んだことが確かめられるまでは終わりませんでした。人々は、パウロが死んだと確信したので、彼を町の外に引きずり出しました。ところがパウロは、何事もなかったかのように立ち上がり——弟子たちが蘇生を試みたことについては、ここでは何も語られていません——、また町に入って行ったのです。これは奇跡です。パウロはよみがえらされたのか、それとも自然に意識を取り戻したのか、どちらかです。彼はこの出来事の間に、パラダイスに引き上げられたのでしょうか。私たちはそれを証明することはできませんが、否定することもできません。この使徒の例は、来世での異常な体験——この場合は信者の体験——が原則としてありうることを明らかにしています。

同じように、殉教者ステパノも、夢の中ではなく文字どおりに、開かれた天を見ました(使徒7:55-56)。それは死の際の体験ではありませんでした。とはいえ、その直後に石打ちによる死が訪れました。私たちは今日でも、このような啓示を原則として排除すべきではありません。

2.11.4 死の際の体験——天国と地獄

今日、死の際の体験が数多く報告されているのは、多くの場合、蘇生を可能にする現代の技術的手段によるものです。私たちの社会の高度な技術化は、聖書の中で直接扱われていない問いを投げかけています。ここで私たちは、答え、あるいは原則を探さなければなりません。それは、神の御霊の助けによってのみ、神のみことばの中に見いだすことができるものです。神のことばは、私たちの時代においても今日的で拘束力を持っています。たとえそれを現代の問いに当てはめるのが、時には簡単でないとしてもです。生き生きとした、御霊によって生み出される聖書理解の特徴は、まさに、神のことばを私たちの時代に当てはめ、時代をその霊的な次元において見分け、判断することにあるのです（歴代第一12:32）。

死の際の体験において重要なのは、きわめて否定的な体験もあるということです。天国と地獄が異なっているのと同じように、死の際の体験も異なっています。人々は、地獄の体験や、苦しみ、悪霊について報告しています。こうした恐ろしい体験は、ベストセラーでは報告されません。それらは、肯定的な体験に彩られた死の美しい像をゆがめ、やはり地獄があり、罪に対する刑罰があるという可能性を指し示すからです。体験したことをすぐに抑え込み、忘れてしまう人もいれば、キリストのうちに救いを求める人もいます。

ローリングス博士（Dr. Rawlings）¹¹⁸が詳しく述べているこの情報があれば、定義上、すべての人に天国があり、地獄は教会の作り話にすぎない、などということはもはや言えません。ですから、先に引用したキューブラー＝ロス女史のことばは真実ではないのです！

死の際の体験は、来世の二つの場所、あるいは二つの状態の両方を映し出しているという点で、聖書の示す姿に合致している、と結論づけることができます。それはあたかも、ハデスとパラダイスが、生と死の間のこの領域に、その影を前もって投げかけているかのようです。

118. 医学博士モーリス・S. ローリングス（Dr. med. Maurice S. Rawlings）*Zur Hölle und zurück, Leben nach dem Tod – überraschende Beweise*, Hamburg (Verlag C.M. Fliß), 1996.

2.11.5 闇の惑わし

イエス・キリストや聖書と何の関わりも持ちたくない人々が肯定的な死の際の体験をし、来世で明らかにとても幸せに過ごしている御使いのような存在や知人たちに会う、ということは、私たちを戸惑わせます。彼らは、自分に責任を問う審判者に会うことはなく、それどころか、自分が行った悪についてさえかばわれ、弁護されるのです。

彼らが出会う存在は、愛を放つ、親しげで明るく輝く存在です。私たちのこれらの存在に対する評価は明白です。彼らは偽りを語っているからです。それは悪霊であり、彼らの最高の指導者である悪魔（コリント第二12:7、黙示録12:8）の戦術をまねているのです。悪魔は光の御使いに変装し（コリント第二11:14）、それによって、自分の腐敗した意図を良いものであるかのように人間に見せかけます。

来世との境目で、霊たちはただ、自分たちの悪しき影響を及ぼす機会を待ち構えています。このことは、これらの霊がどれほど人間の近くにいたかを、はっきりと示しています。しかもそれは、死の境目においてだけではありません。悪霊たちの存在は、これらの報告によっていっそう明らかになります。彼らは空中にいて、したがって人間の間にとどまっています。また、ある人々を支配し、その中に住んでいます。そのことは、とりわけ主イエス・キリストがこの地上におられた間に、主のいやしや解放のわざを通して明らかになりました。パウロはエペソの人たちに次のように書いています。「かつては、それらの罪の中であってこの世の流れに従い、**空中の権威を持つ支配者、すなわち霊**、今も不従順の子らの中に働いている霊に従って歩んでいました」（エペソ2:2）。また、「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、天上にいるもろもろの悪霊に対するものです」（エペソ6:12）。

私が恐れているのは、悪霊の働きと影響が、キリスト者によってしばしば過小評価されていることです。そのために、残念なことに、キリスト者はすでにある程度、敵の策略の犠牲になってしまっています。これは、人類の思考に対する、途方もなくサタンの攻撃です。死の恐れが取り除かれてしまう

のです。しかし、それは厚かましい偽りです。死を無害なもの、限りなく美しい世界への入り口として描き出すことに関心を持つのは、悪魔のほかには誰がいるでしょうか。

貧しいラザロは、死んだ瞬間に神の御使いたちによってアブラハムの懷に運ばれました。この御使いたちについて、私たちはこう読みます。「御使いはみな、救いを受け継ぐことになる人々に仕えるために遣わされた、奉仕する霊ではありませんか」（ヘブル1:14）。ですから御使いたちは、この世と来世の境目に臨在しているのです。

2.11.6 死者に伺いを立てる者は主に忌み嫌われる

神は、生きている者と死んだ者の間にはっきりとした境界を定められました。神は、死者と接触しようとするあらゆる試みを禁じておられます。死者に伺いを立てる者は、この明確な境界を踏み越えます。ですから、このような男女に対する神の判決は、非常に厳しいものです。「男であれ女であれ、霊媒や口寄せの霊がその人のうちにあるなら、その者は必ず殺されなければならない。彼らを石で打ち殺さなければならない。その血の責任は彼らにある」（レビ20:27）。¹¹⁹

このみことばはまた、死者と交わる能力、いや、より正確に言えば、死者と交わろうとする試みが、死者に伺いを立てる者たちを支配している悪霊によって導かれていることを明らかにしています（サムエル第一28:7-8）。神がこのような人々をこれほど厳しく罰せられるのは、とりわけそのためです。ですから、ここに見て取れるのは人間の能力ではなく、悪の国に起源を持つ超自然的な力なのです。それは明らかに、悪しき力の影響です。

したがって、これらの霊が惑わしていることも明らかです。彼らは死者の霊を呼び出すことができないからです。サタンの反逆に従った墮落した御使いたちが死者を思いのままにできるというのは、偽りです。彼らの能力は、該当する人物を本物そっくりにまねるところにあります。彼らは、ほかの方法では知ることのできないことを知ろうとして、死者に伺いを立てる者を通じ

119. さらに、レビ19:31、20:6、申命18:11-12、サムエル第一28:3、列王第二21:6、歴代第一10:13も参照。

て死者と接触しようとするすべての人を欺くのです。このようにして悪魔は、この時代の神としての自分の影響力を広げているのです。

神はイザヤを通して、ご自分の民に、自分たちの神に伺いを立てるよう求められました。「人々があなたがたに『ささやき、つぶやく霊媒や口寄せに伺いを立てよ』と言うとき、こう言いなさい。『民は自分の神に伺いを立てるべきではないか。生きている者のために、死んだ者に伺いを立てるべきだろうか』」（イザヤ8:19）。

この関連で重要なのは、キューブラー＝ロス女史をはじめとする多くの死の研究者が、まさに霊の世界とも深く交わっていたことに目を留めることです。彼女は、自分がしばしば交わっていた霊たちについて報告しています。死の力を持つ悪魔は、人間の死に対する恐れを知っており、それを利用して、死はさばきでも罪の結果でもないかのように人間に見せかけるのです。ですから人間には贖いなど必要ない、というわけです。死に勝利された方が、その贖いを成し遂げてくださったにもかかわらずです。「あなたがたは決して死にません」——これが初めからの惑わす者の偽りでした（創世記3:4）。そして彼は、この偽りを覆い隠すための新しい論拠を、次々と見つけ出すのです。

多くの死の研究者は心霊主義者であり、ニューエイジ運動と結びついています。ですから彼らは、惑わされた者でしかありえないのです。

2.11.7 サウルとサムエル

サムエル記第一28章に記されている、サウルとエン・ドルの霊媒の女の出来事は、注目すべき例外です。サウルはここで大きな過ちを犯しましたし、死者に伺いを立てる者は死者を呼び上げることはできません。それにもかかわらず、この場合にはサムエルが実際に現れました。そのことを明らかにしている点が二つあります。第一に、サムエルを呼び出したのはこの女ではありませんでした。サムエルは彼女の働きなしに現れたのです。女の驚きようは、ここで彼女が慣れているのとはまったく違うことが起こったことを示しています。彼女はその場を支配していませんでした。神の預言者が口寄せの霊によって呼び出されることなど、決してありえなかったでしょう。第二

に、サムエルは明らかに真実を語りました。それはサウルがすでに知っていた真実でした。ですから、サムエルになりすましてサウルに偽りを語った何かの霊ではなかったのです。サムエルはここで、後にモーセとエリヤが変貌の山に現れたのと同じように現れたのです。

したがって、この出来事は、死者が霊媒や悪霊によって呼び出されることはありえない、ということを裏づけています。それができるのは神だけです。そして聖書が報告している限り、神はここでだけそれをなさいました。生きている者たちのこの世と、死者たちの来世との間には、交流などまったくないのです。生きている者と死んだ者の間には、打ち破ることのできない隔てがあります。ここで私が言っているのは、悪霊の世界のことではありません。悪霊の世界は、この世と接触しようとしきりに試みています。しかし悪霊は、死んだ人々とはもはや何の関わりもないのです。

2.11.8 終わりの時の反キリスト的な惑わし

急速に進む技術の発展によって生じている道徳的・倫理的な問題は、終わりの時のしるしです。死の際の体験は、技術によって初めて大規模に起こるようになったものですが、それは悪霊とその教えに対しても扉を開いています。「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります」（テモテ第一4:1）。

黙示録に描かれている終わりの時の出来事は、今日すでにその影を前もって投げかけています。「**彼らはしるしを行う悪霊どもの霊であって、……**」（黙示録16:14）。反キリストの霊は今すでに働いており、教会の携挙の後には、かつてない規模で完全に展開されることになります。反キリストはしるしと不思議を行うでしょう。そして、神だけに帰されるような奇跡を行う余地を、神がサタンにどれほど許されるのか、私たちにはわかりません。パウロはテサロニケの人たちに書き送りました。「そのとき、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。不法の者は、**サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、滅びる者たちに対するあらゆる不義の欺き**をもって現れ

ます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです」(テサロニケ第二2:8-10)。

私がこれらの節に触れるのは、それがまさに今日の状況を描いているからです。神のことばにまったく合致しない死の際の体験も、サタンの終わりの時の計画の一部です。サタンはどんな機会も逃しません。そして、これはまだ始まりにすぎないのです。

2.11.9 結論¹²⁰

では、私たちは死の際の体験をどう考えるべきでしょうか。この問いに一文で答えることはできません。死の際の体験のいくつかの側面は非常に複雑で、心理学や超心理学、オカルトの問題に触れています。ですから私は、この章をいくつかの基本的な確認をもって締めくくります。それらの助けによって、明確な判断に至ることができるでしょう。

死の際の体験をした人々、すなわち「戻ってきた」人々にとって、その死は取り消すことのできない死ではありませんでした。ですから、彼らの体験は来世について本当の情報を与えてはくれません。

彼らは天国にも地獄にもいたのではありません。「死にかけること」は「死んでいること」と同じではありません。ミュンヘンに向かって車を走らせ、同じ道を引き返したとしても、ミュンヘンに着いたことにはなりませんし、ましてやそこに住んだことにはなりません。

彼らが体験したことが天国や地獄に相当するものだったとしても、¹²¹ 私たちが扱っているのは生と死の間の領域であり、それについて聖書は何も語っていません。しかし、そうした体験についての多くの証言に基づいて、私たちは次のように結論づけます。魂が短い時間からだを離れる領域では、¹²² 霊た

120. 死の際の体験について、より詳しく取り組みたい方には、ジョン・アンカーバーグ (John Ankerberg) とジョン・ウェルドン (John Weldon) の本をお勧めします (参考文献を参照)。

121. 臨床上に死んでいて、何も体験しなかった人々もいます。

122. 同じような体験は薬物によっても引き起こすことができます。ですから、それは必ずしも死と関係があるわけではありません。死の体験をすることなしに、体外離脱の体験をした人々についての報告は数えきれないほどあります。

ちが魂に近づくことがあります。それは神の御使いたちであることもあれば、悪霊、すなわちサタンの使い（コリント第二12:7）であることもあります。サタンの惑わしは、滅びに向かっているこの人々に天国を見せかけることにあります。「来世」から持ち帰られた情報は、ほとんどの場合、聖書の真理と一致していません。

終わりの時は悪霊的な惑わしに特徴づけられており、その惑わしはキリスト者の前でも立ち止まりません。報告されていることの多くには、著者や自称研究者たちの願望が入り混じっています。単なる詐欺であるものもあります。いわゆる死の研究者たちの世界観は、たいていの場合、ニューエイジ運動や神秘主義、東洋の宗教や哲学に沿ったものです。それだけでも、この人々はサタンの惑わしに無防備にさらされているのです。

信仰を告白しているキリスト者が死の際の体験をした場合にも、一つのことは常に変わずに保たれなければなりません。聖書の正典は閉じられている、ということです。聖書からすでに知っていること以外の何かを私たちに啓示するような新しい知識は、もう与えられません。そのような体験をしたキリスト者は、神学的な結論を引き出すべきではありません。むしろ、神がその体験を通して、自分の個人的な霊的生活について何を語ろうとしておられるのかを、自らに問うべきです。

私たちが霊を見分けることができ（コリント第一12:10、ヨハネ第一4:1）、明確で聖書的な立場をとることができるように祈りましょう。

理解を深めるための問い

- 死んで、また戻ってきたと主張する人に、あなたなら何と答えますか。
- 他方で、「結局のところ、まだ誰も戻ってきたことがないではないか！」という反論に、あなたならどう答えますか。
- 死の際の体験が天国と地獄について報告しないのはなぜですか。
- 死の際の体験をしたキリスト者は、それにどう応じるべきでしょうか。
- 死の際の体験が新しい知識をもたらすことができないのはなぜですか。

3 聖書の人間観

「靈魂」という概念を用いる以上、聖書の人間観を調べないわけにはいきません。そもそも「死」と「魂の不死」というテーマは、人間と、人間を人間たらしめているものを調べなければ、本当に理解することはできません。ここでは、限られた範囲で、私たちのテーマとの関連においてそれを行います。しかし聖書は人間論¹²³の教科書ではありませんから、一つの箇所で人間について包括的に語っているわけではありません。そのうえ聖書は、人間について神学者や心理学者のことばではなく、日常のことばで語っています。聖書のことばは多面的で、同じ表現をしばしばさまざまな意味で用いています。このテーマが難しく広範なのは、そのためだけではありません。ですから、全体を見渡すには努力が必要です。テーマが難しく、それについてさまざまな意見があるとしても、信者はこのテーマに取り組むことを思いとどまるべきではありません。それはほかでもない、神が彼をどのように造られたのか、どのように望まれたのか、という彼自身にかかわることなのですから！　そこに、神の偉大さと知恵を見て取ることができるのです。

このテーマについて神のことばを手取る人は、人間の本質的な構成要素を表すいくつかの概念に出会います。それは「心、霊、魂、腎臓、骨、肉、からだ、思い、良心、知性、意志」などのことばです。これらの概念は、それぞれの文脈の中で調べなければなりません。

そうすると、これらの概念が多様な意味や訳語で用いられていることに気づくでしょう。ですから、調べた結果として、一点の曇りもない明確な定義を手にするような解決が得られるわけではありません。しかし、本質的な概念はより明確になり、多くの概念をよりよく位置づけることができるようになるでしょう。私たちが聖書の人間観と呼ぶことのできる、一般的な構造、あるいは秩序が見えてくるはずです。¹²⁴

123. 人間についての教え。

124. 基本的に、この考察においては、人間がその成り立ち全体において、すなわちそのすべての本質的な構成要素において、罪の影響のもとに置かれていることを前提にしなければなりません。

また私の考察は、それだけで完結した、あらゆる文脈から切り離された詳細な研究でもありません。とりわけ、人間は死後もはやまったく存在しない、という誤った見解を念頭に置いて行うものです。その見解によれば、人間は、からだとは区別される要素としての魂も霊も持っていないとされます。人間は**もっぱら**その全体性と統一性において見られ、それが死によって滅ぼされるというのです。したがって死とは、復活における新しい創造までの非存在を意味することになります。そうすると、人間の人格の座であり中心である霊と魂も、一時的なものであり、からだと同じように朽ちるもののだということになります。

私はすでに、死後にも意識があることを詳しく明らかにしてきましたので、これらの誤った見解が、聖書の人間観に合致しない人間観に基づいているのは驚くに当たりません。

3.1 人間は何から成り立っているのか

すでに示唆したように、旧約と新約には、人間の本質的な構成要素を表す概念がいくつもあります。そして、その筆頭に立っているのは「霊」や「魂」という概念ではありません。ほかのどの概念にもまして人間の本質を描いているのは、「心」なのです。「心」は聖書の中に千回以上出てきます。しかも、さまざまな意味で用いられています。人間の心——血液を送り出す中空の筋肉のことではありません——は、比喩的な意味において人間の中心であり、その最も内なる、したがって隠された本質です。

人間は、被造物の冠として、また神のかたちとして、きわめて複雑な存在です。人間を二つや三つの要素に分けるのは、あまりにも単純すぎるでしょう。人間は、分解することのできる「実体」から成り立っているのではなく、さまざまな側面を持つ一つの統一体を成しているのです。側面¹²⁵とは、

ん。ですから、そのどれ一つとして、中立的なもの、あるいは罪の影響を受けていないものと見ることはできません。ここで、一般的な人間観が聖書の人間観と著しく対立していることが明らかになります。創造者を知らず、それゆえその啓示を拒んでいる心理学者や哲学者のもとに、墮落や創造者に対する責任を考慮に入れた答えを見いだすことは、まずできないでしょう。

125. これについて詳しくは、W.J. アウウェネール (W.J. Ouweneel) *Psychologie, Ein Bibelorientiert-Wissenschaftlicher Entwurf*, Dillenburg (CVD), 1993、61～67ページを参照。

ある立場、あるいはある視点から人間を描くものです。私たちは、時間を超えた存在であるという側面から人間を考察します。私たちの問いは、死において人間に何が起こるのか、ということです。

注目すべきことに、この問いはしばしば、「霊」と「魂」と呼ばれる本質的な構成要素、あるいは本質的な側面に触れています。¹²⁶ ほかのどの概念にもまして聖書の人間論の概念そのものである「心」は、この関連ではほとんど、あるいはまったく話題になりません。

私の考察の出発点として、二つの聖書箇所を取り上げます。一つは人間の創造にさかのぼり、もう一つは将来を指し示しています。

「神である主は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きた魂となった」（創世記2:7）。そして、

「平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、魂、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように」（テサロニケ第一5:23）。

これらの節には、人間の起源、すなわち創造との関連で、またその将来との関連で、「霊」「魂」「からだ」という概念が出てきます。パウロは主の来臨について語っています。そしてこの聖書箇所において、パウロにとって人間全体は霊と魂とからだから成っています。「あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように」という表現が、この真理をはっきりと強調しています。本質的な構成要素のこの「順序」は、実際、神のことばの中でただ一度、ここにしか出てきません。多くの人はこの箇所から、人間はもっぱら

126. たとえば、創世記8:21、申命6:5、26:16、箴言4:23、マタイ22:37、マルコ7:21、ローマ1:21、2:15、10:9。

三つの部分から成るという三分説を導き出しています。¹²⁷ もしそうだとしたら、人間の心はどこに行ってしまうのでしょうか。また、上に挙げたほかのすべての概念は、どのように説明されるのでしょうか。パウロは人間を一般的にこの三つの側面に限定しているのではありません。彼も手紙の中で、ほかの概念を用いているからです。ここでパウロは将来を見据えて、人間全体が、その多様性において、そのすべての側面において、キリストの日に向けて保たれると言っているのです。

パウロにとっては、将来を見据えて、このような人間観を持つことが大切です。そしてパウロの見方は、創世記2章7節から出発して人間の成り立ちについて何かを語っている、旧約のすべての聖書箇所を受け継ぎ、まとめたものにほかなりません。それ以外ではありえません。旧約と新約から成る聖書は、神によって組み合わされた一つの統一体だからです。ですから、パウロの人間観は、すでに旧約で与えられていた神の啓示に完全に合致しています。したがってそれは、新しい人間観でも、ましてやギリシア的な人間観でもなく、言ってみれば、ヘブライ的な、あるいはユダヤ的な人間観なのです。

パウロは一定の順序を挙げ、人間の霊を第一の位置に置いています。しかし、からだが最後に置かれているからといって、からだが軽んじられている

127. 人間が聖書的な意味で二分説的（二つの部分から成る）に存在するのか、三分説的（三つの部分から成る）に存在するのか、という古くからの論争を、ここでは追いません。私は、魂と霊にはさまざまな意味があるために、両者のはっきりとした境界線は存在しない、という見方のほうが好みます。ですから、次の確認が助けになります。「機能的に見れば、生きている人間の場合、その全体性を考慮に入れるなら、たとえばテサロニケ第一5:23で行われているように、霊、魂、からだについて語ることは十分に可能である。しかし実体的には、人間はただ二つの『部分』、すなわち靈魂という超越的な部分と、からだという内在的な部分から成ることに変わりはない。したがって、実体的な二分説と機能的な三分説について語るができるだろう。つまり魂は、からだと霊から独立した固有の存在を持ってはいない。しかし、霊と完全に同一でもなく、常に——人間の死後においても——区別できるものであり続ける」（ローラント・アントホルツァー（Roland Antholzer）*Geist, Seele und Leib – der Mensch in seiner Beschaffenheit*）。

わけではありません¹²⁸。なぜこの順序が選ばれているのかは、人間の創造から明らかになります。そこでは霊（いのちの息）こそが、人間を初めて神のかたちとしての人間にする本質的な要素なのです。

3.2 人間の霊

人間の創造についての旧約の主要な証言は、次のとおりです。

「神は仰せられた。『さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。……』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造された」（創世記1:26-27）。

「神である主は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きた魂となった」（創世記2:7）。

ここに私たちは、最初の人間を見ます。初めはいのちがなく、地のちりから形造られました。続いて、創造の記録の中で唯一の、いのちを吹き込むという出来事が起こります。神がその鼻にいのちの息を吹き込まれるのです。その結果が、地から形造られた物質的なからだを持つ、生きた人間です。人間は、神のいのちの息を自分のうちに持つ唯一の被造物です。いのちの息は人間の中に入り、そこにとどまります。こうしてそれは、人間の構成¹²⁹に属するものとなるのです。いのちの息が、人間を神のかたちとしての人間にするのです。

3.2.1 いのちの息

神がご自身から与えられたいのちの息は、パウロがテサロニケ人への手紙第一5章でも挙げている人間の霊に相当します。¹³⁰ 「息」ということばは、さ

128. それでも、これはキリスト者が心に留めるべき順序です。からだの必要は、余計な重荷となり、したがって霊的成長の妨げとなることがあります。ですからパウロは、「私は自分のからだを打ちたたいて服従させます」と言いました（コリント第一9:27）。彼は「からだに支配される」のではなく、聖霊によって新しくされる自分の霊によって支配されることを望んだのです。彼のからだは彼の霊の道具であり、彼の思いに従うべきものでした。その逆ではありません。

129. 組成、成り立ち、秩序。

130. このことは旧約によって何度も裏づけられています。ヨブ27:3、32:8、33:4、6、34:14-15、イザヤ42:5、57:16、列王第一17:17、21（詩篇104:29-30およびエゼキエル37:1-14と関連して）。

まざまに訳されています。このことばには広い意味の幅があります。それは、神についても、人間についても、動物についても用いられます。その意味の一つは、いのちの息とは神が人間に与えられた霊であり、それは動物とは対照的に、人間の成り立ちの最も本質的な要素として人間に吹き込まれる、ということです。

神がすべての人に与えられる霊によって、¹³¹ 人間は独立した人格、すなわち一人の「私」となり、それによって神にとっての「あなた」ともなります。私たちにとってなじみ深い「人格」という概念は、まさにここにその起源を持っています。神は無限の、それでいて人格的な神であり、人間の創造者であり、保持者です。

神のかたちに造られた人間は人格であり、その人格性は神の人格性に由来しているのです。

3.2.2 神からの霊と人間の霊

神が与えられる霊が人間の霊を形づくることによって人間を人格にするのであれば、私たちはこの霊の二つの側面をはっきりと区別しなければなりません。それは私たちのテーマにとって非常に重要です。一つには、それは神から来る霊であり、またそうであり続けます。だからといって、人間が神と等しくなるわけではありません。人間はこの霊を、与える方に依存した賜物として持っているのです。ちょうど木の葉が、木とつながっている限りにおいてのみ力といのちを持っているのと同じです。パウロがアレオパゴスでギリシア人たちに、私たちは「神の子孫」であると語ったことばも、この意味で理解しなければなりません（使徒17:28-29。イエスの系図を記したルカの福音書3章38節も参照。そこでは神が人類の創始者として最初に置かれています。「アダムの子、神の子」）。

第二の側面は、この霊が人間の霊として固有の存在を持っているという点にあります。神からの霊は、人間のうちで人間の霊となり、人間を人格にして

131. 「神からの霊」を、私たちが三位一体の第三位格と呼ぶ聖霊と混同してはなりません。それは神からの霊ですが、人格としてではなく、いのちを与える力としての霊です。それは、神がご自身から人間に与えられたものなのです。

いるのです（ローマ1:9、コリント第一16:18、コリント第二2:13、7:13、ピリピ4:23、テモテ第二4:22、ピレモン25）。

ですから、神の前で衰え果てる「彼らの」——すなわち人間の——霊（息）についても語られています（イザヤ57:16）。ここで言われているのは、衰えることのありえない神からの霊とは対照的な、弱くもろい人間の霊です。

霊は人間の最も内なる本質です（詩篇32:2。心とも呼ばれます。マルコ7:20-23、イザヤ57:15、コリント第一7:34）¹³²。霊は主体の中心であり、人格としての「私」です（イザヤ26:9）。神からのこの霊が、人間に神のかたちとしての性質を与え（「神は霊です」ヨハネ4:24）、神が意図されたとおりの人間らしさを形づくっているのです。

霊は、しばしば考えられているように、人間の知性なのではありません。この見方はギリシア哲学に起源を持っています。そこでは霊は「知性」や「認識」と同じ意味なのです。この見方は、聖書の比類のない人間観を曇らせてしまいます。聖書自身が「霊」と「知性」の違いを際立たせています。とはいえ、霊は考えもすれば、感じもします。私たちが知性に帰している思考は、霊の働きの一つにすぎないのです（箴言20:27、コリント第一2:11、14:14、イザヤ29:24）。

人間の霊はまた、神が語りかけることのできる、私たちのうちにある「場所」でもあります。それは、神が人間に働きかけるための接点であり、アンテナです（箴言20:27）。ですから、たとえば聖霊は、私たちが神の子どもであることを、私たちの霊（すなわち人間の霊）とともに証ししてくださるのです（ローマ8:16）。もっとも、神が語りかけられるのは人間全体に対してです。霊は神が語りかけられるときの入り口です。しかし、人間が神に服従するときには、人間全体が神への奉仕に身をささげるのです。

人間の霊は、信者においても信じない者においても、人間の本質的なものです（創世記41:8、45:27、エズラ1:1、5、ダニエル6:3）。しかし聖霊がなけ

132. コリント第二4:16の「内なる人」を参照。ただし、そこでは信者の新しいいのちが描かれています。

れば、人間の霊は肉的であり（ローマ8:4-8）、神と交わることができません。

罪に堕ちた人間とその霊が神と関わりを持とうとすることは、諸宗教にはつきりと表れています。神との関わりの中で、人間は自分の創造者ではなく、偶像に向かいます。その偶像の背後には悪霊がいるのです。

私たちの考察にとって本質的な点は、神から与えられた霊が不死という性質を持っている、ということです。人間の霊の不死は、確かに明示的には語られていません。しかしそれは、神の息が死ぬことはありません、という事実から導き出されます。それは永遠の神の息、すなわち霊なのです（ローマ16:26）。しかし、すべての人が初めから自分のうちに持っている神の息は、三位一体の位格としての聖霊ではありません。聖霊が内に住んでおられると言われているのは、神の子どもたちについてだけです。神の息ということで意味されているのは、まさに神の御霊という位格ではなく、神のいのちに相当するもの、したがって人間にいのちを与える力としての神の息なのです。この神の息は、その本質と「実体」において神から出たものです。人間がこの霊を持っているのであれば、人間の霊も——常に永遠の神に依存しつつ——不死であり、時間を超えたものでなければなりません。

ここで繰り返しておきます。人間は神の息を賜物として持っており、それは人間が人間であるために決定的なものです。そして、それが固有の存在を持つことによって、同時に人間の人格を形づくっています。ですから、死との関連で人間の霊について何が語られているのかを知ることは、興味深いことです。¹³³ よく引き合いに出される伝道者の書の古典的な箇所は、ちり、すなわち人間のからだは地に帰り、霊はそれを与えた神に帰る、と語っています（伝道者12:7）。ここで霊は、からだの死と腐敗の後でも存続する、朽ちないものとして見られています。しかしこの霊は、人間にいのちを与える神からの霊であるだけではありません。それは同時に人間の霊でもあり、そこに人間の人格と自我意識があるのです。霊が神のもとに帰るとき、それによって人間の霊、すなわち人格が（からだのいのちだけではなく）神のもとに帰り

133. 1.7.1節参照。

ます。そして神は、さばきのためであれ、祝福のためであれ、それを受け入れられるのです。

人間の霊はからだに縛られてはおらず、死においてからだのように消え去ることもありません。詩篇の作者が、霊が出て行き、地に帰ると言うとき（詩篇146:4）、¹³⁴ そこから、人格はからだに縛られていて、「私」を形づくっているものが土になるのだ、と結論づけることはできません。人間の人格はその霊に結びついており（コリント第一5:5）、からだが生きて朽ちるときにも、存在することをやめはしないのです。

新約聖書は、ヤイロの娘の霊が死んだ少女のうちに戻ったこと（ルカ8:55、ヤコブ2:26）や、ステパノが自分の霊を主イエスの御手にゆだねたこと（使徒7:59。ルカ23:46、詩篇31:5参照）を示しています。ペテロも、この意味で、今は牢獄にいる霊たちについて語っています（ペテロ第一3:19）。一方で、それはその人々自身です。他方で、彼らは死んだので、霊的な、すなわち非物質的な状態にあるのです（ヘブル12:23）。

3.2.3 まとめ

聖書の霊の概念は、ほかの人間観における霊の概念とは根本的に異なっています。霊は人間の魂を靈魂へと高め、人間を人格にします。霊は人間の同一性を保証するものです。霊は、神のかたちとしての人間を動物から区別します。人間が霊を持っているので、神は人間に語りかけることができ、また人間も神に語りかけることができるのです。霊は永遠に存在します。それは神から来る霊だからです。したがって人間は、より高い、目に見えない世界に関係づけられた、永遠の存在なのです。

3.3 人間の魂

パウロは、人間の霊とからだの間に魂を挙げています。聖書の中では、霊と魂が何度か密接に結びついて出てきます。そのため、どちらの概念も単独で（ペテロ第一2:11、ピリピ1:27）、内なる人（コリント第二4:16、詩篇

134. 詩篇のこの箇所は、「霊」という概念にさまざまな意味があり、ここではたとえば単に「息」を意味していることの証拠です。

103:1)、すなわち人間の非物質的で目に見えない側面を表すことができます。それでもなお、この二つの概念は互いに区別されてもいます（ヘブル4:12、テサロニケ第一5:23）。

魂とは、人間や動物の物質的な有機体にいのちを与えている、単なるいのちのことにすぎない、としばしば指摘されてきました（マタイ2:20、16:25-26、ルカ12:22参照）。しかし、それは不当な指摘です。確かに魂ということばにはこの意味もあります。しかしこのことばは、霊ということばと同じくらい多様な意味を持っているのです。

魂は、しばしば単なる「いのち」という意味から区別されています。魂もまた、人間の霊と同じように、人間の本質的な構成要素だからです（ヨブ19:2、箴言3:21-22、マタイ10:28、ルカ12:20、ペテロ第二2:8）。

たとえば、魂の幸いは、からだとそのいのちの幸いと対比され、それによってはっきりと区別されています（ヨハネ第三2）。人はからだを殺すことはできても、魂を殺すことはできません（マタイ10:28）。もしこの節で魂がいのちのことであるなら、魂はからだのいのちと一緒に殺されてしまうはずです。主イエスはこの箇所、魂を、からだの死によって死ぬことのない人間の本質的な構成要素として、はっきりと特徴づけておられます。主イエスのことばによれば、魂は人間の構成要素として、その霊ともからだとも明確に区別されているのです（ルカ17:33。ペテロ第一2:25、使徒14:22参照）。

人間の一部としての魂は、霊とともに、人間の全体を表す表現でもあります。ですから聖書は、人数を数えるときに「魂」という概念を用いています（創世記46:25、26、27、使徒2:41参照）。

魂は、人間のうちで霊とともに人格を形づくっています（ルカ9:24、ヘブル6:19、10:39）。魂は——霊と同じように——人間の「私」を表しています（コリント第二1:23、イザヤ53:11、哀歌3:24）。

魂が霊とからだの間で、ある種の中間的な位置を占めているとすれば、魂は一方では霊と関わりを持っています。だから私たちは、それを「霊魂」とも

呼ぶのです。他方で、魂はからだ、すなわち外なる人と密接に結びついています。

魂とからだの関係は、肉の魂は血の中にある、と書かれていることにはっきりと表れています（レビ17:11、申命12:23）。人間と動物の魂は、血と結びつけられています（創世記9:4-5）。ですから人間の死は、魂を注ぎ出すこととも呼ばれています（詩篇141:8、イザヤ53:12）。魂は、からだとはさまざまな点で異なっていますが、なおからだと非常に密接に結びついています。このことは、霊にはこのような形では当てはまりません。ですから人間の創造にあたって、人は生きた魂となったと言われているのです。動物もまた、生きた魂と呼ばれているとおりです（創世記1:20、21、24、2:19、9:10）。

人間がその全体において生きた魂となったということは、まさに魂とからだの密接な関係を浮き彫りにしています。そこで問題になっていたのは、土、すなわち死んだ物質にいのちを与えることだったからです。この意味において、そしてこの意味においてだけ、動物も「生きた魂」と呼ばれています。動物の魂は、創造者によって吹き込まれたものではありません。人間の場合には、まさにそれが起こったのです。そこに動物と人間の本質的な違いがあります（レビ24:17-18）。

旧約では、死体も（ヘブル語で）「魂」と呼ばれています（民数5:2、6:6、11、19:11、13）。ここで魂は、人間のからだと姿を表しています。ですから、からだは同時に魂の外的な形でもあります。その実体ではありません。すなわち、死体は魂ではないのです。死体が魂でありえないのは、人間が死ぬとき、魂は出て行くからです（創世記35:18）。死んだ人間のからだについて言えば、「魂」という概念は、純粋にからだ的・物質的な魂の姿を意味していますが、そこに魂はないのです。

からだと魂のこの密接な結びつきは、魂が人間の死後も、「自分の」人間のからだの形と姿に結びついていることを示唆しています。したがって魂は、（ルカの福音書3章22節の意味での）「からだの形」をとって現れるのです。もっとも、中間状態のこの「からだ」は、もはや物質的なものではありません。

ん。こうして魂は死後も人間の姿として現れ、そのようなものとして見分けられるのです。

この光に照らすと、ヨハネが、神のことばのゆえに殺された人々の魂を見ていることも理解できます（黙示録6:9、20:4）。もし魂がいのちにすぎないとしたら、ヨハネはいったい何を見たのでしょうか。彼は明らかに人間の姿を見て、それを人間の姿として見分けたのです。それ以上のこと、つまりヨハネが魂を人間の姿として見分けたということ以上のことを、私たちには見えない世界における魂の霊的なからだ性について結論づけることはできません。ここで明らかにしておきたいのは、死後に見分けがつくということが、人間の外見と関係している、ということです。それはちょうど、地上で物質的なからだによって見分けがつくと同じです。

死後も魂が存在し続けることについてのこうした考察は、不死の問題にも触れています。魂がからだの死の後でも生き続けることは、はっきりと示されてきました。魂が不死であるかどうか、すなわち永遠に存在するかどうかは、魂と霊との結びつきの中でしか答えることができません。不死である霊は魂のうちに住んでおり、人間の構成において魂と切り離すことのできない結びつきの中にあります。そして、この二つの概念はしばしば同じ一つの事柄を表しています。ですから、人間の魂もまた、霊魂として不死でなければなりません。魂はそれ自体において不死なのではありません。それ自体において不死なのは神だけだからです。魂が不死であるのは、神が魂を保たれるからであり、また神が、魂が死ぬことなく生きることを望んでおられるからなのです。

3.3.1 まとめ

「魂」ということば（旧約に755回）には何層もの意味があるため、定義を定めることはできません。それでも、まさにこの豊かさから次のことを導き出すことができます。人間の魂は、人間の本質的な構成要素の一つです。それは霊魂であり、そのようなものとして、**霊魂**ではない動物の魂とは区別されます。魂は、霊とからだを結ぶものです。魂は、人格と個人としての「私」のいのちの座です。魂は、そのうちに住む霊によって不死であり、か

らだの死を越えて人間を人格として保ちます。ここでも——人間の霊の場合と同じように——、人間が永遠の存在であることが明らかになります。

3.4 人間のからだ

からだもまた、人間の本質的な構成要素です。人間の目に見える部分は、目に見えない部分よりもはるかに私たちの理解に近づきやすく、そのため理解するうえでの難しさも少なくて済みます。神は、ご自分の望みのままにからだを与えられました（コリント第一15:38）。からは——墮落の後でも——神の知恵の表れであり、私たちが造られた不思議な方法に、私たちは繰り返し驚かされます（詩篇139篇）。肉と血から成るからは（ヘブル2:14）は、目に見える世界における私たちの存在を可能にし、また規定しています。からだによって、私たちは世界を体験し、経験し、感じ取るのです。

罪によってこの世界に侵入した死によって、からは、すなわち肉は、死と朽ちるべきことに服させられています（ローマ6:23、イザヤ40:6-8、ペテロ第一1:24）。死の向こうにまで届かない生まれながらの人間の見方からすれば、人間には——伝道者が言うように——家畜と同じ運命が降りかかります。人間はまたちに帰るのです（伝道者3:19）。外なる人は朽ちていきます（コリント第二4:16）。それはちょうど、世の有様も過ぎ去るのと同じです（コリント第一7:31、イザヤ51:6）。すなわち、見えるものはすべて過ぎ去るのです（コリント第二4:18）。

からはまた、罪の道具ともなりました（ローマ6章）。ですからパウロは、罪の奴隷とされた人間の無力さについて語るとき、こう言っています。

「だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」（ローマ7:24）。

しかし、それはからは牢獄であって、死によって初めてそこから解放される、という意味ではありません。それはギリシア哲学の考え方であり、からだについての聖書の見方とはまったく相反するものです（4章参照）。からだが神の目にどれほどの価値を持っているかは、世界の歴史における最大の奥義に明らかに示されています。神ご自身が人となられたのです。神は肉において現れてくださいました（テモテ第一3:16）。

ヨハネは、ことばが肉となって私たちの間に住まわれた、と言っています（ヨハネ1:14）。主イエスは、ご自分のためにからだを備えさせ（ヘブル10:5）、そのからだを十字架の上でいけにえとして死に渡されました（ヘブル10:10）。主は死なれたとき、いけにえとしてささげたご自分のからだを、永遠に脱ぎ捨てられたものではありません。主は完全に人であり、永遠に人であり続けられるので、復活において、栄光を受けたからだを受けられました。そのからだは同時に、すべての信者の模範でもあります。信者たちは、変えられるときと復活のときに、それと同じ栄光のからだを着せられるのです（ピリピ3:21、ローマ8:23）。

信者のからだは、贖いによって神の住まいとなりました（コリント第一6:19）。聖霊である神がそのうちに住んでおられるからです。ですから、からだは罪によって死ぬべきものとなっているとはいえ、今この地上で神があめられるための道具なのです（ローマ12:1-2、コリント第一6:20）。人間全体が神への奉仕にささげられているのです。

信者の復活は、神がからだを退けることも、置き去りにすることもなさらないことの証拠です。神がほかの存在形態をよしとされるかもしれない、ということはないのです。かつて神の御手から完全なものとして生み出されたものの、罪によってゆがめられ、損なわれてしまったものは、いつの日か、キリストの死と復活に基づいて、神の栄光のために回復されるのです。

信者たちの子とされることは、からだが贖われるときに初めて完全に実現します（ローマ8:23）。

霊と魂とからだ、すなわち人間全体は、創造のときから永遠に向けて造られています。からだは復活において初めて不死にあずかります。「死ぬべきこと」の反対としての「不死」という概念も、復活したからだにだけ当てはまります（ローマ8:11）。からだは罪によって「死ぬべき」からだになったからです。ですから聖書は「魂の不死」について語っていません。からだの場合にはまさにそうであるのとは違って、魂は死ぬべきものであったこともなければ、死ぬべきものになったこともないからです。

3.5 結論

否定することはできません。聖書は、霊と魂とからだの**統一**体としての人間を知っています。人間は、神との交わりの中で生きるという自分の使命から墮ちてしまいましたが、それでも、創造から示される聖書の人間観は保たれています（ヤコブ3:9）。

そのうえで私が強調したいのは、この三つの側面が切り離すことのできない統一体を成しており、死に至るまで保たれる人間の全体性を表している、ということです。死は、からだと靈魂の一時的な分離をもたらします。復活によって、人間のこの統一性は回復されるのです。

人間は永遠の存在です。それは人間の一部分だけを指しているではありません。神が初めから望まれ、実現されたとおり、その統一性において、同時にそのさまざまな側面における多様性において、人間全体を指しているのです。

理解を深めるための問い

- 聖書の人間観が比類のないものであるのはなぜですか。
- 聖書がその人間観のために用いている概念を挙げてください。
- 中心となる概念はどれですか。また、それはなぜですか。
- 人間の霊が不死であるのはなぜですか。
- 人間の霊の主な特徴をいくつか挙げてください。
- 魂の主な特徴をいくつか挙げてください。
- 人間のからだの主な特徴をいくつか挙げてください。

4 魂の不死

私はこれまでに何度も「魂の不死」（ドイツ語 Unsterblichkeit der Seele、略して UdS）という概念を用いてきました。そこで今度は、この概念に一つの章をあてたいと思います。根拠のない誤解や、残念ながら言いがかりをも取り除くことができるようにするためです。

この概念は、多くのキリスト者を二分しています。それは教会の歴史を通じて今日に至るまで、広範で激しい議論を引き起こしてきました。それでも、この概念はキリスト教界で一般的に受け入れられるようになりました。もっとも、そのこと自体は、まだその正しさを裏づけるものではありません。教会の歴史の中で魂の不死がどのように理解されてきたかをたどるのは、広範で興味深いテーマでしょう。しかし、それは私の意図ではありません。早くから明確になっていたさまざまな立場は、本質的には今日まで変わっていないからです。¹³⁵

注目すべきことに、聖書は「魂の不死」という概念を用いてもいませんし、その事実について直接語ってもいません。しかし、この概念やそれを言い換えた表現がないことは、この概念に含まれている真理を退ける理由にはなりません。同じように、聖書はこれらの概念に触れていないにもかかわらず、私たちは神の三位一体、キリストの身代わり、あるいは古い性質について語ります。それでも、これらの概念は真理を、正しいだけでなく役にも立つ仕方で言い表しているのです。

魂の不死を退ける人々は、ここで私たちが扱っているのは異教の、この場合はギリシア人の概念だ、と正当にも指摘しています。ギリシア人は、その思想の中に魂の不死を持っていました。ちなみに彼らは、死者の場所と死者の領域の神について、「ハデス」という概念も用いていました。

135. たとえば、*Texte der Kirchenväter*, München (Kösel Verlag), 1966, 第1、4、5巻。

しかし、「魂の不死」という概念の由来だけを理由に、死後と永遠における意識あるいのちを退ける人は、反対側の極端に陥っています。ギリシア思想の影響に対する戦いは、ときにあまりにも激しく、そのために神ご自身の不死以外のあらゆる不死がたちどころに否定され、いわば、たらいの水と一緒に赤子まで流してしまっているのです。

私はここで、この概念に固執してその用語を擁護したいのでも、ましてやそれをキリスト教化したいのでもありません。問題は、私たちが魂の不死を聖書的な意味でどのように理解しなければならないか、ということです。¹³⁶ 異教の哲学に対しては、決して扉をほんのわずかでも開いてはなりません。

「魂の不死」とは、魂がからだとは違って死なない、ということです（マタイ10:28）。ギリシア人がある程度の真理を持っていた、ということはありません。その真理は、神が人の心に永遠を置かれた（伝道者3:11）ということに根ざしているのです。死後のいのちを信じることは、あらゆる古代文化の一部でした。人々は真理を知っていますが、それを不義のうちに持ち、押さえつけています。彼らの心が暗くなっているからです（ローマ1:18-32）。¹³⁷

4.1 永遠のいのちと魂の不死

魂の不死に対する一つの反論は、次のような問いの形をとります。人間が生まれながらの魂の不死を持っているのなら、なぜそのうえさらに永遠のいのちが必要なのか。

この問いの立て方から明らかなのは、永遠のいのちと魂の不死が、同じ一つの事柄として理解されているということです。それは誤った理解です。この二つは根本的に異なっているからです（2.9.2節参照）。すべての人は、不死

136. ギリシア人の思想も知らず、原語の知識もない聖書の読者が、私たちが2章で調べた聖書箇所をどのように理解すればよいのでしょうか。そのような読者にとって、「魂の不死」はトロイの木馬でも、異教の思想の浸透でもありません。むしろ読者は、この概念を、2章で明らかにしてきたことの枠組みの中で十分に聖書的に理解し、その意味で用いることができるのです。新約聖書の光の中で、この概念には正当性があります。それは必ずしも異教の思想を運び込むものではないのです。

137. ドン・リチャードソン（Don Richardson）*Ewigkeit in ihren Herzen*, Lahr (Verlag der Liebenzeller Mission), 1999も参照。

の魂を持って生まれてきます。しかし人間はアダムの子孫として罪人なので、その存在全体が罪に染まっています。ですから人間には「新しい」いのちが必要なのです。この問いに対する私の答えはこうです。人間には、その不死の魂、すなわち永遠の存在に「加えて」、永遠のいのちが必要なのです。人間は生まれながらに、被造物としてすでに永遠の存在を持っているので、終わりのないいのちをもう一度必要とするわけではありません。それはすでに持っているからです。人間に必要なのは、単なる永遠の存在よりもはるかに多くのものである「永遠のいのち」です。人間に必要なのは「新しい」存在であり、それを永遠のいのちとともに受けるのです。人間は新しく生まれることによって、神の子どもとなります（ヨハネ1:12-13、3:1-21）。

永遠のいのちを持たない人間も、それでも永遠の存在を持っています。しかしそれは、神なしの永遠の存在です。地上の生涯において、その人は神なしに生き、神なしに死に、よみがえらされた後も神なしに永遠に生き続けます。ですから問題は、人間が永遠に存在するかどうかではなく、神とのどのような関係の中で永遠に存在するのか、ということなのです。すべての人は永遠の存在を持っています。信者は神の子どもとして、永遠のいのちによって、神との交わりのうちにある新しい永遠の存在を持っています。信じない者は、神なしの永遠の存在を持っています。罪がその人を神から引き離しているからです。

4.2 新約聖書における不死

「不死」（ギリシア語 *atanasia*）ということばは、新約聖書に三回しか出てきません。テモテへの手紙第一6章16節には、神は「ただひとり不死を持っておられる」と書かれています。神は、絶対的な意味での不死をご自身のうちに持っておられます。不死は、このような形では神だけが持っておられる属性です。¹³⁸ 誰も神にそれを与えたのではなく、誰も神からそれを奪うこと

138. 注目すべきことに、神が不死である、とは書かれていません。不死について語ることに意味があるのは、死が被造物の中に入ってきた後のことです。それは「死ぬべき」の反対なのです。もしかすると、神は不死である、と言うのはふさわしくないのかもしれませんが。神は死とは一度も関わりを持たれたことがないからです。神が不死を「持っておられる」のは、それが神の本質だからではなく、神がそれを死ぬべき存在にお与えになるからなのです。

はできません。それは神の本質的な所有物です。神は「永遠に存在する方」（出エジプト3:13-14）であり、変わることをしない神だからです（ローマ16:26）。ですから、すべての不死は神に由来しています。それを与えることができるのは神だけなのです。

ここから、神以外の誰も不死ではない、という結論を引き出すこともできるでしょう。しかし主イエスは、御使いたちについて、彼らは死ぬことがないと言われました（ルカ20:36）。言い換えれば、御使いたちは不死なのです。では、神以外の誰かが不死を持つことができるのでしょうか。それは、「ただひとり」神だけが不死を持っておられる、ということと矛盾しないのでしょうか。いいえ、御使いたちは、神と同じ意味で不死なのではありません。彼らはこの性質を、自分自身のうちに、あるいは神から独立して持っているわけではありません。生きているすべてのものに当てはまるように、御使いたちもまた神によっていのちを保たれているのです。万物は、神の力あることばによって保たれています（ヘブル1:3）。この意味で、すべてのいのちは、したがって「不死」もまた、神に由来し、神に依存しています。生きているものはすべて、神がそれを望まれるから生きているのです（黙示録4:11、テモテ第一6:13、使徒17:25）。このことは、人間の靈魂にも当てはまります。問題は、神以外の誰かが不死でありうるかどうかではなく、どのような仕方ですら不死であるのか、ということなのです。

使徒パウロは、復活についての章の中で、この概念をあと二回用いています（コリント第一15:53-54）。そこでは、不死はもっぱら、信者たちが復活、あるいは変えられることによって受ける新しいからだに関係しています。この新しいからだとともに初めて、信者たちは聖書的な意味での不死を受けるのです。

ですから、聖書において不死は、常に人間全体に関係しています。しかし、それは復活とともに初めて始まります。そのとき不死は、魂だけでなく人間全体を包み込むのです。はっきり言っておきます。聖書は、不死という概念を魂との関連で用いてはいません。しかし他方で、魂が人間の本質的な構成要素として描かれている場合に、魂が死ぬと言われている箇所も一つもあり

ません。不死はからだにだけ関係しているので、死ぬべきこともまた、からだにだけ当てはまります。しかし魂は死ぬべきものではないので、魂の不死というものもありません。ある人々が主張しているように、魂が後になって永遠のいのちを受けることによって初めて不死を得た、というのでもありません。

新約聖書において、死ぬべきことはからだにだけ当てはまります（ローマ 6:12、8:11、コリント第一15:53-54、コリント第二4:11、5:4）。からだは死ぬべきものであり、したがって目に見える、それゆえ過ぎ去る被造物に属しています（コリント第二4:18）。私たちの目に見えない魂については、それがからだとは対照的に永遠である、ということが当てはまるのです。

ですから、「魂の不死」という概念は、本当は適切ではありません。私が大切にしたいのは、この概念を擁護することではなく、この概念が言い表している真理を擁護することです。私たちはむしろ「魂の永遠の存在」について語るべきでしょう。私が「魂の不死」という概念を使い続け、さらにはこの本の題名にまで用いているのは、よりよく意思を通じ合わせるためなのです。

人間の永遠の存在には、魂の永遠の存在だけでなく、（復活における）からだの永遠の存在も含まれています。人間は、その全体において永遠に向けて造られているのです。「魂の不死」という概念が、人間の全体のうちの魂という一つの側面だけを取り上げているのは、それが死と復活の間の時期だけに関係しているからです。ですから、この概念が聖書の枠組みの中で有効なのは、この期間についてだけです。それを越える意味はすべて、ギリシア的な考えを受け入れることになり、それは全面的に退けなければなりません。

4.3 死と復活の間

死と復活の間の時期、霊魂はからだなしにあります。からだは朽ちていき、復活において初めて再び生み出されます。ここで、ある人々は次のように反論します。からだとその感覚がなければ意識はありえないのだから、魂はからだなしに独立した存在を持つことはできない。人間の統一性は、死が人間のあらゆる機能に終止符を打つようなものなのだ、と。

4.3.1 からだのない魂の意識

死後の人間の状態は、まったく異常なものです。死が人間の統一性を打ち砕くからです。死は靈魂をからだから引き離します。靈魂はこれから、からだなしで「やっていかなければ」なりません。この状態が完全なものでないことは明らかなです。しかし、それによって、からだのない靈魂には意識がないということが証明されるわけではありません。目に見える世界では、私たちが意識を持つためにはからだと感覚が必要です。しかし私たちは、そのことを、私たちには見えない、まったく性質の異なる死の向こうの世界に当てはめることはできません。

2章で扱った本文から明らかになったように、死後、からだのない魂とその意識には何の制限もありません。死後の魂の意識は、からだに縛られてはいないのです。本来はからだにしか帰することのできない、話すことや聞くことといった機能が、殺された人々の「魂」にも当てはまっています（黙示録 6:9。2.9節参照）。私たちはからだのない魂の状態を思い描くことができないとしても、だからといって、そのような状態の存在を排除してはなりません。御使いたちのことを考えてみてください。彼らは霊であり（ヘブル 1:7、14）、からだを持っていません。それでも、彼らは人格としての意識を持っているのです。

使徒パウロは、第三の天に引き上げられたとき、自分が「からだを離れて」いた可能性もあると考えていました（コリント第二12:1-4）。

4.3.2 魂にはまだからだが必要なのか

もう一つの論拠は、次のようなものです。「人間の魂が死後も生き続け、信者の魂がパラダイスに入るのなら、そのうえ復活が何のために必要なのか。からだがなくとも至福の存在形態に達するのなら、何のためにからだが必要なのか。」

ここでも私は、死と復活の間の時期が、まったくの例外状態であることを強調しておきます。人間はこの時期のために造られたのではなかった、と言うこともできるでしょう。人間的に言えば、死は予定されていなかったのだ

す。人間が死ぬことは、神のみこころではありませんでした。ですから、たとえ信者たちがパラダイスにいるとしても、死後の状態を完全なものと呼ぶことはできません。彼らのからだは死の手に落ちてしまったのです。

この論拠は、すでに何度も扱ってきた、神によって造られたからだの価値と人間の統一性についての真理へと、私たちを再び導きます。神のこのみわざは、死によって破壊されてしまいました。しかし死は、ただ復活によってのみ打ち負かされ、取り除かれるのです。

イエス・キリストのみわざがその復活なしには不完全であるのと同じように（ローマ4:25）、死んだ信者たちのからだは墓に残されたままであるなら、贖いもまた不完全でしょう（ローマ8:23）。もし復活がなかったなら、死が勝利していたことでしょう。復活において問題になっているのは神の誉れと栄光であり、それは復活がなければ損なわれてしまうのです。

キリストは死なれた後、パラダイスに行かれました（2.3節参照）。しかし主は、そこが最高の至福の場所であるにもかかわらず、そこにとどまられませんでした。主は死者の中からよみがえられたのです。私たちの救いは、主の復活にかかっています。主の復活がなければ、義と認められることも、神との平和もないでしょう。このことは、主がパラダイスに行かれ、主の靈魂が死ななかったことと矛盾しません。ここに私たちは、魂の不死と復活が互いを排除したり、打ち消し合ったりするものではないことを見ます。ですから、聖書的な意味での魂の不死は、復活を無意味にするものではありません。しかし、ギリシア的な意味での魂の不死を信じるなら、確かに復活は必要なくなります。次の対比が示すように、ギリシア哲学の不死の概念は、聖書の不死とは何の共通点もないのです。

4.4 聖書における不死とギリシア哲学における不死

魂の不死の教えに反対する最も強い論拠として持ち出されるのは、その異教的な起源です。ギリシア人の不死の考えは、プラトン（Plato）において最もよく知られた形をとりました。もっとも、魂の不死を信じる信仰は、ギリシア人よりもずっと前から、たとえばバビロニア人のもとにすでにありました。

キリスト教界は、ギリシア人の不死の考えを受け入れて、聖書の教えと混ぜ合わせてしまったのでしょうか。残念ながら、実際にそうであったことを認めなければなりません。この点では、魂の不死を退ける人々が正しいと言わなければなりません。ですから、はっきりとした境界線を引き、あらゆる混合を退けなければならないのです。

ギリシア的な思考と、**聖書的な不死**の概念と結びついたキリスト教の復活の希望との対照を手がかりにして、私が異教といかなる妥協もしていないことを明らかにしたいと思います。四つの点で挙げる違い（もちろん、これですべてというわけではありません）は、この二つの考えがどれほど相いれないものであるかを示すのに十分でしょう。両者は、出発点も終着点もまったく正反対なのです。

4.4.1 二元論

ギリシア哲学は、人間を二つの実体に分けます。からだと魂、あるいは物質と精神です。聖書の見方からしても、それが同等の価値を持つ区分であるなら、この区分はまだ許容できるでしょう。¹³⁹ しかし、そうではありません。ギリシア人は魂と精神的なものをからだよりも高く評価し、からだを魂の牢獄と見なしていたからです。ですから彼らにとって、死は牢獄からの解放であり、それによって魂は真のいのちに至るのです。彼らにおいては、精神と物質の間に分裂があったのです。

聖書においては、人間の創造から出発して、からだが二次的なものであることは決してありません。からだは神の被造物であり、それゆえ良いものだからです（3.3節参照）。罪が死をもたらしたとしても、信者のからだは神ご自身の住まれる宮であることに変わりはありません（コリント第一6:19）。信者は、そのからだをもってキリストのからだの一部分なのです。

4.4.2 復活

ギリシア人はからだの復活を知りませんでした。それは彼らの思考に合わなかったからです（使徒17:32-34）。からだの復活は、魂を再びからだという

139. 「内なる」人と「外なる」人として。

牢獄の中に戻すことになってしまうからです。

からだは、魂がそこから解放されなければならないようなものではありません。そのことは、復活という事実によって明らかになります。神ご自身が、復活においてからだを回復されるのです。

キリスト者が靈魂の永遠の存在を信じるとき、それによって復活を放棄しているわけではありません。復活は、聖書的な意味での魂の不死によって置き換えられることも、排除されることもありません。両者は必ず一つに結びついていています。しかも、一方がなければ他方もない、というほどに結びついていてのです。

神は人間の靈魂を不死のものとして造られたので、人格の同一性を保ったからだの復活を可能にされました。ですから復活とは、人間が死ぬときに落ち込む無からの新しい創造ではなく、靈魂とからだを再び一つにすることなのです。一人ひとりの人間の人格としての同一性が、復活において保たれ、継続されることこそが、神のみこころです。

このように、死者の復活は魂の不死の前提です。もし復活がないのなら、魂の不死もないでしょう。神のご計画は、人間をその全体において包み込んでいます。ですから、からだのない魂の永遠の存在というものはありえません。神は人間の統一性を回復されるのです。

すでに挙げた資料から、私たちは、パリサイ人が魂の不死を確信し、また復活を信じていたことを知っています。彼らもヘレニズムの影響にさらされていましたが、復活は、旧約に基づいた彼らの信仰の遺産でした。彼らにとって、魂の不死と復活の関係を認めることは、何の問題でも矛盾でもなかったのです。

魂の不死と死者の復活は、対立するものではありません。聖書の教えによれば、両者は一つに結びついており（2.2節参照）、互いを前提としています。それは、キリスト教の教えと異教の考えとの妥協でも、混合形態でもありません。

4.4.3 魂の不死は最終状態ではない

ギリシア人においては、魂は死後にその最終的な目的地に到達します。魂は人間のうちにある「神的なもの」であり、神のもとに帰るのです。聖書によれば復活があるので、魂は死後もまだその最後の目的地に到達してはいません。聖書の見方による魂の不死の教えは、永遠の最終状態を描いているのではありません。死後に問題になっているのは、復活までしか続かない、魂の一時的な状態なのです。死は、時間的に限られた「例外状態」をもたらしました。それは、イエス・キリストの復活のおかげで、取り除かれることになるのです。

4.4.4 人格

ギリシア人は、魂の先在を信じていました。神的な火花としての魂が死後に神のもとへ帰るのと同じように、魂は人間がみごまれる前から、すでに神のうちに存在していたということです。彼らは魂を、超自然的な「全体魂」の一部と見なしていました。その魂は、からだという牢獄を脱ぎ捨てた後、再びその個性を失うのでした。

ここに、聖書の魂の概念との決定的な違いがあります。聖書においては、魂は神の創造によって、一人ひとりの人間の人格の座であり、表現です。魂は個別の靈魂であり、永遠にそうあり続けます。その存在は、一人ひとりの個人の歴史より前に始まるのではなく、その歴史とともに始まり、決して終わることがありません。

これほど重大な違いがあるのに、キリスト者が魂の不死について語るとき、ギリシア人と同じことを意味しているのだ、という非難をなおも持ち続けることができるのでしょうか。キリスト者は、ただ異教の思想を受け入れただけなののでしょうか。ここに挙げた違いは、そうではないことを十分に明らかにしているはずです。

4.5 結論

以下に、すべての人が永遠の存在を持っており、聖書の教えによれば、そこには永遠の靈魂も含まれている、と私が信じる理由を三つの点にまとめます。

- 人間の霊は、神ご自身が吹き込まれたいのちの霊です（3.1節参照）。この霊は神から出たものであり、同時に人間の霊を形づくっているのです、人間の靈魂は、神の霊そのものと同じように永遠に存在しなければなりません。この存在は、すべてのものをいのちに保っておられる神のみこころにのみ基づいています。
- 次に、私たちは、死後の状態についての聖書の証言を詳しく調べました（2.1～2.10節）。そこで明らかになったのは、人間は死んでも存在しなくなるのではなく、生き続けるということです。この事実を、私たちはどのように説明すればよいのでしょうか。最も筋の通った説明は、人間の靈魂は肉体の死に服していない、ということです。
- 永遠のいのちを持っている人々のほかに、それを持っていない人々がいます。それは信じない者たちであり、主イエスは、彼らが永遠の苦しみに入ると言われました。この苦しみは、信者たちの永遠の喜びと同じように終わりがなく、したがって永遠です（マタイ18:8、25:41、46、テサロニケ第二1:9、ヘブル6:2）。滅びゆく者の上には、神の怒りがいつまでもとどまります（ヨハネ3:36。6.2節参照）。

ルネ・パシュ（René Pache）¹⁴⁰は、このテーマを的確にまとめています。

人間は

- 誕生のときに、その魂とともに終わりのない存在を受け、
- 新生のときに……永遠のいのちを受け、
- 復活のときに、そのからだとともに不死を受ける。

140. ルネ・パシュ（René Pache）*Das Jenseits*, Wuppertal (Verlag Sonne und Schild), 1957。

魂の不死は、死という現実から目をそらすことではなく、聖書が描いている人間の存在の本質的な構成要素なのです。

4.6 この真理の意味

この重要な真理は、福音の宣教にとって大きな意味を持っています。まさに、すべての人が不死の魂を持っているという事実の中に、人々に福音を届けようとする原動力があるのです。パウロは言っています。「こうして、主を恐れることを知っている私たちは、人々を説得しようとしています」（コリント第二5:11）。キリストのさばきの座は、信じない人々や悔い改めない人々にとって、彼らの永遠の運命を決定づける判決が言い渡される瞬間となります（ローマ14:10-12、黙示録20:11-15）。ですから、すべてのキリスト者は、福音を宣べ伝えることの必要性に心をとらえられるべきです。「福音を宣べ伝えないなら、私はわざわざいます」（コリント第一9:16）。

理解を深めるための問い

- 魂の不死がしばしば退けられるのはなぜですか。
- この拒否は正当なものでしょうか。
- 魂の不死の聖書的な意味は何ですか。
- 永遠のいのちと魂の不死の違いは何ですか。
- 不死の魂を持っているのは、どのような人々ですか。
- 永遠のいのちを持っているのは、どのような人々ですか。
- 魂はからだなしに意識を持つことができますか。また、それはなぜですか。
- 魂にはそもそもからだが必要なのですか。また、それはなぜですか。
- 魂の不死について、ギリシア的な理解と聖書的な理解の間には、どのような違いがありますか。

5 死者の将来

これまでの章で明らかになったように、人間は、信者であってもそうでなくても、死んだときにまだ最終状態に到達してはいません。人間が死の直後に意識をもって体験する状態は、時間的に限られたものです。ですからそれは中間状態であり、永遠への途上にある中継地なのです。しかし死者たちには、中間状態が始まるとともに、自分がどこで永遠を過ごすことになるのかすでに明らかになります。この時期は、すでに永遠において彼らの分となるもの、すなわち一方では苦しみ、他方では喜びによって特徴づけられているからです。

神は信者たち、すなわち神の子どもたちに対して、すばらしいことを計画しておられます。神のご計画は、彼らに栄光を与え、御子のかたちと同じ姿にすることです（ローマ8:17、29、30）。このことはすべての信者に当てはまります——キリストが再び来られるときにまだ生きているか、すでに死んでいるかにかかわらずです。死は神のご計画を止めることはできません。死はキリストの復活において滅ぼされたからです。

神と和解しないまま、神との平和を持たずに死んだ人々の場合は、事情が違います。彼らにも将来があります。彼らは死において消滅するものではありません。不死の靈魂を持っているからです。しかし、彼らの将来は恐ろしいものとなるでしょう。聖書のことばによれば、彼らは「滅びゆく」者たちです。彼らにとっても中間状態は終わります。そしてそのとき、彼らは判決を言い渡されるために、全地をさばく方（創世記18:25）の前に引き出されるのです。

信者たちの将来と信じない者たちの将来は、根本的に異なっています。それは、出来事の時間的な流れについても言えます。ですから私たちは、神が信者たちと信じない者たちについてどのようにご自分の目的を達成されるのかを見るために、二つの線をたどっていくことにします。

中間状態は、靈魂がからだから切り離されていることによって特徴づけられています。神は常に人間全体を見ておられるので、これが最終的な状態であることはありえません。ですから、復活——人間の統一性の回復——こそが、死者たちが体験する次の大いなる出来事なのです。

5.1 復活

復活は、死の状態、すなわちからだと靈魂の分離を終わらせます。人間をその全体において、すなわち靈と魂とからだから成るもの（テサロニケ第一5:23）として回復すること——それが、創造に根ざした神のご意図です。

復活におけるこの回復は、あたかも人間が死においてすっかり消え去り、抹消されてしまったかのような、無からの新しい創造ではありません。アダムが死後に再びちりになったとき、それは「アダム全体」に及んだのではなく、地のちりから造られた死ぬべきからだにだけ及んだのです。アダムの靈魂は、死ぬべきからだのように朽ち果てはしませんでした。朽ち果てることもありませんでした。そのうちには神のいのちの息があったからです。

このように人間の靈魂は、死後、からだから切り離されたまま生き続けます。神が復活において、それを再びそのからだの一つにされる瞬間までです（コリント第二5:1-4）。

靈魂が復活まで存在し続けることは、すべての人間の人格としての同一性が復活においても保たれることの根拠であり、前提です。つまり人間は、復活においても、かつて地上で生きていたのとまったく同じ人間なのです。神が一人ひとりの人間にお与えになった人間の人格——そこには靈と魂とからだが含まれています——（詩篇33:15、イザヤ45:9、ローマ9:20-21参照）は、失われることはありません。それは変えられることも新しく造られることもなく、保たれるのです。ですから、からだは新しいものになるとしても、墓から出て来るのは別の人間ではありません。一人ひとりの人間が人格として神にとってどれほど尊いものであるかは、なんとすばらしいことでしょうか！？

その証拠が、主イエス・キリストの復活です。死者の中からよみがえられたのは、十字架で死なれたのと同じ主でした。人としての主の死もまた、主の靈魂がからだから分離することでした。主——すなわち主の靈魂（使徒2:27、31）——は、死なれたときにパラダイスに、天の御父のもとに行かれました（ルカ23:43、46）。主のからだは三日間、墓の中にありました。ですから、主が本当に死なれたことに疑いの余地はありませんでした。主の復活において、この分離は再び取り除かれました。こうして主は今、復活における人として、多くの兄弟たちの中で長子として第一の位置を占めておられるのです（ローマ8:29）。

それでもなお、からだに関して言えば、復活は新しい創造のようなものです。それを成し遂げることができるのは、いのちと死の主である神だけです。それは創造のときと同じです。「主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは立った」（詩篇33:9）。神は「死者を生かし、無いものを有るものとして召される方」です（ローマ4:17）。崩れ去ったからだを、一人ひとりの人間に固有であった特徴をもって再び生み出すことができるのは、神だけです。そこに、神の力の偉大さと、その大能の力が現されるのです（エペソ1:19-20）。

5.1.1 旧約聖書における復活

死者の復活は、すでに旧約の時代に人々の希望でした。ですからアブラハムは、神に従ってひとり子をささげる勇気を持ちました。「神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と彼は考えた」からです（ヘブル11:19。創世記22章、ローマ4:17参照）。イザヤは言います。「あなたの死人たちは生き返り、私の屍たちはよみがえります。ちりの中に住む者たちよ、目を覚ませ、喜び歌え」（イザヤ26:19）。ダニエルは言います。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に」（ダニエル12:2）。エゼキエルは言います。「神である主はこう言われる。見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、わたしの民よ、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く」（エゼキエル37:12。5、6節も参照）。

復活（民族としての復活であれ、からだの復活であれ）は、信仰を持つイスラエル人の信仰の遺産でした（ヘブル6:2、使徒26:6-8、ヨブ19:25-27）。この復活の希望でとりわけ知られていたのは——サドカイ人とは対照的に——パリサイ人でした。彼らは、メシアが来てその王国を打ち立てるときに、死者の復活があると信じていました（使徒23:6）。

しかし、復活という事実が具体的な形をとるのは、イエス・キリストの復活によります。キリストの復活こそが、そもそも死者の復活の土台だからです。「死がひとりの人を通して来たのですから、死者の復活もひとりの人を通して来るのです」（コリント第一15:21）。キリストが人として死に、人としてよみがえられたので、人間の復活は確かなものとされています。このことはとりわけ信者たちに当てはまります。彼らは、生きるにしても死ぬにしても、よみがえられたキリストと結ばれているからです（ローマ14:8-9）。

しかし、復活は明確に贖われた者たちだけに限られているものではありません。それは、信じなかった者をも含めて、すべての人の分なのです（ヨハネ5:29、使徒24:15）。¹⁴¹ けれども、正しい者たちの復活と正しくない者たちの復活とは、その時期においても性格においても、根本的に区別されています。聖書は明らかに、第一の復活、すなわち贖われた者たちだけにかかわるいのちへの復活があり、「残りの者たち」には最後の復活、すなわちさばきへの復活があることを教えています（黙示録20:5）。ですから、すべての人間が例外なく同時によみがえるような、「終わりの日」（ヨハネ11:24）の「全体的な」復活というものはないのです。

5.1.2 いのちへの復活

いのちへの復活とは、信者たちの復活を指しています。この復活は、神の御子の復活のいのちによって引き起こされ、また特徴づけられているからです（ローマ6:9-10）。御子は、死んだラザロの墓のそばでこう言われました。「わたしはよみがえりです。いのちです」（ヨハネ11:25）。御子こそ、よみがえりであり、いのちそのものです。御子がおられなければ、復活も、死を

141. もっとも、生かされると言われているのは信者たちについてだけです。

越えたいのちもないでしょう！ 信者たちがよみがえるのは、主イエスのいのちを自分のいのちとして持っているからです。

死んだ信者たちがよみがえるもう一つの理由は、聖霊が彼らのうちに住んでおられることです。「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてください」（ローマ8:11）。

イエスのうちにあり（コロサイ2:9、ヘブル9:14）、イエスがよみがえられたときに力をもって現された（ローマ1:4、ペテロ第一3:18）その同じ御霊が、私たちのうちにも住んでおられます（コリント第一6:19、テサロニケ第一4:8、ヨハネ第一4:13）。ですから、いのちの御霊（ローマ8:2）は、死んだ信者たちがよみがえらされるときにも働かれるのです。聖霊は保証であり、したがって、信者たちがよみがえられ（コリント第二5:5）、主が来られるときに取り残されることがない（テサロニケ第一4:13-17）ことの担保なのです。

復活と変えられることにおいて、贖いのみわざは信者たちのうちで完成に至ります（ローマ8:23、ピリピ1:6、テサロニケ第一5:23）。主イエスが信者たちのための救い主として再び来られ（テサロニケ第一1:10、4:15-16、ヨハネ14:3）、私たちの卑しいからだを造り変えてくださるとき、私たちは贖われた罪人として、天に属する方のかたちをも持つようになります（ピリピ3:20-21、テトス2:13、コリント第一15:49）。主は今すでに私たちの救い主（救い出す方。ヨハネ4:42）です。私たちの罪は赦されており、主は私たちを神に導いてくださったからです（ペテロ第一1:19、2:24、3:18）。しかし私たちのからだは、主が来られる前には、まだこの救いにあずかっておらず、罪のゆえにまだ死んでいます（ローマ8:10、6:12参照）。信者のからだは、まだ死ぬべきことに服しています。ですから、生きている私たちは、からだのための救い主として主を待ち望んでいるのです。

このことは、キリストにあって眠りについた人たちにも当てはまります。彼らがよみがえらされるとき、救い主の同じ力強い働きが、彼らのうちに抗い

がたく現されるのです。そのとき、神のご計画の中ではとうの昔に完成したものと見なされていることも、現実となります。私たちは栄光を受け、キリストは兄弟たちの中で長子の位置を占められるのです（ローマ8:29-30）。キリストは新しい創造のかしらであり（コロサイ1:18）、その新しい創造はキリストの復活の実なのです。

使徒ヨハネは、ヨハネの黙示録の中で、いのちへの復活を「第一の」復活と呼んでいます。「これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対して、第二の死は何の力も持っていない。彼らは神とキリストの祭司となり、キリストとともに千年の間、王として治める」（黙示録20:5-6）。

第一の復活にあずかる者が幸いな者と呼ばれるのは、地獄における第二の、永遠の死が、その人に対して何の力も持たないからです。したがって、正しくない者たちは第一の復活にあずかりません。彼らを幸いな者、聖なる者と呼ぶことはできないからです。これは正しい人たちの復活であり、そこで彼らは自分たちの正しい行いに報いを受けるのです（ルカ14:14、20:35-36、使徒24:15）。使徒パウロは、コリント人への手紙第一15章で、死者の復活、とりわけ信者たちの復活について詳しく論じています。この議論のきっかけは、コリントのある人たちが、死者の復活はないと主張していたことでした（12節）。彼らは、それが、キリストも死者の中からよみがえることはできなかった、ということの意味するのを見落としていました——そうだとすれば、彼らの信仰は無意味だったことになるでしょう。パウロは、キリスト教信仰の土台としてキリストの復活を擁護し、偽教師たちに反論した後、さらに復活の本質を説明しました。

「しかし今や、キリストは眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」（コリント第一15:20）。キリストは、ご自分の民の復活の創始者として示されています。キリストは彼らと永遠に結ばれています。キリストは新しい家族のかしらです（ローマ5:12-21）。キリストは彼らのために死からいのちへの扉を開くことによって、彼らの先駆者となり、道を備える方とな

られました。キリストは今、死の向こう側におられ、死はもはやキリストを支配しません（ローマ6:9）。

「初穂」という概念は、優位な立場を表しています。キリストは時間的に見て、ある特定の種類の復活の最初の方です。キリストの復活以前にも、よみがえらされた人々はいたからです。しかし彼らは復活のからだを受けたのではなく、その後再び死にました。キリストの復活において、死は最終的に打ち負かされました。キリストが信者たちをよみがえらせるとき、彼らはもはや死ぬことはありません。

主イエスの優位な立場を、パウロは別の箇所でも描いています。「御子は……死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです」（コロサイ1:18）。キリストがよみがえらされたのは、死者の「中から」でした（マルコ9:9、ペテロ第一1:3、21）。信者たちもまた、死者の「中から」よみがえらされます。すなわち、ほかの者たち——信じない者たち——は、さしあたりまだ残されるのです。この人々は第一の復活にはあずからず、「最後の」復活のときに初めて墓から呼び出されます。ですから聖書は、「死者の復活」と「死者の中から〔外へ〕の復活」とをはっきりと区別しているのです（ルカ20:35、使徒4:2、ピリピ3:11）。

一人の人、アダムによって死が世に入り、すべての人に及んだので、すべての人が死にます（ローマ5:12、21）。しかしキリストにあって、死は滅ぼされます。キリストは人として、ご自分も前もって味わわなければならなかった死を（ヘブル2:9）、その復活によって打ち負かされたからです。キリストが死者の中から復活することこそが、死に勝利するための唯一の道でした。

コリント人への手紙第一15章は、信者たちの復活だけを扱っています。そこで問題になっているのは、キリストに属する者たち（23節）、すなわちキリストのものとされ、キリストのうちにあり（22節）、第二の人のいのちを与える力を経験することになる人々です（45～47節）。しかし、信じない者たちもよみがえらされます。彼らはキリストと何のつながりも持っていません。キリストは、彼らをさばきのために墓から呼び出すことによって、よみがえられた方としてのご自分の力を彼らの上に行使されるのです（ヨハネ

5:29)。人の子のこの力の現れは、最初の創造に対する神の道の締めくくり
に属しています（黙示録21:4）。キリストは最後に、最後の敵である死をも
永遠に取り除かれるのです。

この出来事には、正しくない者たちの復活も含まれています。死が取り除か
れることによって、彼らの（からだの）死も終わるからです。ですから、信
じない者たちの復活は、コリント人への手紙第一15章で直接には取り上げら
れていないとしても、そこに含まれています。この復活は、必然的な出来事
として背景にとどまっているのです。信じない者たちは、この章でこれほど
際立って描かれている、死に対する主イエスの勝利に何の分も持っていません
。

理解を深めるための問い

- 信者たちが「いのちへの復活」にあずかる理由を挙げてください。
- それを、信じない者たちの復活と区別してください。

5.1.3 復活のからだ

復活のからだの性質を描くのが難しいのは、この新しいからだを思い描く手
がかりとなるような、比べられるものが何もないからです。私たちは、今持
っているからだしか知りません。このからだは「肉と血」であり、地のちり
から造られた生まれながらのからだです。罪によって、このからだは死ぬべ
きことと朽ちることに服しています。

パウロは、「肉と血」は天にある神の国を受け継ぐことができない、と言っ
ています（コリント第一15:50）。ですから、地上のからだが変わえられるこ
とが必要なのです。神は信者たちに——眠りについた者たちにはよみがえら
せることによって、生きている者たちには変えることによって——天のから
だを与えられます（コリント第一15:40、48-50）。このからだは、天におけ
るいのちの条件にふさわしいものとなるでしょう。

ですから疑いもなく、それは今のからだとは別のからだでなければなりません。
それでもなお、このからだは今のからだに似たところを持つでしょう。
人間の姿が保たれるという連続性があるのです。よみがえられた主のことを

考えてみてください。弟子たちは主を見分けました。それは、彼らが従ってきた方でした。十字架につけられたときの傷さえ、まだ見えていたのです。

142

この類似性は、パウロにおいても表れています。パウロは、私たちの死ぬべきからだが生かされると言っています。私たちが今持っている死ぬべきからだ、再び生かされ、復活において不死を受けるのです。

同じように聖書は、それが別のからだになることも強調しています。復活を種まきにたとえていることから、地に置かれた種とは別のものが地から生えてくることが明らかになります。この比喩もまた、類似性と連続性があることを明らかにしています。種と、そこから生じる実とは「本質的に」同じです。それらは同じ一つの植物だからです。

私たちは、この二つの側面（類似性と相違）を心に留めておかなければなりません。私たちが今持っているからだに結びついている人格は保たれ、そのようなものとして見分けられるでしょう。しかし、からだの性質はまったく新しいものになります。それは、古い創造と新しい創造にたとえることができます。新しい創造も古い創造に似ていますが、同時にまったく新しいものになるのです（黙示録21:1）。

この新しいからだに関して最も偉大なことは、私たちが神の御子であるキリストに似た者になるという事実です（ヨハネ第一3:2）。パウロは言います。「栄光あるものによみがえらされ」（コリント第一15:43）。すべてがキリストの栄光の刻印を帯びるのです。それは、キリストが天に上り、栄光を受けられたときに受けた栄光です。主に似た者となることは、主の外的な栄光にかかわっています。こうして私たちは、主とともに現れるとき、**天に属する方**のかたちを持つことになります（コリント第一15:49、ピリピ3:20-21）。ですから主は、信じた人々の中で感嘆されることになるのです（テサロニケ第二1:10）。

142. これはきっと例外でしょう。それは主の贖いのみわざの傷だからです（ほふられたような姿の子羊、あるいは死の傷を負った子羊を参照。黙示録5章）。私の考えでは、信者たちは復活のからだに傷跡を持つことはないでしょう。

死は打ち負かされているので、新しいからだはもはや死ぬべきものではありません（コリント第一15:54-55）。死んだからだについては、それが朽ちないものを着ると言われています。死んだからだは崩れ去りました。新しいからだには、そのようなことはもはや決して起こりません。まだ死んでいない、生きている者たちのからだについては、それが不死を着ると言われています。もはや死はないのです（黙示録21:4）！

新しいからだのこれらの特徴、すなわち朽ちないことと不死も、よみがえられた神の御子の特徴です。「私たちは知っています。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはありません」（ローマ6:9）。主イエスは、正しい人たちは復活においてもはや死ぬことがない、と言われました。彼らは不死である御使いたちと等しいのです（ルカ20:36）。

この関連で主は、復活においては夫婦の関係はなく、したがって生殖ももはやない、とも言われました。それは、男女の区別もなくなるという意味ではありません。この区別は、神が人間の人格を保たれることによって保たれるのです。そして、男であること、女であることも、まさにその人格に属しているのです。

生まれながらのからだは、地上のために造られています。ですから、地上との結びつきによって形づくられ、規定されています。それは、地上の法則といのちの条件に服していました。しかし復活において、私たちは「御霊に属するからだ」（コリント第一15:44）を受けることになります。このからだは、もはや地上の条件に服することはありません。そのことは、復活における主イエスのからだにはっきりと表れています。そのからだは、空間と時間に縛られていませんでした。主は閉ざされた戸を通して入って来られました。弟子たちの見立てでは、それは霊でしかありえませんでした。しかし主は、霊には肉や骨のからだの特徴はないと言われました。弟子たちは主にさわることができ、主は焼いた魚を食べることさえなさいました（ルカ24:36-43）。

理解を深めるための問い

- 復活のからだの特性をいくつか挙げてください。

5.1.4 復活の時

ですから、終わりの日に、すべての死者が一度にいっせいに復活する、という一般的な復活があるわけではありません。聖書は、正しい人たちが復活する時と、正しくない者たちが復活する時とをはっきりと区別しています。そのことは、すでに次の事実が示しています。すなわち、信者たちの「死者の中から」の復活があり、そのとき、ほかの死者たちはさしあたりよみがえられない、という事実です。「第一の」復活という呼び方（黙示録20:5）も、後にさらに「第二の」、あるいは「最後の」復活があることをはっきりと示しています。

終わりの日に**ただ一つ**の一般的な復活があり、その後にさばきが続くという考えは、主イエスの次のことばから導き出されています。「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます」（ヨハネ5:28-29）。

人々は「時」ということばから、一般的な復活は**ただ一つ**しかありえない、と結論づけます。その際、「時」を一つの時点と理解しているのです。しかしここでは、より長い期間にわたる一つの時代を考えなければなりません。ヨハネは、しばしばこの意味で「時」について語っています（ヨハネ4:21、23、5:25、16:2、25、ヨハネ第一2:18、黙示録3:10、14:7、17:12）。これらの節から明らかなのは、「時」が一つの時点や60分という時間の単位を指しているのではなく、一つの時代を指している、ということです。その時代は、一方では一時間よりもはるかに長く続き、他方では特定の特徴と出来事によって特色づけられています。

ヨハネの福音書5章25節で、主はある「時」について語っておられます。その「時」は60分という時間に限定することはできず、すでに2000年続いている恵みの時代を含んでいます。この時代に、神の子の声が人々を霊的な死から呼び出しているのです。復活との関連では、「時」は少なくとも1000年という期間にわたります。「時」のこの比喩的な意味は、「終わりの日」（ヨハネ6:39以下、11:24）にも当てはまります。この日は、世界の終わりを画する

一つの時点を指しているわけではありません。「時」と同じように一つの期間、一つの時代であり、その中でさまざまな復活が起こるのです。

いのちへの復活、すなわち信者たちの復活は、キリストが再び来られるときに起こります。それは神が定められた順序に属しています。「しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです」（コリント第一15:23）。ここでは、正しい人たちが復活する時が、キリストが来られる時と同一視されています。これによって、その時ははっきりと定められています。そしてキリストの来臨（ギリシア語 *parousia*）は、二つの異なる時点に起こります。したがって、「第一の」復活にも二つ、あるいは三つの段階があることになります。1. キリスト、2. 携挙のときの信者たち、3. 平和の王国の初めの殉教者たちです。

まず主イエスは、生きているすべての信者たちをご自分のもとに、天へ迎えるために再び来られます（ヨハネ17:24、ピリピ3:20-21）。父の家へ迎えるためです（ヨハネ14:2-3）。これは信者たちを携挙するための主の来臨であり、そのときキリストにある死者たちはよみがえらせ、生きている信者たちは変えられます（コリント第一15:51-52、テサロニケ第一4:13-17）。この最初の来臨は信者たちだけに関わるものです。そのとき主は、後の時点でそうなるように、すべての人に見える形で来られるわけではありません。

キリストの最初の来臨は信者たちの希望です。彼らは、天から来られる神の御子を待ち望んでいます。御子は、来たるべき御怒りから彼らを救い出してください。その御怒りは、彼らが天にいるときに地上に臨むのです（テサロニケ第一1:10）。この復活には、旧約の時代の信者たちも加わります（ヘブル11:35、39-40）。彼らは復活の後、教会の信者たちとともに、24人の長老たちの中に見られます。この長老たちは、天で神の御座と子羊を取り囲みます（黙示録4:4以下）。神の御怒りとさばきが地上に臨むとき、復活した者たちは天にいるのです（黙示録6-19章）。

その後、主イエス・キリストは、すべての人に見える形で、二度目に、力と栄光をもって現れます（テサロニケ第二1:7-8、ヘブル1:6、黙示録1:7、

19:11-16)。そのときにも信者たちが復活します。それは携挙の後に死んだ人たちです。ヨハネは彼らについて、彼らが神のことばとイエスの証しのゆえに首をはねられたこと、そして獣を拝まなかったことを述べています。彼らは生き返らされるのです（黙示録20:4）。

したがって、第一の復活は二つの段階で起こります。

- まず、教会の信者たちと旧約の信者たち
- 次に、携挙の後、平和の王国までの間に死んだ信者たち

第一の復活にあずかる信者たちは、栄光のからだをもって天に迎え入れられます。彼らはそこに永遠に住みます。彼らは天のからだを受け、そのからだによって、地上ではなく天に永遠の住まいを持つのです。

よみがえらされた信者たちには、もはやさばきはありません。彼らにとって、さばきの問題はゴルゴタの十字架で解決されたのです。また、すでに完全な者とされ、栄光のからだをまもっている人たちが、なおさばかれ、結局は滅びてしまう可能性がある、ということがないのも当然です。

それでも信者たちは、キリストのさばきの座の前に立ちます（コリント第二5:10）。しかしそこでは、救いの問題が扱われるのではありません。そこで扱われるのは、彼らの働きの評価と報いです（コリント第一3:12-15）。そこで彼らは、自分の生涯を神の視点から見て評価し、自分が知られているのと同じように知るようになります（コリント第一13:12）。彼らは、自分たちを確かに目的地まで導いた恵みを知り、それをほめたたえるのです。

5.1.5 さばきへの復活

正しくない者たちの復活（使徒24:15）については、聖書はわずかしき語っていません。いくつかのことは、いのちへの復活と対比する中ですでに取り上げました。聖書はこの復活を、必ず起こる重要な出来事として語っています。神はこの出来事によって、最初の創造の歴史を締めくくられるのです。

この復活は一瞬のうちに起こり、第一の復活にあずからなかったすべての死者、すなわち残された死者たちを含みます（黙示録20:5）。ただこの意味に

おいてだけ、終わりの日の一般的な復活について語ることができるでしょう。

主イエスは、正しくない者たちをその墓から呼び出されます（ヨハネ5:28-29）。主はこの復活を「さばきへの復活」と呼んでおられます。それがさばきによって特徴づけられているからです。正しくない者たちは、信じなかったので、生きている間にすでにさばかれています（ヨハネ3:18）。彼らは復活の後、永遠のさばきへと進みます。そのさばきは、大きな白い御座での審理によって始まります（黙示録20:11）。

使徒ヨハネは、ヨハネの黙示録20章11～15節で、この出来事について語っています。彼は、キリストの支配の1000年が終わるまで生き返らない、**残りの**死者たちについて語っています（黙示録20:5）。これによって、最後の復活の時もはっきりと定められています。この支配の時代の終わりに（コリント第一15:24）、死者たちは呼び出されます。彼らは、生きている者と死んだ者のさばき主の前に引き出されるために復活するのです（ヘブル12:23、ローマ2:16、テモテ第二4:1）。

ヨハネはこの将来の出来事を印象深く描いています。彼はまず、大きな白い御座を見ます。それは、最高の権威と、絶対的な義と聖さという印象をただちに与えます（ヨハネ第一1:5）。それから彼は、御座に着いておられる方を見ます。この方の前から、天と地は逃げ去ります。それは最初の創造の終わりです（コリント第一15:24）。地と天は逃げ去り（黙示録20:11）、焼けて崩れ去ります（ペテロ第二3:7、11）。今や古い創造は、新しい創造に場所を譲らなければなりません。このようなことを引き起こす方は、どれほどの方でなければならないことでしょうか。この方の前に立つ人々は、いったい何を感じるのでしょうか。

御座に着いておられるのはだれでしょうか。それは主イエス・キリストです。人の子であり、父なる神がさばきのすべてをゆだねられた方です（ヨハネ5:22、27、使徒10:42、17:31、コリント第二5:10）。さばき主は、ご自身が地上で生き、人間であることを完全に知っておられる一人の人です。です

から、主が人間のどのような状況であれ、経験に基づいて判断することができないなどと言いがかりをつけることは、だれにもできないのです。

それからヨハネの目はさらに移り、彼は御座の前に大勢の人々が立っているのを見ます。それは、かつて地上に生きたすべての信じない死者たちです。ただの一人も忘れられてはいません。最も小さな者から最も大きな者まで、すべての人がそこに現れます。この真実の時には、何の差別もありません。

注目すべきことに、これらの人々は、よみがえらされた後もなお「死者」と呼ばれています。これは矛盾ではありません。大きな白い御座の前に立つのは正しくない者たちだけである、ということがすでに明らかになっているからです。第一の復活、すなわち正しい人たちの復活は、すでに少なくとも1000年前に起こっています。御座の前の人々が、よみがえらされたにもかかわらず「死者」と呼ばれているのなら、それは彼らの失われた状態を表しています。彼らは自分の罪の中で霊的に死んでおり（エペソ2:1）、罪の報酬としてからだの死を死にしました。そして判決が言い渡された後、自分の負い目と罪深さを十分に自覚しつつ、永遠の死へと進んでいくのです（黙示録20:6、14）。

判決の証拠となるのは、いのちの書¹⁴³と、すべての行いが記録されている数々の書物です（ダニエル7:10）。いのちの書には、いのちへの復活にあずかったすべての人が記されています。ですから、その人たちはこの御座の前にはまったく立ちません。彼らの復活は、すでに1000年前に起こっているからです。このさばきにおいて、いのちの書に名が見出されなかった者はみな火の池に投げ込まれた、と書かれています。ですから、ここに立っているのは、火の池に投げ込まれる者たちだけなのです！

しかしヨハネの描写からは、御座の前には火の池に行かない人たちも立っている、と読み取ることもできそうです。そこにいのちの書が出てくるからです。なぜいのちの書が持ち出されるのでしょうか。その理由は、このさばきがきわめて厳密に行われるからです。そこで一人の人について、その人の状態に関して生じうるどんな疑いも取り除かれます。書物を調べることによっ

143. ルカ10:20、ピリピ4:3、ヘブル12:23、黙示録3:5、13:8、17:8、20:12、15、21:27、22:19。

て、どんな取り違えも排除されます。いのちを持ち、この書に名が記されている人が、不当に火の池に投げ込まれることはないのです。

人はそこで完全に罪を指摘され、自分自身についての真実を知らされます。そのためには、すべての行いが記録されているほかの書物も役立ちます。ここで特に注意すべきことは、信じない者たちが自分の行いに応じてさばかれる、ということです。すべての行い——良いと思われていた行いも悪い行いも——が見られ、吟味され、評価されます。このさばき主の前で、人は自分の生涯がどれほど腐敗していたかを認めなければなりません。この認識は恐ろしいものです。そこには償いもなく、その人のためにとりなしてくれる弁護者もないからです。

表面的な判決や大ざっぱな判決が下されることはありません。さばきは、細部に至るまで絶対的に公正であり、買収されることもありません。正しく、すべてを知っておられるさばき主がさばきを行われるからです（テモテ第二4:8、詩篇7:11、9:4）。

ヨハネはもう一度、これほど多くの死者がどこから来るのかを考えているようです。彼は、海と死とハデスが、その中にいる死者たちを出すのを見ました。これによって、死者がまだいる可能性のある場所や状態は、一つも除外されずに残りません。死とハデスは火の池に投げ込まれ、これによって最後の敵である死は終わりを迎えます（コリント第一15:26）。

そうなると、第一の死、すなわちからだの死は、もはやありません。最後の復活の後には、靈魂とからだが分離しているという意味での死者は、もういなくなるからです。ですから、死者の場所としてのハデスはもはや必要とされません。この事実から導かれる恐ろしい結論は、正しくない者たち、すなわち失われた人たちは、からだをもって第二の死、すなわち火の池を味わうことになる、ということです。主イエスは、「魂もからだも地獄で滅ぼすことができる方」を恐れなさい、と言われます（マタイ10:28）。このことから、人が魂とからだをもって地獄、すなわち火の池に行くことは、誤解の余地なく明らかです。

ですから、この第二の復活は、ただ正しくない者たちがからだをもって地獄へ追放されるという目的のためだけに起こるのです。彼らの滅びは、その魂だけでなく、そのからだにも及びます。こうして死者たちは、復活とさばきの後、決定的で永遠の状態に入るのです。

理解を深めるための問い

- 信者たちと信じない者たちの復活の、さまざまな段階（あるいは時点）を区別してください。

6 永遠における人間

永遠の状態の始まり、すなわちまったく新しい創造の始まり（黙示録21:1）は、世界に対する神のみわざの完成です。救いの歴史は、長い時を経て完結しています。神は最後に目的を達成し、ご自分の永遠のご計画を完成に導かれました。神はその中でご自分の栄光を現されます。神はすべてを行い、すべてを与えてくださいました。それは、神の被造物であり神のかたちである人間が、至福と永遠の喜びを味わうことができるためです。

死後のいのちについて、私たちが神のことばの啓示に完全に頼らなければならないのであれば、永遠における人間について考えるときにも同じことが言えます。この問いにおいても、私たちは神の啓示を必要としているのです。神がこのことも、私たちが自分の生活にとって重要な結論を引き出せるほどに啓示してくださっているのは、神の大きな恵みのおかげです。将来のことに取り組むことが、私たちの好奇心を満たすだけでなく、日々の生活にも影響を及ぼすこと——それが常に神の目的なのです。

永遠においても、今日とまったく同じように、二つのグループの人々がいます。神からのいのちを持っている人たちと、神からのいのちを持っていない人たちです。ここに、私たちのテーマ、すなわち人間の永遠の存在、言い換えれば魂の不死との関わりがあります。人が死後に——たとえ一時的にであれ——その存在を失うと考えるなら、人はいつかその存在を最終的に失う、という結論を引き出すこともできるでしょう。ですから、魂は死ぬべきものだと思える人たちのもとでは、信じない者たちはいつか消滅させられる、という見解が見られます。魂が死ぬべきものだという教えと、人間が消滅するという教えは、たいていいいっしょに見られます。魂が死ぬべきものであることは、当然、人間の消滅の前提だからです。しかし私たちは今や、聖書に基づいて、人間が永遠の存在を持っていること、そしてそれゆえに信じない者たちが決して消滅させられないことを確認しました。

遅くとも次の考察において、魂の不死、あるいは人間の永遠の存在という真理が、付随的なことでも二次的なことでもないことが明らかになります。この真理を、キリスト者の間の一致のために、うやむやにすることはなりません。この真理を捨てるなら、聖書の教えの姿はゆがめられ（ローマ6:17）、福音のメッセージは損なわれてしまいます。

6.1 永遠における信者たち

自分に永遠の将来があることを疑う信者は、ごくわずかです。「どこで」「どのように」については考え方が分かれていても、皆が喜びに満ちた期待をもって永遠に向かって進んでいます。私たちは、神の日の到来と、新しい天と新しい地を待ち望んでいます（ペテロ第二3:11-13）。

神は私たちを、キリスト・イエスにあって、ご自分の永遠の栄光へと召してくださいました（ペテロ第一5:10）。私たちは、神ご自身の栄光と神ご自身の御国へと召されているのです（テサロニケ第一2:12）。ことばに言い表せない栄光が私たちのために備えられており、それは私たちの想像をはるかに超えるものです（たとえばローマ8:18、21、29-30、テモテ第二2:10）。

「天では、この地上で私たちの生活を苦しめているすべてのものが、永遠に克服されています。その場所に住む人たちは、痛みも、悲しみも、落胆も、病気も、死も、罪も、自己中心も、疲れも、苦しみも、もう二度と耐える必要がありません。『以前のものが過ぎ去った』からです（黙示録21:4、22:3参照）。天は、ことばに言い表せない愛と、美しさと、平和と、喜びと、冒険と、神との交わりの場所となるでしょう（黙示録21:4）。限りなく愛に満ち、全能で、すべてを知っておられる神が、ご自分のひとり子を進んでささげてくださったその人々のために、永遠において何をしてくださるのか、私たちには想像しがたいことです（ローマ8:32、コリント第一2:9、3:21-23参照）。そこでのいのちは、私たちの想像をはるかに超えるものです。天にはすべての否定的なものがいないのなら、その場所は、新しく積極的なものすべてで満たされているはずです。『すると、御座に座っておられる方が言われた。「見よ、わたしはすべてを新しくする。」また言われた。「書き記せ。これらのことばは真実であり、信頼できるからである。』」（黙示

録21:5)。」¹⁴⁴

キリスト者に与えられるこれらの栄光と天の祝福について、さらに思い巡らすことには価値があります。私も今、これについてもっと取り組みたいところです。しかしここで問題になっているのは、信者たちの永遠の存在という問いではありません。それを疑う人はだれもいないのです。信じない者たちとその将来については、事情が違います。ここでは考え方が根本的に分かれています。

6.2 永遠における信じない者たち

悔い改めず、罪の赦しを受けていない信じない者たちは、自分の罪の中で死にます（ヨハネ8:21）。その後、彼らをさばきが待っています（ヘブル9:27）。彼らは生ける神の御手に陥ります（ヘブル10:31）。神は絶対的に聖なる方であり、それゆえに罪を憎み、忌み嫌われます。ですから、信じない者たちの復活は、ただ、さばきのための復活なのです（ヨハネ5:29）。これは、神のことばの教えに基づく、否定することのできない事実です。聖なる神の御怒りは、信じない者たちの上に永遠にとどまるのです（ヨハネ3:36）。

私たちは使徒ペテロとともに問います。「神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか」（ペテロ第一4:17-18）。神のことばは、この点について私たちをあいまいなままにしておきません。しかし、この問いに答える前に、もう一度思い起こしていただきたいことがあります。救い主である神は、ご自分のひとり子をささげることによって、失われた罪人を救うためにあらゆることをしてくださった、ということです。罪人が滅びることは神のみことばではありません（テモテ第一2:4、ペテロ第二3:9）。むしろ、罪人が生き、永遠の死から救われることが神のみことばなのです。神は一人ひとりの人のために心を砕き、ご自分の神としての愛をもってその人に届こうとしておられます。だれ一人として、自分の永遠の運命について神を責め

144. ジョン・アンカーバーグ (John Ankerberg) とジョン・ウェルドン (John Weldon) *Fakten über Sterbeerlebnisse*, Pfäffikon (Verlag Mitternachtsruf), 2001、67ページ。

ることはできないでしょう。永遠の滅びは、創造主である神をあがめず、神の御子を拒んだすべての人に臨むのです。

使徒パウロは、恵みにおいても、さばきにおいても、神が正しく行動されることについて語っています。「それとも、神のいつくしみと忍耐と寛容の豊かさを軽んじているのですか。神のいつくしみがあなたを悔い改めに導いていることを知らないのですか。あなたは、自分の頑なさや悔い改めない心のゆえに、御怒りの日、すなわち神の正しいさばきが現される日に向けて、自分のために御怒りを積み上げているのです。神は、一人ひとりに、その行いに応じて報いをお与えになります。忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと朽ちないものを求める者には、永遠のいのちを与え、争いを好み、真理に従わずに不義に従う者には、怒りと憤りを下されます。悪を行うすべての人の魂には、苦難と苦悩が臨みます」（ローマ2:4-9。ドイツ語のエルバーフェルト訳聖書から訳出）。

怒り、憤り、苦難、苦悩——これらはここで、悔い改めない罪人に対する神の正しいさばきを表すことばです。聖書は、将来の永遠のさばきについて、誤解の余地なく語っています。今日しばしば残念ながらそうされているように、罪に対する神の御怒りの現実を隠したりはしません。罪人を地獄に引き渡す神の聖と義は、たいていの人の考え方に合いませんし、残念ながら多くのキリスト者の考え方にも合いません。神は妥協する用意があり、恵みによって罪を大目に見てくださるだろう、とあまりにもしばしば信じられ、あるいは期待されています。しかし、このような推測はだれの助けにもなりません。それは人を、神のご性質と罪の本質について、したがってまた自分自身の永遠の運命について、誤りに導くからです。¹⁴⁵

145. 永遠の苦しみを軽く扱い、あるいは否定する考え方には、さまざまな形があります。1. 普遍救済論と万物和解説：最後にはすべての人が救われる。2. 条件的不死論、あるいは条件付きの不死：救われていない者たちは消滅させられる——「絶滅説」(Annihilationismus)とも呼ばれる。3. 死後に立ち返って救われる可能性(仮説的な条件的不死論)。これらの教えはいずれも、聖書に反するもの、信仰を空洞化させるものとして退けなければなりません。

聖書は、永遠のさばきをできるかぎり印象深く描くために、さまざまな呼び名と強烈な比喩や比較を用いています。それらは、神がどれほど罪を真剣に受けとめておられるか、またさばきにおいて神がどれほど恐れられるべき方であるかを人に示そうとしています。聖書は、天国と地獄を実際に存在する場所として語り、それらを描写するために比喩的なことばを用いています。私たちは、天国が比喩的に描かれているからといって（ヨハネの黙示録参照）、天国の存在を疑ったりはしません。ですから、地獄の存在を疑うこともできないのです。

それでは、このさばきについて語っている三つの主要な概念と比喩を調べてみましょう。それは地獄、火の池、そして第二の死です。

6.2.1 地獄（ゲヘナ）

主イエス・キリストご自身が、福音書の中で11回、地獄について語っておられます（マタイ5:22、29、30、10:28、18:9、23:15、33、マルコ9:43、45、47、ルカ12:5。新約聖書ではほかにヤコブ3:6だけ）。地獄とは、正しくない者たちが、自分の負い目を十分に自覚しながら永遠に放置され、神によってさばかれる場所です。

注目すべきことに、地獄、すなわち恐ろしいさばきの場所について最も多く語っておられるのは、主イエス・キリストご自身です。しかも主は、ご自身が神の愛の啓示であられるのです。主ほど神の愛を知っていた人はいませんでした。そして主は、その愛を明らかにするために来られたのです。それでは、神の愛は、どうしてこのような恐ろしいさばきと両立するのでしょうか。それは、主ほど神の聖さを知っていた人もいなかったからです。使徒ヨハネはこう言っています。「私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信は、神は光であり、神には闇が全くないということです」（ヨハネ第一1:5）。光ということばは、ここでは神の聖さを表しており、罪と罪に関わるすべてのものを表す闇と対比されています。

イエスの時代のユダヤ人たちは、「地獄」（ギリシア語 *gehenna*）が何を指すかについて、ある程度の考えを持っていました。その考えは、よく知られた一つの場所とその歴史に由来するものでした。このギリシア語は、ヘブル

語の「ゲ・ヒノム」(ge-hinnom)に対応しています。それは、エルサレムの町の南側に下っていくヒノムの谷を指しています(ヨシュア15:8、18:16)。イスラエルの歴史において、アハズ王(列王第二16:3)とマナセ王(列王第二21:6)の時代に、ここは最も忌まわしい偶像礼拝の場所でした。そこでは偶像モレクに子どもたちがいけにえとしてささげられました(歴代第二28:3、33:6)。人々は、子どもたちの叫び声をかき消すために、太鼓を打ち鳴らしながら子どもたちを焼いたのです。神はこの忌まわしいことに対して、恐ろしいさばきを予告されました(エレミヤ7:32、19:5-9、32:35)。

ヨシヤ王のもとでの信仰復興のときに、この場所は破壊され、瓦礫の山とされました(列王第二23:10)。後にこの場所は、瓦礫とごみの捨て場になりました。エルサレムの町のごみや汚物がそこに運ばれたのです。処刑された犯罪人の死体も、焼くためにそこへ運ばれました。そこは、ごみを処理するために絶えず火が燃えているごみ捨て場でした。うじ虫はごみの中に十分な食べ物を見つけ、そこで生き続けることができました。ですから、地獄と結びつけて、死なないうじ虫と消えない火のことがしばしば語られているのです(マルコ9:43-48、イザヤ30:33、66:24)。

ユダヤ人の文書では、この場所で起こることが、正しくない者たちに対する終わりの時の永遠の刑罰のさばきにたとえられています。¹⁴⁶ 主イエス・キリストは、ここで当時のユダヤ人の考えに結びつけて語っておられます。主のことばは、ユダヤ人の考えとは違って、神の真理の啓示です。主は特に二つのことを強調しておられます。

- 人間全体が地獄のさばきに引き渡されます。「むしろ、魂もからだも地獄で滅ぼすことができる方を恐れなさい」(マタイ10:28、ルカ12:5参照)。地獄のさばき(マタイ5:29-30)は、からだと同じように魂にも臨みます(ルカ12:47)。

146. シュトラック (Strack) / ビラーベック (Billerbeck) *Exkurs: Scheol, Gehinnom u. Garten Eden*, München (Verlag C.H. Beck), 1029~1037ページ。G.W. ブロミリー (G.W. Bromiley) *Theological Dictionary of the NT*, Grand Rapids (Eerdmans) 1985, 113ページ。

- 地獄は、切り離すことができないほど火と結びついています。「『愚か者』と言う者は火の燃える地獄に投げ込まれます」（マタイ5:22）。「両手がそろっていて地獄に、その消えない火の中に落ちるよりは、片手でいのちに入るほうがよいのです。そこでは、うじ虫が尽きることがなく、火も消えることはありません」（マルコ9:43-44、マタイ5:29参照）。

人は火を恐れます。地獄では、さばきがからだと魂と霊に臨みます。火の比喻は、苦しみと恐れを語っています。私たちにはそれを想像することができません。この比喻だけで十分に印象深いのです。それは、これ以上ないほど切実な警告です。火はしばしば神のさばきを表すことばとして用いられています。そのさばきは、さばきの日に、神と調和しないすべてのものに向けられるのです（創世記19:24、レビ10:2、民数16:35、コリント第一3:13、テサロニケ第二1:8、ヘブル10:27、ペテロ第二3:7、黙示録20:9、21:8）。

「地獄」という語こそ出てこないものの、同じさばきを描いているほかの聖句には、次のようなものがあります。

「片手片足でいのちに入るほうが、両手両足そろったままで永遠の火に投げ込まれるよりよいのです」（マタイ18:8）。

「……そして彼らを〔悪い者の子たちを〕火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです」（マタイ13:42、8:12参照）。

ユダはこう言っています。「永遠の火の刑罰を受けて」（ユダ7）。

6.2.2 火の池

火の池は、先に挙げた聖句と一致して、地獄の別の呼び名です（黙示録19:20、20:10、14、15）。この場所については、わずかな詳細しか述べられていません。そこは、罪人が永遠に休むことのない場所です。池も海も、絶え間のない不安を暗示しています（黙示録14:11）。

まず、獣と偽預言者（終わりの時の二人の人間。黙示録13章参照）が火の池に投げ込まれます（黙示録19:20）。彼らは生きたまま、火と硫黄の燃える

この場所に行くのです。その1000年後に、悪魔が火の池に投げ込まれ、昼も夜も世々限りなく苦しめられます（20:10）。

火の池、すなわち永遠の火は、悪魔とその使いたちのために——人間のためではありません！——用意されたものです（マタイ25:41）。しかし人間は悪魔に従い、同じ不従順の道を歩み、神に服従しようとしなかったのが、人間もまたそこに自分の永遠の運命を見いだすことになるのです（黙示録20:10、14、15、14:10）。

火は、何かを焼き、取り除くためにあります。ヒノムの谷でゴミに対して行われたのも、そのことでした。しかし地獄のさばきにおいて問題になっているのは、消滅という意味での焼却ではありません。

人間が完全に消滅させられるという教えのほかにも、地獄に一時的にとどまるという見解もあります。それは、限られた刑罰を償うため、あるいは煉獄という意味での清めのためだということです。もし火の比喩をこの意味で解釈するなら、不信仰な者たちはみな、この火にさらされた瞬間に、たちまち焼き尽くされてしまうことでしょう。彼らには、新しいいのちも、清めの後に残りうる何か良いものもないからです。地獄からの逃げ道はありません。地獄には入口があるだけで、出口はないのです。

ヒノムの谷で燃えていたような火は、罪人の苦しみを描くことによって、地獄の現実を表す比喩となっています。

6.2.3 第二の死

私たちはすでに、死が人間の存在の終わりではなく、基本的に存在の形態の変化であることを確認しました。また、死は常に分離をもたらします。第二の死、つまり最後の死（黙示録20:6、14）は、罪人が神から最終的に分離されることです。そこに罪人の永遠のさばきがあります。ですからパウロは、このさばきを「**主の御顔から退けられて、永遠の滅びという刑罰**」と呼んでいます（テサロニケ第二1:9）。神は罪を見ることがおできにならないので、罪人をご自分の御前から永遠に追放しなければなりません（マタイ7:23、25:12）。光と闇は互いに交わりを持つことができないからです（コリント

第二6:14)。罪人は外の暗闇に追放されます。そのとき罪人は、神が罪を持ったままの自分を受け入れることはできない、と知のです（マタイ22:13、ルカ13:22-28、ペテロ第二2:17、ユダ13）。多くの人は神と関わりを持ちたがりません——そうであれば、彼らは永遠に神なしでいることになるのです。この事実を前にすると、私たちは、罪人が永遠に、終わりなく受けることになるものを思って身震いします。

神が最終的に顔を背け、神がおられないということは、死の最も深い暗闇の中にいることを意味します——決して終わることのない失われた状態です。

理解を深めるための問い

- 新約聖書は、信じない者たちの永遠の運命を、どのような比喩で描いていますか。

6.3 刑罰はどれほど続くのか

これは重要な問いであり、教会史の何世紀にもわたって今日に至るまで、さかんに論じられてきた問いです。この点で、多くのキリスト者の考え方は分かれています。ある人たちは、刑罰には時間的な限りがある、と主張します。人は自分の刑罰を償い終えたなら、永遠に消滅させられるか、あるいは天に入る、というのです。ほかの人たちは、著者もその一人ですが、神のことばに基づいて、刑罰は決して終わらないと確信しています。

人間の（願望としての）考えや感情が口をはさむなら、この問いに客観的に答えることはできません。聖書が唯一の権威でなければなりません。聖書の教えは、不信仰な者たちの刑罰と苦しみが永遠であること、つまり時間的な限りがないことを、誤解の余地なく明らかにしています。そのことは、次の聖句から明らかです。

「両手がそろっていて地獄に、その消えない火の中に落ちるよりは、片手でいのちに入るほうがよいのです」（マルコ9:43、マタイ3:12、イザヤ66:24、エレミヤ17:4参照）。

「片手片足でいのちに入るほうが、両手両足そろったままで永遠の火に投げ込まれるよりよいのです」（マタイ18:8）。

「永遠の火の刑罰を受けて」（ユダ7）。

「その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと子羊の前で、火と硫黄で苦しめられる。彼らの苦しみの煙は世々限りなく立ち上る。……彼らには昼も夜も休みがない」（黙示録14:10-11、20:10参照）。

火は永遠に燃えます。すなわち、消えることはありません。人間には想像できない永遠という時の長さ（「世々限りなく」）が、ここでは——私たちにわかりやすいように——昼と夜が終わりなく絶え間なく続くことにたとえられています。

「こうして、この者たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るのです」（マタイ25:46）。「……永遠のさばきについての教え」（ヘブル6:2）。「主の御顔から退けられて、永遠の滅び」（テサロニケ第二1:9）。「彼らには永遠に暗闇が用意されています」（ユダ13、ペテロ第二2:17参照）。「神の怒りがその上にとどまる」（ヨハネ3:36）。

「しかし聖霊を冒瀆する者はだれでも、永遠に赦されず、永遠の罪に定められます」（マルコ3:29、マタイ6:15、12:32）。永遠に罪の赦しがないところでは、罪に対する神のさばきも永遠に続きます。聖霊を冒瀆するのがどのような人々のことなのかという問題は別として、この節もまた、永遠において、罪の赦しを持たず、神の怒りが永遠にとどまる人々がいることを明らかにしています。

しかし、「永遠の」や「永遠」ということばは、必ずしも無限の期間を表すのではなく、限りのある期間を表すこともある、という反論がなされます。ですから私たちは、新約聖書において、さばきとの関連でこれらのことばがどのような意味を持っているのかを調べなければなりません。

6.3.1 新約聖書における「永遠」と「永遠の」

「永遠」ということばは、ギリシア語の「aion」に対応しています。このことばは、ある特定の時期、あるいは限られた時代という意味を持つことがあ

ります。マタイ12:32、24:3、28:20、ルカ16:8、20:34、ローマ12:2、コリント第一1:20、コリント第二4:4、ガラテヤ1:4、テモテ第一6:17、テモテ第二4:10、テトス2:12、ヘブル9:26を参照してください。

これらの節は、時間そのものだけが問題なのではなく、その時代、あるいは時の流れを特徴づけている道徳的な特質が問題になっていることを明らかにしています。

「永遠」はまた——大部分の箇所では——無限の期間でもあります。

- 「永遠に」（ギリシア語 **eis ton aiona**）。この表現は次の節に出てきます。マタイ21:19、マルコ3:29、11:14、ルカ1:55、ヨハネ4:14、6:51、58、8:35、51、52、10:28、11:26、12:34、13:8、14:16、コリント第一8:13、コリント第二9:9、ヘブル5:6、6:20、7:17、21、24、28、ペテロ第一1:25、ヨハネ第一2:17、ヨハネ第二2。
- 「諸々の永遠へ」（**eis tous aionas**）。これについては次の箇所を参照してください。ルカ1:33、ローマ1:25、9:5、11:36、16:27、コリント第二11:31、ヘブル13:8。
- 「すべての永遠に至るまで」（**eis pantas tous aionas**）：ユダ25
- 「永遠の永遠へ」（**eis ton aiona tou aionos**）：ヘブル1:8。
- 「諸々の永遠の諸々の永遠へ」（**eis tous aionas ton aionon**）。この表現はしばしば出てきます。ローマ16:27、ガラテヤ1:5、ピリピ4:20、テモテ第一1:17、テモテ第二4:18、ヘブル13:21、ペテロ第一4:11、5:11、黙示録1:6、18、4:9、10、5:13、7:12、10:6、11:15、14:11、15:7、19:3、20:10、22:5。

ヨハネの黙示録14章11節と20章10節には、刑罰の無限性を表す、これ以上強めることのできない表現があります。その刑罰は、悪魔と獣と偽預言者に臨み、さらに獣に従った人々にも臨みます。彼らは「世々限りなく」苦しめられます。ギリシア語では、「永遠」が複数形になっています。ですから、直訳すれば「諸々の永遠の諸々の永遠へ」となるのです。

形容詞の「永遠の」もまた、時間的に限りがないことを示しています。そのことは、信者たちが受ける「永遠の」祝福にはっきりと見て取ることができ

ます。信者たちは次のものを持っています。

- 「永遠の救い」(ヘブル5:9)
- 「永遠の贖い」(ヘブル9:12)
- 「永遠の資産」(ヘブル9:15)
- 「永遠の栄光」(テモテ第二2:10、ペテロ第一5:10)
- 「永遠の家」(コリント第二5:1)
- 「永遠の御国」(ペテロ第二1:11)。

これらのものに時間的な限りがあると考える神の子どもはいません。これらはまさに、一時的で過ぎ去っていくものと対比されているのです(コリント第二4:17-18)。

信者たちの祝福と対照的なのが、信じない者たちの受ける分です。

- 「永遠の刑罰」(マタイ25:46)
- 「永遠の火」(マタイ18:8、25:41、ユダ7)
- 「永遠のさばき」(ヘブル6:2)
- 「永遠の滅び」(テサロニケ第二1:9)。

信者たちの祝福も、不信仰な者たちの刑罰も、同じように永遠、すなわち終わりがありません。マタイは、それを簡潔にこうまとめています。「こうして、この者たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入ります」(マタイ25:46)。

永遠の苦しみに対するもう一つの論拠は、形容詞「永遠の」は罪人の存在とそのさばきの継続には関わらず、さばきの効果、あるいはその後に残る影響だけに限定されるべきだ、というものです。そうなると、第二の死、すなわち永遠の死とは、不信仰な者たちの消滅だということになります。しかし、そもそも人間の消滅について語ることができるのでしょうか。「滅び」とは、人間の存在が終わることを意味しているのでしょうか。

6.3.2 「滅び」

「滅び」という表現が消滅、すなわち人間の存在の終わりとして理解されるなら、地獄の刑罰は無限ではなく、有限だということになるでしょう。しかしこの見解は、すでに引用した聖句と矛盾します。もし人間が本当に消滅させられるのなら、どうしてその苦しみと責め苦の煙が世々限りなく立ち上るのでしょうか（黙示録14:11、20:10）。この火が「燃える」対象となる人がもうだれもいないのなら、永遠の火の刑罰は何のためにあるのでしょうか（ユダ7）。なぜさばきの火は消えないのでしょうか（マルコ9:43）。

これらの聖句は、**滅び**が**消滅**という意味を持ちえないことを明らかにしています。新約聖書のほかの箇所も、そのことを明らかにしています。ギリシア語の新約聖書には、「滅び」を表すことばがいくつかあります。そのうち、永遠における不信仰な者たちのさばきについても用いられている、最も重要なものをここに挙げます。

名詞「滅び」(apoleia)

このことばは19回出てきて、さまざまに訳されています。

- 「浪費」あるいは「無駄遣い」(Verschwendung / Vergeudung) (マタイ26:8、マルコ14:4)
- 「引き渡す」(preisgeben) (使徒25:16)
- 「滅びの子」(Sohn des Verderbens) (ヨハネ17:12、テサロニケ第二2:3)
- 「滅び」(Verderben) (マタイ7:13、ローマ9:22、ピリピ1:28、3:19、テモテ第一6:9、ヘブル10:39、ペテロ第二2:1、3:7、3:16、黙示録17:8、11)

動詞「滅びる・滅ぼす」(apollymai)

動詞「滅びる・滅ぼす」(新約聖書に86回出てくる)についても同じことが言えます。

- 洪水による地の「滅亡」(Untergang) (ペテロ第二3:6、ヘブル1:11参照)
- 「過ぎ去る」(vergehen) (ペテロ第一1:8ほか)

- 「殺す」(umbringen) (マタイ2:13、12:24、21:41、27:26ほか)
- 「死ぬ・滅びる」(umkommen) (マタイ5:29、30、8:26、26:52、ユダ11ほか)
- 人、動物、物について「失われた」(verloren) (マタイ10:6、15:24、16:25、18:11、14、コリント第二2:15、テサロニケ第二2:10、ヨハネ第二8ほか)
- 地獄で魂とからだを「滅ぼす」(verderben) (マタイ10:28)
- ぶどう酒の革袋が「だめになる」(verderben) (マタイ9:17)
- 「滅ぼし尽くす」(vertilgen) (ユダ5)

名詞「滅び」(olethros)

このことばは新約聖書に4回出てきます。コリント第一5:5、テサロニケ第一5:3、テサロニケ第二1:9、テモテ第一6:9。

テサロニケ人への手紙第二1章7～9節には、主が現れるときの主のさばきが、そして同時に永遠のさばきが、印象深く描かれています。「また、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに安息を与えることです。それは、主イエスが、力ある御使いたちとともに、燃える炎の中に天から現れるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々と、私たちの主イエス・キリストの福音に従わない人々に報いを与えられます。そのような者たちは、主の御顔から〔または「主の御顔から離れて」〕、また御力の栄光から退けられて、永遠の滅びという刑罰を受けるのです。」

6.3.3 まとめ

これらの概念も、永遠のいのちと同じように、さまざまな意味を持っています。ごく少数の箇所では、物が滅ぼされることや、人が地上から取り除かれることを意味することがあります。しかし滅びが、人間の消滅や抹消を意味することは決してありません。それは地上のいのちを失うことを意味する場合があります。しかしそれは存在の終わりではなく、別の存在形態への移行にすぎないのです。

滅びとは、道徳的な破滅と崩壊であり、消滅ではなく、ある状態が根本的に悪化することです。滅びとは、決して存在を失うことではなく、存在に価値を与えるすべてのものを失うことなのです。これらの節で「滅び」の代わりに「消滅させる」や「消滅」ということばを入れてみるなら、意味がゆがめられるだけでなく、節そのものがまったく理解できなくなってしまう。

不信仰な者たちの永遠の滅びとは、彼らが永遠に神から断ち切られ、さばきにさらされることです。彼らは失われ、外の暗闇にいます（マタイ 8:12、22:13、25:30、ユダ13）

理解を深めるための問い

- 次のような誤った見解に、どのように対処することができますか。
- 信じない者たち、あるいはその魂は消滅させられる。
- 彼らの刑罰には時間的な限りがある。

6.3.4 神の義と聖

永遠のさばきがあり、罪人が絶え間なく罰せられるということは、人間の理解や感覚では想像しにくいことです。しかし人はしばしば、そこに至るまでの経緯に目を留めずに、結末だけを見ます。私たちは自分自身の考えに導かれてはなりません。まさにこの究極の問いにおいて、人は自分の考えを神のことばよりも優先させがちです。しかし神のことばこそが唯一の基準であり、私たちはあらゆる問いにおいて、ただへりくだってそれに従うことしかできないのです。

もう一度思い起こしましょう。神は罪人を罪に定めることを喜ばれません。

「主は、人の子らを、意味もなく苦しめ悩ませはしない」（哀歌3:33）。それでは、なぜ永遠のさばきがあるのでしょうか。その答えはこうです。神は愛であるだけでなく、光でもあらわれるからです。神は絶対的な義と聖の神です。神の義は、罪の負債の支払い、すなわち罪人が罰せられることを求めます。神の聖さは罪を容認することができず、罪に関わるすべてのものを取り除き、焼き尽くさなければなりません（ヨシュア24:19）。

預言者イザヤはこう言っています。「万軍の主は、さばきによって高くなり、聖なる神は、正義によって自らが聖であることを示される」（イザヤ5:16）。

永遠のさばきを否定するなら、それによって神のご性質そのものを疑問視することになります。神はそのご性質において変わることがなく、ご自分の義と聖を決して放棄されません。神が変わらない方であることを軽視するだけでなく、罪の本質とその重大さも過小評価してしまうのです。罪こそが永遠のさばきの理由です。それでは、神の目に罪とは何でしょうか。罪は弱さでも、ちょっとした過ちでもありません。「罪とは**不法**のことです」（ヨハネ第一3:4）。不法とは、ある戒めに違反することだけではなく、神のあらゆる律法を拒むこと、つまり自分の意志を押し通し、神の権威を否定することです。それは結局のところ無政府状態であり、創造主がご自分の被造物に対して持っておられる権利を無視することです。罪とは、神に対する敵意であり、反逆なのです。

罪は、必ずしも神に対するあからさまな敵意として現れるわけではなく、さまざまの形をとって現れます。罪によって、神の威厳と栄誉が傷つけられます。ですから神は、罪を罰せずにおくことはなさいません。神はご自分の栄誉を回復し、ご自分の聖さの要求を満たされます。神の子どもたちも同じ神と関わっていますが、神が彼らに求められることは、神の御子が十字架の上で満たしてくださいました。

神の子どもでもある私たちの感覚も、残念ながら罪によって影響を受け、曇らされています。私たち自身、生まれながらに罪人でした。ですから私たちは、判断において中立ではなく¹⁴⁷、罪に対する神の怒りを私たちの基準に合わせることはできません。罪について神がどのように感じておられるのか、私たちはどのような考えを持っているのでしょうか。神に向かって、罪人をその罪のゆえに永遠に罰してはならない、と指図しようというのでしょうか。神が罪人をどのように扱われるかは、ただ神だけのことがらです。神はご自

147. 聖霊は絶えず、私たちが罪とは何かを理解し、罪を憎み、神が罪を感じておられるように罪を感じるようにしようとしておられます（ヨハネ第一1:5-2:2参照）。

分のなさることについて弁明を必要とされることは決してありません。それでも神は、ご自分のことばの中で、これらのことを私たちに説明してくださっているのです。

永遠のさばきは、神の愛を疑わしいものにするものではありません。神はすべてを行い、天と永遠の栄光がすべての人に開かれていることを証明してくださいました。ですから、聖であり正しい神¹⁴⁸が罪人を永遠に罪に定められても、神は不正ではありません。神はそのことにおいても、ご自分の栄光を現されるのです。神は聖であって栄光に輝く方です（出エジプト15:11）！

使徒パウロはこう言っています。「たとえすべての人が偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。『それゆえ、あなたが告げるとき、あなたは正しくあられ、さばくとき、勝利を得られます』と書いてあるとおりです。では、もし私たちの不義が神の義を明らかにするのなら、私たちはどのように言うべきでしょうか。御怒りを下す神は不義なのでしょうか」（ローマ3:4-5）。

6.3.5 ゴルゴタの十字架

私たちは今、この本の終わりに来ました。そこで、罪人を待っている恐ろしいさばきを心に刻みつつ、人類の歴史の中で最も重要な時間に目を向けたいと思います。

私たちは、神がご自分の愛と恵みのために、ご自分の義と聖を放棄されることは決してない、ということを確認しました。ゴルゴタの十字架は、その最も印象深い証拠を私たちに示しています。十字架は、神の聖と義を私たちに思い起こさせます。その聖と義は、神の御子をご自身を私たちの罪のためにささげられたとき、御子に対してさえ例外を設けませんでした。それは、神としての完全なみわざであり、神であるお方によって成し遂げられたものです。それは、私たちを無限のさばきから解放するためでした。

罪のない神の御子は、私たちの身代わりとして、さばきを引き受けてくださいました。御子は私たちの罪を負って聖なる神の前に立たれ、神はそのため

148. 黙示録16:5、詩篇47:8、119:137、イザヤ6:3。

に十字架の上で御子を罰せられました。御子は私たちの罪をご自分のからだに負って、木にかかられました（ペテロ第一2:24）。御子は私たちに代わって罪とされ（コリント第二5:21）、私たちのために木の上でのろわれた者となられたのです（ガラテヤ3:13）。

マルク・タペルヌー（Marc Tapernoux）は、このことを的確に言い表しています。「これが起こったのは、罪が償われ、神の義と聖と栄光の要求が満たされるためであり、他方で神が罪人を赦すことができるためでした。このいけにえの偉大さ〔ヘブル10:1-18〕、負い目を償われた方の〔ヨハネ第一2:2、4:10〕無限の価値〔マタイ3:17、17:5〕、この方に下ったさばきの重さ〔マタイ27:46、詩篇22、42、69篇〕——これらによって私たちは、償われなければならない罪の重さと、罪が人間を突き落とした滅びの大きさを理解することができます。それは永遠の滅びなのです。」¹⁴⁹

刑罰には時間的な限りがある、と言う人は、それによって、罪は神の目には永遠の刑罰をもたらさなければならないほど重大なものではない、と主張していることになります。しかし、もし罪がそれほど害のないもののだとしたら、なぜ神はご自分の御子を、十字架の上でこれほど恐ろしい仕方なさばかれたのでしょうか。なぜ神は、三時間の暗闇の間、そこで御子をお見捨てになったのでしょうか。なぜ神は、御子をこれほどひどく打たれたのでしょうか（イザヤ53章、ゼカリヤ13:7）。

もし私たちが、一定量の一時的な苦しみから解放されさえすればよかったのなら、この恐るべきみわざは必要だったでしょうか。決してそうではありません。御子は私たちを、時間的に限られた一定量の苦しみから解放されたものではありません。神の聖なる御怒りから解放して下さったのです。その御怒りはあまりにも恐ろしく、神ご自身の御子でさえ、それを免れることはなかったのです（ローマ5:8-10、8:32）。

失われた罪人は永遠に罰せられるのではなく、いつか消滅させられるのだ、と主張する人は、神の御子の苦しみを軽んじていることになります！ これ

149. マルク・タペルヌー（Marc Tapernoux） *Das ewige Gericht*, Zürich (Beröa-Verlag), 1962、5ページ。

は、この見解から必然的に生じる悪しき帰結です。もし一時的な苦しみから私たちを解放することだけが問題だったのなら、神の御子が私たちのところに来て、私たちのためにご自身をささげる必要はなかったでしょう。しかし、神の御怒りとさばきは永遠なので、ただ神であるお方だけが、私たちの代わりにそれを負い、私たちをそこから解放することができたのです。

永遠の苦しみを否定するなら、その影響はあまりにも大きく、イエス・キリストの贖いのみわざにまで手をつけ、それをおとしめることになります。神としての偉大ないけにえの無限の価値を、どのような形であれ小さくしてしまうことから、神が私たちを守ってくださいますように！ 神の御子がそこで、私たちに永遠に下るはずだった刑罰を、その全容において引き受けてくださったことを、しっかりと保ちましょう。

これこそが、神の無限の愛の、そして同時に神の変わることはない聖さの、最大の証拠なのです。

それは永遠のあわれみ、
 私たちの思いをはるかに超え、
 愛の腕を大きく広げて
 罪人のもとへ身をかがめる方のあわれみ。
 この方は私たちをのろいと死から解き放ち、
 イエスの栄光へと導いてくださる。

私たちが滅びることのないように、
 神は私たちを助けようと望まれた。
 そのために御子は地に来られ、
 その後、天に帰って行かれた。
 こうして今、恵みの御座から
 御子を通して、あふれる恵みが届く。

お　お　恵　み　よ　、　す　べ　て　の　罪　を
 今　や　キ　リ　ス　ト　の　血　に　よ　っ　て　消　し　去　り　、
 至　る　と　こ　ろ　で　告　げ　知　ら　せ　る　、
 す　べ　て　の　人　へ　の　赦　し　と　平　和　を　。

永遠の救いは今、備えられている。

おお、驚くべき恵みの時よ！

7 付録

7.1 聖書はシェオルとハデスについて何を教えているか

Bible Treasury誌、N 9巻、79ページの質疑応答

質問

「人の子も三日三晩、地の中にいるからです」（マタイ12:40）という表現は、墓以上のものを指しているのでしょうか。また「地の低いところに降られた」（エペソ4:9）という表現は、死と墓以上のものを指しているのでしょうか。

シェオル、あるいはハデス（アブラハムの懐とパラダイスを含む）は地の下にあり、主イエスはそこに降って、何人かをご自分とともに高いところへ連れて行かれた、と言うことは、聖書と一致しているのでしょうか。それとも、パラダイス、あるいはアブラハムの懐は、旧約聖書の時代でさえ、いつも天にあって、決して地の下にはなかったのでしょうか。

「シェオルに下る」という表現は何を意味しているのでしょうか。

「底知れぬ所」は、「ハデス」とは別のものなのでしょうか。

シェオルやハデスということばは、見えないものの一部である天に当てはめることができるのでしょうか。

J.C.B.

回答

旧約聖書の「シェオル」という表現は65回出てきます。そして「欽定訳」（Authorised Version）では、31回が「墓」、3回が「穴」、31回が「地獄」と訳されています。このことは、このことばがさまざまな意味を持ちうることを示しています。同じことばが、七十人訳聖書（旧約聖書のギリシア語訳）では、31回が「ハデス」、2回が「死」（thanatos）と訳され（サムエル第二22:6、箴言23:14）、2か所（ヨブ24:19、エゼキエル32:21）ではまっ

たく訳されていません。ギリシア語には、これらの箇所の意味を表すことのできることはがないからです。

次の箇所では——いくつかだけを挙げるなら——創世記37:35、42:38、44:29、31、民数16:30、31、列王第一2:6、9、詩篇49:15、141:7、「シェオル」は単に「墓」を意味しており、英語版でもそのように訳されています。ただし民数記16章は例外で、そこでは「穴」となっています。一方、ほかのすべての箇所では、「シェオル」という表現は、世を去った霊たちの場所を指しています。墓は、いのちのないからだを受け入れます。まとめて言えば、旧約聖書の「シェオル」という表現は、墓に対しても、世を去った霊たちのいる場所に対しても用いられている、とすることができます。

さて、新約聖書に目を向けると、この二重の意味は消えてしまいます。福音によって、いのちと朽ちないものが明らかに示されたからです。「ハデス」ということばは、もともとヘブル語の「シェオル」のギリシア語訳ですが、新約聖書では、世を去った霊たちの世界だけに関連づけられています。それはちょうど、「死」と「墓」ということば（黙示録20章）が、からだだけに関わり、魂と霊には関わらないのと同じです。死ぬのはからだであり、霊はそれを与えた神のもとに帰ります。霊と魂は、決して存在しなくなることはありません。ハデスは、信じない死者たちだけを受け入れます。信者は、天に召されるとき、ハデスに行くのではなく、パラダイスに行くのです。

ある人たちは、ハデスは死のときに信者も信じない者も同じように受け入れるが、それでもこの二つの部類の人々は大きな淵によって隔てられているのだ、と考えています。聖書は、信者がハデスに行くとはどこにも語っていません。むしろ、信者がハデスから遠く離れていることを語っています（ルカ16:23）。もし詩篇16篇10節——使徒の働き2章で2回引用されている節——が、主が死後にシェオル、あるいはハデスに降り、主の魂がそこに捨て置かれなかった、という教えの根拠になるのだとしたら——しかし私たちは、主がパラダイスに行かれたことを知っています。それは闇の園ではなく喜びの園であり、十字架上の犯罪人もそこにいたのです——、そこには信者のための部分と信じない者のための部分の二つがなければならないことになるでし

よう。しかしこの誤りは、英語版におけるこの節の誤った翻訳によって生じたものです。この節はこう言っているのです。「あなたは私の魂をシェオルへと〔シェオルの中に、ではなく〕ゆだねる（引き渡す、あるいはそこへ追いやる）ことはなさない」。この正しい翻訳は、使徒の働き2章27、31節の「校訂本文」によって裏づけられています。それは、ラハマン（Lachmann）、ティッシェンドルフ（Tischendorf）、トレゲルズ（Tregelles）、ウェストコット（Westcott）、ホート（Hort）、さらにほかの翻訳者たちによって認められているものです。

「ハデス」ということばは、新約聖書では決して肯定的な意味で用いられていません。もしハデスの中に信者のための領域と信じない者のための領域の両方があるのだとしたら、なぜ私たちは、例外なく信じない者たちとの関連でハデスについて読み、信者がそこにいることを示すただ一つの手がかりも見いださないのでしょうか。

「地の中」や「地の低いところ」という表現が意味しているのは墓です。私たちの主は死なれただけでなく、葬られ、三日目によりみがえらされました。ヨナはそのひな型です。詩篇139篇15節は、これらのことばをあまりにも字義どおりに解釈することから、私たちを守ってくれるでしょう。ここで地の低いところとは、疑いなく、目に見えないもの、あるいは隠されたものを意味しています。墓は石で封印された後、番兵によって守られていました（マタイ27:66）。イエスのからだが横たわっていた聖なる領域の中のをぞき込むことのできる人間の目は、一つもありませんでした。

キリストが来られる前、「アブラハムの懷に」という表現は、敬虔なユダヤ人にとって至福そのものでした。アブラハムが「神の友」と呼ばれていたことを知っていたからです。キリストとともにいること——それがキリスト者の至福の見通しです。それは上にある神のパラダイスにおいてです。パラダイスはハデスと同じ意味ではありません。アブラハムはハデスにいたのではなく、ハデスにいた苦しむ魂が、アブラハムを「遠くに」見たのです。主がハデスにおられ、だれかをそこから解放した、というのは人間の作り話です。主はハデスに行かれたのではなく、パラダイスに行かれたのです。聖書

は、ハデスからの解放について、ただ一つの手がかりも与えていません。士師記5章12節、詩篇68篇18節、エペソ人への手紙4章8節は、捕らわれ人の解放について語っているのではなく、悪の諸力を捕らえることについて語っているのです。その諸力が、ここでは「捕らわれ人」と呼ばれています。キリストは、もろもろの支配と権威の武装を解除し、それらをさらしものにし、それらに対して凱旋されました（コロサイ2:15）。キリストは捕らわれ人を捕らえて連れて行かれたのです。これは、ある人たちが解釈しているように、地獄から捕らわれ人を釈放することを指しているではありません。

「シェオルに下る」は、墓、あるいは穴を指しています。そのどちらも地の下にあります。

底知れぬ所（黙示録20章）は、人間が行く場所ではなく、サタンが千年の間つなされる場所です。その後、サタンは最終的に、永遠に火の池に投げ込まれます。これに対してハデスは、神と和解しないまま死んだ人たち、すなわち信じない死者たちの魂と霊を受け入れます。その霊は、かつては死ぬべきからだの中に住んでいたのです。魂と霊はハデスに行き、ちりから形造られたからだは墓（海の中または陸地）に場所を見だし、さばきへの復活を待ちます。人がよみがえらされる時——そのとき天と地はもはや存在しません——、その人はハデス（そのときにはもはや存在しません）に投げ込まれるのではなく、火の池に投げ込まれます。火の池は人間のためではなく、悪魔とその使いたちのために用意されたものです（マタイ25:41）。眠りについた信者は、さばきのためではなく、栄光のためによみがえられます（ピリピ3:20-21）。

「シェオル」や「ハデス」ということばを天に関連づけることはできません。それらは天と対立するものだからです。

訳者の注

ハデスということばは、新約聖書の次の箇所に出てきます。

マタイの福音書11章23節（ルカ10:15）：この二つの箇所では、ハデスは天とはっきり対比されています。主は、カペナウムがハデスにまで落とされ

る、と語っておられます。否定的な意味は明らかです。

マタイの福音書16章18節：ここで主は、新生と信仰によって神の家の生ける石となった人は、ハデスの門に打ち負かされることがない、すなわち決してハデスに行くことはない、と語っておられます。この箇所も、主が起こりえないことを語っておられるという点で、明らかに否定的です。

ルカの福音書16章23節：金持ちはハデスで目を上げ、そこで苦しみの中にいます。ラザロもハデスにいた、とは言われていません。それとは対照的に、金持ちはラザロがアブラハムの懷にいるのを見ます。アブラハムの懷、あるいはパラダイスはハデスの一部ではありません。両者ははっきりと区別された場所であり、一方の場所からもう一方の場所へ行くことはできないのです。「そればかりか、私たちとおまえたちの間には大きな淵が置かれています。」

使徒の働き2章27、31節：使徒の働き2章27、31節における詩篇16篇10節の引用の翻訳は、私の考えでは正しくありません。七十人訳聖書には、文字どおり **enkataleiphes eis haden**（「ハデスへと渡す」）とあります。この動詞の基本形は **enkataleipo** であり、ほかの箇所では「ゆだねる」（überlassen）（または「見捨てる」[verlassen]）と訳したほうがよいことばです。この **enkataleipo** ということばは、新約聖書の中で使徒の働き2章27、31節のほかに8回出てきます。そのうち6回は「見捨てる」と訳され（マタイ27:46、マルコ15:34、コリント第二4:9、テモテ第二4:10、16、ヘブル13:5）、1回は「残す」（ローマ9:29）、1回は「やめる」あるいは「おろそかにする」（ヘブル10:25）と訳されています。決定的なのは、ここに **en haden**（ルカ16:23のような与格）ではなく、**eis haden**（「ハデスへと」、対格）と書かれていることです。前置詞 **eis**（「～へ」）は、対格とだけ結びつきます。対格は、ギリシア語でもドイツ語でも、動きや方向を示します。もし原文に **en haden** とあったなら、**enkataleiphes** を「置き去りにする」と訳すこともできたでしょう。しかし **eis haden** という表現は、この可能性を排除します。ここで問題なのは異なる写本の読みではなく、明らかに翻訳

の問題なのです¹⁵⁰（W. ケリー（W. Kelly）がその著書 *An Exposition of the Acts of the Apostles* と *The Preaching to the Spirits in Prison* の中で述べている詳しい注解を参照）。¹⁵¹

前置詞 *eis* は、たとえばマタイの福音書18章20節に出てきます。「わたしの名において（直訳「わたしの名へと」）集まっている」。さらにバプテスマとの関連で、たとえばローマ6:3、4、コリント第一10:2などにも出てきます（バプテスマに関するエルバーフェルト訳聖書〔ドイツ語聖書翻訳〕の序文を参照）。

ペテロが使徒の働き2章で詩篇16篇10節を引用しているのは、まさに、不法な者たちの手によって十字架につけられて殺された方を、神がよみがえらせたことを証明するためです。主が死の中にとどまり、死に捕らえられたままでいることはありえませんでした。ペテロはこの引用によって、25～27節で、主は一度もハデスにおられなかった、と言おうとしているのです。神

150. ただし、この見解は J.N. ダービー（J.N. Darby）の見方とは異なります。ダービーはこれらの箇所を別の仕方ですら訳しました（ハデスと地獄についてのエルバーフェルト訳聖書の序文を参照。この序文は J.N. ダービーによるもので、*Coll. Writings*, 第13巻に収められています）。

151. W. ケリー（W. Kelly）*The Preaching to the Spirits in Prison*, 1 Peter III. 18-20, Sunbury (Belivers Bookshelf), 133, 134ページ：「詩篇16篇10節のヘブル語は、シェオルの『中に』ではなく、シェオル『へ』を意味しています。それは、オールフォード（Alford）、ラハマン、ティッシェンドルフ、トレゲルズ、ワーズワース（Wordsworth）、ウェストコット、ホートの批判的本文（*eis haden*）による使徒の働き2章27節と同じように、下降を含んでいません。ですから改訂訳（Revised Version）は、ヘブル語を正しく『あなたは私の魂をシェオルへと渡さない〔シェオルにゆだねない〕』などと訳しています。もっとも、ギリシア語のほうは誤って『へ』の代わりに『中に』と訳しているのですが。私たちの主は死なれたとき、ご自分の霊を父の御手にゆだねられました。父は確かに天におられます。そして回心した強盗は、それがどれほど遅かったとしても、まさにその日に主とともにパラダイスにいたのです（ルカの福音書23章）。さて私たちはすでに、パラダイスがハデスの中にあるのではなく天にあること、そして先に述べたように、その最も栄光に満ちた部分であることを見てきました。ある使徒はパラダイスを『第三の天』と結びつけています（コリント第二12:3-4）。また私たちの主は、別の使徒を通して、勝利を得る者には（栄光を受けるときに）いのちの木から食べることを許す、と言われます。それは決してハデスの中ではありません（黙示録2:7）。旧約聖書においては、ハデスも、いのちも、朽ちないことも、はつきりしないままでした。しかし、これらのことも、さらにはるかに多くのことも、福音によって明らかにされたのです。ですから私たちの主は、ルカの福音書16章の最後のたとえで、信仰も愛も持たなかった金持ちが、死後にハデスで目上げる様子を描いておられます。これに対して、信仰を持っていたラザロは、忠実なアブラハムのもとで祝福されています。どちらの側からも渡って行くことを排除するために、それほど大きな淵が掘えられていました。ハデスは確かに『遠く離れて』いました。そしてそこにいることは、『苦しみの中に』いることを意味します。ラザロがそこにいたとは、ひと言も言われていません。彼はアブラハムの懷にいたのです。

は、主のからだは墓の中に横たわっていた間、主の魂がハデスにあることを許すことはおできになりませんでした。主のからだは朽ちることを見なかったのと同じように、主の魂もハデスへ追いやられることはなかったのです。不法な者たちは、もしそれが彼らの力の内にあったなら、そうしたことでしょう。しかし神は、それについて別の考えを持っておられました。主イエスは、神のあらゆる喜びを受けておられたからです。そして神は、主をよみがえらせることによって、そのことを最もはっきりと証明されたのです。ハデスの否定的な性格を、これ以上ははっきりと示す箇所があるでしょうか。

ヨハネの黙示録1章18節：ここで私たちは、主が死とハデスの鍵を持っておられることを見ます。この節で主は、さばき主として私たちに示されています。ヨハネの黙示録20章11～15節でも、すべての死者をさばかれる主の姿が見られます。そこでは、死とハデスが、さばかれるべきすべての死者を返さなければなりません。サタンは自分から進んで死者を返すことはしません。しかし主は、死とハデスに対しても最終的な権威を持っておられるのです。

ヨハネの黙示録6章8節：ハデスは、死が乗っている青ざめた馬の後についていきます。この箇所は、携挙の後に地に臨むさばきと関連しています。死が殺す者たちを、ハデスはただちに受け入れます。もちろん、死者の魂と霊だけです。これとは対照的に、この時期に命を落とす忠実なユダヤ人たちは、祭壇の下にいます（6章9節）。

ヨハネの黙示録20章13、14節：ここで死とハデスは火の池に投げ込まれます。死とハデスは、神に対立する最後のものであり、それゆえに火の池に投げ込まれるのです。神が、すでに救われている信者の霊と魂を、ご自分に対立する場所に追いやられるでしょうか。そんなことはありません！死もまた神に対立するものではありませんが、信者にとっては見えない世界への扉です。主がその前に来られないなら、私たちもお死を通らなければなりません。罪のからだはまだ贖われていないからです。しかし私たちの希望は、主が来られること、しかもすぐに来られること、そして「万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださる」（ピリピ3:21）ことなのです。

ヴェルナー・ミューヒャー (Werner Mücher)

7.2 さまざまな用語の一覧表

名称	聖書箇所	意味
	旧約聖書に65回。たとえば創世記37:35、42:38、44:29、31、民数16:30-33、列王第一 2:6、9、詩篇 49:15、141:7 など	まず第一に墓、地中の墓穴。しかしまた死者の領域をも指し、信者と信じない者の居場所の区別はない
シェオル (ヘブル語)	マタイ11:23、16:18、ルカ10:15、16:23、使徒2:27、31、黙示録1:18、6:8、20:13、14	信じない死者たちの居場所。苦しみの中。新約聖書ではハデスは常に否定的な意味を持つ
ハデス (ギリシア語)	パラダルカ23:43、コリント第二12:4、黙示録2:7	眠りについた信者たちが意識をもって喜びの中にある場所
パラダリス	ハムのルカ 16:22、23	パラダイスの別の呼び名
火の池	黙示録19:20、20:14、15、21:8 (マタイ25:46の「永遠の刑罰」参照)	人間と、サタンとその悪霊たちの居場所。彼らはそこで、絶え間なく永遠にさばきの苦しみを味わう。今日まで、火の池にはだれもない。最初に獣と偽預言者がそこに追放され、サタンはその1000年後になって初めて追放される。そしてサタンとともに、すべての信じない者たちも追放される。

地獄（ギリシ
 ア語
 gehenna）

マタイ 5:22、29、30、
 10:28、18:9、23:15、33、
 マルコ 9:43、45、47、ルカ

火の池の別の名
 12:5、ヤコブ 3:6
 ヨブ 26:6、28:22、31:12、
 詩篇 88:11、箴言 15:11、底知れぬ所は、とりわけ、神
 27:20、ルカ 8:31、ローマが最終的なさばきの時までつ
 （ヘブル語
 abbadon）

10:7、ペテロ第二 2:4、黙示 ないでおられる墮落した御使
 録 9:1、11、11:7、17:8、私たちの保管場所である。
 20:1、3

天

聖書に 700 回以上

聖書は、第一の天（＝大気圏
 の空）、第二の天（宇宙、
 星々の間の空間）、そして神
 の御座とパラダイスのある第
 三の天を区別している（コリ
 ント 第二 12 章）
 造られたものではない天。そ
 こには神の三つの位格が永遠

父の家ヨハネ

14:2 の昔から住んでおられ、神の
 集会（教会）のすべての信者
 たちがそこに入る

8 参考文献

Ankerberg, J., *Fakten über das Leben nach dem Tod*, Pfäffikon (Verlag Mitternachtsruf) 2001

Ankerberg, J., *Fakten über Sterbeerlebnisse*, Pfäffikon (Verlag Mitternachtsruf) 2001

Bergmann, G., *Leben nach dem Tod?*, Gladbeck 1960

Brand, Reinhard, Godzik, Peter *Die gemeinsame christliche Hoffnung über den Tod hinaus und ihre unterschiedliche Auslegung*, 1992

Brinke, G. R., *Jenseitiges und Zukünftiges*, Frutigen

Brockhaus, R., *Botschafter des Heils in Christo*, 「Unsterblichkeit der Seele, Seelenschlaf und Verdammnis」, 1919

Bouter, H., *Onnaspeurlijke Rijkdom*, Bijbelstudies over het Paradijs van God, Gouda, 2003

Cremer, H., *Jenseits des Grabes*, 1886, Gießen (TVG) 1987

Darby, J. N., *Die ewige Pein*, Neustadt (E.-P. Verlag)

Fijnvandraat, J. G., *Wiedergeboren – in Ewigkeit?*, Schwelm 1980

Grant, F. W., *Facts and Theories as to a future state*, North Carolina 1889

Hallesby, O., *Himmel, Tod und Hölle*, Wuppertal (Rudolf Brockhaus Verlag)

Hauke, Dr., Rainer, *Wo sind unsere Toten? Ein vernachlässigter Aspekt der individuellen Eschatologie* (教授資格取得講演)

Heidler, F., *Die biblische Lehre von der Unsterblichkeit der Seele* (Beiträge zur systematischen Theologie), Vandenhoeck & Ruprecht

- Hole, F. B., *Das Feuer, das nicht erlischt*, Hückeswagen (CSV) 1987
- Ironside, H. A., *Death and afterwards*, Neptune (Loizeaux Brothers) 1924
- Jennings, F. C., *The Human Body, Its Source, History and Destiny*, Essex 1927
- Lockyer, H., *Was geschieht nach dem Tod*, Wetzlar (Verlag Hermann Schulte) 1976
- Lutzer, E. W., *Fünf Minuten nach dem Tod*, Dillenburg (CVD) 1999
- Ouweneel, W. J., *Das ewige Leben*, Neustadt (E.-P. Verlag) 1980
- Ouweneel, W. J., *Herz und Seele*, Dillenburg (CVD) 1991
- Ouweneel, W. J., *De leer van de mens*, Buiten & Schipperheijn, 1986
- Ouweneel, W. J., *Ende gut – alle(s) gut?*, Bielefeld (CLV) 1993
- Pache, R., *Das Jenseits*, Wuppertal (Verlag Sonne und Schild) 1957
- Pfannmüller, G., *Tod, Jenseits und Unsterblichkeit*
- Pollock, A. J., *Eternal Life*, London
- Rawlings, M., *Zur Hölle und zurück*, Hamburg (C. M. Fliß) 1996
- Rienecker, F., *Das Schönste kommt noch I, II*, Wuppertal (Verlag Sonne und Schild) 1964
- Rincke, H. W., *Vom Zustand nach dem Tode*, Basel, 1885
- Schwengeler, B., 編 *Sterbeerlebnisse, Ufo, Anthroposophie*, Berneck, 1981
- Steinmeister, A., *Auferstehung – Realität oder Illusion*, Wuppertal (Telos) 1989
- Swihart, P. J., *Der Tod – wirklich anders?*, Bad Liebenzell, 1979
- Tapernoux, Marc, *Das ewige Gericht*, Zürich (Beröa Verlag) 1962

Zodhiates, S., *Leben nach dem Tod*, Dillenburg (CVD) 1978

次の書物は、全体的に、または部分的に反対の立場を述べている

Cullmann, O., *Unsterblichkeit der Seele oder Auferstehung der Toten*, Stuttgart (Quell Verlag) 1986

Custance, A. C., *Journey out of time*, A study of the interval between death and resurection of the body, Ontario (Doorway Publication)

Le Seur, P., *Die Zukunft der Toten*, Wuppertal (Aussaat Verlag) 1974

Jukes, A., *Der zweite Tod und die Wiederbringung aller Dinge*, 1912 (1987)

Magner, J., *Zukunft ohne Tod*, Hamburg (Saatkorn Verlag)

Petry, P., *Allaussöhnung, Tod und letzte Dinge*, Pforzheim (Konkordanter Verlag) 1986

Raiber, H., *Wir werden was wir sind* (Chiron Verlag) 1986

Tobler, G., *Wann beginnt das ewige Leben*, Zürich (Advent-Verlag)

Tod und Leben, Studien zur christlichen Anthropologie, Genf (Edition Oikumene) 1840

Tomasi, M., *Tod und Auferstehung, Himmel und Hölle*, Zürich (Advent Verlag)

77 Fragen an die Gemeinschaft der Siebenten-Tags-Adventisten, 1988

参考図書

Handreichungen aus dem Worte Gottes, 月刊誌 1913-1938, Bielefeld (CLV)

Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch, C. H. Beck, München (Strack & Billerbeck),

Texte der Kirchenväter, München (Kösel Verlag) 1963

The Bible Treasury, edited by William Kelly 1856-1920, Winschoten (H. L. Heijkoop Verlag)

The Collected Writings of John Nelson Darby, Winschoten, (H.L. Heijkoop Verlag) 復刻版 1972

雑誌

An Outline of Sound Words, W. C. Reid, Edingburgh

Bibel und Gemeinde, Bibelbund（聖書同盟）の機関誌

De Bode van het heil in Christus, Vassen (Uitgeverij H. P. Medema)

聖書注解書

Best, E., Second Corinthians, A Bible Commentary for Teaching and Preaching, Atlanta (John Knox Press)

de Boor, W., Der zweite Brief des Paulus an die Korinther, Wuppertal (R. Brockhaus Verlag) 1972

Godet, F., Kommentar zu dem Evangelium des Lukas, TVG

Godet, F., Kommentar zum 1. Brief an die Korinther, TVG

Grosheide, F.W., Paulus eerste Brief aan de Kerk te Korinthe, Korte Verklaring der Heilige Schrift, Kampen

Kelly, W., Notes on the second Epistle of Paul the Apostle to the Corinthians with a new Translation, London

McDonald, W., 2 Corinthians (Emmaus Bible School), 1961,

Ouweneel, W. J., Wij zien Jezus, Bijbelstudies over de Brief aan de Hebreërs

Ouweneel, W. J., De Openbaring van Jezus Christus, deel 1 en 2

Rienecker, F. Lukas, Wuppertaler Studienbibel, Wuppertal (Brockhaus Verlag)

Zahn, T., Das Evangelium des Lukas, TVG

学習用資料

Begriffslexikon zum Neuen Testament, TVG

Bibleworkshop (コンピューター聖書ソフト) , media C

Bromiley, G. W., Theological Dictionary of the New Testament, Eerdmans

Metzger, B. M., A Textual Commentary on the Greek New Testament, London, New York (United Bible Societies), 1971

Rienecker, Sprachlicher Schlüssel zum griechischen Neuen Testament

Vine, W. E., Expository Dictionary of New Testament Words, Fleming H. Revell

Wigram, G., Publishing Englishmans Greek Concordance

一般文献

Bruce, F. F., Zeitgeschichte des Neuen Testaments, Wuppertal (TVG) 1986

Gitt, W., Und die anderen Religionen?, Bielefeld (CLV)

Gitt, W., Schuf Gott durch Evolution?, Bielefeld (CLV)

Hunt, D., Whatever happened to heaven, Harvest House Publishers, Eugene, 1988

Josephus, F., Geschichte des Jüdischen Krieges, Wiesbaden (Fourier Verlag)

Josephus, F., Jüdische Altertümer, Wiesbaden (Fourier Verlag)

Scott, W., Doctrinal Summaries, Glasgow (G. T. Publications) 1982

Walvoord, J., The Prophecy Knowledge Handbook, Wheaton (Victor Books) 1990

脚注

ペーパーバック

W. & M. デッペ (W. & M. Deppe)

Auswege oder Wege ins Aus? (『出口か、それとも行き止まりへの道か』)

320ページ

ISBN 3-89397-290-0

グルの共同体、セクト、密儀宗教、心理グループは、西洋世界でますます人気を集め、会員数を増やしています。

それに加えて、私たちは80年代以来、見通すこともできないほどのエソテリックの波に押し流されています。

それとほぼ時を同じくして、何世紀もの間考えられなかったことが起こっています——世界中で、大きな世界宗教の間の対話が始まっているのです！

その結果、キリスト者は、キリスト教の思想をほかの宗教の要素と混ぜ合わせた人々にますます頻繁に直面するようになり、これまで以上に、私たちの時代のさまざまな潮流と取り組むよう求められています。

この本は、宗教の多様さという迷宮の中で、方向を見定めるための良い手引きです！

死者は生きているのでしょうか。それとも、死はすべての存在の終わりなののでしょうか。人は魂の眠りに落ちるのでしょうか。それとも、死の向こう側でも意識を持っているのでしょうか。これは、すべての人が気にかける問いです。これらの問いに答え、同時に希望を伝えること——それがこの本の目的です。その中心テーマは、魂の不死という問いです。生きている死者——聖書はこの逆説を解き明かします。死は終わりではなく、もはや決して終わることのないいのちの始まりなのです。このことばが真実であることは、ある……によって保証されています。